

茨城県教育財団文化財調査報告第214集

# 島名熊の山遺跡

島名・福田坪一体型特定土地区画整理  
事業地内埋蔵文化財調査報告書 X

(下巻)

平成16年3月

茨 城 県  
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第214集

しま な くま やま い せき  
島名熊の山遺跡

島名・福田坪一体型特定土地区画整理  
事業地内埋蔵文化財調査報告書 X

(下巻)

平成16年3月

茨 城 県  
財団法人 茨城県教育財団

# 目 次

## —下 卷—

(2) 掘立柱建物跡	371
(3) 焼成遺構	443
(4) 柱穴列跡	459
(5) 土坑	462
3 中世の遺構と遺物	472
(1) 掘立柱建物跡	472
(2) 堀跡	475
(3) 方形堅穴遺構	477
(4) 地下式横	480
(5) 井戸跡	485
4 その他の時代の遺構と遺物	487
(1) 道路跡	487
(2) 溝跡	488
(3) 土坑	492
(4) ビット群	500
(5) 遺物包含層	501
(6) 遺構外出土遺物	504
第4節・まとめ	507

写真図版

付図

(2) 掘立柱建物跡

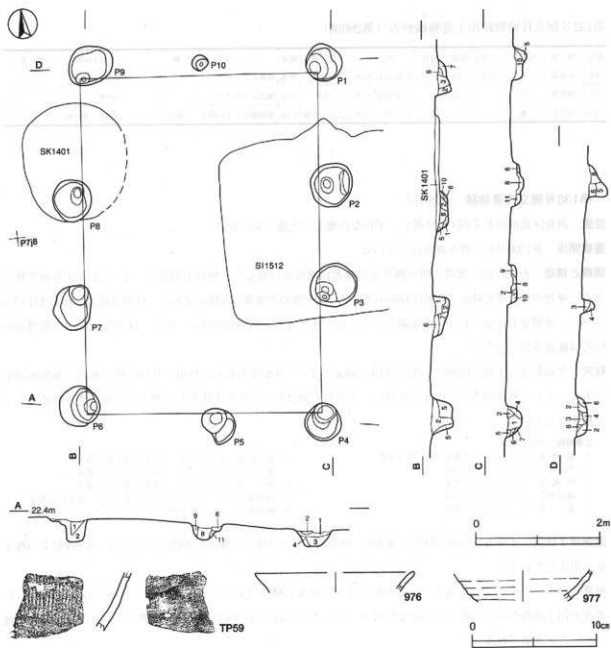
第132号掘立柱建物跡 (第290図)

位置 調査区北部のP78区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1512号住居跡を掘り込み、第1401号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間、梁間2間の側柱式建物跡で、桁行方向を $N-4^{\circ}-E$ とする南北棟である。規模は桁行5.40m、梁間3.60mほどで、柱間寸法はいずれも1.81m(6尺)を基調としている。

柱穴 平面形はいずれも円形で、深さは20~30cmである。柱痕・柱抜き取り痕は土層断面図中の第1~4・8~10層が相当し、しまりが弱い。その他の層はローム土を主体とした埋土で、互層をなしているが、強く突き固められた様子は認められない。



第290図 第132号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

## 土層解説 (各柱穴共通)

- 1 褐色 ロームブロック多量  
 2 暗褐色 ローム粒子少量  
 3 暗褐色 ロームブロック中量  
 4 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量  
 5 褐色 ロームブロック中量  
 6 暗褐色 ロームブロック少量

- 7 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量  
 8 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量  
 9 黒褐色 ローム粒子・炭化物少量  
 10 黒褐色 ロームブロック少量  
 11 極暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量

遺物出土状況 土師器片16点(坏2, 甕14), 須恵器片5点(坏4, 甕1)が出土している。976・977はP2の埋土から出土している。

所見 埋土から出土した土器から, 9世紀中葉に構築されたと考えられる。また, 柱抜き取り痕からは10世紀代の土器が見られないことや周囲に10世紀代の集落の広がり認められないことなどから, 9世紀後葉には廃絶したと考えられる。

## 第132号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第290図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
976	須恵器	坏	[128]	(1.6)	-	雲母・長石・石英	灰	普通	條部ロクロナデ	P2埋土	
977	須恵器	坏	-	(2.5)	-	雲母・長石・石英	灰黄	普通	條部ロクロナデ	P2埋土	
Tp06	須恵器	甕	-	-	-	雲母・長石・石英	にぶい黄褐	不良	外面縦位の平行引き, 内面ナデ	P5抜き取り裏	

## 第133号掘立柱建物跡(第291図)

位置 調査区北部のP7f6区に位置し, 平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1500号住居跡を掘り込んでいる。

規模と構造 桁行3間, 梁間2間の側柱式の身舎に東庇が付属した, 桁行方向をN-7°-Eとする南北棟である。身舎の桁行は6.30m, 梁間は3.65mほどで, 庇を含めた梁間は5.45mである。柱間寸法は, 桁行が2.12m(7尺), 梁間が1.81m(6尺)を基調としている。庇と身舎の間隔は1.81m(6尺)ほどで, 庇の中間部分の柱穴は確認されていない。

柱穴 平面形はいずれも円形で, 深さは15~50cmとばらつきが見られる。柱痕・柱抜き取り痕は土層断面図中の第6・8・9層が相当し, しまりが弱い。その他の層はローム土を主体とした埋土で, 強く突き固められて互層をなしている。

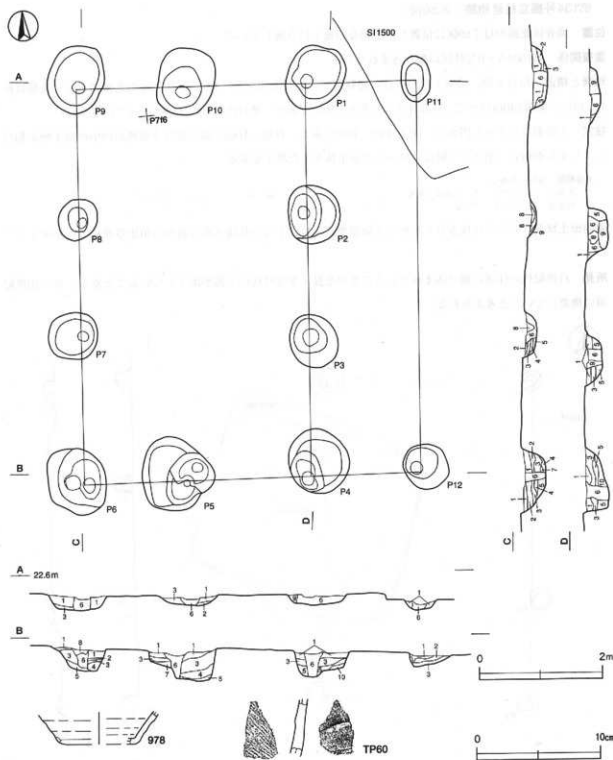
## 土層解説 (各柱穴共通)

- 1 暗褐色 ロームブロック多量、焼土粒子少量  
 2 黒褐色 ロームブロック少量  
 3 暗褐色 ロームブロック多量  
 4 極暗褐色 ロームブロック中量  
 5 褐色 ロームブロック多量

- 6 暗褐色 ロームブロック多量、焼土粒子微量  
 7 暗褐色 ロームブロック多量、炭化粒子微量  
 8 褐色 ロームブロック多量、焼土粒子微量  
 9 極暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量  
 10 極暗褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 土師器片61点(坏19, 甕42), 須恵器片7点(坏1, 甕6)が出土している。978はP7の埋土から出土している。

所見 埋土から出土した土器から, 9世紀前葉から中葉に構築されたと考えられる。南西へ20mの距離には, 規模や出土遺物から当該期の中心的な住居の一つと考えられる第1506号住居跡が位置しており, 同時期に機能していたと推測される。



第291図 第133号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第133号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第291図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
978	須恵器	坏	-	(2.6)	[5.8]	雲母・長石・石英	灰	普通	体部下端子持ちへう割り	P7層土	
TP60	須恵器	甕	-	-	-	雲母・長石・石英	黒灰	普通	外面斜位の平行彫き, 内面ナデ	P7層土	

### 第134号掘立柱建物跡 (第292図)

位置 調査区北部のQ7b9区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1508A・B号住居に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間、梁間1間の側柱式建物跡で、桁行方向を $N-12^{\circ}-E$ とする南北棟である。規模は桁行5.15m、梁間3.40mほどで、柱間寸法は桁行が1.70mであり、梁行は桁行の2倍となっている。

柱穴 平面形はいずれも円形で、深さは10~30cmである。柱痕・柱抜き取り痕は土層断面図中の第1層が相当し、しまりが弱い。第2・3層は、ローム土を主体とした埋土である。

土層解説 (各柱穴共通)

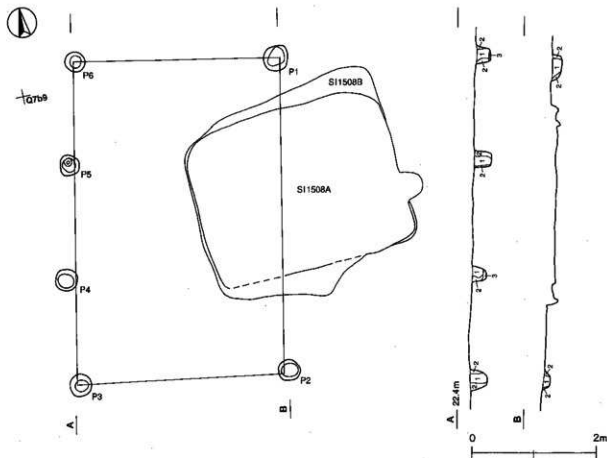
1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子散見

3 褐色 ロームブロック中量

2 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 P5の柱抜き取り痕から土師器甕片1点、P4の柱抜き取り痕から須恵器瓶片1点が出土している。

所見 11世紀代の住居に掘り込まれていることや奈良・平安時代の土器が出土していることから、9~10世紀頃に機能していたと考えられる。



第292図 第134号掘立柱建物跡実測図

### 第135号掘立柱建物跡 (第293・294図)

位置 調査区中央部のR8i5区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1535号住居跡と第188号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

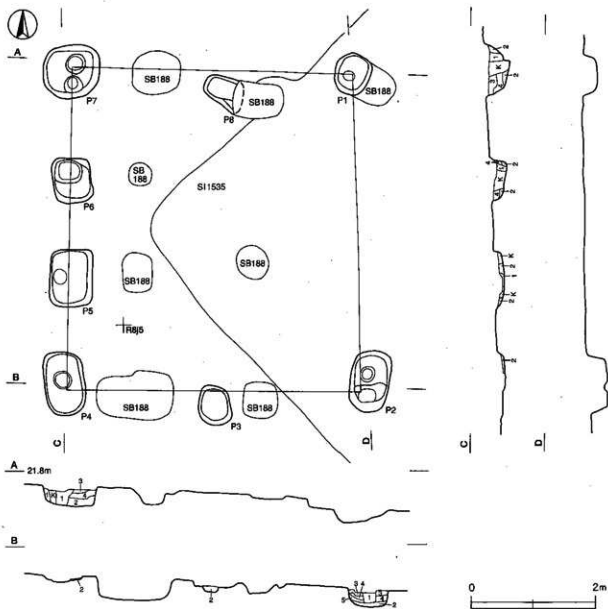
規模と構造 桁行3間、梁間2間の側柱式建物跡で、桁行方向をN-0°とする南北棟である。規模は桁行5.05m、梁間4.80mほどで、柱間寸法は桁行が1.66m(5.5尺)、梁間は2.42m(8尺)を基調としている。東側桁行の中間に想定される柱穴は、確認されていない。

柱穴 平面形は隅丸方形ないし隅丸長方形で、深さは12~30cmである。柱痕・柱抜き取り痕は土層断面図中の第1層が相当し、しまりが弱い。その他の層はローム土を主体とした埋土で、互層をなしているが、強く突き固められてはいない。

土層解説(各柱穴共通)

- |                        |                        |
|------------------------|------------------------|
| 1 極暗褐色 ロームブロック少量       | 4 暗褐色 ロームブロック中量        |
| 2 褐色 ロームブロック多量         | 5 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 |                        |

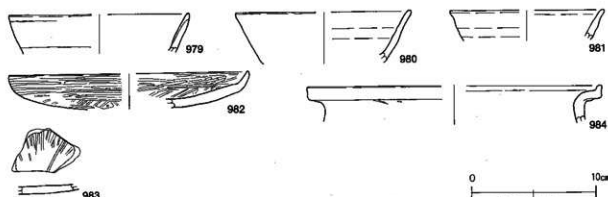
遺物出土状況 土師器片48点(坏7, 皿2, 甕・瓶39)、須恵器片9点(坏8, 甕1)が出土している。979はP4の柱抜き取り痕から、982~984はP4の埋土から出土している。



第293図 第135号掘立柱建物実測図



所見 時期は、出土土器から8世紀中葉と考えられる。西へ7mの位置には第1549号住居跡があり、本跡と軸線を揃えて東西に並列していることから、同時期に機能していたと推測される。



第294図 第135号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第135号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第294図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
979	土師器	平	[14.4]	(3.1)	-	石英・赤色粒子	赤褐色	普通	口縁部横ナデ・輪痕み痕	P4抜き取り灰	
980	須恵器	環	[14.0]	(4.1)	-	雲母・長石・石英	灰	普通	体部ロクロナデ	P5埋土	
981	須恵器	平	[12.2]	(2.4)	-	雲母・長石・石英	灰	普通	体部ロクロナデ	P7埋土	
982	土師器	皿	[19.0]	(2.8)	-	雲母・長石・石英	にがい橙	普通	体部内・外面へう磨き	P4埋土	
983	土師器	皿	-	(0.7)	-	赤色粒子	明赤褐色	普通	体部外面へう磨り	P4埋土	
984	土師器	甕	[23.3]	(3.1)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ・輪痕み痕	P4埋土	

第136号掘立柱建物跡 (第295図)

位置 調査区中央部のS 8 a4区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1538・1541号住居跡を掘り込んでいる。

規模と構造 桁行3間、梁間2間の隅柱式建物跡で、桁行方向をN-0°とする南北棟である。規模は桁行5.50m、梁間4.20mほどで、柱間寸法は桁行が1.81m(6尺)、梁間が2.12m(7尺)を基調としている。

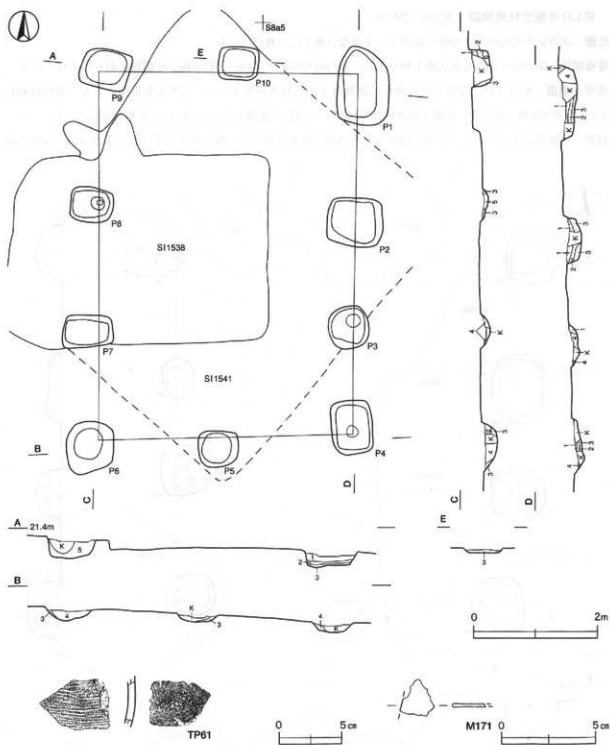
柱穴 平面形はP3・P5だけが円形で、その他は隅丸方形ないし隅丸長方形を呈し、深さは10~35cmである。柱痕・柱抜き取り痕は土層断面図中の第4・5層が相当し、しまりが弱い。その他の層はローム土を主体とした埋土で、互層をなしているが、強く突き固められてはいない。

土層解説 (各柱穴共通)

- |                        |                             |
|------------------------|-----------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 4 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック中量        | 5 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量        |
| 3 褐色 ロームブロック多量         | 6 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量      |

遺物出土状況 土師器片39点(環13, 甕26), 須恵器片3点(甕), 不明鉄製品1点が出土している。TP61はP1の埋土から、M171はP1の柱抜き取り痕から出土している。

所見 本跡と第1561号住居跡、第145号掘立柱建物跡はほぼ10mの間隔で東西に並列しており、同時期に機能していた可能性が高く、時期は出土土器と併せて8世紀後葉と考えられる。



第295図 第136号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第136号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第295図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP61	須恵形	甕	-	-	-	雲母・長石・石英	オリーブ黒	普通	外面横位の平行明き、内面ナデ	P1埋土	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
M171	不明	(1.9)	(1.8)	0.2	(1.1)	鉄	板状		P1跡き取り痕		

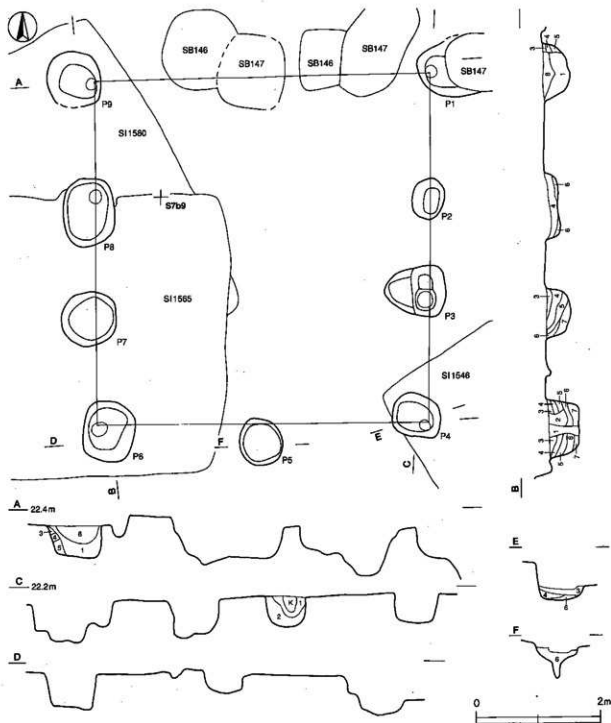
第137号掘立柱建物跡 (第296・297図)

位置 調査区中央部のS7b9区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1546・1580号住居跡を掘り込み、第1565号住居と第146・147号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間、梁間2間の偶柱式建物跡で、桁行方向をN-0°とする南北棟である。規模は桁行5.50m、梁間5.20mほどで、柱間寸法は桁行が1.81m(6尺)、梁間が2.57m(8.5尺)を基調としている。

柱穴 平面形はP5・P7・P9が円形で、その他は隅丸方形ないし隅丸長方形を呈し、深さは25~50cmである



第296図 第137号掘立柱建物跡実測図

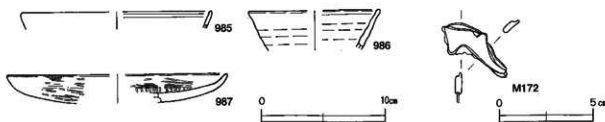
る。柱痕・柱抜き取り痕は土層断面図中の第1・8層が相当し、しまりが弱い。その他の層はローム土を主体とした埋土で、強く突き固められて互層をなしている。

土層解説 (各柱穴共通)

- |                         |                         |
|-------------------------|-------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 5 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量         | 6 褐色 ロームブロック多量          |
| 3 暗褐色 ロームブロック中量         | 7 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子少量 |
| 4 極暗褐色 ロームブロック少量        | 8 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片82点(坏16, 皿1, 甕・甔65), 須恵器片9点(坏5, 甕4), 不明鉄地青銅張製品1点が出土している。985・987はP6の埋土から, 986・M172はP10の柱抜き取り痕から出土している。

所見 時期は, 出土土器と重複関係から8世紀前半と考えられる。



第297図 第137号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第137号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第297図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
985	須恵器	坏	[15.0]	(1.4)	-	霞母・灰石・石英	灰褐	普通	口縁縁部内面に沈線一条	P6埋土	
986	須恵器	坏	[10.4]	(3.2)	-	霞母・灰石・石英	灰	普通	体部ロクロナデ	P10抜き取り痕	
987	土師器	皿	[17.5]	(2.3)	-	石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部内・外面にヘラ磨き, 内外面黒色処理痕	P6埋土	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M172	不明	(2.8)	(3.6)	0.4	(0.5)	鉄地青銅張	棒状の突起有り	P10抜き取り痕	PL83

第138号掘立柱建物跡 (第298図)

位置 調査区中央部のR7g9区に位置し, 平坦な台地上に立地している。北側部分は調査区域外に延びている。  
重複関係 第1569・1579号住居跡と第143号掘立柱建物跡を掘り込み, 第1570号住居と第184号掘立柱建物, 第36号井戸, 第1471・1496号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 北側部分が調査区域外のため全体の様相は不明で, 東西・南北方向ともに2間だけが確認されている。付近の掘立柱建物の様相や柱穴の規模から, 桁行は3間またはそれ以上の可能性が高く, 桁行方向をN-5°-Wとする梁間2間の側柱式建物跡と推定される。梁間長は4.85mで, 桁行長は4.60mが確認されており, 柱間寸法は桁行, 梁間ともに2.42m(8尺)を基調としている。

柱穴 平面形はいずれも隅丸方形ないし隅丸長方形を呈し, 深さは55~75cmである。柱痕・柱抜き取り痕は土層断面図中の第1・2・6層が相当し, しまりが弱い。その他の層は埋土で, 強く突き固められて互層をなしている。

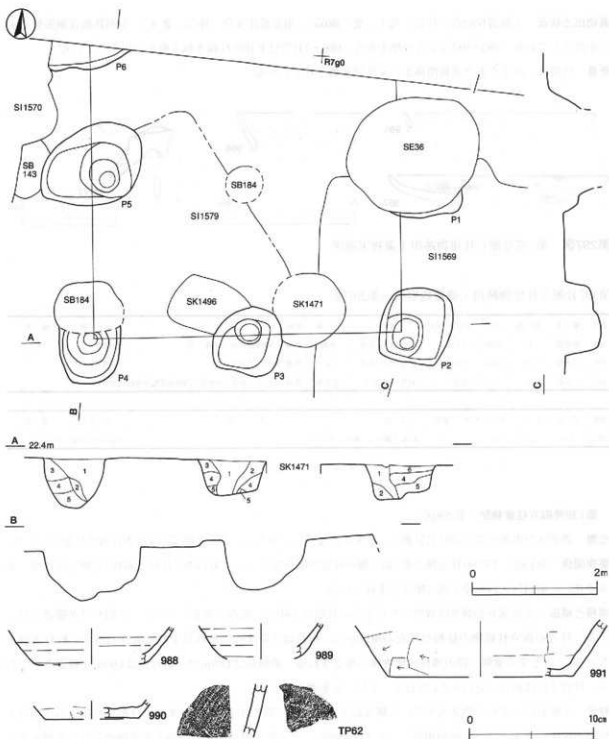
土層解説 (各柱穴共通)

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量  
 2 黒褐色 ロームブロック少量  
 3 暗褐色 ロームブロック少量

- 4 暗褐色 ロームブロック中量  
 5 暗褐色 ロームブロック多量  
 6 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片51点 (坏8, 甕・瓶43), 須恵器片9点 (坏7, 甕2) が出土している。988・990はP5の柱抜き取り痕から, 991はP4の埋土から出土している。

所見 時期は, 出土土器と重複関係から8世紀後葉から9世紀前葉にかけてと考えられる。



第298図 第138号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第138号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第298図)

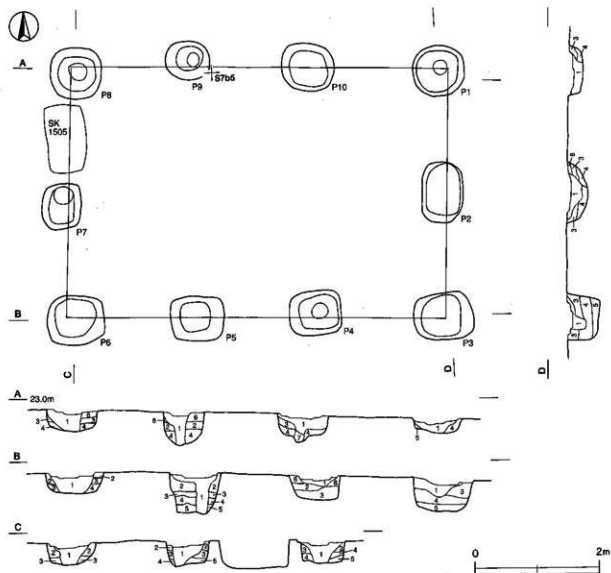
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色澤	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
988	須恵器	杯	-	(3.9)	[8.4]	雲母・長石・石英	灰	普通	底部ロクロナデ	P5抜き取り痕	
989	須恵器	杯	-	(2.8)	-	雲母・長石・石英	灰	普通	底部ロクロナデ	P4層土中	
990	須恵器	杯	-	(1.4)	[7.5]	雲母・長石・石英	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り後、多方向のヘラ削り	P5抜き取り痕	
991	須恵器	盃	-	(4.4)	[14.8]	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	底部下端ヘラ削り	P4層土	
TP26	須恵器	盃	-	-	-	雲母・長石・石英	オリーブ黒	普通	外面斜位の平行印き、内面ナデ	P2層土	

第139号掘立柱建物跡 (第299・300図)

位置 調査区北部のS7b4区に位置し、平坦な台地上に立地している。

規模と構造 桁行3間、梁間2間の傾柱式建物跡で、桁行方向をN-85°-Wとする東西棟である。規模は桁行5.90m、梁間3.95mほどで、柱間寸法は1.96m (6.5尺)を基調としている。

柱穴 平面形はいずれも隅丸方形で、深さは20~65cmである。柱痕・柱抜き取り痕は土層断面図中の第1・7



第299図 第139号掘立柱建物跡実測図

層が相当し、しまりが弱い。その他の層は埋土で、ローム土を主体として互層をなしているが、強く突き固められた様子は認められない。

土層解説 (各柱穴共通)

- |                 |                        |
|-----------------|------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量 | 5 暗褐色 ローム粒子中量          |
| 2 褐色 ロームブロック多量  | 6 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量   |
| 3 暗褐色 ロームブロック多量 | 7 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 ロームブロック中量 |                        |

遺物出土状況 土師器片81点(坏5, 甕76), 須恵器片9点(坏・高台付坏3, 甕6)が出土している。992はP7の柱抜き取り痕から, 993はP8の埋土から出土している。

所見 時期は, 出土土器から8世紀中葉と考えられる。東へ7mには第1565号住居跡が軸方向を揃えて位置しており, 同時期に機能していたものと考えられる。



第300図 第139号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第139号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第300図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
992	須恵器	坏	[11.0]	[2.2]	-	雲母・長石・石英	灰	普通	体部ロクロナデ	P7抜き取り痕	
993	須恵器	高台付坏	-	[1.5]	[9.0]	長石・石英	灰	普通	高台胎り付け後, ロクロナデ	P8埋土	
994	土師器	甕	[20.0]	[1.6]	-	雲母・長石・石英	にふい陶	普通	口縁部横ナデ	P10抜き取り痕	
TP63	須恵器	甕	-	-	-	雲母・長石	黄灰	普通	外面削位の平行明き, 内面ナデ	P6抜き取り痕	

第140号掘立柱建物跡 (第301・302図)

位置 調査区中央部のR8h1区に位置し, 平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1549・1569・1577・1601号住居跡を掘り込み, 第1576・1584・1588号住居に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間, 梁間2間の掘立柱建物跡で, 桁行方向をN-92°-Eとする東西棟である。規模は桁行6.40m, 梁間4.20mほどで, 柱間寸法は2.12m(7尺)を基調としている。

柱穴 平面形はP4・P10が円形で, その他は隅丸長方形ないし楕円形を呈し, 深さは50~60cmである。柱痕・柱抜き取り痕は土層断面図中の第1層が相当し, しまりが弱い。P6・P8の土層断面からは柱痕が明瞭に確認され, 推定される柱の径は15cmほどである。その他の層は埋土で, ローム土を主体とした暗褐色土で突き固められて互層になっている。P1の土層断面に見られる第7・8層の焼土は, 第1549号住居跡の竈を掘り込んだ際に流入したものである。

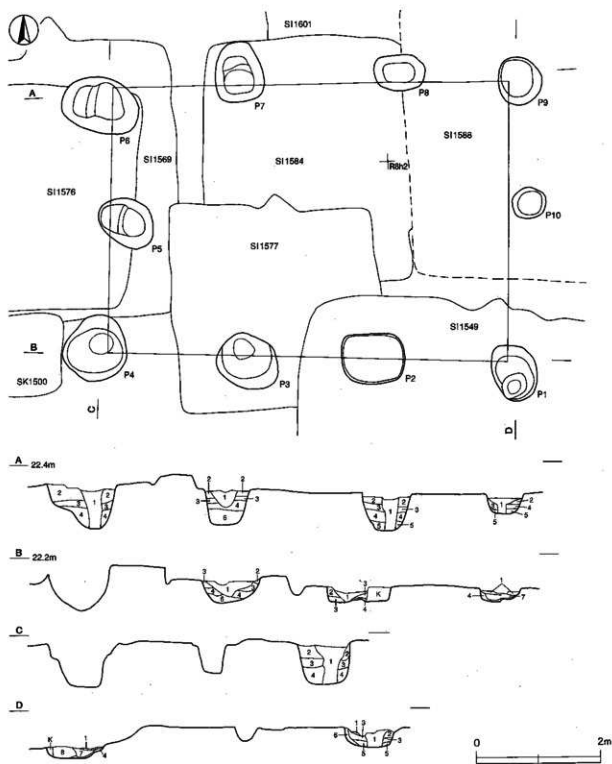
土層解説 (各柱穴共通)

- |                 |                                |
|-----------------|--------------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量 | 5 暗褐色 ロームブロック少量                |
| 2 暗褐色 ロームブロック多量 | 6 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量        |
| 3 暗褐色 ローム粒子中量   | 7 暗褐色 ロームブロック中量, ロームブロック・炭化物少量 |
| 4 暗褐色 ロームブロック中量 | 8 暗赤褐色 焼土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子少量    |

遺物出土状況 土師器片39点(坏10, 甕29), 須恵器片30点(坏12, 甕18)が出土している。995はP8の埋土

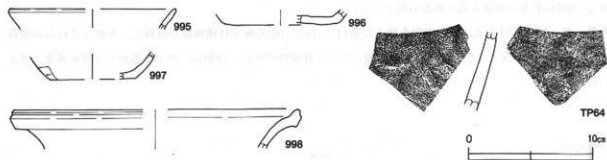
から、997はP9の柱抜き取り痕から出土している。

所見 西へ10mには南北に桁行方向を描えた第142・144・145号掘立柱建物跡が位置し、本跡はそれらの建物群と桁行方向が直交しており、同時期に機能していた可能性が高い。時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第301図 第140号掘立柱建物跡実測図





第302図 第140号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第140号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第302図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
995	須恵器	坏	[13.0]	(1.6)	-	雲母・長石・石英	褐灰	普通	体部ロクロナゲ	P6埋土	
996	須恵器	坏	-	(1.3)	[9.2]	雲母・長石・石英	褐灰	普通	底部多方向のヘウ割り	P4埋土	
997	須恵器	坏	-	(2.2)	[6.8]	雲母・長石・石英	灰黄	普通	体部下端手持ヘウ割り	P9抜き取り痕	
998	須恵器	甕	[22.8]	(3.2)	-	雲母・長石・石英	黄灰	普通	口縁部ロクロナゲ	P6埋土	
TP64	須恵器	甕	-	-	-	雲母・長石・石英	黄灰	普通	外面同心円状の叩き、内面ナゲ	P6抜き取り痕	

#### 第141号掘立柱建物跡 (第303図)

位置 調査区中央部のR7g4区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1573号住居跡を掘り込んでいる。

規模と構造 桁行3間、梁間2間の側柱式建物跡で、桁行方向をN-3°-Eとする南北棟である。規模は桁行5.50m、梁間3.50mほどで、柱間寸法は桁行、梁間ともに1.81m(6尺)を基調としている。

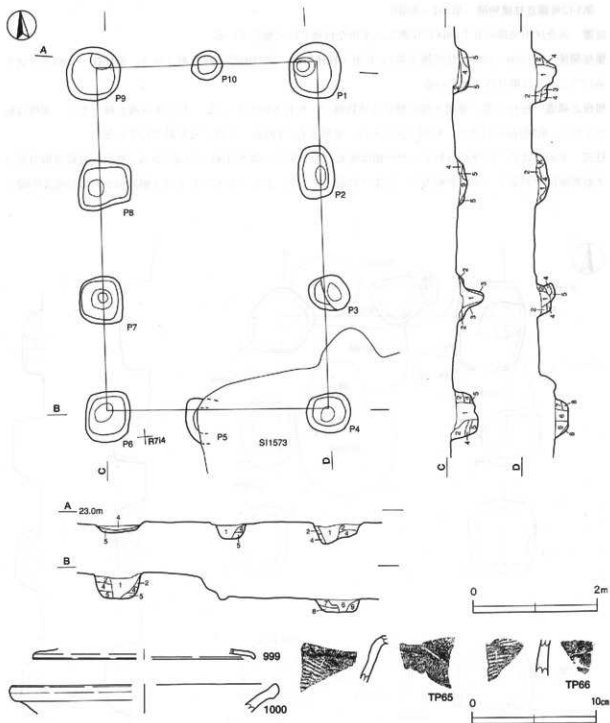
柱穴 平面形はP3・P9・P10が円形で、その他は隅丸方形ないし隅丸長方形を呈し、深さは15~45cmである。柱抜き取り痕は土層断面図中の第1・6・9層が相当し、しまりが弱い。その他の層は埋土で、ローム土を主体とした褐色土や暗褐色土で突き固められて互層をなしている。P4の土層断面に見られる第6~9層の焼土や粘土は、第1573号住居跡の産材が流入したものである。

#### 土層解説 (各柱穴共通)

1	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	7	暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量、砂粒・粘土粒子微量
2	暗褐色	ロームブロック中量	8	暗褐色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量、粘土粒子微量
3	極暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	9	暗赤褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・砂粒・粘土粒子少量
4	暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量			
5	褐色	ロームブロック多量			
6	暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・砂粒・粘土粒子少量			

遺物出土状況 土師器片41点(坏3, 甕38), 須恵器片16点(坏4, 蓋1, 甕11)が出土している。999はP1の埋土から、1000はP7の埋土から出土している。

所見 東へ12mには第142・144・145号掘立柱建物跡が桁行方向を描いて南北に配置されており、本跡を含めたこれらの建物群は同時期に機能していたと推測される。時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第303図 第141号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第141号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第303図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色	裏	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
999	瓶壺器	蓋	[177]	(0.8)	-	雲母・長石・石英	灰黄褐	普通	普通	口縁部クロコナデ	P1埋土	
1000	瓶壺器	蓋	[210]	(2.3)	-	雲母・長石・石英	灰白	普通	普通	口縁部クロコナデ	P7埋土	
TP65	瓶壺器	鉢	-	-	-	雲母・長石・石英	褐灰	普通	普通	外面斜位の平行明き、内面ナデ	P8埋土	
TP66	瓶壺器	蓋	-	-	-	雲母・長石・石英	褐灰	普通	普通	外面横位の平行明き、内面ナデ	P9埋土	

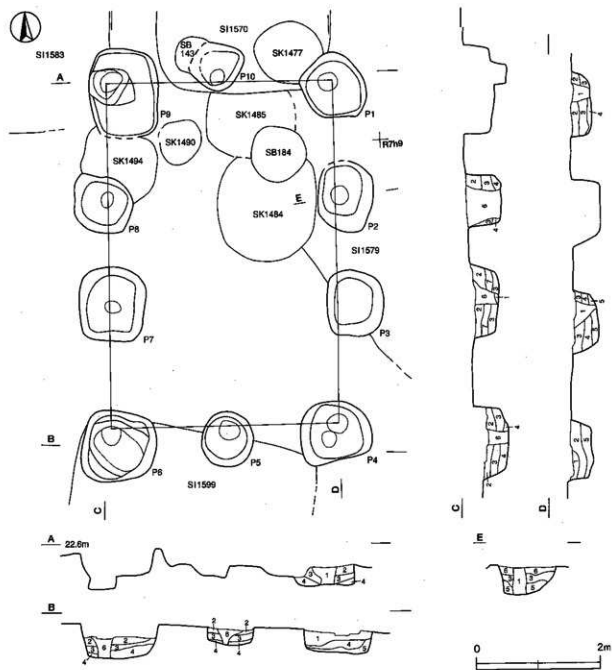
第142号掘立柱建物跡 (第304・305図)

位置 調査区中央部のR7h8区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1579・1599号住居跡と第143号掘立柱建物跡、第1494号土坑を掘り込み、第1570・1583号住居と第1477号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間、梁間2間の側柱式建物跡で、桁行方向を $N-2^{\circ}-E$ とする南北棟である。規模は桁行5.45m、梁間3.65mほどで、柱間寸法は桁行、梁間ともに1.81m(6尺)を基調としている。

柱穴 平面形はP5だけが円形で、その他は隅丸方形を呈し、深さは30~55cmである。柱痕・柱抜き取り痕は土層断面図中の第1・6層が相当し、しまりが弱い。また、P1・P6・P7の土層断面からは柱痕が明瞭に



第304図 第142号掘立柱建物跡実測図

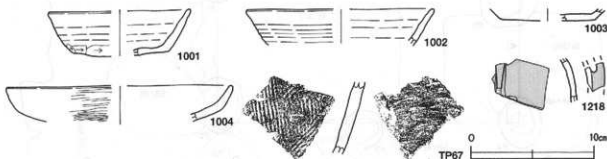
確認され、推定される柱の径は15~20cmである。その他の層は埋土で、ローム土を主体とした暗褐色土や黒褐色土で突き固められて互層をなしている。P4の底面からは、柱の圧痕が2か所確認されている。

土層解説 (各柱穴共通)

- |       |                                |       |                   |
|-------|--------------------------------|-------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量           | 4 暗褐色 | ロームブロック多量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量, 粘土粒子少量, 炭化粒子微量      | 5 暗褐色 | ロームブロック多量         |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量, 粘土粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量         |
|       |                                | 7 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片64点(坏6, 皿1, 甕・瓶57), 須恵器片8点(坏6, 甕2)が出土している。1001はP1の柱痕から、1002・1004はP1の埋土から出土している。

所見 本跡と第141号掘立柱建物跡は東西に並列し、第144・145号掘立柱建物跡とは南北に直列しており、これらの建物群が軸線を揃えて整然と並んだ景観が想定される。時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第305図 第142号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第142号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第305図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1001	須恵器	坏	[11.2]	3.6	[7.6]	雲母・長石・石英	灰灰	普通	底縁一方のヘラ削り	P1抜き取り痕	
1002	須恵器	坏	[15.0]	(2.8)	-	雲母・長石・石英	灰黄	普通	底部ロケロナテ	P1埋土	
1003	須恵器	坏	-	(1.0)	[7.8]	雲母・長石・石英	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り後, 多方向のヘラ削り	P6抜き取り痕	
1004	土師器	坏	[18.0]	(2.8)	-	石英・赤色粒子	浅黄橙	普通	口縁部外面ヘラ磨き, 内面横ナテ	P1埋土	5-6世紀後葉
1218	灰陶陶器	双耳瓶*	-	(4.1)	-	緻密	にぶい赤黒	良好	底部ロケロナテ後, 耳部削り付け	P6抜き取り痕	製造地, 外周自然熱
TP67	須恵器	甕	-	-	-	長石・石英	暗青灰	普通	外面削位の平行叩き, 内面無文の当り肌	P6抜き取り痕	

第143号掘立柱建物跡 (第306図)

位置 調査区中央部のR7g8区に位置し、平坦な台地上に立地している。北側は、調査区域外に延びている。

重複関係 第1570・1583号住居と第138・142号掘立柱建物, 第1486号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 北側が調査区域外に延びているため全体の様相は不明であるが、付近の掘立柱建物の様相から、N-0°を桁行方向とする梁間2間の欄柱式建物跡と推定される。規模は梁間が4.80mほどで、桁行は2.10mだけが確認されている。柱間寸法は桁行が2.12m(7尺)で、梁間は2.42m(8尺)を基調としている。

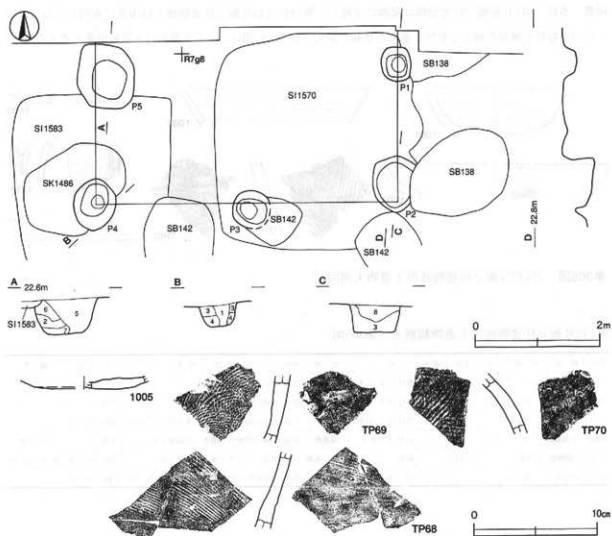
柱穴 平面形はP1・P5が隅丸方形, P2・P4が楕円形, P3が円形を呈し、深さは20~45cmである。柱痕・柱抜き取り痕は土層断面図中の第1・5層が相当し、しまりが弱い。その他の層は埋土で、ローム土を主体とした暗褐色土や黒褐色土で突き固められて互層をなしている。

土層解説（各柱穴共通）

- |        |                       |        |                       |
|--------|-----------------------|--------|-----------------------|
| 1 極暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色  | ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色  | ロームブロック多量、焼土粒子微量      | 6 褐色   | ローム粒子多量               |
| 3 暗褐色  | ロームブロック多量、炭化粒子微量      | 7 黒褐色  | ロームブロック少量             |
| 4 暗褐色  | ロームブロック多量             | 8 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量     |

遺物出土状況 須恵器片4点（坏1，甕3）が出土している。1005・TP69・TP70はP5の柱抜き取り痕から出土している。

所見 時期は，出土土器と重複関係から8世紀前半と考えられる。



第306図 第143号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第143号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第306図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1005	須恵器	坏	-	(1.0)	[8.1]	雲母・長石・石英	褐色	普通	底部回転へた削り	P5抜き取り痕	
TP68	須恵器	甕	-	-	-	雲母・長石・石英	褐色	普通	外面削位の平行押き，内面ナデ	P4抜き取り痕	
TP69	須恵器	甕	-	-	-	長石	灰	普通	外面同心円状の押き，内面無文の当て具痕	P5抜き取り痕	
TP70	須恵器	甕	-	-	-	長石・黒色粒子	褐色	良好	外面平行押き，内面ナデ	P5抜き取り痕	外面自然蝕

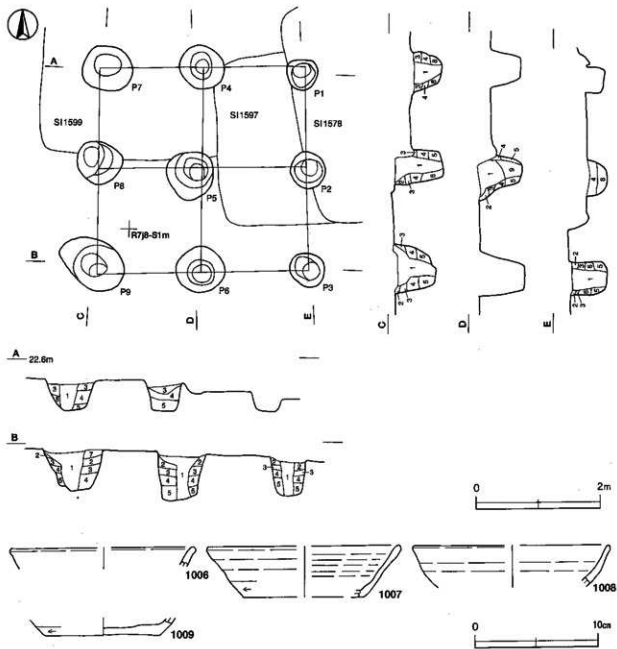
第144号掘立柱建物跡 (第307図)

位置 調査区中央部のR7区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1597・1599号住居跡を掘り込み、第1578号住居に掘り込まれている。

規模と構造 桁行・梁間ともに2間の総柱式建物跡である。規模は桁行、梁間ともに3.30mほどで、 $N-0^\circ$ を基軸としている。また、柱間寸法はいずれも1.66m (5.5尺)を基調としている。

柱穴 平面形はいずれも円形を呈し、深さは60~75cmである。柱痕・柱抜き取り痕は土層断面図中の第1・9層が相当し、しまりが弱い。P3・P6の土層断面からは明瞭に柱痕が確認され、推定される柱の径は15cmほどである。その他の層は埋土で、ローム土を主体とした暗褐色土や黒褐色土で突き固められている。



第307図 第144号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

## 土層解説 (各柱穴共通)

- |       |                |       |                       |
|-------|----------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 6 褐色  | ロームブロック多量             |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量        | 7 黒褐色 | ローム粒子少量               |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 | 8 黒褐色 | ロームブロック少量             |
| 4 暗褐色 | ロームブロック多量      | 9 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子多量        |       |                       |

遺物出土状況 土師器片32点(坏4, 甕2), 須恵器片3点(坏)が出土している。1006・1008はP2の抜き取り痕から, 1007・1009はP4の埋土から出土している。

所見 8世紀中葉と考えられる第1597号住居跡を掘り込んでおり, 出土土器と併せて8世紀後葉に構築されたと考えられる。本跡と第142・145号掘立柱建物跡は2m間隔で南北に整然と並んでおり, 同時期に機能していたことが推測される。

## 第144号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第307図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1006	土師器	坏	[16.4]	(1.6)	-	石英・赤色粒子	黄	普通	口縁部横ナデ	P2抜き取り痕	
1007	須恵器	坏	[15.2]	4.0	[ 9.8]	雲母・長石・石英	黒褐色	普通	体部下端・底部回転ヘラ削り	P4埋土	
1008	須恵器	坏	[15.5]	(3.3)	-	雲母・長石・石英	灰黄褐色	普通	体部ロクロナデ	P2抜き取り痕	
1009	須恵器	坏	-	(1.4)	[ 9.3]	雲母・長石・石英	黒褐色	普通	体部下端・底部回転ヘラ削り	P4埋土	

## 第145号掘立柱建物跡 (第308図)

位置 調査区中央部のS7a8区に位置し, 平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1565・1580号住居跡を掘り込んでいる。

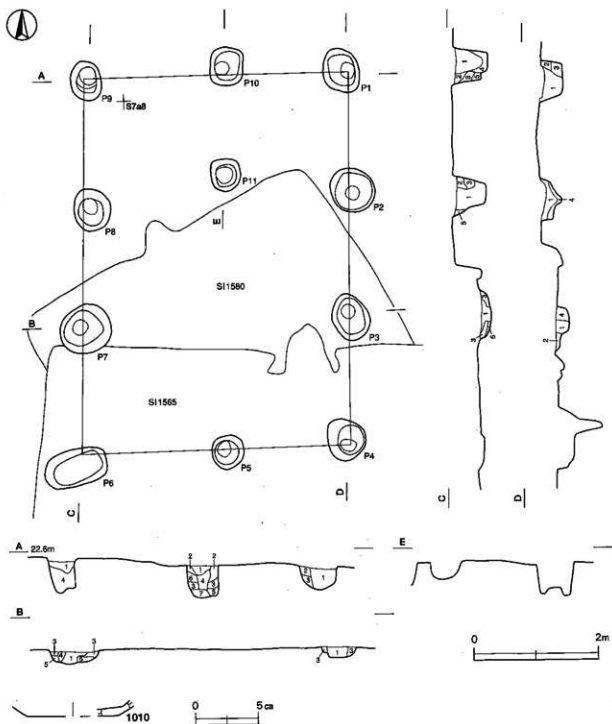
規模と構造 桁行3間, 梁間2間の側柱式建物跡で, 桁行方向をN-0°とする南北棟である。規模は桁行5.90m, 梁間4.20mほどで, 柱間寸法は桁行が1.96m(6.5尺), 梁間が2.12m(6尺)を基調としている。また, P5とP10を結ぶ軸線上にはP11が位置し, 底面から柱の圧痕が確認されていることから東柱穴の可能性もある。柱穴 平面形はP1・P10が隅丸方形で, その他は円形ないし楕円形を呈しており, 深さは15~55cmである。柱抜き取り痕は土層断面図中の第1・4層が相当し, しまりが弱い。その他の層は埋土で, ローム土を主体とした暗褐色土や褐色土で突き固められて互層をなしている。

## 土層解説 (各柱穴共通)

- |       |                   |       |                  |
|-------|-------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 5 褐色  | ロームブロック多量        |
| 2 暗褐色 | ロームブロック多量         | 6 暗褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量         | 7 暗褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子少量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量           |       |                  |

遺物出土状況 土師器片52点(坏1, 甕51), 須恵器片3点(坏1, 甕2)が出土している。1010はP7の抜き取り痕から出土している。

所見 出土土器から時期を判断するのは困難であるが, 柱筋を揃えて南北に並ぶ第142・144号掘立柱建物跡や東西に並ぶ第136・141号掘立柱建物跡と同時期に機能していたと推測されることから, 8世紀後葉に機能していたと考えられる。



第308図 第145号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第145号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第308図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色澤	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1010	須恵器	坏	-	(1.1)	[7.0]	雲母-長石-石英	褐灰	普通	底部陶輪ヘリ削り	P7抜き取り痕	

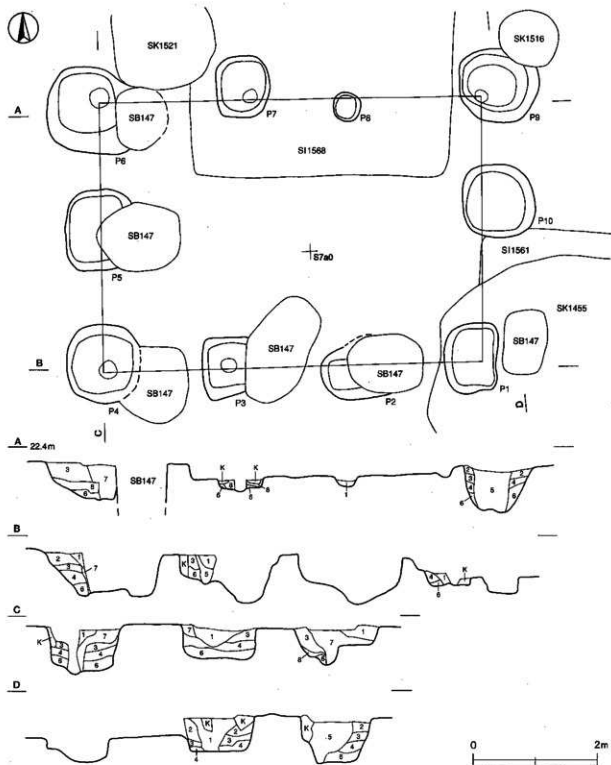


第146号掘立柱建物跡 (第309・310図)

位置 調査区中央部のR 7j9区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1561・1568号住居跡と第137号掘立柱建物跡を掘り込み、第147号掘立柱建物と第1455・1516・1521号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間、梁間2間の側柱式建物跡で、桁行方向を $N-92^{\circ}-E$ とする東西棟である。規模は桁



第309図 第146号掘立柱建物跡実測図

行6.00m, 梁間4.25mほどで, 柱間寸法は桁行が1.96m (6.5尺), 梁間が2.12m (7尺) を基準としている。

**柱穴** 平面形はいずれも隅丸方形で, 深さは50~80cmほどである。柱抜き取り痕は土層断面図中の第1・5・7層が相当し, しまりが弱い。その他の層は埋土で, ローム土を主体とした褐色土や暗褐色土で突き固められて互層をなしている。

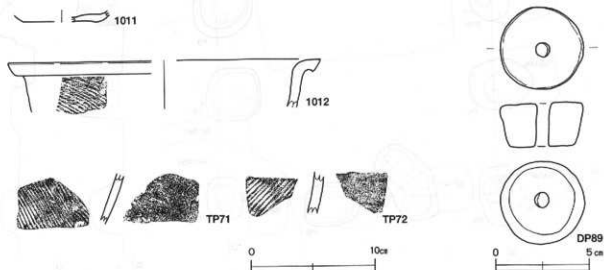
**土層解説** (各柱穴共通)

- |                              |                        |
|------------------------------|------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック中量              | 5 黒褐色 ロームブロック少量        |
| 2 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量      | 6 褐色 ロームブロック多量, 炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 極暗褐色 ロームブロック少量       |
| 4 褐色 ロームブロック多量               | 8 極暗褐色 ロームブロック中量       |

**遺物出土状況** 土器器片126点 (坏20, 甕106), 須恵器片18点 (坏8, 甕10), 土製紡錘車1点が出土している。

1011はP4の柱抜き取り痕から, 1012はP9の柱抜き取り痕から出土している。

**所見** 時期は, 出土土器や重複関係から9世紀前半と考えられる。



第310図 第146号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第146号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第310図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1011	須恵器	坏	-	(0.9)	[6.0]	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘケ廻り	P4抜き取り痕	
1012	須恵器	鉢	[24.7]	(3.9)	-	雲母・長石・石英	黄灰	普通	口縁部・底部内面口ロナデ	P9抜き取り痕	
TP71	須恵器	甕	-	-	-	長石・石英・雲母	灰	普通	外面平行叩き, 内面ナデ	P9埋土	
TP72	須恵器	甕	-	-	-	雲母・長石・石英	黄灰	普通	外面平行叩き, 内面ナデ	P10抜き取り痕	

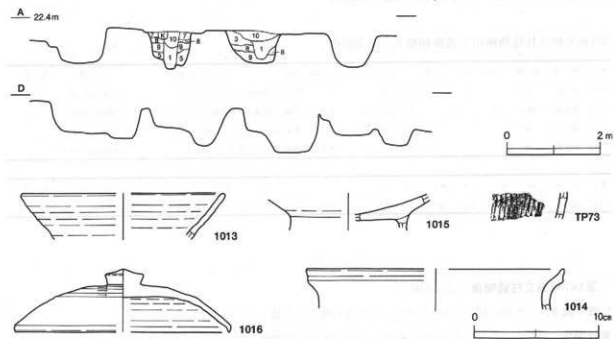
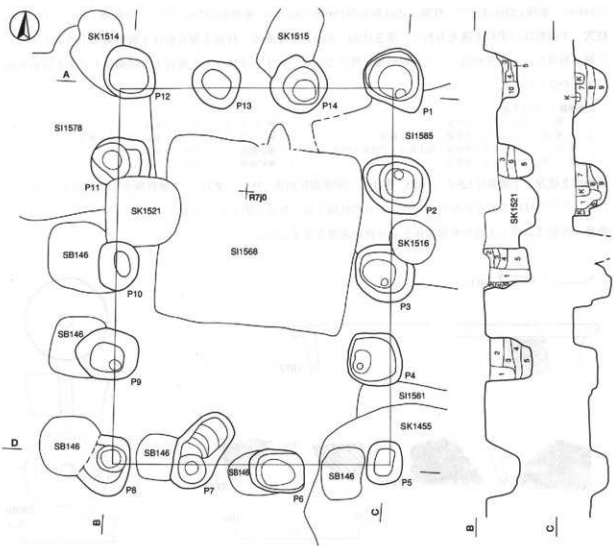
  

番号	器種	幅	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP89	紡錘車	4.5	2.3	0.7	56.4	灰石・赤色粒子	にぶい棕色, ナデ	P10埋土	PL75

第147号掘立柱建物跡 (第311図)

**位置** 調査区中央部のR7j9区に位置し, 平坦な台地上に立地している。

**重複関係** 第1561・1585号住居跡と第137・146号掘立柱建物跡を掘り込み, 第1578号住居と第1514・1515・1516・1521号土坑に掘り込まれている。



第311图 第147号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

規模と構造 桁行4間、梁間3間の側柱式建物跡で、桁行方向をN-0°とする南北棟である。規模は桁行8.00m、梁間5.80mほどで、柱間寸法は桁行・梁間ともに1.96m（6.5尺）となっている。

柱穴 平面形はP13・P14が円形で、その他は隅丸方形ないし長方形で、深さは50~100cmほどである。柱抜き取り痕は土層断面図中の第1・10層が相当し、しまりが弱い。その他の層は埋土で、ローム土を主体とした褐色土や暗褐色土で突き固められている。

土層解説（各柱穴共通）

1	極暗褐色	ローム粒子中量	6	褐色	ローム中ブロック多量
2	暗褐色	ローム小ブロック多量	7	極暗褐色	ローム中ブロック少量
3	暗褐色	ローム中ブロック多量	8	暗褐色	ローム大ブロック中量
4	暗褐色	ローム大ブロック多量	9	極暗褐色	ローム中ブロック中量、炭化粒子微量
5	暗褐色	ローム粒子中量	10	黒褐色	ローム小ブロック少量

遺物出土状況 土師器片148点（坏35、甕113）、須恵器片17点（坏10、甕6、瓶1）が出土している。1015はP7の柱抜き取り痕から、1016はP1の確認面から出土している。

所見 時期は、1014・1015の形状や重複関係から9世紀中葉と考えられる。

第147号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第311図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	手法の特徴	出土位置	備考
1013	須恵器	坏	[160]	(3.6)	-	雲母・石英	褐色	普通	修飾口ロナデ	P2抜き取り痕	
1014	土師器	甕	[206]	(3.4)	-	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部線ナデ	P5抜き取り痕	
1015	須恵器	高台付坏	-	(2.9)	-	長石・石英	黄灰	普通	底部回転ヘウ切り後、高台貼り付け	P7抜き取り痕	
1016	須恵器	甕	[170]	5.0	-	長石・石英	褐色	普通	天井部回転ヘウ削り	P1確認面	80%, PL66
TP23	須恵器	甕	-	-	-	雲母・長石・石英	褐色	普通	外周縦位の平行引き、内面ナデ	P7抜き取り痕	

第149号掘立柱建物跡（第312図）

位置 調査区中央部のS7f1区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1610号住居跡と第153号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と構造 桁行3間、梁間2間の側柱式建物跡で、桁行方向をN-95°-Eとする東西棟である。規模は桁行6.90m、梁間4.35mほどで、柱間寸法は桁行が2.27m（7.5尺）、梁間が2.12m（7尺）を基調としている。

柱穴 平面形はほぼ円形を呈し、深さは20~50cmほどである。柱抜き取り痕は土層断面図中の第5層が相当し、しまりが弱い。その他の層はローム土を主体とした埋土で、互層をなしており、強く突き固められている。

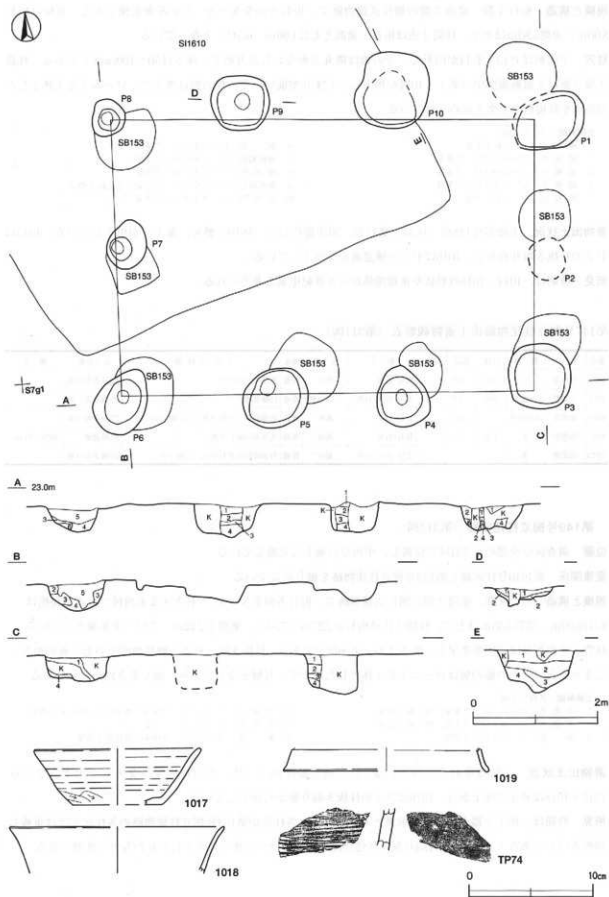
土層解説（各柱穴共通）

1	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	4	黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2	黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	5	暗褐色	ロームブロック少量
3	褐色	ロームブロック中量	6	褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片81点（坏6、甕75）、須恵器片16点（坏・高台付坏8、甕8）が出土している。

1017・1018はP4の埋土から、1019はP4の柱抜き取り痕から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。各柱穴が第153号掘立柱建物跡の各柱穴とほぼ重複し、規模も同じであることから、第153号掘立柱建物跡から本建物への建て替えが行われたものと推測される。



第312图 第149号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

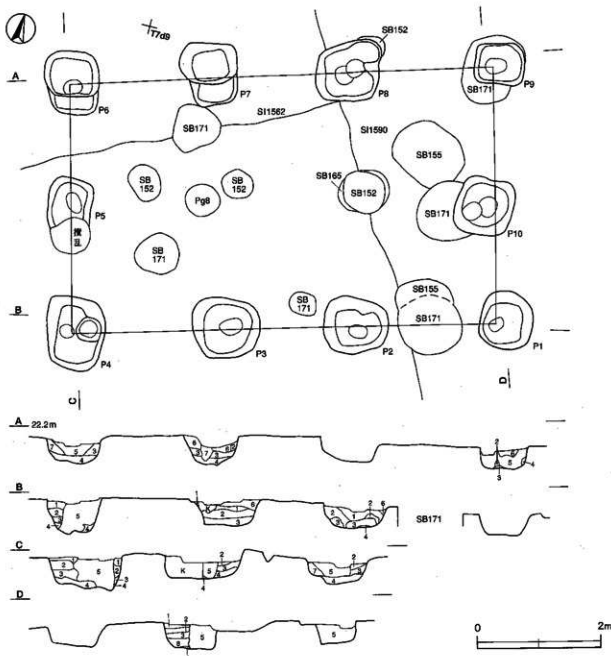
第149号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第312図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1017	須恵器	杯	[13.0]	4.4	[7.0]	長石・石英	灰	普通	体部下邊手持ちへく割り	P4埋土	
1018	須恵器	高台付杯*	[17.0]	(3.7)	-	長石・石英	灰白	普通	体部口クロナデ	P4埋土	
1019	須恵器	高台付杯*	-	(1.8)	[16.2]	長石・石英	灰	普通	高台部口クロナデ	P4抜き取り痕	
TP74	須恵器	甕	-	-	-	長石・石英・雲母	褐灰	普通	外面横位の平行叩き、内面ナデ	P5埋土	

第150号掘立柱建物跡 (第313・314図)

位置 調査区中央部のT7d9区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1562・1590号住居跡と第152・165号掘立柱建物跡を掘り込み、第171号掘立柱建物に掘り込まれ



第313図 第150号掘立柱建物跡実測図

ている。

**規模と構造** 桁行3間、梁間2間の個柱式建物跡で、桁行方向をN-72°-Eとする東西棟である。規模は桁行6.80m、梁間4.10mほどで、柱間寸法は桁行が2.27m(7.5尺)、梁間が2.12m(7尺)を基調としている。P4・P8・P10の底面からは、柱の圧痕が2か所ずつ確認されている。

**柱穴** 平面形はP4・P5が隅丸長方形で、その他は隅丸方形を呈し、深さは40~60cmである。柱抜き取り痕は土層断面図中の第5・7層が相当し、しまりが弱い。その他の層はローム土を主体とした埋土で、互層をなしているが、強く突き固められてはいない。

**土層解説 (各柱穴共通)**

- |                 |                        |
|-----------------|------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック中量 | 5 暗褐色 ローム粒子少量          |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量 | 6 褐色 ロームブロック多量、炭化粒子微量  |
| 3 暗褐色 ロームブロック少量 | 7 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 4 褐色 ロームブロック多量  | 8 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 |

**遺物出土状況** 土師器片36点(坏3, 甕33), 須恵器片20点(坏11, 蓋6, 甕3)が出土している。1020・1022はP4の柱抜き取り痕から、1021はP4の埋土から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から8世紀前半と考えられる。柱穴の底面から柱の圧痕が複数確認されており、建て替えが行われたことが示唆される。



第314図 第150号掘立柱建物跡出土遺物実測図

**第150号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第314図)**

番号	種別	形状	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	手法の特徴	出土位置	備考
1020	須恵器	坏	[12.8]	(3.3)	-	雲母・長石・石英	灰白	普通	体部口ロナデ	P4抜き取り痕	
1021	須恵器	坏	[15.6]	(2.9)	-	雲母・石英・赤色粒子	灰	普通	体部口ロナデ	P4埋土	
1022	須恵器	坏	-	(1.5)	[7.2]	雲母・長石・石英	灰	普通	底部一方向のヘラ削り	P4抜き取り痕	
1023	須恵器	坏	-	(1.0)	[7.0]	長石	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り	P1埋土	
1024	須恵器	坏	-	(0.8)	[5.6]	長石・石英	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り	P8埋土	

**第161号掘立柱建物跡 (第315図)**

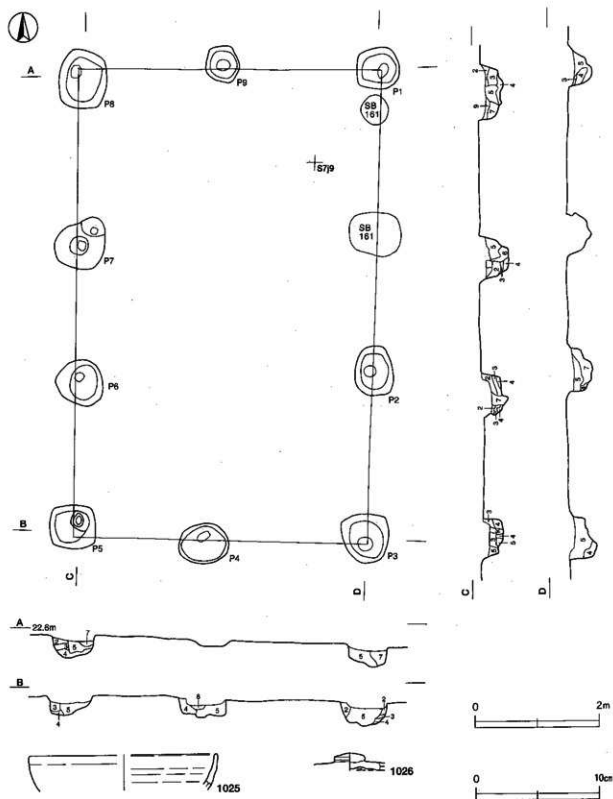
**位置** 調査区中央部のS7j8区に位置し、平坦な台地上に立地している。

**重複関係** 第161号掘立柱建物に掘り込まれている。

**規模と構造** 桁行3間、梁間2間の個柱式建物跡で、桁行方向をN-1°-Eとする南北棟である。規模は桁行7.50m、梁間4.75mほどで、桁行の柱間寸法は中間部に位置するP2・P3間とP7・P8間が2.12m(7尺)で、その両側部分は2.57m(8.5尺)と、異なる寸法によって構築されている。また、梁間は2.42m(8尺)を基調としているが、P4が西側に寄った位置で確認されているため、南側の梁行部分は寸法が揃っていない。

**柱穴** 平面形はP4・P6・P7が円形で、その他は隅丸方形ないし長方形を呈し、深さは30~40cmほどである。

る。柱痕・柱抜き取り痕は土層断面图中的の第5～7層が相当し、しまりが弱い。P6の土層断面からは明瞭に柱痕が確認され、推定される柱の径は15cmほどである。その他の層はローム土を主体とした埋土で、強く突き固められて互層をなしている。



第315図 第151号掘立柱建物跡・出土遺物実測図



土層解明 (各柱穴共通)

- |       |                  |       |                |
|-------|------------------|-------|----------------|
| 1 褐色  | ロームブロック多量        | 6 黒褐色 | ローム粒子少量        |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量        | 7 褐色  | ロームブロック中量      |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 8 褐色  | ローム粒子中量        |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量        | 9 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子少量          |       |                |

遺物出土状況 土師器片18点(坏3, 甕15), 須恵器片2点(坏, 蓋)が出土している。1025・1026はP1の埋土から出土している。

所見 時期は, 出土土器から8世紀中葉と考えられる。

第151号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第315図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1025	須恵器	坏	(14.9)	(2.9)	-	黄母・長石・石英	黄灰	普通	体部ロクロナデ	P1埋土	
1026	須恵器	蓋	-	(1.4)	-	石英・黒色粒子	灰	普通	つまみ縁合縁, ロクロナデ	P1埋土	

第153号掘立柱建物跡 (第316・317図)

位置 調査区中央部のS7f1区に位置し, 平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1610号住居跡を掘り込み, 第149号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間, 梁間2間の割柱式建物跡で, 桁行方向をN-85°-Eとする東西棟である。規模は桁行6.90m, 梁間4.25mほどで, 柱間寸法は桁行が2.27m (7.5尺), 梁間が2.12m (7尺)を基調としている。

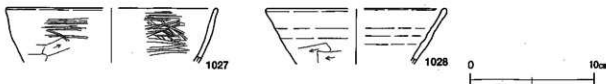
柱穴 平面形はP3・P7が方形で, その他はほぼ円形を呈しており, 深さは15~40cmほどである。柱抜き取り痕は土層断面図中の第1・2・6~8層が相当し, しまりが弱い。その他の層はローム土を主体とした埋土で, 強く突き固められて互層をなしている。

土層解明 (各柱穴共通)

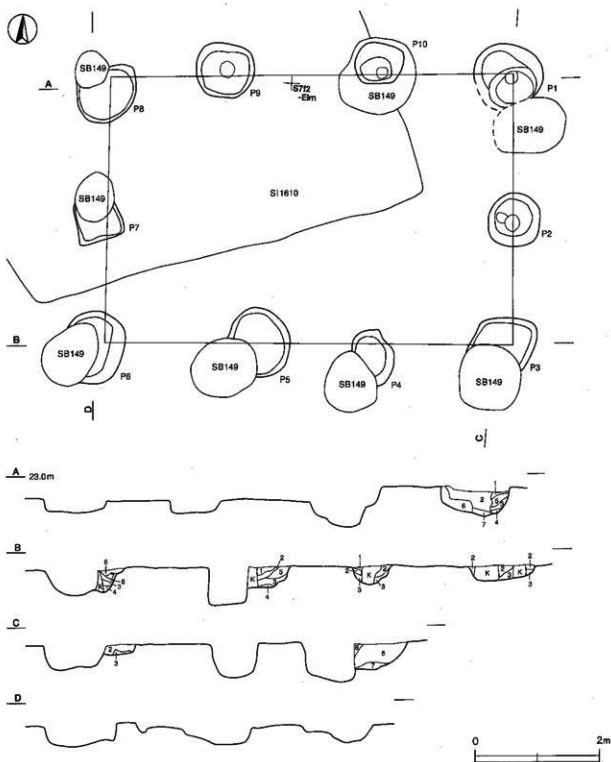
- |       |                  |       |                 |
|-------|------------------|-------|-----------------|
| 1 褐色  | ロームブロック多量        | 5 暗褐色 | ロームブロック少量       |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量          | 6 黒褐色 | ロームブロック少量       |
| 3 褐色  | ロームブロック多量、炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量        | 8 褐色  | ローム粒子中量         |

遺物出土状況 土師器片48点(坏7, 甕・瓶41), 須恵器片9点(坏2, 甕・瓶6, 瓶1)が出土している。1028は, P3の柱抜き取り痕から出土している。

所見 時期は, 1027の形状と重複関係から8世紀後葉と考えられる。重複する第149号掘立柱建物跡とはほぼ重なることから, 同位置で桁行方向を若干ずらしながら建て替えが行われたものと推測される。



第316図 第153号掘立柱建物跡出土遺物実測図



第317図 第153号掘立柱建物跡実測図

第153号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第316図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1027	土師器	環	[16.5]	(4.3)	-	長石・石英	明赤褐	普通	体部外面へツ磨り後、へツ磨き	P2掘土	
1028	須臾器	環	[14.0]	(4.4)	-	雲母・長石・石英	灰白	普通	体部下縁手持ちへツ磨り	P3抜き取り痕	

第154号掘立柱建物跡 (第318図)

位置 調査区中央部のT 8 h3区に位置し、平坦な台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第1637・1638号住居跡を掘り込み、第1631・1632号住居と第91号堀、第1548号土坑、第6号柱穴列に掘り込まれている。

規模と構造 北側部分が第91号堀に掘り込まれているために全体の様相は不明で、東西方向は3間、南北方向は1間だけが確認されている。付近の掘立柱建物の様相から、桁行方向をN-88°-Eとする桁行3間の東西棟の可能性が高い。規模は桁行5.15m、梁間2.50mほどが確認されており、柱間寸法は桁行の中間部分であるP3・P4間が2.12m(7尺)、その両側は1.51m(5尺)で、梁間は2.12m(7尺)を基調としている。

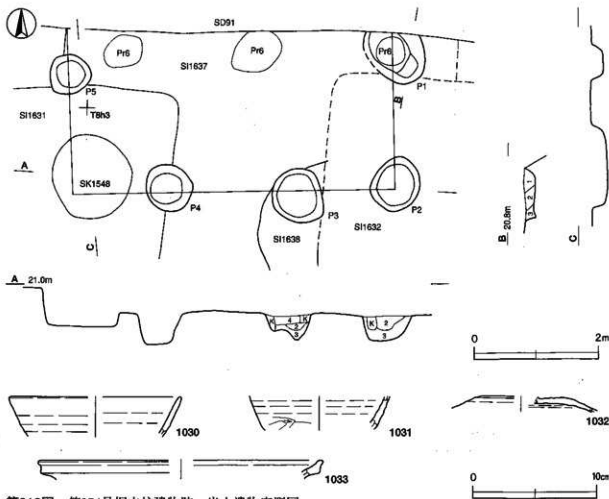
柱穴 平面形はいずれも円形を呈し、深さは15~40cmである。柱抜き取り痕は土層断面図中の第1・4層が相当し、しまりが弱い。その他の層はローム土を主体とした埋土で、互層をなしているが、強く突き固められてはいない。

土層解説 (各柱穴共通)

- |                            |                             |
|----------------------------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量   | 3 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 4 暗褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片19点(坏2, 甕17), 須恵器片7点(坏2, 蓋4, 甕1)が出土している。I031~I033はP2の柱抜き取り痕から出土している。

所見 時期は、出土土器と重複関係から8世紀後葉と考えられる。



第318図 第154号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第154号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第318図)

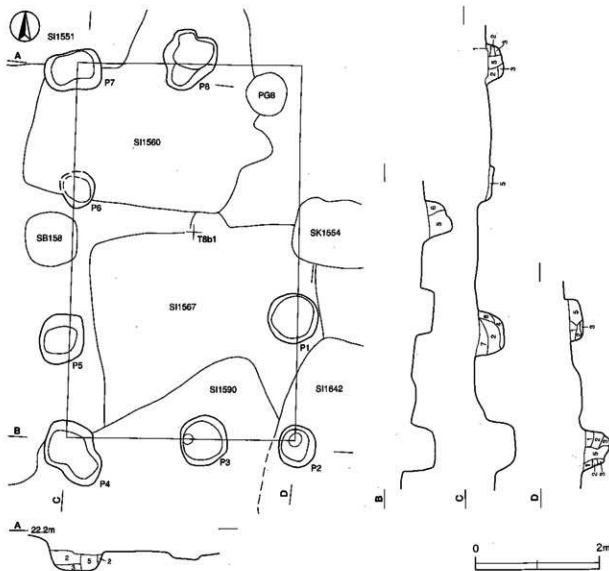
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1000	須恵器	杯	[13.6]	(3.2)	-	雲母・長石・石英	黄灰	普通	体部口クロナデ	P3抜き取り痕	
1001	須恵器	杯	-	(2.7)	-	雲母・長石・石英	黄灰	普通	体部下縁手持ちヘタ削り	P2抜き取り痕	
1002	須恵器	蓋	-	(1.2)	-	長石・石英	灰	普通	天母部回転ヘラ削り、つまみ接合痕	P2抜き取り痕	
1003	土師器	壺	[22.4]	(1.5)	-	雲母・長石・石英	橙	普通	口縁磨損ナデ	P2抜き取り痕	

第157号掘立柱建物跡 (第319・320図)

位置 調査区中央部のT7b0区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1567・1590号住居跡と第155・158・162・183号掘立柱建物跡を掘り込み、第1551・1560・1642号住居に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間、梁間2間の側柱式建物跡で、桁行方向をN-0°とする南北棟である。規模は桁行7.00m、梁間3.60mほどで、桁行の柱間寸法は中間部分のP7・P8間が2.42m(8尺)、その両側が1.81m



第319図 第157号掘立柱建物跡出土遺物実測図

(6尺)で、梁間は1.81m(6尺)を基調としている。

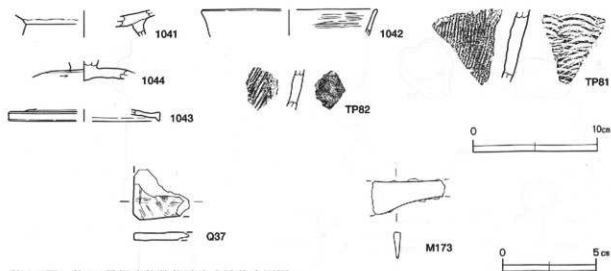
柱穴 平面形はP1～P3・P6が円形で、その他は隅丸方形ないし長方形を呈し、深さは25～40cmほどである。柱痕・柱抜き取り痕は土層断面図中の第5層が相当し、しまりが弱い。P7の土層断面からは柱痕が明瞭に確認されており、推定される柱の径は20cmほどである。その他の層はローム土を主体とした埋土で、互層をなしているが、強く突き固められてはいない。

土層解説 (各柱穴共通)

- |        |           |       |                    |
|--------|-----------|-------|--------------------|
| 1 褐色   | ロームブロック多量 | 5 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量 |
| 2 黒褐色  | ロームブロック少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック微量 |
| 3 極暗褐色 | ロームブロック少量 | 7 褐色  | ロームブロック多量、炭化粒子微量   |
| 4 暗褐色  | ロームブロック中量 | 8 褐色  | ロームブロック中量、炭化粒子微量   |

遺物出土状況 土師器片35点(坏・碗5、甕・瓶30)、須恵器片17点(坏・高台付坏6、蓋4、甕・瓶7)、砥石1点、不明鉄製品1点(鑿カ)が出土している。1042はP8の柱抜き取り痕から、1043はP8の埋土から出土している。

所見 時期は、出土土器と重複関係から9世紀前半と考えられる。



第320図 第157号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第157号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第320図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1041	須恵器	高台付坏	-	(2.1)	-	雲母・長石・石英	灰黄	普通	高台貼り付け後、ロクロナデ	P1埋土	
1042	土師器	碗	[140]	(2.1)	-	雲母・長石・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	体部内面へうろつき	P8抜き取り痕	
1043	須恵器	蓋	[120]	(0.9)	-	雲母・長石・石英	黄灰	普通	口縁部ロクロナデ	P8埋土	
1044	須恵器	蓋	-	(1.6)	-	雲母・長石・石英	灰白	普通	天井部凹陥へうろつき	P1埋土	
TP81	須恵器	大甕	-	-	-	長石	オリーブ灰	普通	外面平行明き、内面同心円状の当て具痕	P1埋土	
TP82	須恵器	甕	-	-	-	雲母・長石	灰	普通	外面平行明き、内面ナデ	P6埋土	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q37	砥石	(2.7)	(2.9)	(0.4)	(3.4)	粘板岩	砥面1面、その他の面は潤雑のため不明	P2埋土	
M173	刀子	(3.9)	1.3	0.3	(3.9)	鉄	茎部の破片、片割カ	P1埋土	

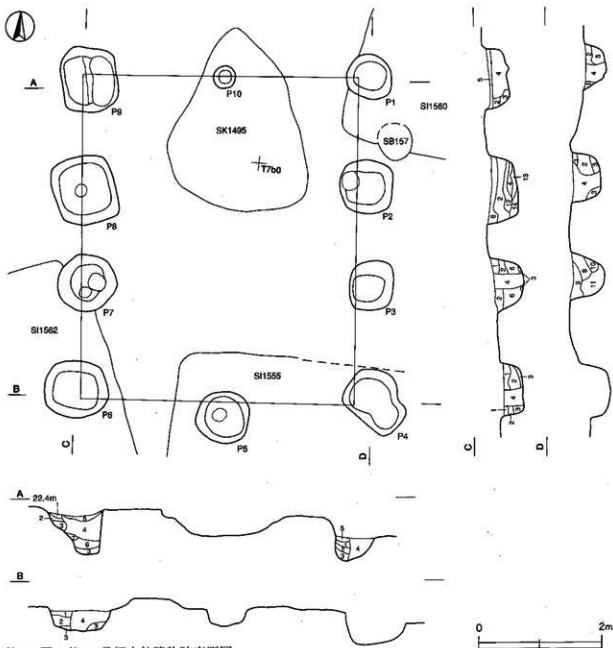
第158号掘立柱建物跡 (第321・322図)

位置 調査区中央部のT7b9区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1562号住居跡と第155号掘立柱建物跡を掘り込み、第1555・1560号住居と第157号掘立柱建物、第1495号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間、梁間2間の掘立柱式建物跡で、桁行方向を $N-5^{\circ}-W$ とする南北棟である。規模は桁行5.20m、梁間4.30mほどで、柱間寸法は桁行が1.81m(6尺)、梁間が2.12m(7尺)を基調としている。

柱穴 平面形はP1・P5・P7が円形で、その他は隅丸方形である。深さは35~70cmほどである。柱痕・柱抜き取り痕は土層断面図中の第4~6層が相当し、しまりが弱い。P6の土層断面からは柱痕が明瞭に確認されており、推定される柱の径は25cmほどである。その他の層はローム土を主体とした埋土で、互層をなしているが、強く突き固められてはいない。



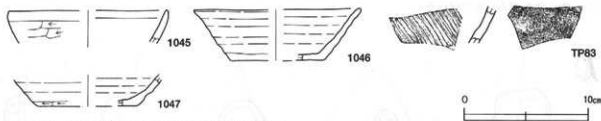
第321図 第158号掘立柱建物跡実測図

土層解説 (各柱穴共通)

- |       |                   |        |                            |
|-------|-------------------|--------|----------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量         | 8 暗褐色  | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量     |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量         | 9 褐色   | ロームブロック多量, 焼土ブロック少量, 炭化物微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化物微量  | 10 褐色  | ロームブロック多量                  |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量     | 11 暗褐色 | ロームブロック中量                  |
| 5 褐色  | ローム粒子中量           | 12 褐色  | ロームブロック多量, 炭化物微量           |
| 6 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 13 褐色  | ロームブロック中量, 焼土粒子微量          |
| 7 褐色  | ロームブロック中量         | 14 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量          |

遺物出土状況 土師器片7点(坏4, 甕・瓶3), 須恵器片7点(坏3, 甕・瓶4)が出土している。1045はP2の埋土から, 1046はP8の柱抜き取り痕から出土している。

所見 時期は, 出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第322図 第158号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第158号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第322図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1045	土師器	坏	[12.6]	(27)	-	雲母・石英	明赤褐	普通	口縁部・体部内面横ナデ	P2埋土	
1046	須恵器	坏	[13.2]	4.1	[7.4]	長石・石英	黄灰	普通	体部下端・底部回転ヘラ削り	P8抜き取り痕	
1047	須恵器	坏	-	(25)	[8.0]	雲母・石英	黄灰	普通	体部下端・底部手持ちヘラ削り	P9埋土	
TP83	須恵器	甕	-	-	-	雲母・石英	黄灰	普通	外面平行叩き。内面施文の当て具痕	P8埋土	

第159号掘立柱建物跡 (第323図)

位置 調査区中央部のT8b2区に位置し, 平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1586号住居跡と第177・183号掘立柱建物跡を掘り込み, 第1642号住居と第1552・1554・1579号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間, 梁間2間の側柱式建物跡で, 桁行方向をN-0°とする南北棟である。規模は桁行6.75m, 梁間4.60mほどで, 柱間寸法は梁間が2.27m (7.5尺), 桁行は中間部分のP2・P3間だけが2.27m (7.5尺)で, その両側部分は2.12m (7尺)を基調としており, 異なる間尺を用いて構築されている。

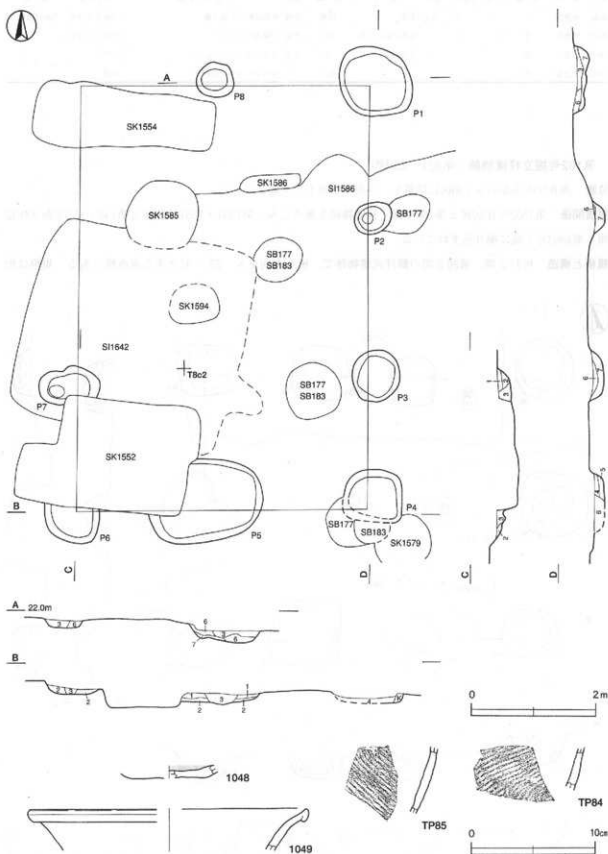
柱穴 平面形はP4~P6が隅丸方形または隅丸長方形で, P7が不整形円形, その他は円形を呈しており, 深さは15~20cmほどである。柱痕・柱抜き取り痕は土層断面図中の第3・6層が相当し, しまりが弱い。その他の層はローム土を主体とした埋土で, 互層をなしているが, 強く突き固められてはいない。

土層解説 (各柱穴共通)

- |        |                     |       |                  |
|--------|---------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色  | ロームブロック少量           | 5 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化物微量 |
| 2 極暗褐色 | ロームブロック少量           | 6 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量   |
| 3 黒褐色  | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化物微量 | 7 褐色  | ローム粒子中量          |
| 4 暗褐色  | ローム粒子少量             |       |                  |

遺物出土状況 土師器片16点(坏1, 甕・瓶15), 須恵器片4点(坏1, 甕3)が出土している。1048・1049はP4の柱抜き取り痕から出土している。

所見 廃絶時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第323図 第159号掘立柱建物跡・出土遺物実測図



第159号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第323図)

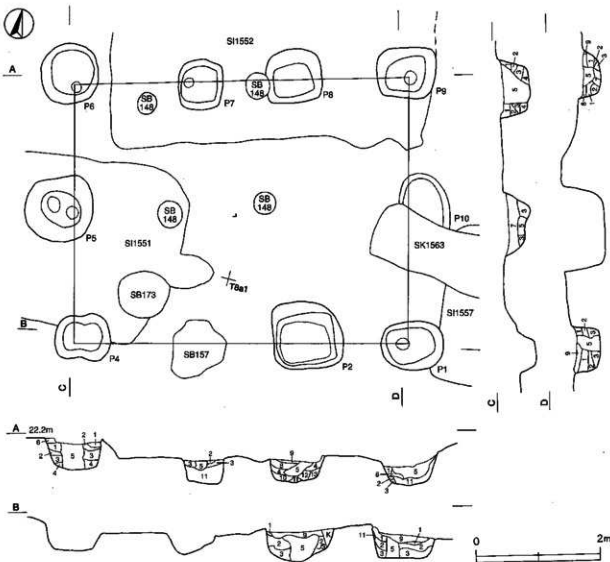
番号	類別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1048	須恵器	坏	-	(1.0)	[6.2]	長石	灰褐色	普通	底部回転ヘラ切り履し	P4抜き取り痕	内面自然釉
1049	須恵器	甕	[22.1]	(3.5)	-	雲母・長石・石英	黄灰	普通	口縁部ロクロナデ	P4抜き取り痕	
TP84	須恵器	甕	-	-	-	雲母・長石・石英	灰	普通	外面平行印き, 内面ナデ	P3埋土	
TP85	須恵器	甕	-	-	-	長石	褐色	普通	外面平行印き, 内面ナデ	P4埋土	

第162号掘立柱建物跡 (第324・325図)

位置 調査区中央部のS7j0区に位置し, 平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1552号住居跡と第160号掘立柱建物跡を掘り込み, 第1551・1557号住居と第148・157号掘立柱建物, 第1563号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間, 梁間2間の竪柱式建物跡で, 桁行方向をN-73°-Eとする東西棟である。規模は桁



第324図 第162号掘立柱建物跡実測図

行5.35m, 梁間4.20mほどで, 柱間寸法は桁行が1.81m (6尺), 梁間が2.12m (7尺)を基調としている。

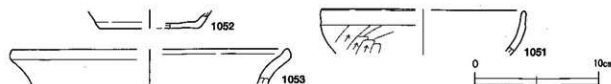
柱穴 平面形はP5・P6が円形, P4が不整楕円形で, その他は隅丸方形を呈し, 深さは40~50cmほどである。柱抜き取り痕は土層断面図中の第5・7・9層が相当し, しまりが弱い。その他の層は埋土で, ローム土を主体とした褐色土や暗褐色土で突き固められて互層になっている。

土層解説 (各柱穴共通)

- |                                |                                |
|--------------------------------|--------------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量                | 8 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量                | 9 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量   |
| 3 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量        | 10 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量           |
| 4 黒褐色 ロームブロック少量                | 11 褐色 ロームブロック多量                |
| 5 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量      | 12 褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子微量        |
| 6 褐色 ロームブロック中量                 | 13 暗褐色 ロームブロック中量               |
| 7 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化物少量, 焼土粒子微量 |                                |

遺物出土状況 土師器片34点 (坏5, 甕・甔29), 須恵器片3点 (坏, 蓋, 甕)が出土している。1051はP5の埋土から, 1052はP9の柱抜き取り痕から出土している。

所見 時期は, 出土土器や遺構の配置から8世紀前葉と考えられる。



第325図 第162号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第162号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第325図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色質	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1051	土師器	坏	[6.2]	(3.6)	-	炭石・赤色粒子	にぶい質粒	普通	口縁部・体内外面削ナゲ	P5埋土	
1052	須恵器	坏	-	(1.4)	[8.0]	雲母・炭石・石英	黄灰	普通	底部多方向のヘタ削り	P9抜き取り痕	
1053	土師器	甕	[22.0]	(2.9)	-	雲母・炭石・石英	橙	普通	口縁部削ナゲ	P2埋土	

第164号掘立柱建物跡 (第326図)

位置 調査区中央部のT8j1区に位置し, 南に緩やかに傾斜した台地上の縁辺部に立地している。

重複関係 第168号掘立柱建物跡を掘り込み, 第1559号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間, 梁間2間の銅柱式建物跡で, N-2°-Wを桁行方向とする南北棟である。規模は桁行5.50m, 梁間4.20mほどで, 柱間寸法は桁行が1.81m (6尺), 梁間が2.12m (7尺)を基調としている。南側梁間の中間部分に想定される柱穴は, 確認されていない。

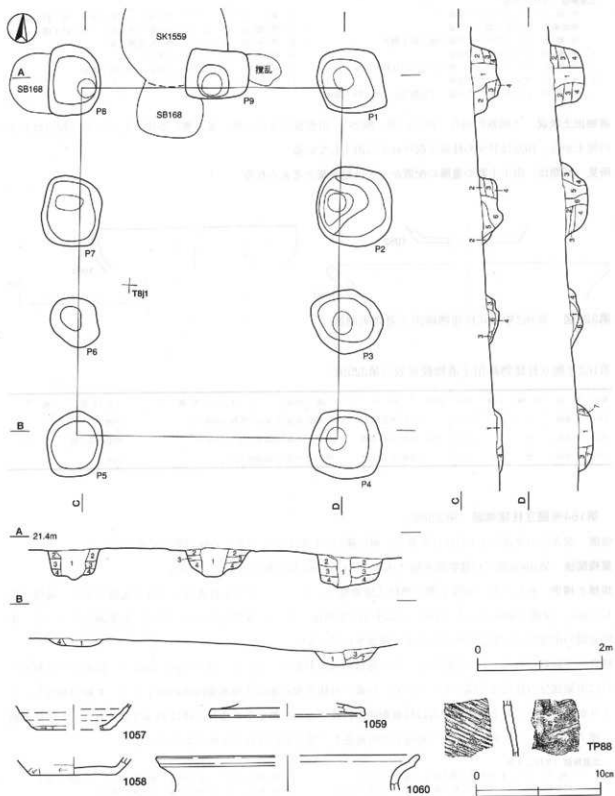
柱穴 平面形はP3・P6が円形で, その他は隅丸方形を呈している。深さは10~40cmで, 傾斜した地形のために南側部分の柱穴ほど浅くなっている。柱痕・柱抜き取り痕は土層断面図中の第1・5・6層が相当し, しまりが弱い。P1の土層断面からは柱痕が明瞭に確認され, 推定される柱の径は20cmほどである。その他の層は埋土で, ローム土を主体とした褐色土や暗褐色土で突き固められて互層をなしている。

土層解説 (各柱穴共通)

- |                                 |                               |
|---------------------------------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量      | 5 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック・粘土粒子少量, 炭化粒子微量    | 6 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量         |
| 3 暗褐色 ロームブロック中量, 粘土粒子少量         | 7 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化物少量        |
| 4 暗褐色 ロームブロック中量, 粘土粒子少量, 焼土粒子微量 |                               |

遺物出土状況 土師器片23点（坏1，堯22），須恵器片24点（坏10，蓋3，堯11）が出土している。1058・1060はP1の埋土から，1057はP8の柱抜き取り痕から出土している。

所見 時期は，出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第326図 第164号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第164号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第326図)

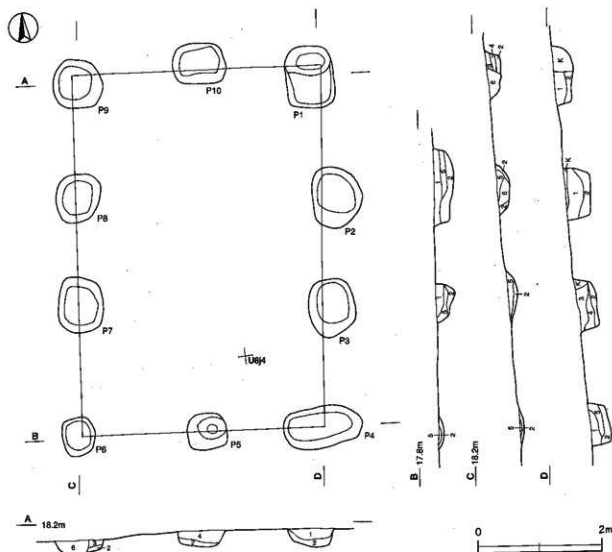
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1057	須恵器	坏	-	(2.0)	[5.8]	灰石	黄灰	普通	体部下縁・底部手持ちヘラ削り	P8抜き取り痕	
1058	須恵器	坏	-	(1.4)	6.7	灰石・石英	黄灰	普通	底部一方向のヘラ削り	P1黒土	
1059	須恵器	蓋	[12.2]	(1.0)	-	雲母・灰石・石英	黄灰	普通	口縁部ロクロナデ	P2抜き取り痕	
1060	土師器	甕	[20.8]	(2.4)	-	雲母・灰石・石英	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ	P1埋土	
TP88	須恵器	甕	-	-	-	雲母・灰石・石英	にぶい黄橙	普通	外面平行叩き、内面ナデ	P4抜き取り痕	

第166号掘立柱建物跡 (第327・328図)

位置 調査区南部のU 813区に位置し、台地から低地に下りる斜面部に立地している。

規模と構造 桁行3間、梁間2間の圓柱式建物跡で、桁行方向をN-7°-Eとする南北棟である。規模は桁行5.80m、梁間3.90mほどで、柱間寸法は桁行・梁間ともに1.96m (6.5尺)を基調としている。

柱穴 平面形はP4だけが楕円形で、その他は兩丸方形ないし長方形を呈している。深さは5~40cmで、中間



第327図 第166号掘立柱建物跡実測図

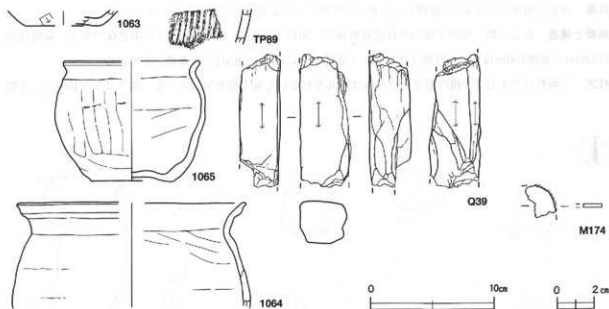
部分は浅く、両側が深くなっている。柱抜き取り痕は土層断面図中の第1・5・6層が相当し、しまりが弱い。その他の層は埋土で、ローム土を主体とした暗褐色土で突き固められて、互層をなしている。

土層解説 (各柱穴共通)

- |       |                     |        |                     |
|-------|---------------------|--------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量   | 4 暗褐色  | ロームブロック中量、焼土粒子・砂粒微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量    | 5 極暗褐色 | ロームブロック少量           |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子・砂粒少量 | 6 極暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量    |

遺物出土状況 土師器片43点(坏5, 甕38), 須恵器片10点(坏3, 蓋2, 甕5), 砥石1点, 不明鉄製品1点が出土している。1063はP5の埋土から, 1065はP8の柱抜き取り痕から出土している。

所見 時期は, 出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第328図 第166号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第166号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第328図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	手法の特徴	出土位置	備考
1063	須恵器	坏	-	(1.2)	[6.0]	雲母・長石・石英	灰黄	普通	底部下縁・底部手持ちヘラ削り	P5埋土	
1064	土師器	甕	[18.0]	(8.3)	-	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	体部外面ナデ・輪模み板, 内面ヘラナデ	P2埋土	
1065	土師器	小形甕	[10.6]	9.6	6.2	雲母・長石・石英	灰黄褐	普通	体部内・外面ヘラナデ	P8抜き取り痕	60%, PL66
TP89	須恵器	甕	-	-	-	雲母・長石・石英	灰黄褐	普通	外面平行叩き, 内面ナデ	P3埋土	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q39	砥石	(10.6)	4.2	3.4	(304)	凝灰岩	両端欠損, 残存する4面のうち3面は断面, 1面は自然面	P8埋土	PL77
M174	紡錘車*	(1.7)	(1.6)	0.2	(0.9)	鉄	均一な厚さの円盤状	P4埋土	

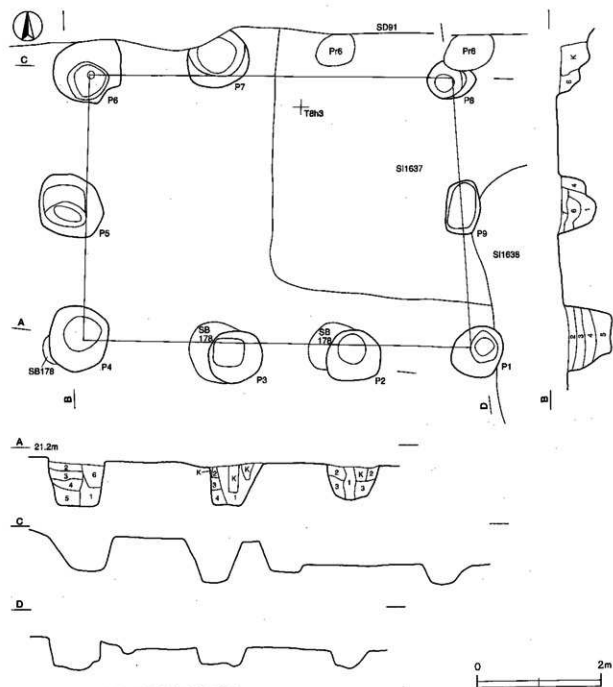
第167号掘立柱建物跡 (第329・330図)

位置 調査区南部のT8h2区に位置し, 平坦な台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第1637・1638号住居跡と第178号掘立柱建物跡を掘り込み, 第91号堀と第6号柱穴列に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間、梁間2間の偏柱式建物跡で、 $N-90^{\circ}-E$ を桁行方向とする東西棟である。規模は梁間が4.20mほどで、桁行は北側が5.80m、南側が6.20mと、北側桁行が南側比べて短くなっており、平面形は台形に近い長方形となっている。柱間寸法は桁行・梁間ともに概ね2.12m（7尺）を基調としているが、北側桁行は中間部分に想定される柱穴が確認されていないため不明である。

柱穴 平面形はP9だけが隅丸長方形で、その他は円形を呈し、深さは60~75cmほどである。柱痕・柱抜き取り痕は土層断面図中の第1・6・7層が相当し、しまりが弱い。P2の土層断面からは柱痕が明瞭に確認され、推定される柱の径は15cmほどである。その他の層は埋土で、ローム土を主体とした褐色土や暗褐色土で突き固められて互層をなしている。



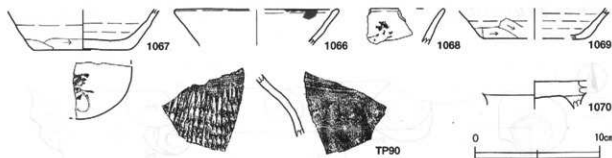
第329図 第167号掘立柱建物跡実測図

土層解説 (各柱穴共通)

- |       |                        |       |                   |
|-------|------------------------|-------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量              | 6 黒褐色 | ロームブロック少量         |
| 3 褐色  | ロームブロック多量, 焼土粒子微量      | 7 黒褐色 | ロームブロック少量         |
| 4 褐色  | ロームブロック多量              |       |                   |

遺物出土状況 土師器片36点(坏・高台付坏3, 甕33), 須恵器片18点(坏10, 甕8)が出土している。1066はP2の埋土から, 1067はP4の柱抜き取り痕から出土している。

所見 時期は, 出土土器と重複関係から9世紀前葉と考えられる。



第330図 第167号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第167号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第330図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1066	土師器	坏	[13.0]	(2.9)	-	石英	橙	普通	体部ロクロナデ	P2埋土	輪縁付着
1067	須恵器	坏	-	(3.3)	[7.8]	雲母・長石・石英	黄灰	普通	底部ヘラナデ	P4抜き取り痕	底部外面墨書 □□ PL70
1068	須恵器	坏	-	-	-	雲母・長石・石英	灰白	普通	体部ロクロナデ	P4抜き取り痕	体部外面墨書 □□ PL70
1069	須恵器	坏	-	(2.4)	[8.0]	雲母・長石・石英	灰	普通	体部下端・底部手持ちヘラ削り	P4抜き取り痕	
1070	土師器	高台付坏	-	(2.3)	-	雲母・長石・石英	橙	普通	高台縁を付け、ロクロナデ, 内面黒色処理	P6抜き取り痕	
TP90	須恵器	片	-	-	-	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	外面平行削き, 内面ナデ	P6抜き取り痕	

第168号掘立柱建物跡 (第331図)

位置 調査区南部のT7h0区に位置し, 平坦な台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第1630号住居跡と第170号掘立柱建物跡を掘り込み, 第1629・1634・1636号住居と第164・176号掘立柱建物, 第1559号土坑, 第27号地下式竈, 第107号溝に掘り込まれている。

規模と構造 桁行・梁間ともに2間の総柱式建物跡である。平面形は1辺が4.85mほどの方で, 桁行と梁間の区別は困難である。南北軸はN-2°-Wを指しており, 柱間寸法は2.42m(8尺)を基調としている。

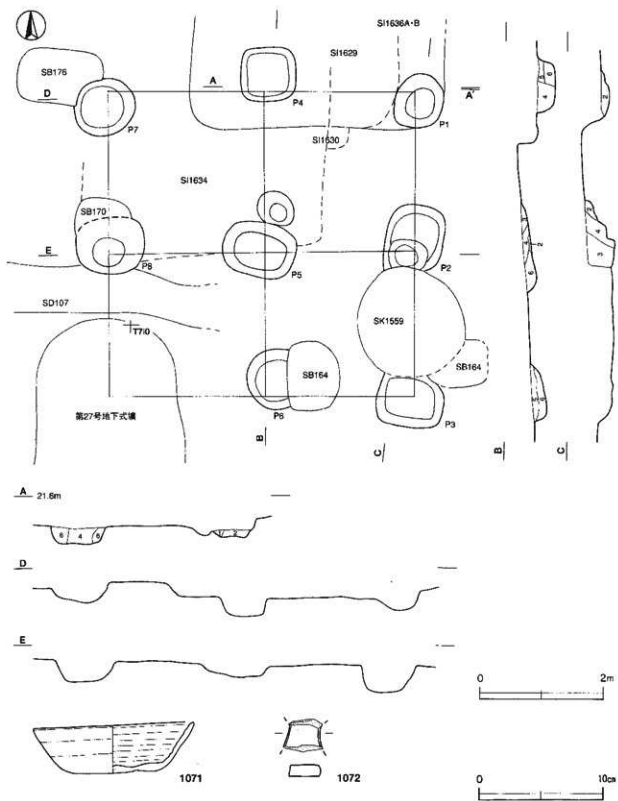
柱穴 平面形はP1・P7が7角形で, その他は隅丸方形ないし長方形を呈し, 深さは15~45cmとばらつきがある。柱抜き取り痕は土層断面図中の第1・3・4層が相当し, しまりが弱い。その他の層は埋土で, ローム土を主体とした褐色土や暗褐色土で突き固められて互層をなしている。

土層解説 (各柱穴共通)

- |       |                      |       |                         |
|-------|----------------------|-------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量     |
| 2 褐色  | ロームブロック多量            | 5 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量  |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物少量 |

遺物出土状況 土師器片9点(坏2, 甕・甌7), 須恵器片3点(坏1, 甕・甌2)が出土している。1071はP2の柱抜き取り痕から, 1072はP4の柱抜き取り痕から出土している。

所見 柱抜き取り痕から出土した土器から, 8世紀後葉に廃絶されたと考えられる。



第331図 第168号掘立柱建物跡・出土遺物実測図



第168号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第331図)

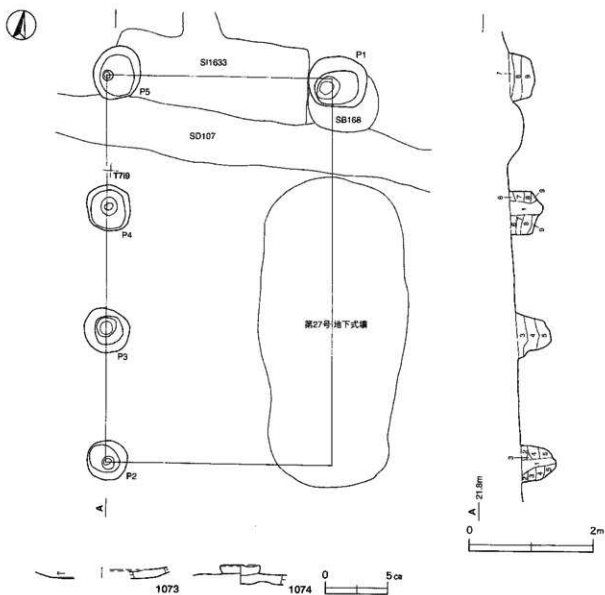
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	手法の特徴	出土位置	備考
1071	須臬器	杯	12.6	4.0	7.5	長石・石英	に濃い黄橙	普通	底部回転ヘラ切り磨し	P2抜き取り痕	PL66
1072	拍毬器	盃	-	-	-	長石・石英	灰白	普通	孔はヘラ切り	P4抜き取り痕	

第170号掘立柱建物跡 (第332図)

位置 調査区南部のT79区に位置し、南に緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第1633号住居と第168号掘立柱建物、第107号溝、第27号地下式竈に掘り込まれている。

規模と構造 規模は桁行6.30m、梁間3.60mほどで、桁行3間、梁間1間の側柱式建物跡である。桁行方向はN-2°-Wで、柱間寸法は桁行が2.12m(7尺)、梁間が3.62m(12尺)を基準としている。梁面は規模から判断して2間の可能性も考えられるが、中間部分に想定される柱穴は確認されていない。



第332図 第170号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

柱穴 平面形はP1が隅丸方形で、その他は円形を呈し、深さは40～60cmほどである。柱痕・柱抜き取り痕は土層断面図中の第1層が相当し、しまりが弱い。その他の層は埋土で、ローム土を主体とした褐色土で突き固められている。

土層解説（各柱穴共通）

1	暗褐色	ローム粒子多量、炭化粒子微量	7	褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量
2	褐色	ロームブロック多量、粘土ブロック少量、焼土ブロック微量	8	褐色	ロームブロック多量、粘土ブロック微量
3	褐色	ロームブロック多量	9	褐色	ロームブロック多量、粘土ブロック少量、焼土粒子微量
4	褐色	ロームブロック多量、粘土ブロック中量			
5	褐色	ロームブロック多量、粘土ブロック少量			
6	褐色	ロームブロック多量、炭化物微量			

遺物出土状況 土師器片18点（坏1、甕・瓶17）、須恵器片3点（坏、甕、甍）が出土している。1073はP1の柱抜き取り痕から、1074はP4の埋土から出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀前半と考えられる。

第170号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第332図）

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1073	須恵器	坏	—	(0.99)	7.8	雲母・長石・石英	灰	普通	底器回転ヘラ削り	P1抜き取り痕	
1074	須恵器	甕	—	(1.6)	—	雲母・長石・石英	灰	普通	つまみ焼合後、ロクロナデ	P4埋土	

第171号掘立柱建物跡（第333図）

位置 調査区中央部のT7d9区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1562・1590号住居跡と第150・155・165号掘立柱建物跡を掘り込み、第1555号住居に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間、梁間2間の隅柱式建物跡で、桁行方向をN-0°とする南北棟である。規模は桁行が6.40m、梁間が4.30mほどで、柱間寸法は桁行・梁間ともに2.12m（7尺）を基調としている。

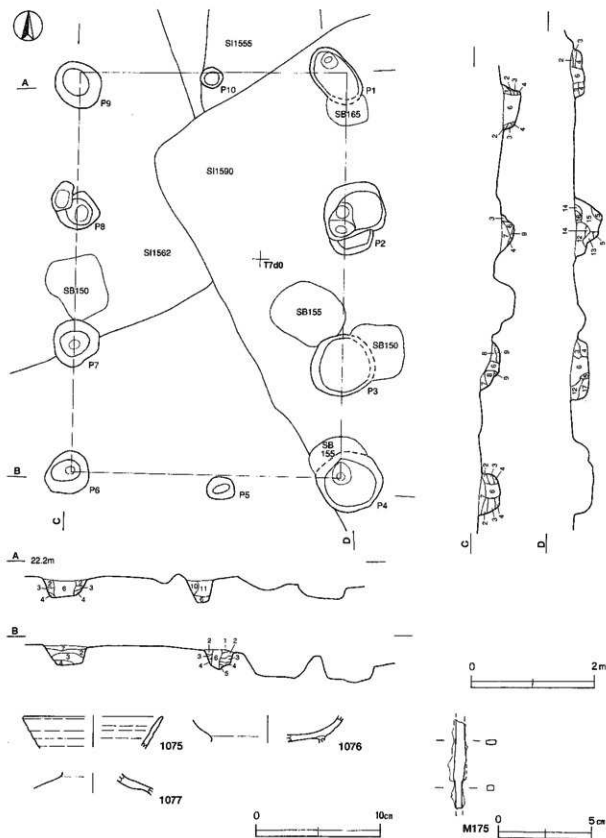
柱穴 平面形はP1・P2が隅丸方形で、その他は円形を呈し、深さは40～60cmほどである。柱痕・柱抜き取り痕は土層断面図中の第6・7・11～16層が相当し、しまりが弱い。P5～P7の土層断面からは柱痕が明瞭に確認されており、推定される柱の径は10～15cmである。その他の層は埋土で、ローム土を主体とした褐色土や暗褐色土、黒褐色土で突き固められて互層をなしている。

土層解説（各柱穴共通）

1	暗褐色	ロームブロック中量	10	褐色	ロームブロック中量
2	褐色	ロームブロック多量	11	暗褐色	ロームブロック中量
3	暗褐色	ロームブロック中量、炭化物微量	12	黒褐色	焼土ブロック・炭化物少量、ロームブロック微量
4	黒褐色	ローム粒子微量	13	黒褐色	焼土ブロック・炭化粒子少量
5	褐色	ローム粒子中量	14	褐色	ロームブロック多量、焼土粒子少量
6	暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック微量	15	褐色	ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化物微量
7	黒褐色	ロームブロック少量、炭化物微量	16	褐色	ロームブロック多量、焼土粒子微量
8	黒褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量	17	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
9	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量			

遺物出土状況 土師器片17点（甕・瓶）、須恵器片6点（坏・高台付坏3、甕2、瓶1）、鉄鎌1点が出土している。1075・1076はP3の埋土から出土している。

所見 埋土から出土した土器から、8世紀後半に構築されたと考えられる。



第333图 第171号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第171号掘立柱建物跡出土物観察表 (第333図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色黄	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1075	須恵器	坏	[112]	(2.5)	-	雲母・長石・石英	灰白	普通	体部口クロナゲ	P3層土	
1076	須恵器	高台付坏	-	(2.0)	-	長石・石英	灰	普通	底部距縁へフ覆り後、高台離り付け	P3層土	
1077	須恵器	長圓瓶	-	(1.7)	-	長石・褐色粒子	灰白	良好	体部口クロナゲ	P7層土	外麗自然粉

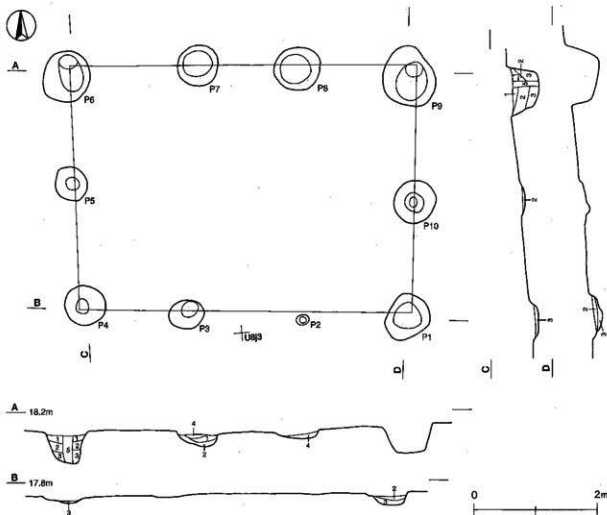
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M175	鐵	(4.8)	(0.7)	0.3	(3.7)	鐵	瓦葺部から基部にかけての破片、両端	P1抜き取り痕	

第172号掘立柱建物跡 (第334・335図)

位置 調査区南部のU 8 i2区に位置し、南に傾斜した斜面部に立地している。

規模と構造 桁行3間、梁間2間の掘立柱建物跡で、桁行方向をN-92°-Eとする東西棟である。規模は桁行5.50m、梁間3.90mほどで、柱間寸法は桁行が1.81m (6尺)、梁間が1.96m (6.5尺)を基調としている。

柱穴 平面形は、いずれも円形を呈している。深さは5~50cmほどで、南側に位置する柱穴はほど浅くなっている。柱痕・柱抜き取り痕は土層断面図中の第5層が相当し、しまりが弱い。P 6の土層断面からは柱痕が明瞭



第334図 第172号掘立柱建物跡実測図

に確認され、推定される柱の径は15cmほどである。その他の層は埋土で、ローム土を主体とした暗褐色土で突き固められている。

土層解説 (各柱穴共通)

- |                 |                        |
|-----------------|------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック中量 | 4 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子中量   | 5 黒褐色 ローム粒子少量          |
| 3 暗褐色 ロームブロック多量 |                        |

遺物出土状況 土師器片18点(坏・碗2, 甕16), 須恵器片7点(坏5, 甕2)が出土している。1078はP9の埋土から、1079はP9の柱抜き取り痕から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後半と考えられる。



第335図 第172号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第172号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第335図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1078	須恵器	坏	[13.5]	(2.7)	-	雲母・炭石・石英	灰白	普通	肩部ロケロナテ	P9埋土	
1079	土師器	碗	[12.9]	(4.7)	-	炭石・石英・赤色粒子	黒	普通	肩部内面ヘラ磨き	P9抜き取り痕	
1080	須恵器	高台付坏	-	(2.3)	-	雲母・炭石・石英・赤色粒子	にぶい黒	普通	底部回転ヘラ磨り、高台磨り付け痕	P6埋土	

第173号掘立柱建物跡 (第336図)

位置 調査区中央部のS7j0区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1552号住居跡を掘り込み、第1551号住居に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間、梁間2間の御柱式建物跡で、N-0<sup>\*</sup>を桁行方向とする南北棟である。規模は桁行が6.95m、梁間が4.20mほどで、柱間寸法は桁行が2.27m(7.5尺)、梁間が2.12m(7尺)を基調としている。

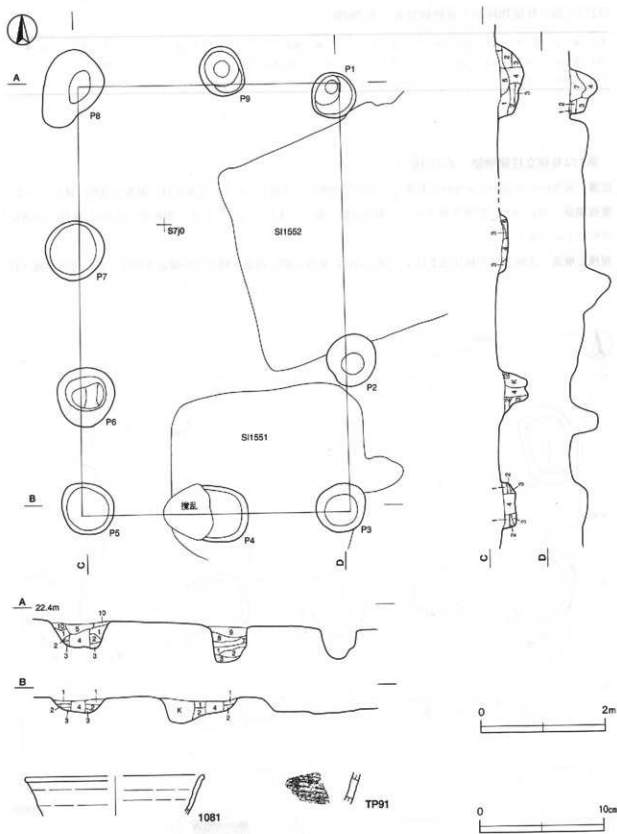
柱穴 平面形はいずれも円形を呈し、深さは15~55cmとばらつきが見られる。柱抜き取り痕は土層断面図中の第4・5・7~9層が相当し、しまりが弱い。その他の層は埋土で、ローム土を主体とした褐色土や暗褐色土、極暗褐色土で突き固められて互層をなしている。

土層解説 (各柱穴共通)

- |                             |                          |
|-----------------------------|--------------------------|
| 1 極暗褐色 ロームブロック少量            | 6 褐色 ロームブロック多量           |
| 2 暗褐色 ロームブロック中量             | 7 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量      | 8 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量 |
| 4 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量   |
| 5 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量      | 10 極暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片5点(坏2, 甕3), 須恵器片2点(坏, 甕)が出土している。1081はP9の埋土から出土している。

所見 時期は、遺構の配置と重複関係から9世紀中葉ないし後半と考えられるが、遺物が少ないため、いずれとも断定しがたい。



第336图 第173号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第173号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第336図)

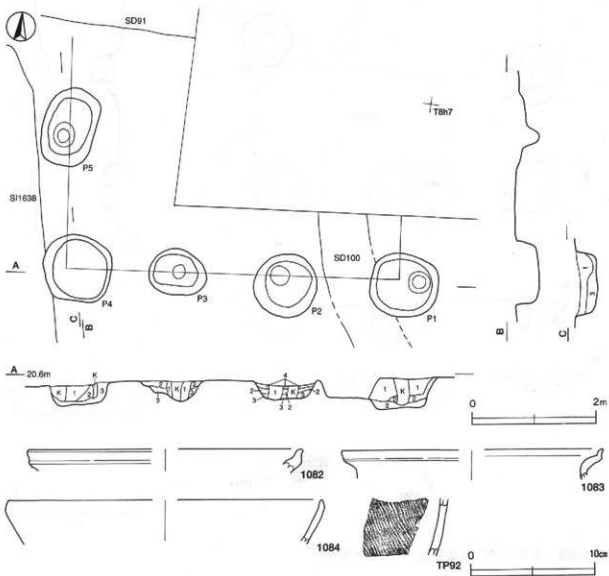
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1081	須恵器	坏	[142]	(3.1)	-	雲母・長石・石英	灰	普通	外部ロケナデ	P3埋土	
TP91	須恵器	甕	-	-	-	雲母・長石・石英	黄灰	普通	外面平行明き、内面ナデ	P4埋土	

第174号掘立柱建物跡 (第337図)

位置 調査区中央部のT 8 h6区に位置し、平坦な台地上に立地している。北東部は、調査区域外に延びている。

重複関係 第1638号住居跡を掘り込み、第91号堀に掘り込まれている。P 1と重複する第100号溝跡との新旧関係は不明である。

規模と構造 北側部分が掘り込まれているために、東西3間、南北1間だけが確認されている。付近の掘立柱



第337図 第174号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

建物の様相から見て、N-85°-Eを桁行方向とする桁行3間の側柱式建物跡の可能性が高い。確認された規模は桁行が5.40m、梁間が3.90mで、柱間寸法は桁行が1.81m（6尺）、梁間が2.12m（7尺）となっている。  
**柱穴** 平面形はP2が円形で、その他は隅丸方形ないし隅丸長方形を呈し、深さは30~50cmである。柱痕・柱抜き取り痕は土層断面図中の第1層が相当し、しまりが弱い。その他の層は埋土で、ローム土を主体とした暗褐色土や極暗褐色土で突き固められている。

土層解説（各柱穴共通）

- |                        |                  |
|------------------------|------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 3 暗褐色 ロームブロック中量  |
| 2 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 4 極暗褐色 ロームブロック少量 |

**遺物出土状況** 土師器片25点（甕・飯24、鉄鉢形1）、須恵器片3点（甕・飯）が出土している。1084・TP92はP1の埋土から出土している。

**所見** 南方6mに位置する第1641号住居跡と軸線を揃えて並列していることから、同時期に機能していたものと推測され、時期は出土土器と併せて9世紀中葉と考えられる。

第174号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第337図）

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1082	土師器	甕	[21.5]	(1.7)	-	長石・石英	黄	普通	口縁部横ナデ	P2埋土	
1083	土師器	甕	[21.0]	(2.4)	-	雲母・長石・石英	に濃い赤褐色	普通	口縁部横ナデ	P5埋土	
1084	土師器	鉄鉢形	[25.0]	(3.4)	-	石英	黄	普通	口縁部横ナデ、体内内・外面磨成	P1埋土	
TP92	須恵器	甕	-	-	-	雲母・長石・石英	黄	普通	外周平行叩き、内面ナデ	P1埋土	

第175号掘立柱建物跡（第338図）

**位置** 調査区中央部のT 8e1区に位置し、平坦な台地上に立地している。

**重複関係** 第1590・1654号住居跡を掘り込み、第1570・1600・1608号土坑と第91号堀に掘り込まれている。

**規模と構造** 桁行3間、梁間2間の側柱式建物跡で、N-80°-Wを桁行方向とする東西棟である。南側桁行のP5・P6は第91号堀の側壁から確認されており、その東側に想定される柱穴は不明である。規模は桁行の6.10m、梁間4.15mほどで、柱間寸法は桁行が1.81m（6尺）、梁間が2.12m（7尺）を基調としているが、桁行のP8・P9間だけは2.42m（8尺）と広がっている。

**柱穴** 平面形はP1が隅丸円形で、その他は円形を呈している。深さはP8だけが25cmと浅く、その他は60~80cmである。また、P5・P6は底面部分だけが確認されている。柱抜き取り痕は土層断面図中の第4~6層が相当し、しまりが弱い。その他の層は埋土で、ローム土を主体とした褐色土や暗褐色土で突き固められている。

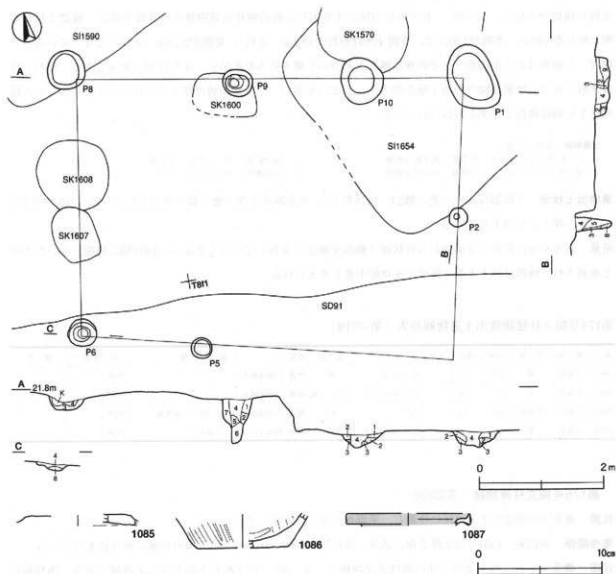
土層解説（各柱穴共通）

- |                       |                            |
|-----------------------|----------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック中量       | 6 黒褐色 ローム粒子微量              |
| 2 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物微量 | 7 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量     |
| 3 褐色 ロームブロック多量        | 8 褐色 ロームブロック多量、炭化粒子微量      |
| 4 黒褐色 ロームブロック少量       | 9 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 |
| 5 暗褐色 ロームブロック少量       |                            |

**遺物出土状況** 土師器片8点（甕・飯）、須恵器片6点（坏2、甕2、甕2）、灰釉陶器片1点（長頸瓶）が出土している。1087はP8の埋土から、1085はP8の柱抜き取り痕から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀後葉と考えられる。





第338図 第175号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第175号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第338図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1085	須恵器	壺*	-	(1.0)	-	雲母・長石・石英	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	P8抜き取り面	
1086	土師器	甕	-	(1.6)	[7.4]	雲母・長石・石英	明赤陶	普通	外部内面、底部内・外面ヘラナデ	P8埋土	
1087	灰釉陶器	長頸瓶	[9.8]	(1.1)	-	黒色粒子・小礫	灰白・オリープ灰	良好	口縁部ロクロナデ	P8埋土	兼役産

第176号掘立柱建物跡 (第339図)

位置 調査区中央部のT7h9区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1630号住居跡と第168号掘立柱建物跡を掘り込み、第91号堀に掘り込まれている。

規模と構造 北側部分が掘り込まれているために、東西2間、南北1間が確認されただけであり、付近の掘立柱建物の様相からみて、N-7°-Wを桁行方向とする梁間2間の側柱式建物跡の可能性が高い。確認された

規模は桁行2.10m、梁間4.20mで、柱間寸法は桁行1.81m（6尺）、梁間2.12m（7尺）を基調としている。

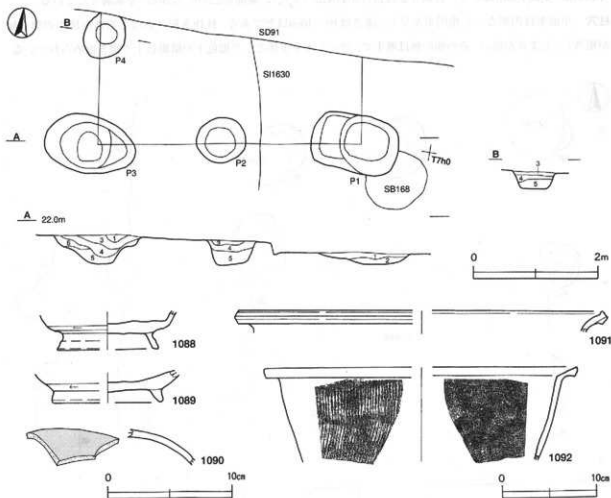
柱穴 平面形はP1が隅丸方形、その他は円形ないし楕円形で、深さは35～40cmほどである。柱抜き取り痕は土層断面図中の第1～4層が相当し、しまりが弱い。その他の層はローム土を主体とした埋土で、強く突き固められた痕跡は認められない。

土層解説（各柱穴共通）

- |   |     |                               |   |      |                 |
|---|-----|-------------------------------|---|------|-----------------|
| 1 | 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化物・粘土ブロック少量     | 3 | 暗褐色  | ロームブロック中量       |
| 2 | 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物・粘土ブロック微量 | 4 | 黒褐色  | ロームブロック少量       |
|   |     |                               | 5 | 暗褐色  | ローム粒子中量         |
|   |     |                               | 6 | 極暗褐色 | ロームブロック中量、炭化物微量 |

遺物出土状況 土師器片16点（甕・瓶）、須恵器片19点（坏・高台付坏13、甕・瓶・鉢6）、灰陶器片1点（長頸瓶）が出土している。1088・1089・1091はP3の柱抜き取り痕から、1090・1092はP2の柱抜き取り痕から出土している。

所見 時期は、出土土器と重複関係から9世紀前葉または中葉と考えられる。



第339図 第176号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第176号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第339図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1088	須恵器	高台付坏	-	(3.0)	[8.0]	長石・石英	灰	普通	底部回転へつ張り後、高台貼り付け	P3抜き取り痕	20%
1089	須恵器	高台付坏	-	(2.5)	[8.6]	雲母・長石・石英	黄灰	普通	高台貼り付け後、ロクロナデ	P3抜き取り痕	15%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1090	灰物陶器	長頸瓶	-	(30)	-	長石	灰黄・灰オリーブ	良好	体部ロケロナテ	P2抜き取り痕	壁投産
1091	須恵器	瓶	[38.4]	(24)	-	長石・石英	灰	普通	口縁部ロケロナテ	P3抜き取り痕	
1092	須恵器	鉢	[33.0]	(100)	-	長石	灰	普通	体部内面ナデ・指頭痕	P2抜き取り痕	

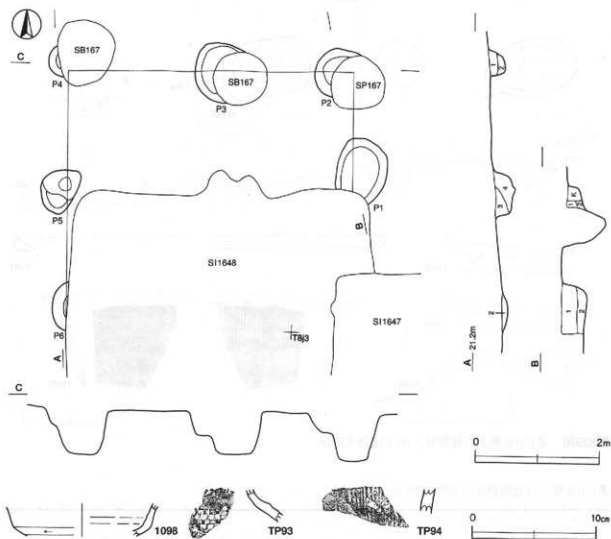
### 第178号掘立柱建物跡 (第340図)

位置 調査区中央部のT8区に位置し、平坦な台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第1647・1648号住居と第167号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と構造 南側部分を掘り込まれているため、南北2間、東西2間が確認されただけであり、付近の掘立柱建物の様相からN-2°-Wを桁行方向とする梁間2間の側柱式建物跡の可能性が高い。確認された規模は桁行4.10m、梁間4.55mほどで、柱間寸法は桁行が1.81m(6尺)、梁間が2.27m(7.5尺)を基調としている。

柱穴 平面形は円形ないし楕円形を呈し、深さは10~40cmほどである。柱抜き取り痕は土層断面図中の第3層が相当し、しまりが弱い。その他の層は埋土で、ローム土を主体とした褐色土や暗褐色土で突き固められている。



第340図 第178号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

## 土層解説 (各柱穴共通)

- 1 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子・炭化粒子微量 3 黒褐色 ロームブロック少量  
 2 暗褐色 ロームブロック中量 4 褐色 ロームブロック多量

遺物出土状況 土師器片4点(甕・甌), 須恵器片7点(環・高台付杯3, 甕・甌4)が出土している。

TP93・TP94はP1の柱抜き取り痕から出土している。

所見 時期は, 重複関係から8世紀後半以前と考えられる。

## 第178号独立柱建物跡出土遺物観察表 (第340図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1086	須恵器	高台付杯	-	(27)	-	長石・石英	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り	P4埋土	
TP93	須恵器	甕	-	-	-	雲母・長石・石英	にぶい黄褐色	不良	外面格子状の叩き, 内面ナデ	P1抜き取り痕	
TP94	須恵器	甕	-	-	-	長石・石英	灰	普通	外面平行叩き, 内面ナデ	P1抜き取り痕	

## 第179号独立柱建物跡 (第341・342図)

位置 調査区中央部のT8b5区に位置し, 東に向かって緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第1524・1531・1537・1563・1566号住居と第186・187号独立柱建物, 第1454・1605号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 桁行4間, 梁間2間の開柱式建物跡で, N-72°-Eを桁行方向とする東西棟である。規模は桁行が8.60m, 梁間が4.60mほどで, 柱間寸法は桁行が2.12m (7尺), 梁間が2.27m (7.5尺)を基調としている。また, 北側桁行の外側には4間の庇ないし目隠し状の施設が付属している。身舎との間隔は1.51m (5尺)で, 柱間寸法は両端に位置するP13・P14間とP16・P17間が2.42m (8尺)で, その中間は2.12m (7尺)と, 異なる間尺で構築されている。

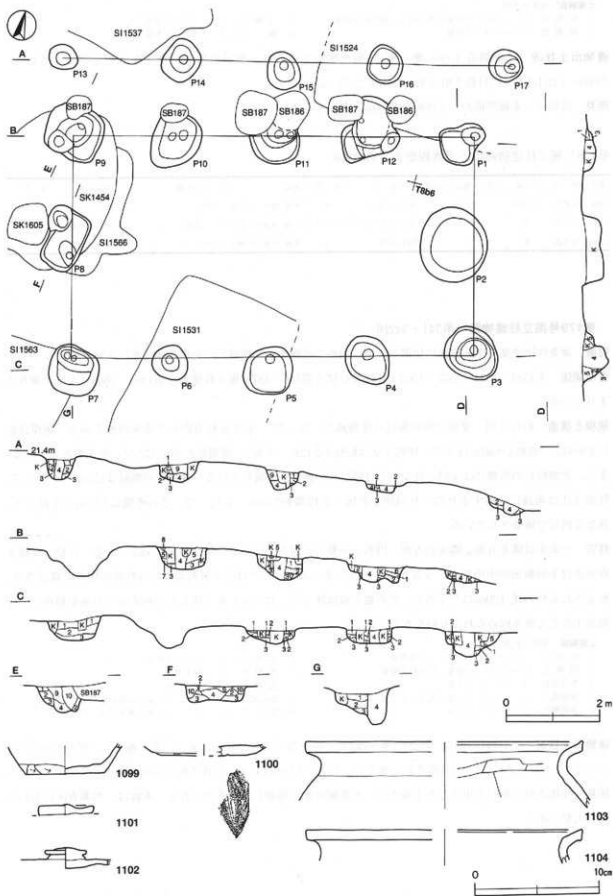
柱穴 平面形は隅丸方形, 隅丸長方形, 円形, 不整形が混在しており, 深さは30~50cmである。柱痕・柱抜き取り痕は土層断面中の第4・9層が相当し, しまりが弱い。P11の土層断面からは柱痕が明瞭に確認され, 推定される柱の径は20cmほどである。その他の層は埋土で, ローム土を主体とした暗褐色土や極暗褐色土, 黒褐色土などで突き固められて互層をなしている。

## 土層解説 (各柱穴共通)

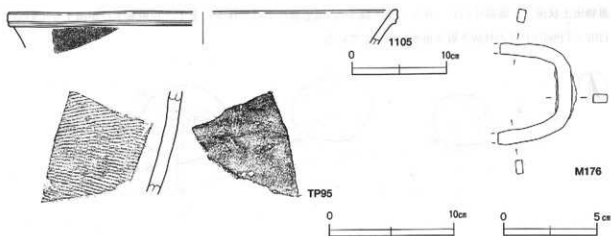
- 1 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化物微量 6 黒褐色 ロームブロック微量  
 2 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量 7 黒褐色 ローム粒子微量  
 3 極暗褐色 ロームブロック少量 8 暗褐色 ローム粒子中量  
 4 極暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子・炭化粒子微量 9 極暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量  
 5 極暗褐色 ロームブロック中量 10 黒褐色 ロームブロック少量, 炭土ブロック微量

遺物出土状況 土師器片103点(環29, 甕・甌74), 須恵器片21点(環12, 蓋3, 甕・甌6), 円1点が出土している。1102・1104はP3の柱抜き取り痕から, 1103・TP95はP9の柱抜き取り痕から出土している。

所見 柱抜き取り痕から出土した土器から, 8世紀前半に廃絶したと考えられる。本跡は, 当調査区において最も大形である。



第341圖 第179号掘立柱建物跡・出土遺物実測図



第342図 第179号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第179号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第341・342図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1009	須恵器	坏	-	(2.4)	[6.2]	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ切り後、多方向のヘラ削り	P11埋込面	10%
1100	須恵器	坏	-	(0.8)	[7.0]	雲母・長石・石英	黄灰	普通	底部多方向のヘラ削り	P15抜き取り痕	瓦部外面書き 「-」
1101	須恵器	蓋	-	(0.9)	-	雲母・長石	灰	普通	つまみ口ロナデ	P7埋土	
1102	須恵器	蓋	-	(1.7)	-	長石・石英	灰	普通	天井部回転ヘラ削り後、つまみ接合	P3抜き取り痕	
1103	土師器	蓋	[22.0]	(5.4)	-	雲母・長石・石英	にぶい濁	普通	外部外面ナデ、内面貫ナデ	P9抜き取り痕	10%
1104	土師器	蓋	[22.0]	(2.8)	-	雲母・長石・石英	にぶい濁	普通	口縁部横ナデ	P3抜き取り痕	
1105	須恵器	大甕	[41.2]	(3.6)	-	長石	灰	良好	底部磨擦波状文	P8埋土	
TP95	須恵器	大甕	-	-	-	雲母・長石・石英	灰白	普通	外面平行叩き、内面ナデ	P9抜き取り痕	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M176	門	(3.9)	5.3	0.4	(13.7)	鉄	断面長方形、コの字状に屈曲、両端部欠損	南壁際床面	PL83

### 第180号掘立柱建物跡 (第343図)

位置 調査区中央部のT7g8区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1630号住居跡を掘り込み、第1661号住居と第91号堀に掘り込まれている。

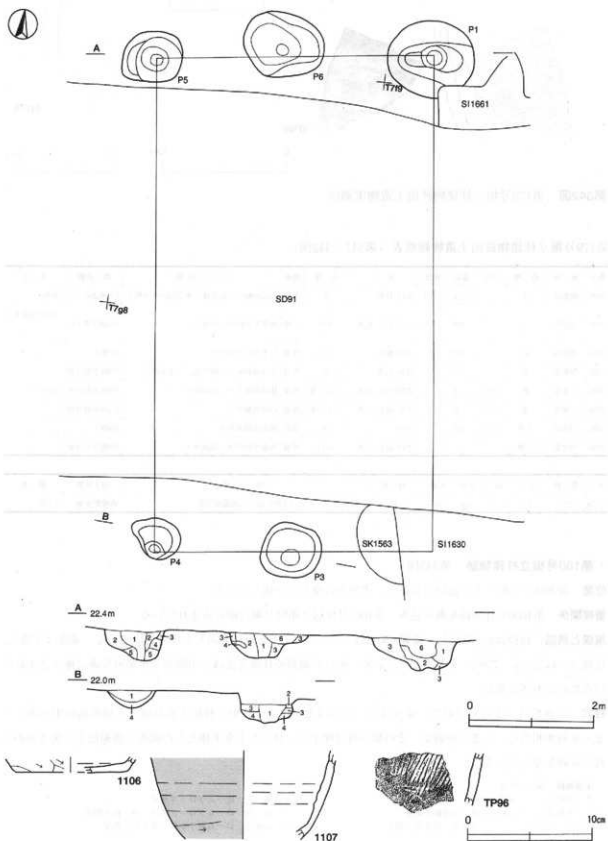
規模と構造 規模は桁行7.80m、梁間4.50mほどで、N-0°を桁行方向とする南北棟である。梁間は2間で、柱間寸法は2.27m (7.5尺)を基調としている。桁行の間数や柱間寸法は、中間部分を第91号溝に掘り込まれているために不明である。

柱穴 平面形はいずれも円形で、深さは30~50cmほどである。柱痕・柱抜き取り痕は土層断面図中の第1・2・6層が相当し、しまりが弱い。その他の層は埋土で、ローム土を主体とした褐色・暗褐色土で突き固められて互層をなしている。

#### 土層解説 (各柱穴共通)

- |                       |                       |
|-----------------------|-----------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子中量         | 4 褐色 ロームブロック多量        |
| 2 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量  | 5 褐色 ロームブロック多量、焼土粒子微量 |
| 3 褐色 ロームブロック多量、炭化粒子微量 | 6 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量  |

遺物出土状況 土師器片11点(坏2, 甕・瓶9), 須恵器片7点(坏5, 甕1, 長頸瓶1)が出土している。  
 1107・TP96はP5の柱抜き取り痕から出土している。



第343図 第180号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

所見 柱抜き取り痕から出土した土器から、9世紀前葉に廃絶したと考えられる。

第180号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第343図)

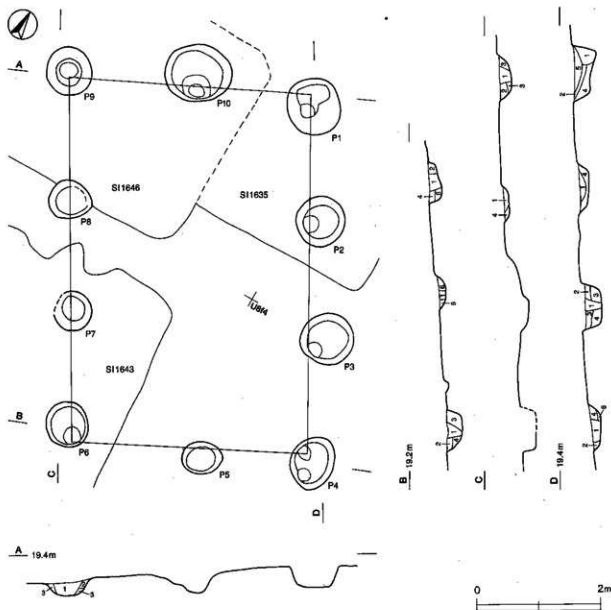
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	手法の特徴	出土位置	備考
1106	須恵砂	坏	-	(12)	(9.0)	雲母	赭灰	普通	底部多方向へのヘリ削り	P1層土	
1107	灰胎陶器	長頸瓶	-	(7.0)	-	長石・石英	灰・濁灰	良好	体部下層回転への削り	P5抜き取り痕	
TP96	須恵器	差	-	-	-	雲母・長石・石英	灰黄	普通	外面平行可き、内面ナデ	P5抜き取り痕	

第181号掘立柱建物跡 (第344・345図)

位置 調査区南部のU 8 f3区に位置し、台地から低地へ下りる斜面部に立地している。

重複関係 第1635・1643・1646号住居跡を掘り込んでいる。

規模と構造 桁行3間、梁間2間の銅柱式建物跡で、桁行方向はN-30°-Wである。規模は桁行5.80m、梁間



第344図 第181号掘立柱建物跡実測図



3.80mほどで、柱間寸法は桁行・梁間ともに1.96m（6.5尺）を基調としているが、平面形はやや歪み、平行四辺形に近い長方形となっている。

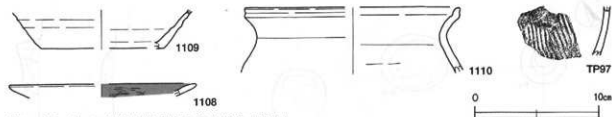
**柱穴** 平面形はいずれも円形で、深さは15~40cmほどである。柱痕・柱抜き取り痕は土層断面図中の第1・5層が相当し、しまりが弱い。P3の土層断面からは柱痕が明瞭に確認されており、推定される柱の径は10~15cmである。その他の層は埋土で、ローム土を主体とした褐色・暗褐色土で突き固められて、互層をなしている。

**土層解説**（各柱穴共通）

1 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	4 暗褐色	ロームブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック多量	5 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック中量	6 褐色	ロームブロック多量

**遺物出土状況** 土師器片50点（坏1，皿1，甕・瓶48），須恵器片23点（坏12，甕2，甕・瓶9）が出土している。1108・1109はP1の柱抜き取り痕から出土している。

**所見** 時期は、出土土器と重複関係から9世紀後葉と考えられる。



第345図 第181号掘立柱建物跡出土遺物実測図

**第181号掘立柱建物跡出土遺物観察表**（第345図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1108	土師器	皿	[14.8]	(1.0)	-	石英	浅黄橙	普通	外部内面ヘラ削き	P1抜き取り痕	
1109	須恵器	坏	-	(3.1)	[9.8]	長石・石英	灰	普通	外部下縁手持ちヘラ削り	P1抜き取り痕	
1110	土師器	甕	[17.0]	(5.3)	-	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	外部外面ナデ、内面ヘラナデ	P6埋土	
TP97	須恵器	甕	-	-	-	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	外面平行叩き、内面ナデ	P3埋土	

**第182号掘立柱建物跡**（第346図）

**位置** 調査区中央部のT8e3区に位置し、平坦な台地上に立地している。

**重複関係** 第1532・1533・1534号住居と第91号堀に掘り込まれている。

**規模と構造** 桁行3間、梁間2間の御柱式建物跡で、N-87°-Eを桁行方向とする東西棟である。規模は桁行5.50m、梁間4.20mほどで、柱間寸法は桁行が1.51m、1.81m、2.12m、梁間は2.27m、1.81mと一定していないが、柱筋は通っている。

**柱穴** 平面形はP3~P9が円形または楕円形、その他は隅丸方形または長方形で、深さは15~60cmである。柱抜き取り痕は土層断面図中の第1・4層が相当し、しまりが弱い。その他の層は埋土で、ローム土を主体とした暗褐色土や極暗褐色土で突き固められて、互層をなしている。

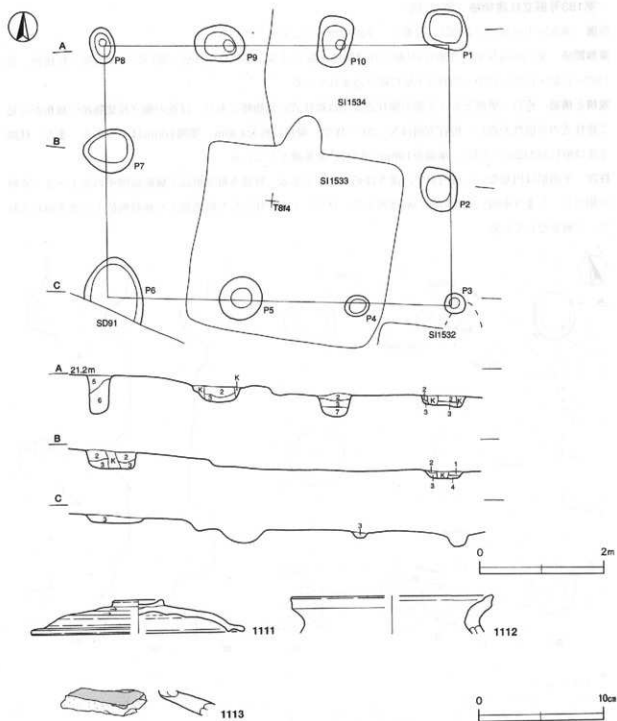
土層解説 (各柱穴共通)

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック多量
- 3 暗褐色 ロームブロック多量、炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量

- 5 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子微量
- 6 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 7 極暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量

遺物出土状況 土師器片13点(坏2, 甕・飯11), 須恵器片5点(坏3, 蓋1, 甕1), 擾乱により混入した灰軸陶器片1点(短頸壺)が出土している。1111はP7の柱抜き取り痕, 1112はP9の埋土から出土している。

所見 時期は, 出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第346図 第182号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第182号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第346図)

番号	種別	器種	口径	器高	口径	土質	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1111	須恵器	壺	[16.8]	2.6	-	磁母・長石・石英	灰白	普通	天井押出軸へう削り	P7抜き取り痕	15%
1112	土師器	壺	[16.0]	(3.1)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤陶	普通	口縁部横ナデ	P9遺土	
1113	灰釉陶器	短頸壺	-	-	-	黒色粒子	明赤灰・灰ヤリブ	良好	基部ロクロナデ	P6横乱部	壊破産

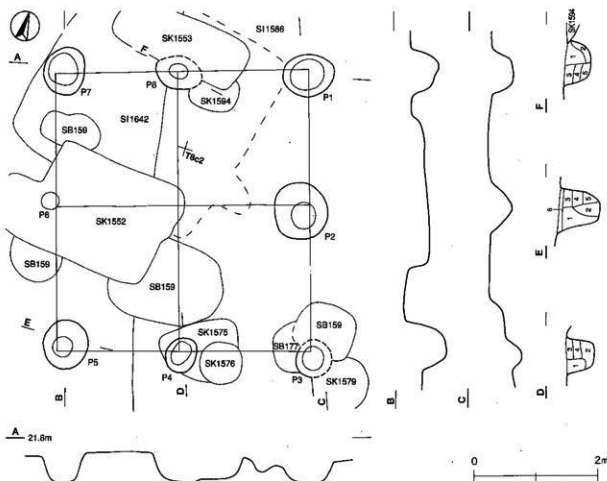
第183号掘立柱建物跡 (第347図)

位置 調査区中央部のT8c2区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1586号住居跡と第177号掘立柱建物跡を掘り込み、第1642号住居と第157・159号掘立柱建物、第1552・1553・1575・1579・1594号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 桁行・梁間ともに2間の細柱式または総柱式の建物跡であり、付近の掘立柱建物跡の様相から見て総柱式の可能性が高い。桁行方向はN-20°-Wで、規模は桁行4.30m、梁間4.00mほどである。また、柱間寸法は桁行が2.12m (7尺)、梁間が1.96m (6.5尺)を基調としている。

柱穴 平面形は円形ないし楕円形で、深さは45~70cmである。柱抜き取り痕は土層断面図中の第1・2・6層が相当し、しまりが弱い。その他の層は埋土で、ローム土を主体とした暗褐色土や極暗褐色土で突き固められて、互層をなしている。



第347図 第183号掘立柱建物跡実測図

土層解説 (各柱穴共通)

- |       |                       |       |                         |
|-------|-----------------------|-------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量      | 5 暗褐色 | ロームブロック中量               |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量   | 6 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量   |

遺物出土状況 土師器片10点(坏2, 甕・瓶8), 須恵器片1点(坏)が出土している。

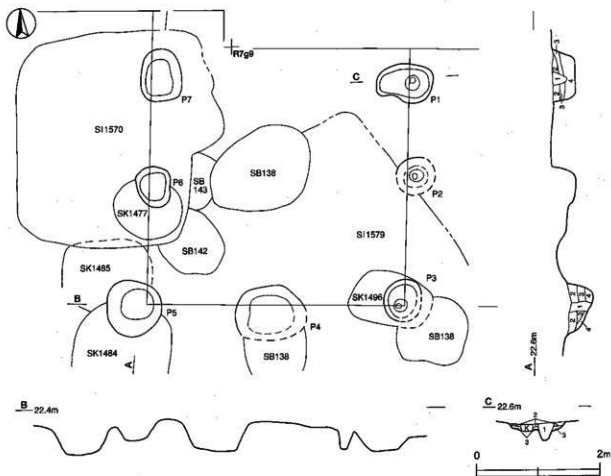
所見 出土土器から時期を判断することは困難であるが, 桁行方向が北西を指すのは8世紀前葉までには限られることや7世紀後葉と考えられる第177号掘立柱建物跡を掘り込んでいることなどから, 8世紀前葉に構築された可能性が高い。

第184号掘立柱建物跡 (第348・349図)

位置 調査区中央部のR7g9区に位置し, 平坦な台地上に立地している。北側は, 調査区域外に延びている。

重複関係 第1579号住居跡と第138号掘立柱建物跡を掘り込み, 第1570号住居と第1477・1484・1485・1496号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 北側部分が調査区域外に延びているために, 南北2間, 東西2間が確認されただけであり, 付近の掘立柱建物跡の様相から, 桁行方向を $N-0^\circ$ とする梁間2間の側柱式建物跡の可能性が高い。確認された規模は桁行3.60m, 梁間4.20mで, 柱間寸法は桁行が1.81m(6尺), 梁間が2.12m(7尺)を基調としている。



第348図 第184号掘立柱建物跡実測図

柱穴 平面形はP1・P7が隅丸長方形で、その他は円形を呈し、深さは35～40cmである。柱痕・柱抜き取り痕は土層断面図中の第1層が相当し、しまりが弱い。P5の土層断面からは柱痕が明瞭に確認されており、推定される柱の径は15cmほどである。その他の層は埋土で、ローム土を主体とした暗褐色土や極暗褐色土で突き固められて、互層をなしている。

土層解説 (各柱穴共通)

- |       |              |        |                  |
|-------|--------------|--------|------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 3 極暗褐色 | ロームブロック少量        |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量    | 4 暗褐色  | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片14点(坏・碗6、甕・瓶8)、須恵器片1点(坏)、灰釉陶器片1点(短頸壺)が出土している。1114はP5の柱痕から、1115はP4、1116はP6のいずれも柱抜き取り痕から出土している。

所見 柱抜き取り痕から出土した土器から、9世紀後葉に廃絶したと考えられる。



第349図 第184号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第184号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第349図)

番号	類別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1114	土師器	碗	-	(30)	-	石英・赤色粒子	橙	普通	高台貼り付け後、ロクロナデ	P5抜き取り痕	20%
1115	須恵器	坏	[13.3]	(31)	-	長石	灰	普通	外部ロクロナデ	P4抜き取り痕	
1116	灰釉陶器	短頸壺*	-	(27)	-	長石	褐灰・ 暗灰黄	良好	外部外面回転へう割り	P6抜き取り痕	

第185号掘立柱建物跡 (第350図)

位置 調査区中央部のR7g7区に位置し、平坦な台地上に立地している。北側は、調査区域外に延びている。

重複関係 第1583号住居に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間の掘立柱建物跡と推定され、北側部分が調査区域外のため梁間は1間だけが確認されている。桁行方向はN-80°-Wで、確認された規模は桁行5.90m、梁間1.90mほどである。また、柱間寸法は桁行・梁間ともに1.81m(6尺)を基準としているが、桁行の中間部分であるP3・P4間だけが2.27m(7.5尺)と広がっている。

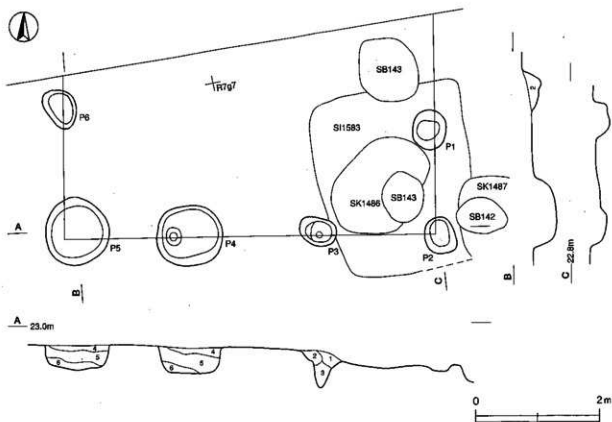
柱穴 平面形はP2が隅丸長方形で、その他は円形ないし楕円形を呈し、深さは30～55cmである。柱抜き取り痕は土層断面図中の第1～3層が相当し、しまりが弱い。その他の層は埋土で、ローム土を主体とした暗褐色土や極暗褐色土で突き固められて、互層をなしている。

土層解説 (各柱穴共通)

- |       |                  |        |                       |
|-------|------------------|--------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 4 暗褐色  | ロームブロック中量、粘土粒子微量      |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量   | 5 極暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量        | 6 極暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量      |

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、重複関係から10世紀後葉以前と考えられる。



第350図 第185号掘立柱建物跡実測図

第186号掘立柱建物跡 (第351図)

位置 調査区中央部のT 8 b5区に位置し、東に向かって緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第179号掘立柱建物跡を掘り込み、第187号掘立柱建物と第1524・1531号住居に掘り込まれている。

規模と構造 桁行・梁間ともに2間の総柱式建物跡で、桁行方向は $N-80^{\circ}-E$ である。規模は桁行が5.40m、梁間が4.80mほどで、柱間寸法は桁行が2.72m (9尺)、梁間が2.42m (8尺)を基調としている。

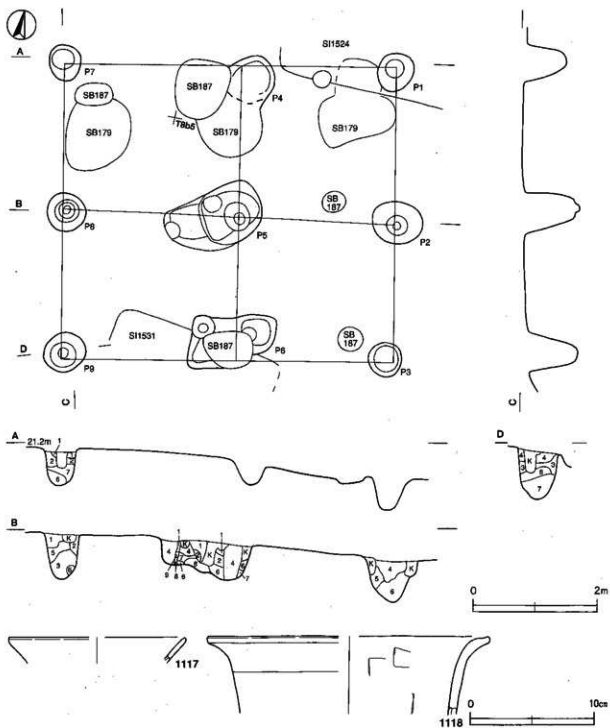
柱穴 平面形はいずれも円形で、深さは40~80cmほどである。柱抜き取り痕は土層断面図中の第4・7層が相当し、しまりが弱い。その他の層は埋土で、互層をなしているが、強く突き固められてはいない。

土層解説 (各柱穴共通)

- |                              |                 |
|------------------------------|-----------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物微量        | 6 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量       | 7 黒褐色 ローム粒子微量   |
| 3 極暗褐色 ロームブロック少量             | 8 暗褐色 ローム粒子多量   |
| 4 極暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 黒褐色 ロームブロック微量 |
| 5 極暗褐色 ロームブロック中量             |                 |

遺物出土状況 土師器片16点 (坏2, 壺・甔14), 須恵器片7点 (坏5, 甔2)が出土している。1118はP 6の埋土から出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀中葉と考えられる。



第351図 第186号掘立柱建物跡・出土物実測図

第186号掘立柱建物跡出土物観察表 (第351図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1117	須恵器	杯	[14.0]	(2.1)	-	雲母・長石	灰赤	普通	口縁部ロクロナデ	P6抜き取り成	
1118	土師器	甕	[22.4]	(6.2)	-	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面ナデ、内面ヘラナデ	P6掘土	

第187号掘立柱建物跡 (第352図)

位置 調査区中央部のT8b5区に位置し、平坦な台地の縁辺部に立地している。

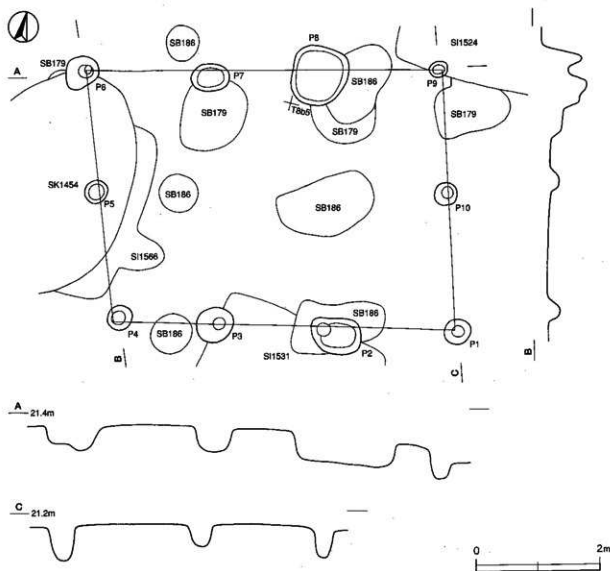
重複関係 第179・186号掘立柱建物跡を掘り込み、第1524・1531・1566号住居と第1454号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間、梁間2間の側柱式建物跡で、桁行方向をN-70°-Eとする東西棟である。規模は梁間が4.20mで、北側桁行は5.60m、南側桁行は5.40mとなっており、平面形は歪んだ長方形を呈している。柱間寸法は、桁行が1.81m(6尺)、梁間が2.12m(7尺)を基調としている。

柱穴 平面形はP8だけが隅丸方形で、その他は円形を呈し、深さは15~55cmである。

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、重複関係から10世紀ないしそれ以前と考えられる。



第352図 第187号掘立柱建物跡実測図

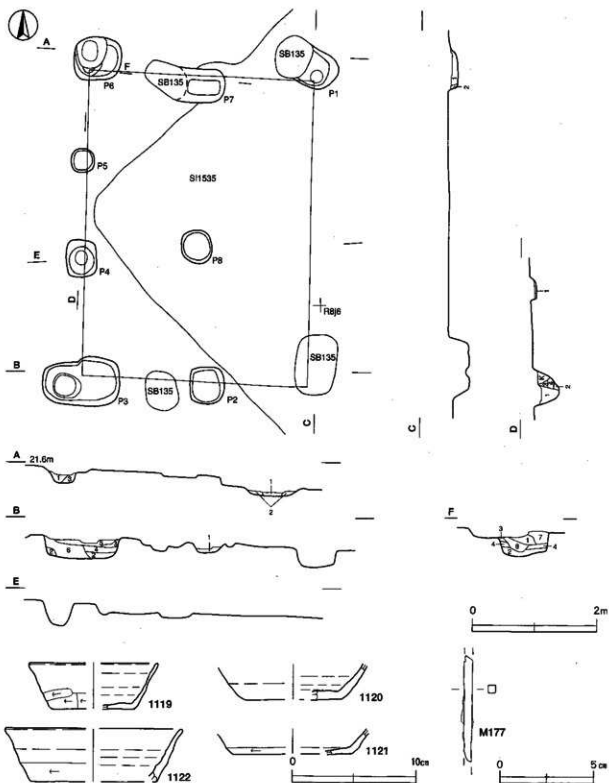


第188号掘立柱建物跡 (第353図)

位置 調査区中央部のR 8 15区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1535号住居跡を掘り込み、第135号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間、梁間2間の榿柱式建物跡で、桁行方向をN-0°とする南北棟である。規模は桁行



第353図 第188号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

5.30m, 梁間3.60mほどで, 柱間寸法は桁行, 梁間ともに1.81m (6尺) を基調としている。東側桁行の中間に想定される柱穴は, 確認されていない。

柱穴 平面形はP5・P6・P8が円形で, その他は隅丸方形ないし隅丸長方形を呈し, 深さは10~40cmである。柱痕・柱抜き取り痕は土層断面図中の第1・7・8層が相当し, しまりが弱い。その他の層はローム土を主体とした埋土で, 互層をなしているが, 強く突き固められてはいない。

土層解説 (各柱穴共通)

- |        |                              |       |                              |
|--------|------------------------------|-------|------------------------------|
| 1 極暗褐色 | ロームブロック少量                    | 6 褐色  | ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化物微量        |
| 2 褐色   | ロームブロック多量                    | 7 黒褐色 | 粘土粒子中量, ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 |
| 3 暗褐色  | ロームブロック中量, 炭化粒子微量            | 8 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量       |
| 4 暗褐色  | ロームブロック中量                    |       |                              |
| 5 暗赤褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物・粘土粒子少量 |       |                              |

遺物出土状況 土師器片21点 (坏4, 甕・瓶17), 須恵器片6点 (坏3, 甕・瓶3), 鉄鏃カ1点が出土している。I119~I122・M177は, P1の柱抜き取り痕からの出土である。

所見 時期は, 出土土器や重複関係から, 8世紀前半ないし中葉の早い段階に機能していたと考えられる。

第188号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第353図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1119	須恵器	坏	[103]	3.6	[6.6]	雲母・灰石	灰	普通	底部多方向のヘラ削り	P1抜き取り痕	35%
1120	須恵器	坏	-	(2.8)	[7.4]	雲母・灰石・石英	褐灰	普通	底部ヘラナゲ	P1抜き取り痕	10%
1121	須恵器	坏	-	(2.0)	[9.4]	雲母・灰石・石英	暗灰	普通	体部下端・底部回転ヘラ削り	P1抜き取り痕	10%
1122	須恵器	坏	[14.0]	4.2	[10.0]	雲母・黒色粒子	褐灰	普通	体部下端・底部回転ヘラ削り	P1抜き取り痕	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M177	不明	(5.6)	0.4	0.4	(3.6)	鉄	新羅方形の脚状	P1抜き取り痕	

表5 奈良・平安時代掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	桁×梁 (尺)	規模 (m)	* 附礎 (m)	桁行柱間 (m)	梁間柱間 (m)	柱穴 (cm)			出土遺物	備考 (時期)	
								構造	柱穴	平面形			深さ
132	F76	N4°E	3×2	5.40×3.60	19.44	1.81	1.81	廻柱	10	円形	20~30	土師器片, 須恵器片	9世紀中葉~後葉
133	F76	N4°E	3×2	6.30×3.65 (6.30×3.45)	23.00 (34.34)	2.12	1.81	廻柱 (家庇)	12	円形	15~50	土師器片, 須恵器片	9世紀中葉
134	Q769	N12°E	3×1	5.15×3.40	17.51	1.70	3.40	廻柱	6	円形	10~30	土師器片, 須恵器片	9~10世紀
135	R85	N0°	3×2	5.05×4.80	24.24	1.66	2.42	廻柱	8	隅丸方形・ 隅丸長方形	12~30	土師器片, 須恵器片	8世紀中葉
136	S8a4	N0°	3×2	5.50×4.20	23.1	1.81	2.12	廻柱	10	円形・隅丸方形・ 隅丸長方形	10~35	土師器片, 須恵器片, 不明鉄製品	8世紀後葉
137	R769	N0°	3×2	5.50×5.20	28.6	1.81	2.57	廻柱	9	円形・隅丸方形・ 隅丸長方形	25~50	土師器片, 須恵器片, 銅洋	8世紀前半
138	R7g9	N5°W	(2×2)	(4.60)×4.85	(22.31)	2.42	2.42	廻柱	6	隅丸方形・ 隅丸長方形	55~75	土師器片, 須恵器片	8世紀後葉~ 9世紀前半
139	S7b4	N45°W	3×2	5.90×3.95	23.31	1.96	1.96	廻柱	10	隅丸方形	20~65	土師器片, 須恵器片	8世紀中葉
140	R8b1	N92°E	3×2	6.40×4.20	26.88	2.12	2.12	廻柱	10	円形・隅丸方形・ 隅丸長方形	50~60	土師器片, 須恵器片	8世紀後葉

序号	位置	航行方向	桁×梁 (m)	延深 (m)	出梁 (m)	桁行间距 (m)	梁间距 (m)	柱穴 (cm)			出土遗物	备注 (附层)	
								构造	柱穴	平面形			深
141	R7g4	N-3°-E	3×2	5.50×3.50	19.25	1.51	1.81	圆柱	10	圆形-椭圆形- 椭圆形	15-45	土器碎片, 须惠器片	8世纪前半
142	R7h5	N-2°-E	3×2	5.45×3.65	19.89	1.81	1.81	圆柱	10	圆形-椭圆形	30-55	土器碎片, 须惠器片	8世纪后半
143	R7g8	[N-0°]	(2×1)	(2.10)×4.80	(10.08)	2.12	2.42	圆柱	5	圆形-椭圆形- 椭圆形	20-85	须惠器片	8世纪前半
144	R7h8	N-0°	2×2	3.30×3.30	10.89	1.66	1.66	圆柱	9	圆形	60-75	土器碎片, 须惠器片	8世纪前半
145	S7a8	N-0°	3×2	5.90×4.30	24.78	1.96	2.12	圆柱	11	圆形-椭圆形- 椭圆形	15-55	土器碎片, 须惠器片	8世纪前半
146	R7j9	N-82°-E	3×2	6.00×4.25	25.50	1.96	2.12	圆柱	10	椭圆形	50-85	土器碎片, 须惠器片, 土质纺锤	9世纪前半
147	R7j9	N-0°	4×3	3.00×5.80	46.4	1.96	1.96	圆柱	14	圆形-椭圆形- 椭圆形	50-100	土器碎片, 须惠器片	9世纪中半
149	S7f1	N-95°-E	3×2	6.90×4.35	30.02	2.27	2.12	圆柱	10	圆形	30-50	土器碎片, 须惠器片	9世纪前半
150	T7d9	N-72°-E	3×2	6.80×4.10	27.88	2.27	2.12	圆柱	10	椭圆形- 椭圆形	40-60	土器碎片, 须惠器片	8世纪前半
151	S7j8	N-1°-E	3×2	7.50×4.75	35.63	2.12, 2.57	2.42	圆柱	9	圆形-椭圆形- 椭圆形	30-40	土器碎片, 须惠器片	8世纪中半
153	S7f1	N-85°-E	3×2	6.90×4.25	29.33	2.27	2.12	圆柱	10	圆形-方形	15-40	土器碎片, 须惠器片	8世纪后半
154	T8b3	N-88°-E	3×(1)	5.15×(2.50)	(12.88)	2.12, 1.51	2.12	圆柱	5	圆形	15-40	土器碎片, 须惠器片	8世纪后半
157	T7b0	N-0°	3×2	7.00×5.60	25.20	2.42, 1.81	1.81	圆柱	8	圆形-椭圆形- 椭圆形	25-40	土器碎片, 须惠器片, 不明铁制品(鑿)	9世纪前半
158	T7b9	N-5°-W	3×2	5.20×4.30	22.36	1.81	2.12	圆柱	10	圆形-椭圆形	35-70	土器碎片, 须惠器片	8世纪前半
159	T8b2	N-0°	3×2	6.70×4.60	31.05	2.27, 2.12	2.27	圆柱	8	圆形-椭圆形- 椭圆形	15-20	土器碎片, 须惠器片	9世纪中半
162	S7j0	N-73°-E	3×2	5.35×4.20	22.47	1.81	2.12	圆柱	10	圆形-不规则形- 椭圆形	40-50	土器碎片, 须惠器片	8世纪前半
164	T8j1	N-2°-W	3×2	5.50×4.20	23.10	1.81	2.12	圆柱	9	圆形-椭圆形	10-40	土器碎片, 须惠器片	9世纪中半
166	U8b3	N-7°-E	3×2	5.80×3.90	22.62	1.96	1.96	圆柱	10	椭圆形-椭圆形- 椭圆形	5-40	土器碎片, 须惠器片, 砥石, 不明铁制品	9世纪中半
167	T8h2	N-90°-E	3×2	5.80~6.30 ×4.20	25.20	2.12	2.12	圆柱	9	圆形-椭圆形- 椭圆形	60-75	土器碎片, 须惠器片	9世纪前半
168	T8h0	N-2°-W	2×2	4.80×4.85	23.52	2.42	2.42	圆柱	8	圆形-椭圆形- 椭圆形	15-45	土器碎片, 须惠器片	8世纪后半
170	T7f9	N-3°-W	3×(1)	6.30×(3.60)	(22.68)	2.12	3.62	圆柱	5	圆形-椭圆形	40-60	土器碎片, 须惠器片	8世纪前半
171	T7d9	N-0°	3×2	6.40×4.30	27.52	2.12	2.12	圆柱	10	圆形-椭圆形	20-40	土器碎片, 须惠器片, 铁器	8世纪前半
172	U8i2	N-82°-E	3×2	5.50×3.90	21.45	1.81	1.96	圆柱	10	圆形	5-30	土器碎片, 须惠器片	9世纪前半
173	S7j0	N-0°	3×2	6.95×4.20	29.19	2.27	2.12	圆柱	9	圆形	15-55	土器碎片, 须惠器片	9世纪中半~后半
174	T8b6	N-85°-E	3×(1)	5.40×(3.90)	(21.06)	1.81	2.12	圆柱	5	圆形-椭圆形- 椭圆形	30-50	土器碎片, 须惠器片	9世纪中半
175	T8e1	N-80°-W	3×2	6.10×4.15	25.32	1.81	2.12	圆柱	8	圆形-椭圆形	25.60~ 80	土器碎片, 须惠器片, 灰陶器碎片	9世纪后半
176	T7b9	N-7°-W	2×(1)	(2.10)×4.20	(8.82)	1.81	2.12	圆柱	4	圆形-椭圆形- 椭圆形	35-40	土器碎片, 须惠器片, 灰陶器碎片	9世纪前半~中半

番号	位置	掘行方向	炬×梁 (m)	規模 (m)	面積 (㎡)	掘行距離 (m)	焼炭柱間 (m)	柱穴 (cm)			出土遺物	備考 (時期)	
								構造	柱穴	平面形			深さ
178	T82	N-2°W	(2)×2	(4.10)×4.55	(18.66)	1.81	2.27	圓柱	6	円形・地円形	10~40	土師器片, 須恵器片	8世紀後半以前
179	T85	N-72°E	4×2	8.60×4.60	39.56	2.12	2.27	圓柱	12	円形・溝丸方形 溝丸長方形	30~50	土師器片, 須恵器片, 門	8世紀前半
180	T798	N-0°	掘行不明, 梁間2間	7.80×4.50	35.10	不明	2.27	[圓柱]	5	円形	30~50	土師器片, 須恵器片	8世紀後半~ 9世紀前半
181	U85	N-30°W	3×2	5.80×3.80	22.04	1.96	1.96	圓柱	10	円形	15~40	土師器片, 須恵器片	9世紀後半
182	T8e3	N-87°E	3×2	5.50×4.30	23.10	1.51, 1.81, 2.12	2.27, 1.81	圓柱	10	円形・楕円形 溝丸方形	15~60	土師器片, 須恵器片, 灰釉陶器片	8世紀前半
183	T8c2	N-20°W	2×2	4.30×4.00	17.20	2.12	1.96	[圓柱]	8	円形・地円形	45~70	土師器片, 須恵器片	8世紀前半
184	R7p9	N-0°	(2)×2	(3.60)×4.30	(15.12)	1.81	2.12	圓柱	7	円形・溝丸長方形 形	35~40	土師器片, 須恵器片, 灰釉陶器片	9世紀後半
185	R7q7	N-80°W	3×(1)	5.90×(1.90)	(11.21)	1.81, 2.27	1.81	圓柱	6	円形・楕円形 溝丸長方形	30~35	—	10世紀後半以前
186	T8h5	N-80°E	2×2	5.40×4.80	25.92	2.72	2.42	圓柱	9	円形	40~80	土師器片, 須恵器片	8世紀中葉
187	T8h5	N-70°E	3×2	5.40×3.60 ×4.20	23.10	1.81	2.12	圓柱	10	円形・溝丸長方形	15~55	—	10世紀以前
188	R85	N-0°	3×2	5.30×3.60	19.08	1.81	1.81	圓柱	8	円形・溝丸長方形 溝丸長方形	10~40	土師器片, 須恵器片, 鉄器*	8世紀前半~中葉

### (3) 焼成遺構

#### 第1426号土坑 (第354・355図)

位置 調査区中央部のR 8 9区に位置し, 平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1518号住居跡を掘り込んでいる。

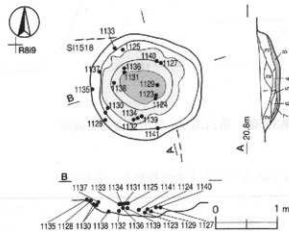
規模と形状 長径1.80m, 短径1.70mほどのほぼ円形で, 深さは35cmほどである。底面はやや凹凸のある皿状を呈し, 壁はなだらかに傾斜して立ち上がっている。底面は被熱によって赤変しており, 赤変硬化した部分の厚さは最大で8cmほどある。

覆土 8層からなる。上から, 焼成後に自然堆積した第1層, 焼土を多く含む第2・3層, 灰や炭化物を多く含む第4~7層と大きく三つに区別され, 第2~7層は焼成に伴って堆積した層と考えられる。第8層は, 底面を断ち割りした際の土層である。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化物少量
- 2 黒暗赤褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化物・粘土ブロック少量
- 3 極暗赤褐色 焼土ブロック・炭化物中量, ロームブロック少量
- 4 灰赤色 灰多量, 焼土粒子中量, 炭化粒子少量
- 5 赤黒色 炭化物多量, 焼土粒子少量
- 6 灰赤色 灰多量, 焼土ブロック中量, 炭化粒子少量
- 7 暗赤灰色 焼土粒子・炭化物・灰中量
- 8 におい赤褐色 焼土粒子多量, ローム粒子少量

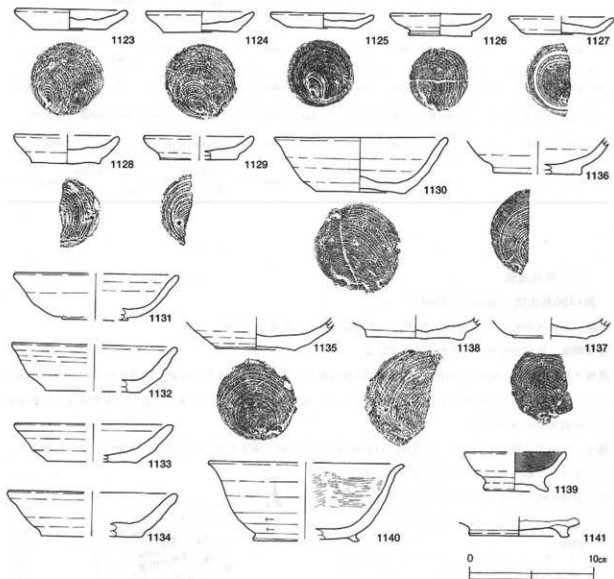
遺物出土状況 土師器片344点 (小皿74, 坏254, 椀



12, 堯4), 骨片2点, 混入と考えられる土師器片 第354図 第1426号土坑実測図

32点、須恵器片10点、攪乱により混入した陶器片2点が出土している。ほとんどの土器は土層断面図中の第2・3層から出土しており、破断面の摩滅が認められないことから、焼成時に破損したものが遺棄されたものと推測される。1140と1127は重なり合って、北部の焼土層から出土している。

所見 赤変硬化した部分は底面の中央部だけであり、壁面には被熱痕が認められない。また、底面が皿状を呈し、平坦面が見られないことなど、主に関東を中心に確認されているものと同じ形態を示している。焼成された器種は土師器の坏と小皿が主体であるが、使用痕の認められない高台付碗が小皿と重なって出土していることから、碗頭を焼成していた可能性もある。時期は、重複関係と出土土器から11世紀頃と考えられる。



第355図 第1426号土坑出土遺物実測図

第1426号土坑出土遺物観察表（第355図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1123	土師器	小皿	8.6	1.6	5.8	長石・石英	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	中央部下層	100%, P1.66
1134	土師器	小皿	8.5	1.7	5.8	長石・石英	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	中央部下層	100%, P1.66

番号	類別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1125	土師器	小皿	8.1	1.2	5.0	長石・石英	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	北部中層	70%
1126	土師器	小皿	7.8	1.9	5.0	長石・石英	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	覆土中	75%
1127	土師器	小皿	[ 8.2]	1.4	[5.2]	長石・石英	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	北部中層	30%
1128	土師器	小皿	[ 8.2]	2.2	[5.4]	長石・石英	浅黄	普通	底部回転糸切り	由西部上層	45%
1129	土師器	小皿	[ 8.6]	1.9	[6.0]	長石・石英	橙	普通	底部回転糸切り	中央部下層	40%
1130	土師器	杯	13.5	4.5	6.9	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	南西部下層	95%, PL66
1131	土師器	杯	[13.0]	3.7	[5.2]	長石・石英	橙	普通	底部回転糸切り	中央部上層	30%
1132	土師器	杯	[13.0]	3.7	[7.6]	長石・石英	橙	普通	底部回転糸切り	南部下層	10%
1133	土師器	杯	[12.6]	3.0	[7.2]	石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り	北西部下層	20%
1134	土師器	杯	[13.4]	3.6	[8.0]	石英・赤色粒子	浅黄橙	普通	底部回転糸切り	南部上層	15%
1135	土師器	杯	-	(2.6)	6.3	長石・石英	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	西壁面上	40%
1136	土師器	杯	-	(2.5)	[7.0]	長石・石英	浅黄	普通	底部回転糸切り	中央部中層	10%
1137	土師器	杯	-	(1.7)	[6.0]	長石・石英	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り	北西部上層	20%
1138	土師器	杯	-	(1.9)	[7.8]	長石・石英	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	中央部底面	20%
1139	土師器	小碗	[ 8.0]	3.1	3.2	石英・白色粒子	橙	普通	高台取り付け後、ロケロナデ	南部中層	40%
1140	土師器	碗	[13.2]	6.3	[8.5]	石英・赤色粒子	浅黄橙	普通	底部回転へラ削り後、高台取り付け	北部下層	40%
1141	土師器	碗	-	(1.5)	7.6	雲母・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転へラ削り後、高台取り付け	南壁面上	10%

### 第1430号土坑 (第356図)

位置 調査区中央部のS 8 a9区に位置し、平坦な台地上の縁辺部に立地している。

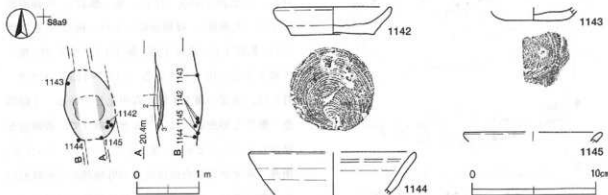
重複関係 第1516号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.10m, 短径0.80mほどの楕円形で、長径方向はN-12°-Wである。深さは15cmほどで、底面は皿状を呈し、壁はなだらかに傾斜して立ち上がっている。底面は被熱によって赤変し、特に中央部が固く焼け締まっており、赤変硬化した部分の厚さは最大で5cmほどある。

覆土 3層からなる。第1・2層は焼成時に堆積した層で、第1層からは燃料材の一部と考えられる炭化物、第2層からは灰が検出されている。上部が削平されているために、焼成後の堆積状況は不明である。また、第3層は底面を断ち割りした際の土層である。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 炭化物中量、ロームブロック・焼土ブロック少量
- 2 赤褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック少量
- 3 赤褐色 焼土ブロック多量、灰少量



第356図 第1430号土坑・出土物実測図

**遺物出土状況** 土師器片30点（小皿2，坏25，碗3），混入した土師器片19点が出土している。ほとんどの土器は土層断面図中の第1層から出土しており，焼成時に破損したものが遺棄されたものと考えられる。1142は南東部の覆土上層から，1144は南西部の覆土上層から出土した破片が接合したものである。

**所見** 壁面から赤変硬化した部分が確認されていないことから，被熱が壁面に及ばない焼き方が推測され，焼成方法を復元する上で一つの手がかりとなるものと思われる。時期は，重複関係と出土土器から11世紀頃と考えられる。

第1430号土坑出土遺物観察表（第356図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1142	土師器	小皿	9.2	2.1	6.7	長石・石英	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	南東部下層	80%
1143	土師器	小皿	-	(1.0)	4.6	雲母・石英	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	北西部成面	10%
1144	土師器	坏	[13.4]	(3.4)	-	石英	浅黄橙	普通	底部回転糸切り	南西部上層	
1145	土師器	坏	[11.2]	(6.8)	-	石英	浅黄橙	普通	1線部クロコナテ	南部成面	

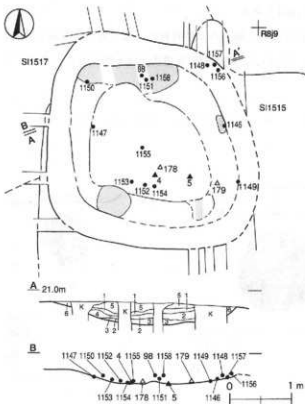
第1435号土坑（第357・358図）

**位置** 調査区中央部のR 8 J8区に位置し，南東に緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

**重複関係** 第1515・1517号住居跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 耕作による擾乱が激しいため東壁の立ち上がりは判然としなが，焼土の広がりから1辺が3.30 mほどの若干歪んだ隅丸方形と推測される。深さは50cmほどで，壁はなだらかに立ち上がっている。底面は浅い皿状を呈し，底面の外周部部分から赤変硬化した部分が断続的に確認されている。底面の中央部からは，赤変した部分は確認されていない。

**覆土** 6層からなる。最上層である第5層は，含有物から焼成後に自然堆積した層と考えられる。第1～4層は焼土や灰を含んでおり，焼成時に堆積した層と考えられる。



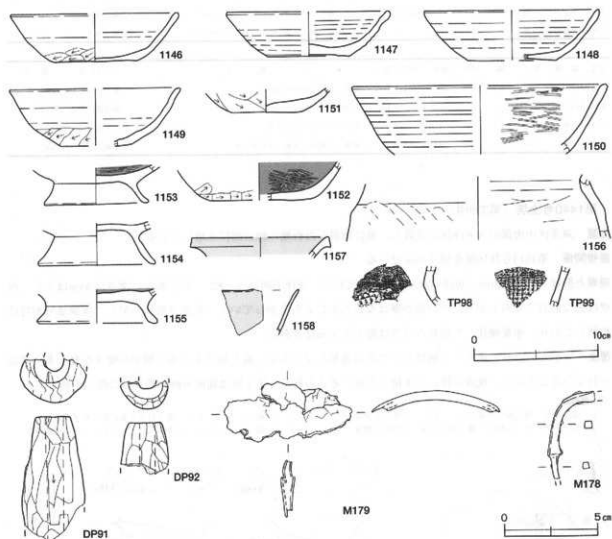
- 土層解説**
- 1 暗赤褐色 焼土ブロック多量，炭化物・灰中量
  - 2 暗赤灰色 焼土ブロック多量，ロームブロック・炭化物・灰少量
  - 3 灰褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量，灰少量
  - 4 黒褐色 焼土ブロック中量，炭化物・灰少量
  - 5 黒褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量
  - 6 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量，炭化物・灰少量

**遺物出土状況** 土師器435片（坏26，碗9，甕・飯161），須恵器片83点（坏41，甕・飯42），灰軸陶器片1点（長頸瓶），緑軸陶器片1点（碗），管状土錘2点，鉄鎌1点，鉄滓1点，銅滓1点，骨片が，覆土下層を中心に出土している。1152～1154・M178・骨片は，南部の覆土下層から出土している。土師器甕・飯片と須恵器片はほとんどが細片で，破断面が摩滅していることから，混入したのと考えられる。

**所見** 赤変硬化した面は底面の外周部から断続的にしか確認されていないが，これは擾乱を受けたことによるものと考えられ，本来は外周部全面が赤変硬

第357図 第1435号土坑実測図

化していたと推測される。また、出土した骨片は、分析の結果、シカ成獣の中節骨と左下顎骨の関節突起の破片、中手もしくは中足骨滑車部の破片と考えられ、いずれも被熱している。これらは、体重70kgほどの千葉産原生種とほぼ同じ大きさのものである。形状については、巻末の写真図版を参照されたい。時期は、出土土器から10世紀前半と考えられる。



第358図 第1435号土坑出土遺物実測図

第1435号土坑出土遺物観察表 (第358図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法的特徴	出土位置	備考
1146	土師器	坏	[13.2]	3.8	6.2	長石・石英	橙	普通	底部二方向のヘラ削り	東部下層	55%
1147	土師器	坏	[12.8]	3.7	7.3	長石・石英	明赤褐	普通	底部回転ヘラ切り後、ヘラナデ	西部底面	80%
1148	土師器	坏	[13.8]	4.0	[7.0]	長石・石英	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後、ヘラナデ	北東部下層	25%
1149	土師器	坏	[13.4]	4.5	[3.6]	長石・石英・白色粒子	浅黄橙	普通	底部下縁・底縁手持ちヘラ削り	南東部底面	15%
1150	土師器	坏	[20.0]	(5.4)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	底部ロクロナデ、内面ヘラ磨き	北西部下層	10%
1154	土師器	坏	-	(1.8)	3.6	石英・白色粒子	にぶい橙	普通	底部一方向のヘラ削り	北部下層	10%
1152	土師器	坏	-	(2.9)	[8.0]	石英	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後、ヘラナデ	南部底面	10%
1153	土師器	碗	-	(3.0)	8.3	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	高台貼り付け後、ロクロナデ	南部底面	30%
1154	土師器	碗	-	(3.4)	9.4	雲母・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	底部内面無調整	南部下層	30%
1155	土師器	碗	-	(2.7)	[9.6]	赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	中央部下層	10%



番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1156	土師器	甕	-	( 5.1 )	-	石英・赤色粒子	橙	普通	体内・外面ヘラナデ	北京部下層	
1157	灰釉陶器	長頸瓶	[11.0]	( 1.6 )	-	長石	灰青・灰グリーン	良好	口縁部ロコロナデ	北京部下層	窯検査
1158	灰釉陶器	椀	-	( 2.6 )	-	石英	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	北部上層	40%
TP98	須恵器	甕	-	-	-	長石	褐色	不良	外面平行明き、内面ナデ	北部中層	
TP99	須恵器	甕	-	-	-	長石	にぶい橙	不良	外面平行明き、内面ナデ	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質・胎土	特徴	出土位置	備考
DP91	管状土鉢	( 6.6 )	( 3.4 )	( 2.3 )	(33.6)	長石・石英	孔径1.1cm, 外面ヘラ削り	覆土中	PL72
DP92	管状土鉢	( 2.7 )	( 2.5 )	( 1.4 )	( 7.4 )	長石・石英	孔径0.8cm, 外面ヘラ削り	南部覆土中	PL72
M178	皿	( 6.1 )	0.4	0.4	( 4.3 )	鉄	断面方形の棒状、台状開	中央部下層	PL80
M179	不明	( 6.8 )	( 3.1 )	( 0.6 )	(38.1)	黒	彎曲した板状、外面に炭化物付着	南部部下層	PL83

### 第1440号土坑 (第359図)

位置 調査区中央部のS 8c8区に位置し、東に傾斜した台地の縁辺部に立地している。

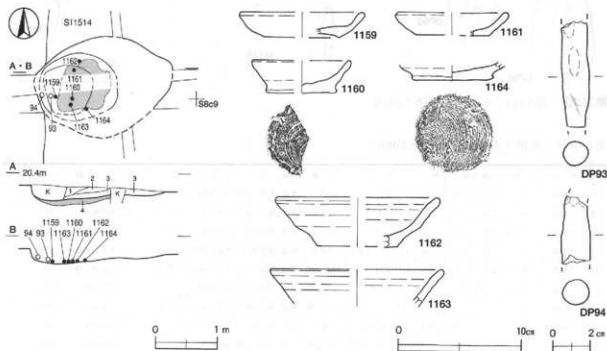
重複関係 第1514号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径2.20m、短径1.60mほどの楕円形で、長径方向はN-82°-Eである。深さは30cmほどで、西壁は急な傾斜で立ち上がり、その他の壁はなだらかに立ち上がっている。底面は皿状を呈し、西側部分が特に被熱しており、赤変化した部分の厚さは最大で5cmほどある。

覆土 4層からなる。第1～3層はレンズ状に堆積しているが、最上層である第1層から焼土が最も多く確認されていることから、焼成に伴って堆積した層と考えられる。第4層は底面を断ち割りした際の土層である。

#### 土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、粘土粒子微量
- 4 赤褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック・炭化粒子少量



第359図 第1440号土坑・出土遺物実測図

**遺物出土状況** 土師器片136点（小皿3，坏121，甕・瓶12），不明土製品2点，鉄滓1点，骨片が，西側部分を中心に出土している。図示した土器と土製品は，いずれも底面の西側部分から出土している。

**所見** 西壁だけが急な傾斜で立ち上がり，赤変硬化した部分や遺物の掘り込みが西側部分に集中していることから，東側部分を築き口部，西側部分を焼成部と想定することもできる。時期は，出土土器から11世紀頃と考えられる。

#### 第1440号土坑出土遺物観察表（第359図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1159	土師器	小皿 [ 9.5 ]	2.0 [ 6.0 ]	長石・石英	浅黄橙	普通	底部回転糸切り	西部底面	30%	
1160	土師器	小皿 [ 7.6 ]	2.6 [ 5.4 ]	長石・石英	浅黄橙	普通	底部回転糸切り	西部底面	30%	
1161	土師器	小皿 [ 8.8 ]	1.8 [ 6.0 ]	長石・石英	浅黄橙	普通	底部回転糸切り	西部底面	15%	
1162	土師器	小皿 [ 12.8 ]	3.9 [ 6.5 ]	長石・石英	黄	普通	底部回転糸切り	北西部底面	20%	
1163	土師器	坏 [ 13.6 ]	3.0	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	底部口ロナデ	西部底面	
1164	土師器	坏 -	1.3	6.6	長石・石英	浅黄橙	普通	底部回転糸切り	西部底面	25%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DF93	不明	[ 6.6 ]	1.5	1.3	( 11.1 )	長石	断面円形の棒状，両側欠損，磨頭痕	西部底面	PL72
DF94	不明	[ 3.7 ]	1.6	1.3	( 6.9 )	長石	断面円形の棒状，両側欠損	西壁際底面	PL72

#### 第1441号土坑（第360・361図）

**位置** 調査区中央部のS 8 c8区に位置し，東に傾斜した台地の縁部に立地している。

**重複関係** 第1514号住居跡を掘り込んでいる。

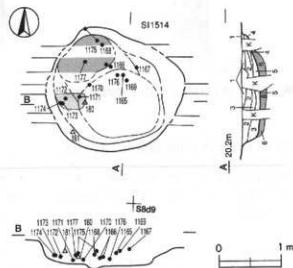
**規模と形状** 長径2.20m，短径1.95mほどのやや歪んだ円形で，長径方向はN-40°-Wである。深さは35cmほどで，底面は皿状を呈している。特に北西部が被熱しており，赤変硬化した部分の厚さは最大で10cmほどである。壁はいずれも外傾して立ち上がり，底面の中央部には性格不明のピット状のくぼみが認められる。

**覆土** 6層からなる。第1～5層は焼成に伴って堆積した層で，第6層は底面の断ち割り土層である。上部が削平されているために，焼成後の堆積状況は不明である。

##### 土層解説

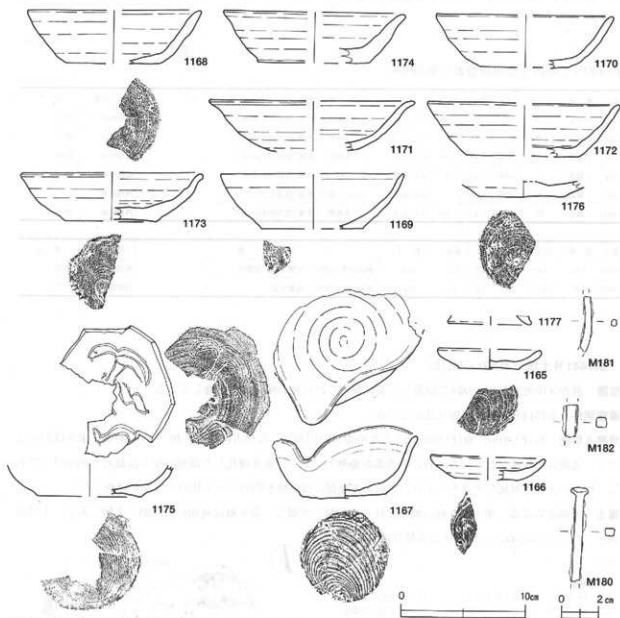
- 1 暗褐色 焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
- 4 にぶい黄褐色 ローム粒子・粘土粒子少量，炭化物微量
- 5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量
- 6 暗赤褐色 焼土ブロック中量，ロームブロック少量，炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片173点（小皿8，坏152，椀9，甕4），不明鉄製品3点（釘カ1，不明2），骨片が，北西部から西部にかけての覆土上層を中心に出土している。1175は北部の覆土上層から出土した破片が接合したもので，水鳥が線刻されている。



第360図 第1441号土坑実測図

所見 土師器に水鳥が線刻された例は極めて少なく、岩手県花巻市庫裡遺跡の住居跡から出土した例にみられる程度である。両者を比較した場合、構図や描き方などにいくつかの共通性を見いだすことができ、単なる画面とも言い切れない。時期は、出土土器から11世紀頃と考えられる。



第361図 第1441号土坑出土遺物実測図

第1441号土坑出土遺物観察表 (第361図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1165	土師器	小皿	[ 8.0]	1.6	4.8	雲母・石英	橙	普通	底部回転糸切り	中央部下層	55%
1166	土師器	小皿	[ 9.0]	1.8	[ 4.7]	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	中央部下層	30%
1167	土師器	杯	-	5.0	6.9	雲母・長石・石英	橙	普通	底部回転糸切り、焼成時に口縁部特曲	中央部中層	70%, PL.66
1168	土師器	杯	[13.4]	4.3	[ 7.6]	石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り	北部下層	20%
1169	土師器	杯	[14.7]	4.3	[ 8.1]	石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り	中央部中層	15%
1170	土師器	杯	[14.0]	4.2	[ 7.0]	雲母・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	中央部下層	15%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1171	土師器	環	[162]	(4.0)	-	長石・赤色粒子	橙	普通	体部ロクロナデ	西部下層	40%
1172	土師器	環	[151]	4.2	[ 9.0]	石英・赤色粒子	にぶい黄	普通	底部回転車切り	西壁階下層	30%
1173	土師器	環	[144]	3.8	[ 7.2]	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転車切り	西壁階下層	40%
1174	土師器	環	[142]	4.1	[ 9.0]	長石・赤色粒子	にぶい黄緑	普通	底部回転車切り	西壁階下層	30%
1175	土師器	環	-	(2.6)	[ 8.4]	長石・赤色粒子	橙	普通	底部回転車切り、内面水島彫刻	北部中層	30%、PL70
1176	土師器	環	-	(1.4)	6.6	石英・赤色粒子	橙	普通	底部回転車切り	中央部下層	10%
1177	土師器	輪	-	(0.7)	[ 6.8]	雲母・赤色粒子	にぶい黄緑	普通	高台貼り付け痕	北西部中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M180	釘	[ 5.0]	0.9	0.9	( 3.8)	鉄	断面方形の棒状	中央部下層	
M181	不明	[ 3.0]	0.4	0.4	( 1.1)	鉄	断面方形の棒状、縦やかに彎曲	南西壁階下層	
M182	不明	[ 1.8]	0.6	0.5	( 1.8)	鉄	断面方形の棒状	覆土中	

### 第1453号土坑 (第362図)

位置 調査区中央部の T 8 e4区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1563号住居跡と第1543号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径2.70m、短径2.30mほどの楕円形で、長径方向はN-80°-Wである。深さは15~20cmで、壁は外傾して立ち上がっている。底面はほぼ平坦で、中央部が特に固く焼け締まっている。

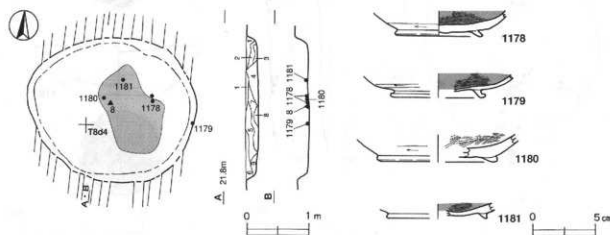
覆土 9層からなり、ブロック状に堆積した人為堆積である。

#### 土層解説

- |        |                         |        |                           |
|--------|-------------------------|--------|---------------------------|
| 1 暗褐色  | ロームブロック・炭化粒子少量          | 6 褐色   | ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土ブロック微量 |
| 2 黒褐色  | 炭化粒子中量、焼土ブロック少量         | 7 黒褐色  | 炭化粒子中量、焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量   |
| 3 極暗褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子微量          | 8 黒褐色  | 炭化粒子中量、焼土小ブロック少量          |
| 4 極暗褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック少量 | 9 極暗褐色 | ロームブロック少量                 |
| 5 黒褐色  | 焼土ブロック・炭化物少量、ローム粒子微量    |        |                           |

遺物出土状況 土師器片232点(輪145、寛・瓶87)、骨片、混入した須恵器片21点が出土している。1178・1180・1181と骨片は赤変硬化した底面の中央から出土しており、骨片には被熱痕が認められる。

所見 時期は、重複関係と出土土器から11世紀頃と考えられる。骨片は出土状況から、廃絶後に投棄されたものではなく、焼成された可能性が高い。



第362図 第1453号土坑・出土遺物実測図

第1453号土坑出土遺物観察表 (第362図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1178	土師器	椀	-	( 2.0)	6.7	雲母・赤色粒子	にぶい肌	普通	底部回転ヘラ切り後、高台貼り付け	中央部下層	30%
1179	土師器	椀	-	( 1.9)	[ 6.7]	雲母・赤色・褐色粒子	橙	普通	高台貼り付け後、ロクロナデ	東壁部下層	10%
1180	土師器	椀	-	( 2.2)	[ 9.1]	雲母・赤色粒子	灰青藍	普通	高台貼り付け後、ロクロナデ	中央部下層	内底黒色処理あり
1181	土師器	椀	-	( 1.2)	[ 7.7]	雲母・赤色粒子	にぶい肌	普通	底部回転ヘラ切り後、高台貼り付け	中央部下層	

第1454号土坑 (第363・364図)

位置 調査区中央部のT 8 b4区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1566号住居跡と第179・187号掘立柱建物跡、第1605・1606号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径3.50m、短径2.70mほどの楕円形で、長径方向はN-10°-Eである。深さは5~15cmで、北壁は外傾して、その他の壁はなだらかに立ち上がっている。底面はやや凹凸があり、中央部の南寄りから赤変硬化した部分が若干確認されている。

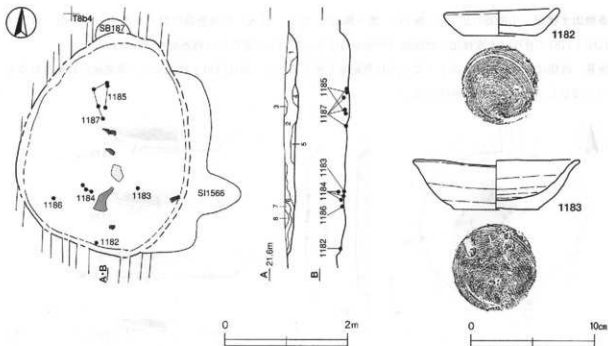
覆土 8層からなり、ブロック状に堆積した人為堆積である。

土層解説

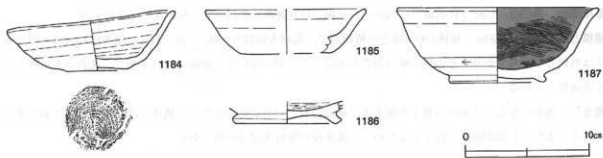
- |       |                        |        |                         |
|-------|------------------------|--------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 | 5 極暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量        |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量   | 6 褐色   | ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量   |
| 3 褐色  | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量  | 7 褐色   | ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子中量            | 8 黒褐色  | 炭化物少量、ローム粒子微量           |

遺物出土状況 土師器片184点(小皿7, 坏21, 椀95, 甕・瓶61)、炭化材、骨片が、覆土下層を中心にほぼ全域から出土している。土師器甕・瓶片はほとんどが細片で、破断面が摩擦していることから、混入したものと考えられる。1182は、南部の壁面から正位で出土している。その他の図示した土器は、すべて底面から出土している。

所見 時期は、重複関係と出土土器から11世紀頃と考えられる。



第363図 第1454号土坑・出土遺物実測図



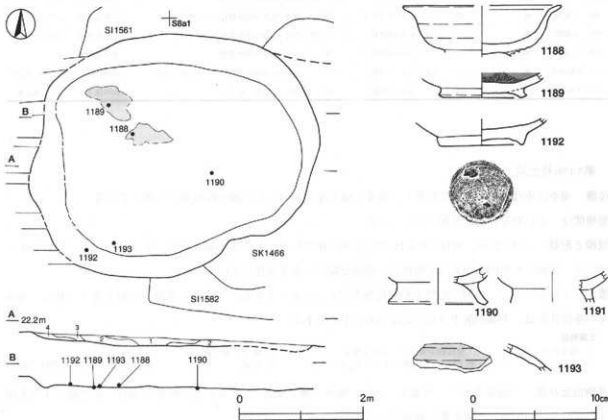
第364図 第1454号土坑・出土遺物実測図

第1454号土坑出土遺物観察表 (第363・364図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1182	土師器	小皿	8.9	2.2	6.0	長石・石英	橙	普通	底部回転糸切り	南部下層	100%, PL67
1183	土師器	杯	13.0	4.0	7.0	灰石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り	中央部下層	100%, PL67
1184	土師器	杯	13.4	4.6	4.9	長石・石英	浅黄橙	普通	底部回転糸切り	中央部下層	70%
1185	土師器	杯	[12.6]	3.6	[7.0]	石英・赤色粒子	橙	普通	体部ロクロナデ	北部下層	
1186	土師器	碗	-	[1.8]	[7.7]	雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	高台跡有り付け後、ロクロナデ	南西部下層	30%
1187	土師器	碗	15.9	6.0	7.3	灰石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部回転へラ削り後、高台跡有り付け	北部下層	90%, PL67

第1455号土坑 (第365図)

位置 調査区中央部の S 7 a0区に位置し、平坦な台地上に立地している。



第365図 第1455号土坑・出土遺物実測図

重複関係 第1561・1582号住居跡と第146・147号掘立柱建物跡，第1466号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径4.50m，短径3.90mほどの楕円形で，長径方向はN-90°-Eである。深さは10cmほどで，西壁は外傾して立ち上がり，その他の壁はなだらかに立ち上がっている。底面はほぼ平坦で，北西部が被熱して赤変硬化している。

覆土 4層からなる。上層から焼土が最も多く確認されていることなどから，焼成に伴って堆積した層と考えられる。また，上部が削平されているために，焼成後の堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子少量，炭化物中量，ロームブロック・粘土 3 黒褐色 炭化粒子中量，焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量  
 2 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化物・粘土粒子中量，ロームブロック少量  
 4 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量

遺物出土状況 土師器片239点（坏・椀104，甕・瓶135），須恵器片35点（坏16，甕18，蓋1），灰軸陶器片2点（碗，壺），骨片が，南部の覆土下層を中心に出土している。土師器甕・瓶片と須恵器片は破断面が摩滅しており，混入したものと考えられる。1188・1190は中央部，1192・1193は南部の底面から若干浮いた状態で出土している。

所見 時期は，出土土器から10世紀中頃と考えられる。灰軸陶器片は胎土や色調から三河・遠江系と考えられ，本遺構で焼成されたものではないが，灰軸陶器の出土量が激減する当該期にあつては稀少な例として興味深い資料である。

第1455号土坑出土遺物観察表（第365図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1188	土師器	碗	[125]	(4.1)	-	長石・石英	にぶい砂	普通	高台盛り付け	中央部下層	40%
1189	土師器	碗	-	(2.0)	6.2	石英・赤色粒子	橙	普通	底部内面放射状のへちま	中央部下層	25%
1190	土師器	碗	-	(2.9)	7.6	石英・赤色粒子	にぶい砂	普通	底部内面無調整	中央部下層	10%
1191	土師器	碗	-	(2.5)	-	石英・赤色粒子	橙	普通	底部内面無調整	南西部覆土中	
1192	灰軸陶器	碗	-	(2.2)	6.8	長石・黒色粒子	灰白	良好	底部回転車切り後，高台盛り付け	南西部下層	三河・遠江系30%
1193	灰軸陶器	蓋	-	(2.4)	-	長石・黒色粒子	灰白	良好	輪は流し掛け	南西部下層	三河・遠江系

第1456号土坑（第366図）

位置 調査区東部のT8e5区に位置し，南東に緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第1534号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径2.25m，短径2.05mほどのほぼ円形である。深さは10cmほどで，壁はなだらかに立ち上がっている。底面はやや凹凸のある平坦面で，南部を除いて赤変硬化している。

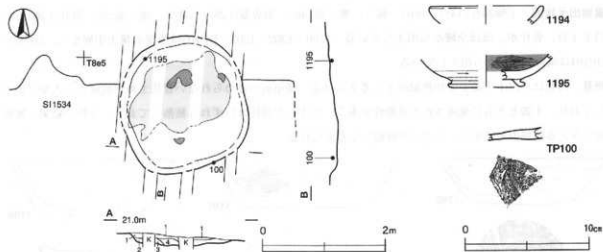
覆土 4層からなる。各層とも焼土や炭化物を含んでいることから，焼成時に堆積した層と考えられる。焼成後の堆積状況は，上部が削平されているために不明である。

土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化物少量，ローム粒子微量 3 黒褐色 炭化物少量  
 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物・粘土粒子・砂粒少量 4 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片22点（小皿1，坏2，碗10，甕・瓶9），混入した土師器片38点，須恵器片4点が出土している。1195は，北西境界の底面から出土している。

所見 時期は，出土土器から11世紀頃と考えられる。



第366図 第1456号土坑・出土遺物実測図

第1456号土坑出土遺物観察表 (第366図)

番号	種別	器型	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1194	土師器	小皿	9.0	1.5	-	赤色粒子	橙	普通	腰部ロクロナデ	覆土中	
1195	土師器	碗	-	2.6	5.2	雲母・赤色粒子	にぶい黒	普通	高台輪り付け後、ロクロナデ	北西隅附近面	20%
T196	土師器	杯	-	-	-	雲母・灰石・石英	黒	普通	底部回転糸切り	南東壁際下層	

第1466号土坑 (第367~369図)

位置 調査区中央部のS 8 a1区に位置し、平坦な台地上に立地している。

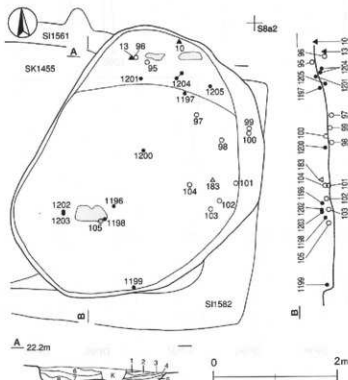
重複関係 第1561・1582号住居跡と第1455号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径4.55m、短径3.45mほどの楕円形で、長径方向はN-35°-Eである。深さは15cmほどで、北壁はなだらかに立ち上がり、その他の壁は外傾して立ち上がっている。底面は南に向かってやや傾斜しており、南部と北部に赤変硬化した部分が認められる。

覆土 8層からなる。上層からも焼土や灰が確認されており、焼成に伴って堆積した層と考えられる。上部が削平されているため、焼成後の堆積状況については不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 にぶい赤褐色 焼土粒子多量、灰微量
- 3 灰褐色 灰多量、焼土ブロック少量
- 4 暗赤褐色 灰中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 7 暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
- 8 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量

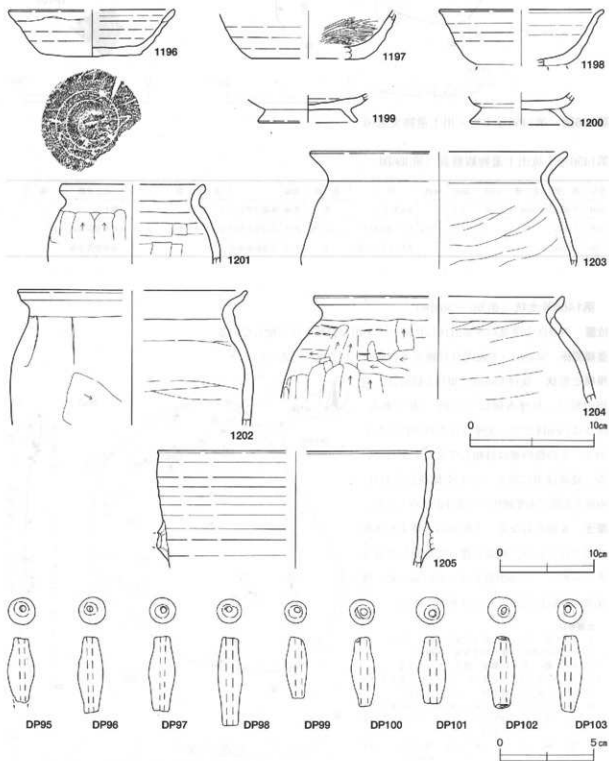


第367図 第1466号土坑実測図

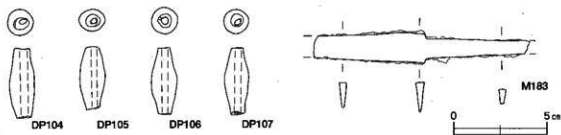


遺物出土状況 土師器片214点（坏63，碗5，甕・瓶146），須恵器片28点（坏3，甕・瓶25），管状土鍾13点，刀子1点，骨片が、ほぼ全域から出土している。1196・1202・1203・DP105は西部の覆土中層から，DP95～DP104は東部の底面から出土している。

所見 時期は，出土土器から10世紀前半と考えられる。使用痕の認められない管状土鍾が底面から大量に出土しており，土器とともに焼成された可能性がある。出土した骨片はいずれも被熱しており，分析の結果，破断面にみえる髓部の形態から，シカの角幹破片と考えられる。



第368図 第1466号土坑出土遺物実測図（1）



第369図 第1466号土坑出土遺物実測図(2)

第1466号土坑出土遺物観察表(第368・369図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1196	土師器	坏	[132]	3.8	7.6	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	底部回転ヘラ切り	中央部下層	30%
1197	土師器	坏	- (3.9)	[ 9.0]	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	体部下層・底部回転ヘラ削り	北部下層	10%	
1198	土師器	椀	[130]	( 4.5)	-	長石・石英・赤色粒子	褐色	普通	高台貼り付け機、底部内面無調整	西部下層	40%
1199	土師器	椀	- (2.2)	[ 7.7]	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐色	普通	底部内面無調整	南壁際下層	25%	
1200	土師器	椀	- ( 2.5)	[ 7.9]	長石・石英・赤色粒子	浅黄褐色	普通	底部内面無調整	中央部下層	20%	
1201	土師器	小形壺	[113]	( 6.4)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐色	普通	体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	北部下層	30%
1202	土師器	壺	[162]	(10.8)	-	長石・石英	にぶい褐色	普通	体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	西部中層	15%
1203	土師器	壺	[202]	( 9.2)	-	赤鉛・長石・石英	褐色	普通	体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	西部中層	10%
1204	土師器	甕	[193]	( 8.4)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	北部下層	10%
1205	須恵器	瓶	[292]	(12.4)	-	長石・石英	灰青	普通	体部口クロナゲ機、把手接合	北部下層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質・胎土	特徴	出土位置	備考
DP95	管状土師	4.1	1.4	1.4	( 5.5)	長石・石英	孔径0.3cm、片輪端部欠損、ナデ、にぶい黄褐色	北部上層	FL74
DP96	管状土師	4.1	1.5	1.5	5.4	長石・石英	孔径0.3cm、ナデ、にぶい褐色	北部底面	FL74
DP97	管状土師	4.0	1.4	1.4	5.9	長石・石英	孔径0.3cm、ナデ、にぶい褐色	東部底面	FL74
DP98	管状土師	4.7	1.3	1.2	6.3	長石・石英	孔径0.3cm、ナデ、にぶい褐色	東部底面	FL74
DP99	管状土師	3.2	1.2	1.1	3.4	長石・石英	孔径0.3cm、ナデ、にぶい褐色	東部底面	FL74
DP100	管状土師	3.6	1.3	1.3	4.6	長石・石英	孔径0.3cm、ナデ、にぶい褐色	東部底面	FL74
DP101	管状土師	3.5	1.4	1.4	5.2	長石・石英	孔径0.3cm、ナデ、褐色	東部底面	FL74
DP102	管状土師	3.8	1.4	1.4	5.6	長石・石英	孔径0.3cm、ナデ、褐色	東部底面	FL74
DP103	管状土師	4.0	1.3	1.3	4.8	長石・石英	孔径0.3cm、ナデ、にぶい黄褐色	東部底面	FL74
DP104	管状土師	3.5	1.4	1.4	5.8	長石・石英	孔径0.4cm、ナデ、にぶい褐色	東部底面	FL74
DP105	管状土師	3.3	1.3	1.2	4.1	長石・石英	孔径0.3cm、ナデ、にぶい褐色	西部下層	FL74
DP106	管状土師	3.6	1.4	1.4	4.8	長石・石英	孔径0.3cm、ナデ、にぶい褐色	覆土中	FL74
DP107	管状土師	3.5	1.3	1.3	4.6	長石・石英	孔径0.3cm、ナデ、にぶい褐色	覆土中	FL74
M183	刀子	(11.5)	1.6	0.4	(25.1)	鉄	刃部から基部にかけての破片、両側	東部中層	FL79

第1474号土坑(第370図)

位置 調査区中央部のT7c3区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1595号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.30m、短径1.10mほどの楕円形で、長径方向はN-40°-Wである。深さは10cmほどで、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面はほぼ平坦で、中央部のやや北寄りか赤変しているが、固く焼け締まっていない。また、底面のほぼ全域から灰や炭化粒子の広がりが確認されている。

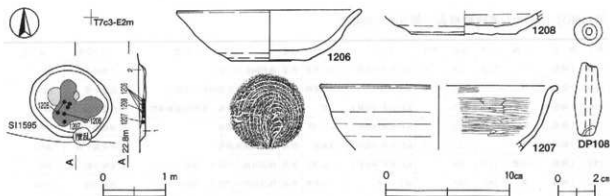
覆土 2層からなる。レンズ状に堆積した自然堆積である。

土層解説

1 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化物少量、ローム粒子微量 2 暗褐色 ローム粒子・流土粒子・炭化物・粘土粒子・砂粒少量

遺物出土状況 土師器片10点(坏7, 甕3), 須恵器片1点, 管状土錘1点が, 中央部の覆土下層や底面を中心に出土している。1206~1208は, 中央部の底面から若干浮いた状態で出土している。

所見 時期は, 出土土器から11世紀頃と考えられる。底面の赤変部分が中央部から認められる場合と偏在する場合があります, 両者の違いは焼成方法の違いに起因するものと推測される。



第370図 第1474号土坑・出土遺物実測図

第1474号土坑出土遺物観察表(第370図)

番号	種別	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1206	土師器	坏	14.6	4.1	6.2	雲母・赤色粒子	に濃い橙	普通	底部回転糸切り	中央部底面	70%
1207	土師器	甕	18.6	(5.2)	-	雲母・赤色粒子	に濃い黄橙	普通	底部外部口コナナテ, 内面ヘラ磨き	中央部底面	20%
1208	土師器	坏	-	(1.9)	8.4	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り	中央部底面	80%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP108	管状土錘	3.8	1.4	1.4	(6.8)	長石	孔径0.3cm, ナテ, 灰黄褐色	覆土中	PL74

表6 焼成遺構一覽表

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 (時期)
1426	R89	-	円形	1.80×1.70	35	縦割	皿状	自然	土師器片, 須恵器片, 骨片	11世紀
1430	S869	N-12°-W	楕円形	1.10×0.80	15	縦割	皿状	自然	土師器片	11世紀
1435	R58	N-0°	楕円方形	3.30×3.30	50	縦割	皿状	自然	土師器片, 須恵器片, 灰陶器片, 灰土塊, 炭化物, 赤変土塊, 骨片	10世紀前半
1440	S8c8	N-82°-E	楕円形	2.30×1.60	30	外傾	皿状	自然	土師器片, 不明土製品, 鉄滓, 骨片	11世紀
1441	S8c8	N-40°-W	円形	2.30×1.95	35	外傾	皿状	自然	土師器片, 不明土製品, 骨片	11世紀
1453	T8e4	N-80°-W	楕円形	2.70×2.30	15~30	縦割	平皿	人為	土師器片, 須恵器片, 骨片	11世紀
1454	T8e4	N-10°-E	楕円形	3.50×2.70	5~15	縦割	凹凸	人為	土師器片, 骨片	11世紀
1455	S7a0	N-90°-E	楕円形	4.50×3.90	10	縦割	平皿	自然	土師器片, 須恵器片, 灰陶器片, 骨片	10世紀中頃
1456	T8e5	-	円形	2.35×2.05	10	縦割	凹凸	自然	土師器片, 須恵器片	11世紀
1466	S8a1	N-35°-E	楕円形	4.55×3.45	15	外傾	傾斜	自然	土師器片, 須恵器片, 管状土錘, 刀子, 骨片	10世紀前半
1474	T7c3	N-40°-W	楕円形	1.30×1.10	10	縦割	平皿	自然	土師器片, 須恵器片, 管状土錘	11世紀

#### (4) 柱穴列跡

当調査区からは、4基の柱穴列跡が確認されている。いずれも南部の掘立柱建物群付近に位置しており、掘立柱建物跡の可能性もあるが、配列が伴わないため、ここでは柱穴列跡として報告する。

##### 第4号柱穴列跡（第371図）

位置 調査区中央部のT7a8区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 第8号ピット群に掘り込まれている。

規模と構造 柱穴3か所が、東西に並んで確認されている。方向はN-90°-Eで、P1からP3までの距離は3.03mである。柱間寸法は、1.51m（5尺）を基調としている。

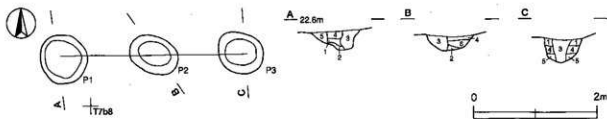
柱穴 平面形は円形を呈し、深さは20~40cmである。柱抜き取り痕は土層断面図中の第3層が相当し、しまりが弱い。その他の層は埋土で、ローム上を主体とした褐色度や暗褐色土で突き固められている。

土層解説（各柱穴共通）

- |                       |                 |
|-----------------------|-----------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量         | 4 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 褐色 ロームブロック多量、焼土粒子微量 | 5 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子少量         | 6 褐色 ロームブロック多量  |

遺物出土状況 土師器片16点、須恵器片6点が出土している。いずれも細片である。

所見 掘立柱建物を想定して調査を進めたが、柱穴3か所が確認されただけであり、横列跡の可能性も考えられる。時期は、判断できる遺物が出土していないが、柱穴の形状や東西に並んだ様相から、奈良・平安時代と考えられる。



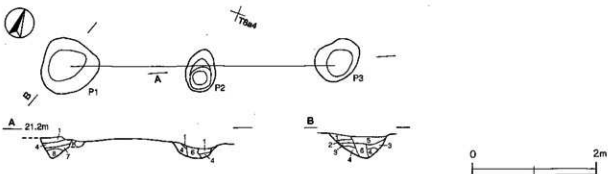
第371図 第4号柱穴列跡実測図

##### 第5号柱穴列跡（第372図）

位置 調査区中央部のT8a4区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1537号住居に掘り込まれている。

規模と構造 柱穴3か所が、東西に並んで確認されている。方向はN-20°-Eで、P1からP3までの距離



第372図 第5号柱穴列跡実測図

は4.20mほどである。柱間寸法は、2.12m（7尺）を基調としている。

**柱穴** 平面形は円形を呈し、深さは30～40cmである。柱抜き取り痕は土層断面図中の第5・6層が相当し、しまりが弱い。その他の層は埋土で、ローム土を主体とした黒褐色土や暗褐色土で突き固められている。

**土層解説**（各柱穴共通）

1 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量	5 黒褐色	ロームブロック・炭化物少量
2 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量	6 暗褐色	ロームブロック中量
3 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量	7 暗褐色	ロームブロック少量
4 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量	8 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量

**遺物出土状況** 出土していない。

**所見** 独立柱建物を想定して調査を進めたが、柱穴3か所が確認されただけであり、欄列跡の可能性も考えられる。時期は、判断できる遺物が出土していないが、柱穴の形状や土層断面の様相、重複関係から、奈良・平安時代と考えられる。

**第6号柱穴列跡**（第373図）

**位置** 調査区中央部のT8g3区に位置し、平坦な台地上に立地している。

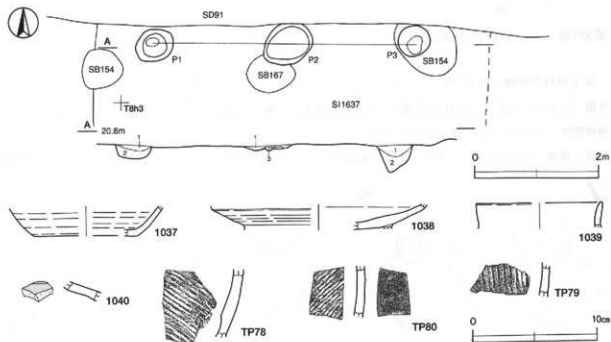
**重複関係** 第1637号住居跡と第154・167号独立柱建物跡を掘り込み、第91号堀に掘り込まれている。

**規模と構造** 柱穴3か所が、東西に並んで確認されている。方向はN-90°-Eで、P1からP3までの距離は4.20mほどである。柱間寸法は、2.12m（7尺）を基調としている。

**柱穴** 平面形は円形を呈し、深さはP1が20cm、P2が5cm、P3が40cmとばらつきがある。柱抜き取り痕は土層断面図中の第1・2層が相当し、しまりが弱い。第3層は埋土で、ローム土を主体とした暗褐色土で突き固められている。

**土層解説**（各柱穴共通）

1 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	3 暗褐色	ロームブロック多量
2 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量		



第373図 第6号柱穴列跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 須恵器片 6点 (坏1, 盤1, 甕3, 短頸壺1), 灰釉陶器片1点 (盞) が出土している。1037~1039はP1の柱抜き取り痕から, TP78・TP80はP2の柱抜き取り痕から, 1040・TP79はP3の柱抜き取り痕から出土している。

所見 時期は, 出土土器と重複関係から9世紀後半と考えられる。第91号堀に掘り込まれているために, 北側部分の様相が不明であるが, 柱穴の規模や配列からみて, 掘立柱建物の可能性もある。

第6号柱穴列跡出土遺物観察表 (第373図)

番号	種別	器種	L径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1037	須恵器	坏	-	(2.4)	[8.3]	長石・石英	灰	普通	体部ロクロナテ	P1抜き取り痕	
1038	須恵器	盤	-	(2.0)	-	長石・石英	灰	普通	底縁副軽へう割り縁, 両台取り付け	P1抜き取り痕	
1039	須恵器	短頸壺	[9.8]	(2.0)	-	長石・石英	灰赤色	普通	口縁部ロクロナテ	P1抜き取り痕	
1040	灰釉陶器	短頸壺	-	(1.5)	-	長石	灰合焼付	良好	体部ロクロナテ	P3抜き取り痕	板投産
TP78	須恵器	甕	-	-	-	雲母・長石・石英	灰赤色	普通	体部外周平行叩き, 内周ナテ	P2抜き取り痕	
TP79	須恵器	甕	-	-	-	雲母・長石・石英	製灰	普通	体部外周平行叩き, 内周ナテ	P3抜き取り痕	
TP80	須恵器	甕	-	-	-	緻密	オリブ黒	良好	外周平行叩き, 内周同心円状の当て具痕	P2抜き取り痕	東海地方産

### 第7号柱穴列跡 (第374図)

位置 調査区中央部のS813区に位置し, 平坦な台地上に立地している。

規模と構造 柱穴3か所が, 東西に並んで確認されている。方向はN-15°-Eで, P1からP3までの距離は4.50mほどである。柱間寸法は, 2.27m (7.5尺) を基調としている。

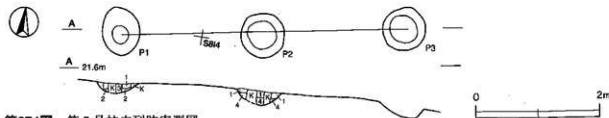
柱穴 平面形は円形を呈し, 深さは15~20cmである。柱抜き取り痕は土層断面図中の第3層が相当し, しまりが弱い。その他の層は埋土で, ローム土を主体とした褐色土や暗褐色土で突き固められている。

土層解説 (各柱穴共通)

- |                 |                 |
|-----------------|-----------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量   | 3 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック中量 | 4 褐色 ローム粒中量     |

遺物出土状況 出土していない。

所見 掘立柱建物を想定して調査を進めたが, 柱穴3か所が確認されただけであり, 横列跡の可能性も考えられる。時期は, 判断できる遺物が出土していないが, 柱穴の形状や土層断面の様相から, 奈良・平安時代と考えられる。

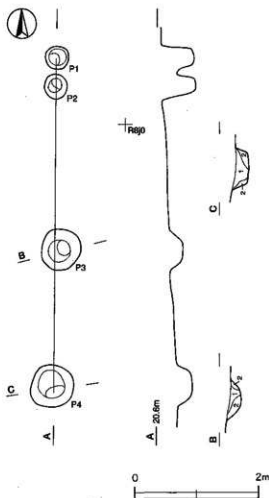


第374図 第7号柱穴列跡実測図

### 第8号柱穴列跡 (第375図)

位置 調査区中央部のR819区に位置し, 平坦な台地上に立地している。

規模と構造 柱穴4か所が, 南北に並んで確認されている。方向はN-0°で, P1からP4までの距離は



第375図 第8号柱穴列跡実測図

表7 柱穴列跡一覧表

番号	位置	方向	柱穴数	平面形	径φ(cm)	径間寸法(m)	出土遺物	備考
4	T7a8	N-90°-E	3	円形	20~40	1.51	土師器片, 須恵器片	
5	T8a4	N-20°-E	3	円形	30~40	2.12		
6	T8g3	N-90°-E	3	円形	30.5, 40	2.12	須恵器片, 灰輪陶器片	9世紀後半
7	S8i3	N-15°-E	3	円形	15~20	2.27		
8	R8i9	N-0°	4	円形	50, 20, 25	2.42	土師器片, 須恵器片	

#### (5) その他の土坑

当調査区から確認された土坑のほとんどは性格や時期が不明であるが、遺物の出土状況や重複関係から帰属時期を当該期に特定できるものや独立柱建物跡の柱穴の可能性のあるものについて、記述する。

#### 第1431号土坑 (第376図)

位置 調査区中央部のS816区に位置し、平坦な台地上に立地している。

規模と形状 径0.75mほどのほぼ円形である。深さは20cmほどで、壁は外傾して立ち上がっている。底面は平

5.30mほどである。P2~P4の柱間寸法は2.42m(8尺)を基調としており、P1とP2の間隔は0.50mの間隔に隣接している。

柱穴 平面形は円形を呈し、深さはP1・P2が50cm、P3が20cm、P4が25cmとばらつきがある。柱抜き取り痕は土層断面図中の第1層が相当し、しまりが弱い。第2層は埋土で、ローム土を主体とした暗褐色土で突き固められている。

#### 土層解説 (各柱穴共通)

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 土師器片14点、須恵器片4点が出土している。いずれも細片である。

所見 時期は、判断できる遺物が出土していないが、柱穴の形状や南北に整然と並んだ様子から、奈良・平安時代の可能性が高い。また、柱穴は、調査区域外になっている東へ延びていることも考えられる。

坦である。

覆土 2層からなる。ブロック状に堆積した人為堆積である。

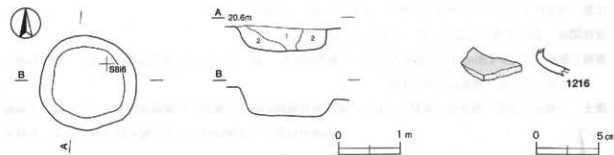
土層解説

1 暗褐色 ロームブロック多量、炭化粒子微量

2 暗褐色 ロームブロック多量、炭化粒子少量、焼土ブロック微量

遺物出土状況 土師器片34点、須恵器片5点、土製支脚1点、炭化材が出土している。1216は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀頃と考えられる。形状や人為的に埋め戻された様子から、墓塚の可能性はある。



第376図 第1431号土坑・出土遺物実測図

第1431号土坑出土遺物観察表（第376図）

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1216	須恵器	冠葉笠	-	(2.5)	-	緻密	灰黄褐色	良好	口縁部にクロナデ、自然釉	覆土中	

#### 第1463号土坑（第377図）

位置 調査区中央部のS 8区に位置し、平坦な台地上に立地している。

規模と形状 長径1.70m、短径1.45mほどの楕円形で、長径方向はN-10°-Wである。深さは30cmほどで、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面は皿状を呈している。

覆土 4層からなる。ブロック状に堆積した人為堆積である。

土層解説

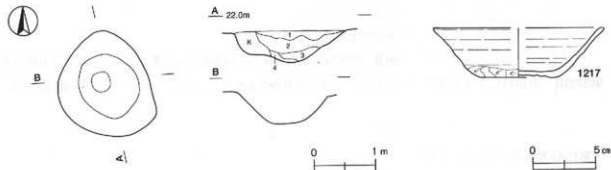
1 黒褐色 ロームブロック少量

3 黒色 ロームブロック・炭化粒子少量

2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

4 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片8点、須恵器片8点、鏝1点、混入した縄文土器片1点が出土している。1217は中央



第377図 第1463号土坑・出土遺物実測図



部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀頃と考えられる。性格は不明である。

#### 第1463号土坑出土遺物観察表 (第377図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1217	須恵器	杯	[13.1]	4.0	6.1	芯砂・長石・石英	灰青	普通	底部回転ヘラ切り後、一方のヘラ振り	中央部下層	60%

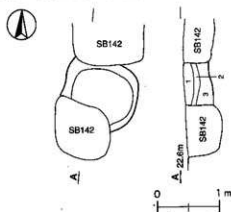
#### 第1494号土坑 (第378図)

位置 調査区中央部のR7b8区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 第142号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 1辺が1.20mほどの隅丸方形で、主軸方向はN-10°-Eである。深さは45cmほどで、壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦である。

覆土 3層からなる。版築状に堆積しており、掘立柱建物跡の柱穴と類似した堆積状況を示している。土層断面図中の第1～3層はローム土で埋め戻されており、互層を



なしている。

#### 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量
- 3 褐色 ロームブロック多量

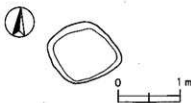
遺物出土状況 土師器片6点、須恵器片1点が出土している。いずれも細片である。

所見 形状や覆土の堆積状況から見て柱穴と考えられるが、掘立柱建物を構成するような柱穴の配列は確認されていない。時期は、重複関係から8世紀前半頃と考えられる。

第378図 第1494号土坑実測図

#### 第1543号土坑 (第379図)

位置 調査区中央部のT8c4区に位置し、平坦な台地上に立地している。



重複関係 第1566号住居と第7号土器焼成遺構に掘り込まれている。

規模と形状 長径0.90m、短径0.70mほどの楕円形で、長径方向はN-30°-Wである。深さは20cmほどで、壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦である。

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、重複関係から10世紀以前と考えられる。性格は不明であるが、付近に掘立柱建物群が展開していることから、柱穴の可能性がある。

第379図 第1543号土坑実測図

#### 第1547号土坑 (第380～382図)

位置 調査区中央部のT8j3区に位置し、平坦な台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第1647号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径3.40m、短径3.30mほどのほぼ円形である。深さは25cmほどで、壁は外傾して立ち上がっている。底面はほぼ平坦で、北半部分に焼土が薄く広がっているが、焼け締まっていない。

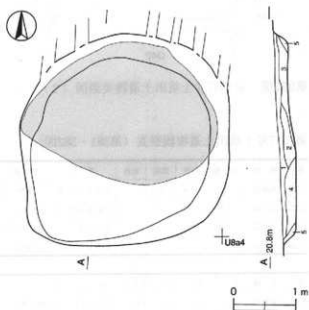
覆土 5層からなる。第5層は壁の崩落に伴って堆積した層で、第2～4層は焼土や炭化物を含み、第5層の堆積後に有機物を燃やした際に生じた堆積土と考えられる。また、最上層である第1層は黒色土を主体としており、焼成後の産地に自然堆積した層である。

土層解説

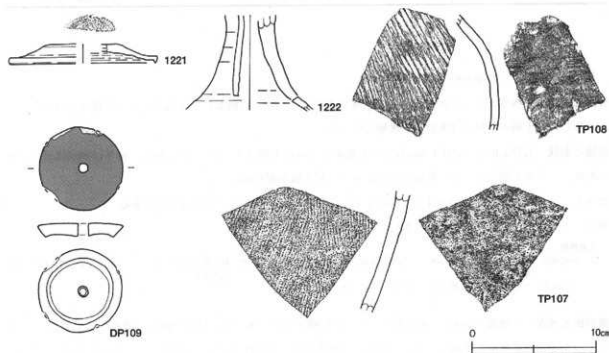
- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 炭化物中量、ロームブロック・焼土粒子少量
- 3 黒褐色 焼土ブロック・炭化物中量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片201点、須恵器片179点、土製紡錘車1点、砥石1点、刀子2点、鉄鏝1点が、ほぼ全域から散在して出土している。1222・M188・M189は、中央部の覆土下層から出土している。

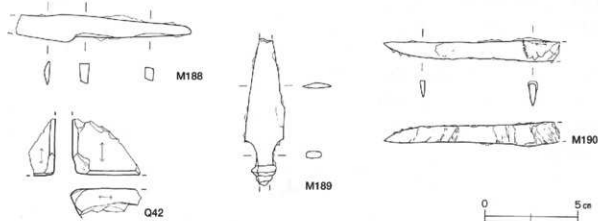
所見 時期は、出土土器から9世紀と考えられる。当初、焼上の広がりか確認されていたことから土器焼成遺構と考えて調査を進めたが、焼成時に生じる破損品が認められなかったため、それ以外の目的で使用されていたものと思われる。使用の最終段階では何らかの有機物を燃やし、その後は廃棄されたと考えられる。



第380図 第1547号土坑実測図



第381図 第1547号土坑出土遺物実測図(1)



第382図 第1547号土坑出土遺物実測図(2)

第1547号土坑出土遺物観察表(第381・382図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1221	須恵器	蓋	[11.6]	( 1.3)	-	雲母・長石・石英	黄灰	普通	天井部回転へつ削り	南東部上層	天井部残存[ナ]
1222	須恵器	高盤	-	( 7.6)	-	雲母・長石・石英	灰	普通	透かしは3か所々	中央部下層	
17107	須恵器	大槌	-	-	-	長石・石英	オリブ黒	良好	外面平行叩き、内面無文の帯て具取	中央部下層	外面自然植
17108	須恵器	甕	-	-	-	雲母・長石・石英	黄灰	普通	外面平行叩き、内面ナデ	南西部上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
D709	紡錘車	6.7	6.6	1.0	(44.0)	雲母・石英	孔径0.8cm、一部黒斑、片面に断面三角形の緑帯を持つ	東壁面下層	9556, PL75
Q42	砥石	( 3.8)	( 3.0)	( 1.0)	( 8.3)	凝灰岩	砥面3面、その他の面は破損のため不明	南東部上層	
X08	刀子	( 9.4)	1.5	0.5	(13.3)	鉄	刃部から基部にかけての破片、片割	中央部下層	PL79
X08	鏃	( 7.8)	2.1	0.4	(16.9)	鉄	鏃身部から穂先部にかけての破片、陥凹線、溝有り	中央部下層	PL80
X08	刀子	( 9.4)	1.3	0.4	( 9.0)	鉄	刃部の破片、鐵鑄質付着	中央部底面	PL79

### 第1556号土坑(第383図)

**位置** 調査区南西部のT5h2区に位置し、台地から低地へ下りる斜面部に立地している。木跡付近はローム土が流出し、粘土層の上層には黒色土が堆積している。

**規模と形状** 長径4.40m、短径3.30mほどの不整形で、長径方向はN-35°-Eである。深さは20cmほどで、壁は外傾して立ち上がっている。底面は凹凸があり、粘土層を掘り込んでいる。

**ピット** 1か所。P1は径50cmほどの円形を呈し、深さは15cmである。性格は不明である。

**覆土** 3層からなり、ブロック状に堆積した人為堆積である。

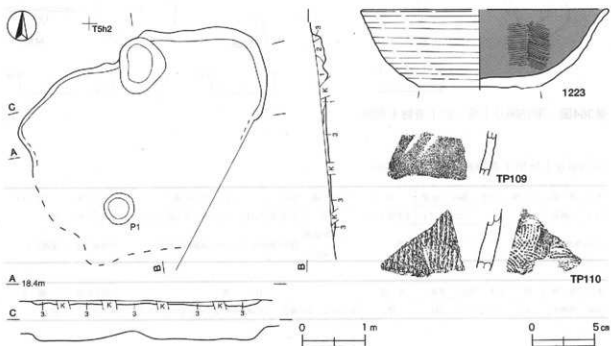
#### 土層解説

- 1 暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化物少量、粘土粒子 3 暗褐色 粘土粒子中量、ロームブロック少量、焼土粒子・炭化物微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物粒子・粘土粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片169点、須恵器片5点、炭化種子1点(桃)が、ほぼ全域から散在して出土している。出土した土器は破断面の摩滅が少ないことから、投棄された可能性が高い。1223は、P1内から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から10世紀前半と考えられる。掘り込みは浅いものの、粘土層を掘り込んでいること

や形状が不整形であることなどから、粘土採掘坑の可能性もある。また、廃絶後の窪地は廃棄土坑として利用されたと考えられる。



第383図 第1556号土坑・出土遺物実測図

第1556号土坑出土遺物観察表 (第383図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1223	土師器	椀	19.5	(6.3)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	底部回転ヘラ削り、高台貼り付け痕	P1内	80%
T788	土師器	甕	-	-	-	雲母・長石・石英	にぶい黄褐色	普通	外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	北西部覆土中	半月痕石
T718	須恵器	大甕	-	-	-	長石・石英	黄灰	良好	外面平行明き、内面同心円状の当て具痕	南西部覆土中	

第1566号土坑 (第384図)

位置 調査区中央部のT8e1区に位置し、平坦な台地上に立地している。

規模と形状 長径1.15m、短径0.95mほどの楕円形で、長径方向はN-20°-Eである。深さは40cmほどで、壁はほぼ直立している。底面は平坦である。

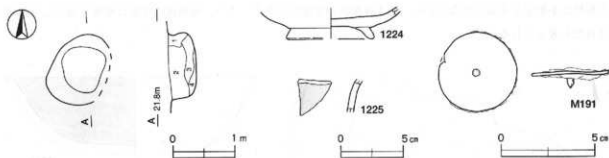
覆土 4層からなる。掘立柱建物跡の柱穴と類似した堆積状況を示しており、土層断面図中の第1～3層は黒褐色土や極暗褐色土の柱抜き取り痕、第4層はロームブロックを主体とした埋土の可能性もある。

土層解説

- |        |                       |       |                       |
|--------|-----------------------|-------|-----------------------|
| 1 極暗褐色 | ロームブロック・流土ブロック・炭化粒子少量 | 3 黒褐色 | 炭化物少量、ロームブロック・焼土粒子微量  |
| 2 黒褐色  | ロームブロック・流土粒子・炭化物少量    | 4 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片37点、灰釉陶器片1点、鉄製紡錘車1点が出土している。1224・1225は中央部の覆土下層から出土している。

所見 形状や覆土の堆積状況から見て柱穴と考えられるが、掘立柱建物を構成するような柱穴の配列は確認されていない。時期は、出土土器から10世紀頃と考えられる。



第384図 第1566号土坑・出土遺物実測図

第1566号土坑出土遺物観察表 (第384図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1224	土師器	碗	-	(25)	[7.1]	金雲母・長石	橙	普通	底面回転へつ回り焼, 高台貼り付け	中央部下層	15%
1225	灰陶陶器	長頸瓶	-	(2.9)	-	緻密	にじみ青緑・灰白	良好	頸部ロクロナデ, 施釉技法不明	中央部下層	東濃産?

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M191	結縁車	4.2	0.4	0.3	(10.1)	鉄	厚さの均一な円盤状, 円孔は錆化により塞がる, 結縁欠失	覆土中	PLS2

第1570号土坑 (第385図)

位置 調査区中央部のT8e1区に位置し, 平坦な台地上に立地している。

重複関係 第175号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.50m, 短径1.40mほどのほぼ円形である。深さは60cmほどで, 壁は急な傾斜で立ち上がっている。底面は平坦である。

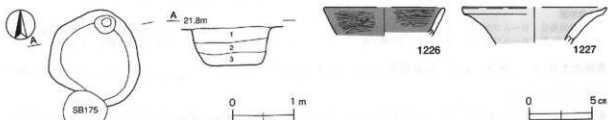
覆土 3層からなる。版築状に堆積しており, 掘立柱建物跡の柱穴と類似した堆積状況を示している。柱痕は確認されておらず, 確認された土層は埋土と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量  
 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量  
 3 赤褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量, 砂粒微量

遺物出土状況 土師器片 8点, 灰陶陶器片 1点, 不明鉄製品 1点が出土している。1226・1227は中央部の覆土中から出土している。

所見 形状や覆土の堆積状況から見て柱穴と考えられるが, 付近に同じような柱穴の配列は確認されていない。時期は, 重複関係から9世紀後葉以前と考えられる。



第385図 第1570号土坑・出土遺物実測図

第1570号土坑出土遺物観察表 (第385図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	出土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1226	土師器	瓶	[ 9.6 ]	( 2.3 )	-	長石	黒	貫通	体部内・外面ヘラ磨き	覆土中	
1227	灰釉陶器	瓶	[11.4]	( 2.9 )	-	黒色砂子	灰黄・ オリーブ灰	良好	釉は流し掛け	覆土中	施設所

第1605号土坑 (第386図)

位置 調査区中央部のT 8 b4区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1566号住居と第1454号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 1辺が0.85mほどの隅丸方形で、主軸方向はN-0°である。深さは30cmほどで、壁は外傾して立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。

覆土 4層からなる。版築状に堆積しており、掘立柱建物跡の柱穴と類似した堆積状況を示している。第1～4層は埋土と考えられ、ローム土を主体とした暗褐色土や極暗褐色土、黒褐色土で埋め戻され、互層をなしている。

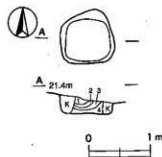
土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化物少量
- 3 極暗褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 4 黒褐色 炭化物少量、焼土ブロック・ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片18点、礫2点が出土している。いずれも細片で、形状を把握できるものは確認されていない。

所見 時期は、重複関係から11世紀以前に構築されたと考えられる。

形状や土層観察から、柱穴の可能性が高い。



第386図 第1605号土坑実測図

第1606号土坑 (第387図)

位置 調査区中央部のT 8 b4区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1566号住居と第1454号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.00m、短径0.85mほどのほぼ円形で、長径方向はN-40°-Wである。深さは55cmほどで、壁は直立している。底面は、ほぼ平坦である。

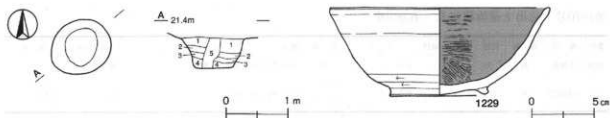
覆土 5層からなる。版築状に堆積しており、掘立柱建物跡の柱穴と類似した堆積状況を示している。第5層は柱痕と考えられ、しまりが弱い。第1～4層は埋土に相当し、ローム土を主体とした暗褐色土や極暗褐色土で埋め戻され、互層をなしている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 2 極暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量
- 5 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量

遺物出土状況 土師器片8点、須恵器片2点が、出土している。1229は、覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀以降に構築されたと考えられる。土層断面の様相から、掘立柱建物跡の柱穴の可能性が考えられるが、付近に同様の柱穴の配列は確認されていない。



第387図 第1606号土坑・出土遺物実測図

第1606号土坑出土遺物観察表(第387図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1229	土器部	碗	17.6	7.0	7.6	雲母・長石・石英	にぶい褐色	普通	底部回転ヘラ削り後、高台取り付け	覆土上層	35%, PL67

### 第1614号土坑(第388図)

位置 調査区中央部のT7c8区に位置し、平坦な台地上に立地している。

規模と形状 長径1.60m、短径1.20mほどの隅丸長方形で、長軸方向は $N-0^\circ$ である。深さは25cmほどで、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面は皿状を呈している。

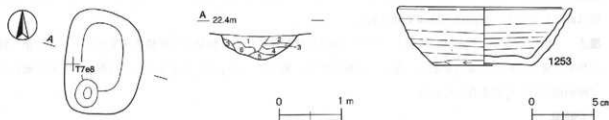
覆土 6層からなる。版築状に堆積しており、掘立柱建物跡の柱穴と類似した堆積状況を示している。土層断面図中の第1・6層は柱抜き取り痕と考えられ、しまりが弱い。第2～5層はローム土を主体とした暗褐色土で埋め戻されて、互層をなしている。

#### 土層解説

- |        |                  |       |                  |
|--------|------------------|-------|------------------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子中量          | 4 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色  | ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック多量        |
| 3 暗褐色  | ロームブロック多量、焼土粒子微量 | 6 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量   |

遺物出土状況 土師器片2点、須恵器片7点、混入した陶器片1点が出土している。1253は中央部の底面から出土している。

所見 形状や覆土の堆積状況から見て柱穴と考えられるが、掘立柱建物を構成するような柱穴の配列は確認されていない。時期は、出土土器から8～9世紀頃と考えられる。



第388図 第1614号土坑・出土遺物実測図

第1614号土坑出土遺物観察表(第388図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1253	須恵器	坏	13.6	4.6	7.8	雲母・長石・石英	褐色	普通	底部回転ヘラ切り後、2方向のヘラ削り	覆土中	80%

### 第1615号土坑（第389図）

位置 調査区中央部のT7b8区に位置し、平坦な台地上に立地している。

規模と形状 長径0.90m、短径0.70mほどの楕円形で、長径方向はN-30°-Wである。深さは20cmほどで、壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦である。

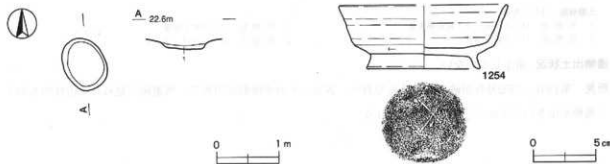
覆土 単一層である。ロームブロックを主体とした人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 暗褐色 ロームブロック多量

遺物出土状況 土師器片8点、須恵器片3点が出土している。1254は覆土中から出土している。底部に「×」のヘラ記号が見られる。

所見 時期は、出土土器から8～9世紀と考えられる。性格は不明である。



第389図 第1615号土坑・出土遺物実測図

### 第1615号土坑出土遺物観察表（第389図）

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1254	須恵器	高台付椀	134	5.1	8.7	長石・石英	褐色	普通	底部回転ヘラ削り後、高台削り付け	覆土中	底部内部草減 外周施青「×」

表8 奈良・平安時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 (時期)
1431	S8i6	-	円形	0.75×0.75	20	外傾 平坦	人為	土師器片、須恵器片、土製支脚、炭化材	墓壇a.9世紀	
1463	S8i2	N-40°-W	楕円形	1.70×1.45	30	外傾 皿状	人為	土師器片、須恵器片、縄、縄文土器片	9世紀	
1494	R7b8	N-10°-E	楕円方形	1.20×1.20	45	外傾 平坦	人為	土師器片、須恵器片	柱穴c.8世紀前半	
1543	T8c4	N-30°-W	楕円形	0.90×0.70	20	外傾 平坦	不明	-	柱穴a.10世紀以前	
1547	T8j3	-	円形	3.40×3.30	25	外傾 平坦	自然	土師器片、須恵器片、土製紡錘車、磁石、刀子、鉄鏝	9世紀	
1556	T8b2	N-35°-E	不整形	4.40×3.30	20	外傾 西凸	人為	土師器片、須恵器片、炭化種子(桃)	臺上塚跡a.10世紀後半	
1566	T8e1	N-20°-E	楕円形	1.20×1.20	40	直立 平坦	人為	土師器片、灰釉陶器片、鉄製紡錘車	柱穴c.10世紀	
1570	T8e1	-	円形	1.50×1.40	60	外傾 平坦	人為	土師器片、灰釉陶器片、不明鉄製品	柱穴a.9世紀後半以降	
1605	T8b4	N-0°	楕円方形	0.85×0.85	30	外傾 平坦	人為	土師器片、縄	柱穴a.11世紀以前	
1606	T8b4	N-40°-W	円形	1.00×0.85	55	直立 平坦	人為	土師器片、須恵器片	柱穴c.9世紀以降	
1614	T7e8	N-0°	楕円長方形	1.60×1.20	25	外傾 皿状	人為	土師器片、須恵器片	柱穴a.8-9世紀	
1615	T7b8	N-30°-W	楕円形	0.90×0.70	20	外傾 平坦	人為	土師器片、須恵器片	8-9世紀	



### 3 中世の遺構と遺物

#### (1) 掘立柱建物跡

今回の調査で、掘立柱建物跡3棟を確認した。以下、その概要について記述する。

#### 第148号掘立柱建物跡 (第390図)

位置 調査区中央部のS7j0区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1551・1552号住居跡と第162号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と構造 桁行2間、梁間1間の側柱式建物跡で、桁行方向をN-17°-Wとする南北棟である。規模は桁行2.9m、梁間は北側で1.8m、南側で1.5mである。柱間寸法は1.1m、1.5m、1.8mを基調としている。

柱穴 径が32~41cmほどの円形を呈しており、深さは14~52cmである。第1~3層が埋土、第4層が抜き取り痕に相当する

土層解説 (各柱穴共通)

1 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量

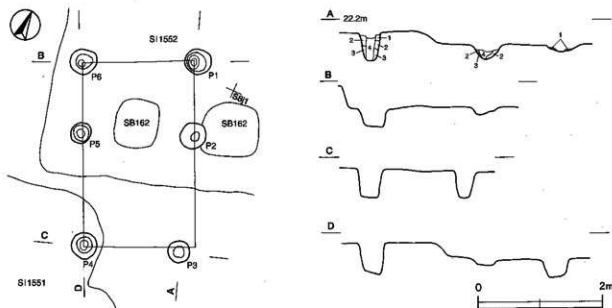
2 暗褐色 ローム粒子少量

3 黒褐色 ローム粒子少量

4 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 出土していない。

所見 第1551・1552号住居跡を掘り込んでおり、各ピットの平面形が円形で、当遺跡で見られる古代のものより規模が小さいことから、中世と考えられる。



第390図 第148号掘立柱建物跡実測図

#### 第161号掘立柱建物跡 (第391図)

位置 調査区中央部のS7i8区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 第151号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と構造 桁行3間、梁間2間の側柱式建物跡で、桁行方向をN-24°-Wとする南北棟である。規模は桁行4.5mで、柱間寸法は1.5mを基調としている。梁間は北側3.86m、南側3.74mで、南側と北側に若干の差がある。

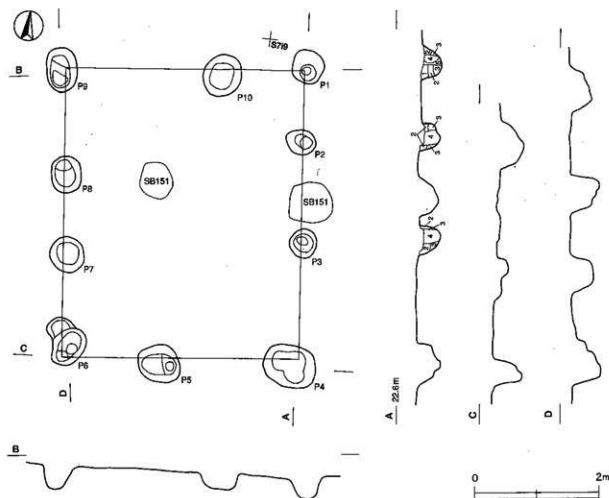
柱穴 平面形は円形を呈し、長径48～86cm、短径44～70cm、深さ28～48cmである。柱のあたりはP1～P3、P5、P6、P8で確認されている。第1～3層が埴土、第4・5層が抜き取り痕に相当する。

土層解説 (各柱穴共通)

- |                 |                 |
|-----------------|-----------------|
| 1 褐色 ローム粒子中量    | 4 黒褐色 ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量   | 5 褐色 ロームブロック少量  |
| 3 暗褐色 ロームブロック微量 |                 |

遺物出土状況 出土していない。

所見 第151号掘立柱建物跡の柱穴と重複しているP4は本来の形状把握が困難であるが、その他の柱穴は古代のものと比較して規模が小さい。また、平安時代の建物跡を掘り込んでおり、時期は中世と考えられる。



第391図 第161号掘立柱建物跡実測図

#### 第163号掘立柱建物跡 (第392図)

位置 調査区中央部のS8i2区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 第169号掘立柱建物跡を掘り込み、第1530・1532号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間、梁間2間の側柱式建物跡で、桁行方向をN-4°-Wとする南北棟である。規模は桁行5.0m、梁間は北側が3.4mで、柱間寸法は1.67mを基調としている。東側柱穴のP3が北側にずれているため、P2とP3の柱間寸法が1.11m、P3とP4の柱間寸法が2.21mになっている。

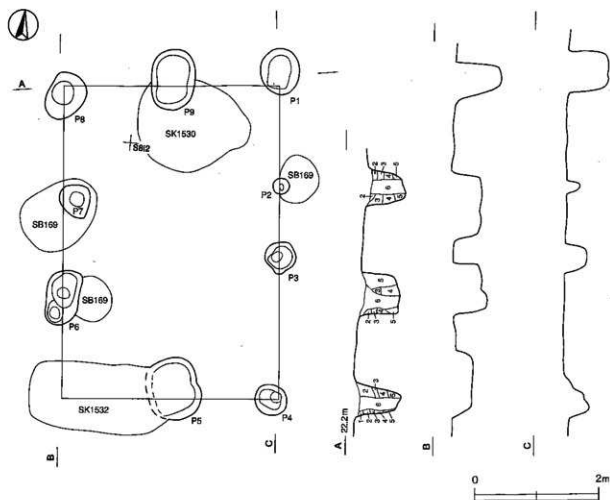
柱穴 径が20～50cmの円形を呈しており、深さは20～71cmである。P1とP7～P9は第169号掘立柱建物跡のP1及びP6～P8と重複している。第1～5層が埋土、第6層が抜き取り痕に相当する。

土層解説 (各柱穴共通)

- |                |                 |
|----------------|-----------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量  | 4 灰褐色 ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子微量  | 5 灰褐色 ロームブロック微量 |
| 3 褐色 ロームブロック少量 | 6 黒褐色 ロームブロック少量 |

遺物出土状況 出土していない。

所見 P1やP8, P9は古代の掘立柱建物の柱穴跡と重複しており、本来の形状把握が困難である。P2～P4は平面形が円形を呈し、規模も小さいことから、中世に機能していた可能性が高い。



第392図 第163号掘立柱建物跡実測図

表9 中世の掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	桁×梁 (間)	規模 (m)	面積 (㎡)	桁行柱間 (m)	梁間柱間 (m)	柱穴 (cm)			出土遺物	備考 (時期)	
								構造	柱穴	平面形			深さ
148	S710	N-17°-W	2×1	2.9×1.8	5.2	1.1, 1.8	1.5, 1.8	簀柱	6	円形	14-52	-	
161	S718	N-24°-W	3×2	4.5×1.5	6.8	1.5	3.74, 3.96	懸柱	10	円形	28-48	-	
163	S812	N-4°-W	3×2	5.0×3.4	17.0	1.67	1.7	懸柱	9	円形	20-71	-	

## (2) 堀跡

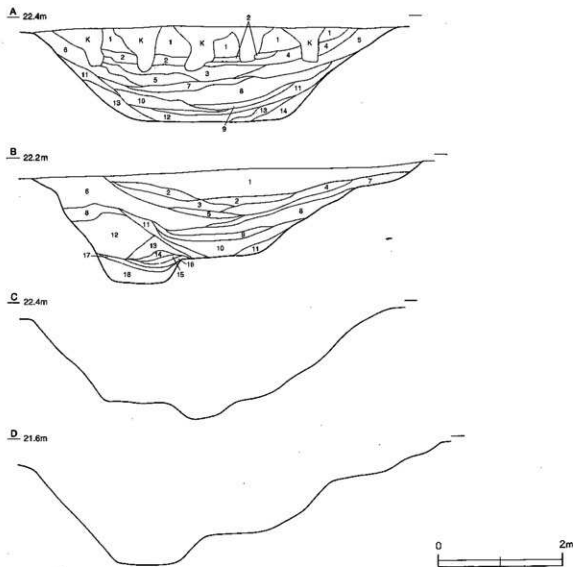
調査区中央部の南側にL字状に廻る堀跡を確認した。堀跡は南と東の調査区域外の谷部に向かって延びているため、全容は不明である。出土遺物も少なく、明確な性格・時期を特定することができない。以下、その概要について記述する。

### 第91号堀跡（第393・394図，付図）

位置 調査区中央部のT 6 g0～T 8 g5区に位置し，台地縁辺部の緩斜面に立地している。

重複関係 第1532・1534・1661・1629・1630・1637号住居跡と第154・156・174・175・176・180・182号掘立柱建物跡，第1603・1604号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 東から西へ延び，直角に折れて南へ延びている。堀跡はコーナー部から南側と東側が調査区域外に延びているため，南北の長さは外辺13.2m・内辺9.2m，東西長さは外辺62.8m・内辺58.0mだけが確認された。南北の方向は $N-8^{\circ}-E$ で，東西の方向は $N-95^{\circ}-E$ である。上幅は3.5～6.4m，下幅は1～2mで，断面形状は箱築を呈している。東西側の中央部は上幅が広く，底面には段差を有しており，土層断面からも掘



第393図 第91号堀跡実測図

り返しが行われたと推定される。また、底面は南北軸では南に、東西軸では東に向かって低くなっており、比高は南北軸で最大1.3m、東西軸で0.1mほどである。

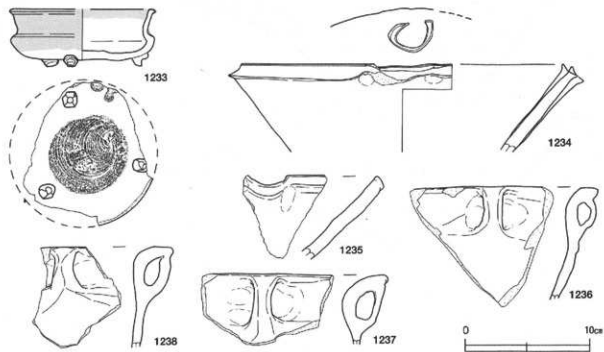
**覆土** 両壁外から交互に流れ込み、堆積方向が変わる堀特有の堆積状態で、レンズ状を示した自然堆積である。第12・14・15層には堆積後に掘られた痕跡があり、掘り返しが行われたものと考えられる。

**土層解説 (A・B共通)**

1 暗褐色	ロームブロック中量	10 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック・炭化粒子微量	11 褐色	ロームブロック多量、ローム粒子中量
3 黒褐色	ロームブロック・炭化物少量	12 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック少量	13 細暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量
5 褐色	ロームブロック多量	14 細暗褐色	ロームブロック少量、粘土ブロック微量
6 極暗褐色	ロームブロック少量	15 暗褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量
7 極暗褐色	ロームブロック・炭化物少量	16 黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量
8 褐色	ロームブロック多量、ローム粒子少量	17 暗褐色	ロームブロック多量
9 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	18 細暗褐色	ロームブロック中量、炭化材微量

**遺物出土状況** 土師器片637点(坏180, 甕457), 須恵器片218点(坏70, 蓋13, 盤5, 高盤1, 瓶2, 甕127), 陶磁器片13点(香炉1, 片口鉢2, 常滑片10), 土師質土器片6点(内耳鍋5, 壺1)が出土している。遺物は全体的に覆土中層から下層にかけて出土している。1233と1234はコーナー部東側の覆土下層, 1235~1238はコーナー部東側の覆土中から出土している。

**所見** コーナー部が1か所だけ確認され、東側と南側が調査区域外に延びており、全体を把握することができない。東西堀の底面幅は最大で2mあるが、二分するように約1mの幅で東西方向に2条の掘り込みがあり、底面に段を有している。土層断面から南側の掘り返しが行われた後に、再度北側の掘り返しが行われたと考えられる。また、コーナー部の土層断面からもU字状に掘り返しの痕が見られ、数度にわたる掘り返しが行われた可能性がある。廃絶時期は出土陶器(古瀬戸・後Ⅲ期, 常滑・6b型式, 10型式カ)から15世紀後半ごろと考えられる。



第394図 第91号掘跡出土遺物実測図

第91号掘跡遺物観察表 (第394図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎上	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1233	古瀬戸	香炉	[112]	4.5	-	織帯	灰白	普通	門縁部輪郭毛起り、底縁未切り、足部貼付	コーナー部下層	30%、後日期 PL67
1234	常滑	片口鉢	[257]	(7.0)	-	長石・石英・小礫	にぶい赤褐色	普通	体部内・外縁ヘラナデ、通部は断面丁字状	コーナー部下層	10%、10層式
1235	常滑	片口鉢	-	6.7	-	長石・石英	灰褐色	普通	体部内・外縁ヘラナデ、輪縁み底	コーナー部最上層	6h型式*
1236	土師黄土器	内耳鍋	-	(9.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	体部内・外縁ヘラナデ、指痕痕	コーナー部最上層	外縁縁付着
1237	土師黄土器	内耳鍋	-	(3.7)	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	体部内・外縁ヘラナデ、指痕痕	コーナー部最上層	外縁縁付着
1238	土師黄土器	内耳鍋	-	(8.0)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	体部内・外縁ヘラナデ、指痕痕	コーナー部最上層	外縁縁付着

(3) 方形竪穴遺構

今回の調査で、方形竪穴遺構4基を確認した。これまでの調査で確認された方形竪穴遺構は、中世の火葬施設や墓域群を囲むように位置しており、骨粉や白濁が出土している例もある。今回の調査でも、墓域と考えられる墓域群が7か所確認されており、その周辺に位置していることから葬送に関わる遺構と考えられる。以下、その概要について記述する。

第25号方形竪穴遺構 (SK-1545) (第395図)

位置 調査区中央部のT7a4区に位置し、台地上の平坦面に立地している。

重複関係 第1609号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸2.4m、短軸2.1mの長方形で、主軸方向はN-67°-Wである。壁高は18~22cmで、外傾して立ち上がっている。

床 は平坦である。北西コーナー部は若干張り出しており、スロープ状に立ち上がっている。

ピット 1か所。平面形は径40cmほどの円形を呈し、

深さは18cmである。

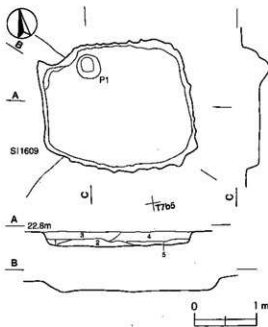
覆土 5層からなり、ブロック状に堆積した人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 極暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック・炭化穀子少R、焼上ブロック散在
- 4 褐色 ロームブロック中量
- 5 褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 出土していない

所見 壁にはV字状の工具痕があり、鋤のようなもので掘られたものと考えられる。また、北西コーナー部の床面は壁外から緩やかに傾斜して連結しており、スロープ状の出入り口施設の可能性はある。時期は、遺構の形状から中世と考えられる。



第395図 第25号方形竪穴遺構実測図

第26号方形竪穴遺構 (SI-1616) (第396図)

位置 調査区南部のS6h5区に位置し、台地から低地へ下りる斜面部に立地している。

規模と形状 長軸2.6m、短軸2.0mの長方形で、主軸方向はN-1°-Eである。壁高は12~32cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。ローム土が貼られ、南部壁際から中央部にかけて踏み固められている。

ピット 6か所。P1~P4の深さは44~86cmで、配列から柱穴と考えられる。P5の深さは42cmで柱穴の可能性もあるが、性格は不明である。P6は深さ20cmで、性格は不明である。覆土からは多量の灰が検出されている。

P6土層解説

- 1 灰褐色 灰多量、ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 3 暗褐色 ロームブロック多量  
2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量

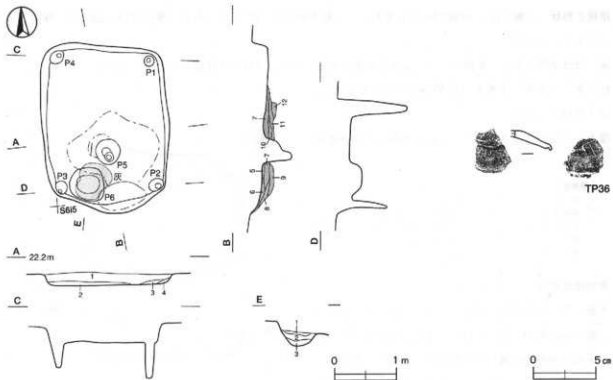
覆土 12層からなる。各層にロームブロックや焼土・炭化粒子が多く含まれていることから、人為堆積である。

土層解説

- |                             |                              |
|-----------------------------|------------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック多量             | 7 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量         |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量             | 8 極暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量    |
| 3 褐色 ロームブロック中量              | 9 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量   | 10 暗褐色 ロームブロック多量、焼土粒子少量      |
| 5 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック微量 | 11 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化物微量  |
| 6 褐色 ロームブロック多量              | 12 極暗褐色 ロームブロック少量            |

遺物出土状況 須恵器片1点(蓋)がP6内から出土している。

所見 土層断面にはローム土主体の褐色層に挟まれて、焼土粒子や炭化粒子を含む黒褐色の層が確認されていることから、数度にわたる床の張り替えが行われたと考えられる。時期は、遺構の形状から中世と考えられる。



第396図 第26号方形竪穴遺構・出土遺物実測図

第26号方形竪穴遺構出土物観察表 (第396図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP36	須臾器	壺	-	-	-	長石・石英・玄母	に濃い黒	普通	ロタリ成形、天井部回転へり削り	P6内	内面緑刷

第27号方形竪穴遺構 (SI-1675) (第397図)

**位置** 調査区南部のU7j8区に位置し、台地から低地に下りる斜面部に立地している。

**規模と形状** 長軸2.0m、短軸1.6mの隅丸長方形で、主軸方向は $N-14^{\circ}-E$ である。壁高は8~22cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** ほほ平坦である。北東コーナー付近から焼土及び炭化粒子の広がりが検出されている。

**ピット** 1か所。北壁際の中央部に位置し、平面形は径16cmほどの円形を呈している。深さは56cmである。

**覆土** 4層からなり、ブロック状に堆積した人為

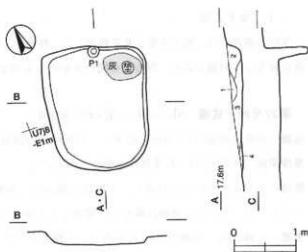
堆積である。

**土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 3 黒暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量

**遺物出土状況** 出土していない。

**所見** 北東コーナー部から焼土及び炭化粒子の広がりが検出されているが、煮炊きした痕跡は認められていない。時期は、遺構の形状から中世と考えられる。



第397図 第27号方形竪穴遺構実測図

第28号方形竪穴遺構 (SK-1598) (第398図)

**位置** 調査区南部のV8a3区に位置し、台地から低地に下りる斜面部に立地している。

**規模と形状** 南に傾斜しているため、南部壁の立ち上がりが確認できない。ローム土よりやや黒い暗褐色の範囲から長軸2.4m、短軸2.2mの方形と推測され、主軸方向は $N-10^{\circ}-E$ である。壁高は6~8cmで、外傾して立ち上がっている。

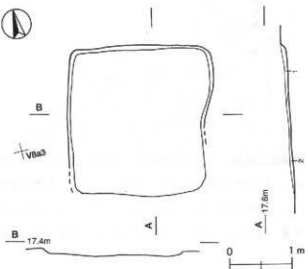
**床** ほほ平坦である。

**覆土** 2層からなる。ロームブロックが含まれていることから人為堆積である。

**土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量

**遺物出土状況** 出土していない。



第398図 第28号方形竪穴遺構実測図



所見 生活の痕跡は見られない。時期は、遺構の形状から中世と考えられる。

表10 方形竪穴遺構一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	深さ (cm)	壁面	底面	遺土	出土遺物	備考
25	T 7a4	N-67°-W	長方形	2.4×2.1	15-22	外傾	平坦	人為		
26	S 6h5	N-1°-E	長方形	2.6×2.0	12-32	外傾	平坦	人為	須恵器片(蓋)	
27	U 7j8	N-14°-E	隅丸長方形	2.0×1.6	8-22	外傾	平坦	人為		
28	V 8a3	N-10°-E	方形	2.4×2.2	6-8	外傾	平坦	人為		

#### (4) 地下式竪

今回の調査では、地下式竪3基を確認した。性格を示す遺物の出土がないが、方形竪穴遺構と隣接しており、確証数もほぼ同数であり、何らかの関わりがあるものと推測される。以下、その概要について記述する。

#### 第27号地下式竪 (SK-1544) (第399・400図)

位置 調査区南部のT 7 19区に位置し、台地縁辺の斜面部に立地している。

重複関係 第170号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

竪坑 主室南壁の中央に位置し、上面は長軸2.0m、短軸1.7mほどの隅丸長方形である。壁高は1.2mで外傾して立ち上がっている。底面は緩やかに傾斜して主室に至っている。

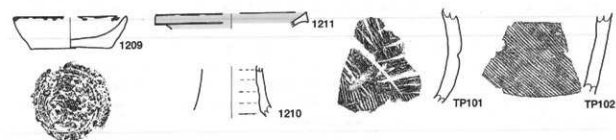
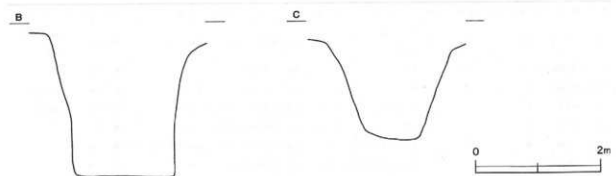
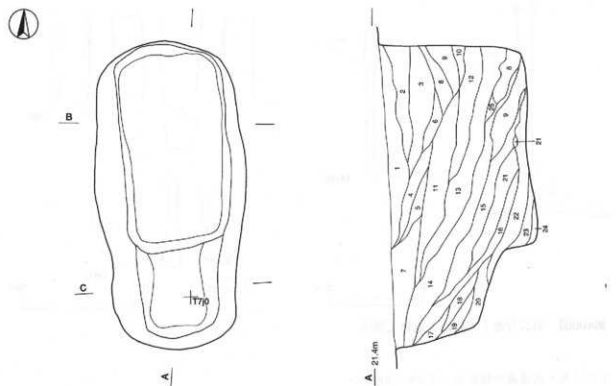
主室 長軸3.3m、短軸2.4mの長方形で、主軸方向はN-3°-Wである。天井部は遺存していない。壁はほぼ直立し、壁高は2.4mである。底面は平坦である。

覆土 2層からなる。レンズ状に堆積した自然堆積である。第6・8層はローム土を多く含む褐色土であることから、天井部の崩落土と考えられる。

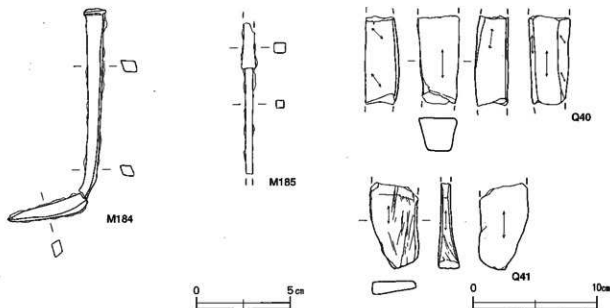
#### 土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	14 暗褐色	ロームブロック微量
2 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	15 暗褐色	ロームブロック少量
3 暗褐色	ロームブロック微量	16 黒褐色	ロームブロック微量
4 暗褐色	ロームブロック少量	17 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック中量	18 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
6 褐色	ロームブロック中量	19 暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
7 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	20 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
8 褐色	ロームブロック多量	21 暗褐色	ロームブロック中量
9 褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量	22 暗褐色	焼土粒子中量、ロームブロック少量
10 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量	23 暗褐色	焼土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
11 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	24 暗褐色	焼土粒子少量、ロームブロック少量
12 黒褐色	ローム粒子微量	25 暗褐色	ローム粒中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
13 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量		

遺物出土状況 土師器片299点、須恵器片117点、灰釉陶器片2点、土師質土器1点(小皿)、鉄製品2点(釘、鏃)、砥石2点が出土しているが、ほとんどが埋没時に混入したものと考えられる。1210・T P 101～T P 105・Q 40は覆土上層、1209・1211・T P 106・M 184は覆土中層、Q 41・M 185は覆土下層から出土している。所見 時期は、中世の土器片が出土しており、第28号地下式竪と隣接していることから、15世紀後半頃と考えられる。



第399图 第27号地下式墓・出土遺物実測図



第400図 第27号地下式墳出土遺物実測図

第27号地下式墳遺物観察表 (第399・400図)

番号	種別	器種	口径	器高	直径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
I209	土加賀七器	小皿	[ 9.0]	2.5	6.4	長石・雲母・赤色鉄子	にぶい橙	普通	体部内・外面ナデ, 底部糸切り	覆土中層	60%, 遺物番号 PL67
I210	灰輪陶器	長頸壺	-	( 4.0)	-	緻密	灰オリーブ	良好	ロクロ成形	覆土上層	
I211	灰輪陶器	長頸壺	[12.2]	( 1.2)	-	緻密	灰オリーブ	良好	ロクロ成形	覆土中層	横行転出
TP101	須恵器	壺	-	-	-	長石・石英	灰黄	普通	体部外面平行叩き, 内面ナデ	覆土上層	面西向き
TP102	須恵器	壺	-	-	-	緻密	灰黄濁	良好	体部外面平行叩き, 内面ナデ	覆土上層	
TP103	須恵器	壺	-	-	-	長石・石英・雲母	灰	普通	体部外面平行叩き, 内面同心円状の帯で片煮	覆土上層	
TP104	須恵器	壺	-	-	-	長石・石英・黒色鉄子	黄灰	良好	体部外面平行叩き, 内面ナデ	覆土上層	
TP105	須恵器	壺	-	-	-	長石・石英・黒色鉄子	灰	良好	体部外面平行叩き, 内面ナデ	覆土上層	内面縦組
TP106	土師器	鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部下端へラ磨り	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質・胎土	特徴	出土位置	備考
Q40	磁石	( 7.1)	( 3.3)	( 2.6)	(04.9)	安山岩	断面方形, 底面は上下2面, 側面にも使用痕	覆土上層	PL77
Q41	磁石	( 6.8)	4.0	1.7	(40.6)	凝灰岩	断面3面, 中央部は凹状に磨耗	覆土下層	PL77
M184	釘	11.35	1.15	0.65	29.4	鉄	断面方形, 断面段打ち, 先から3分の1で屈曲	覆土中層	PL81
M185	釘	( 8.1)	( 0.7)	0.7	(8.10)	鉄	断面方形, 先端から基部, 磨有り	覆土下層	PL80

第28号地下式墳 (SK-1560) (第401図)

位置 調査区南部のU7b0区に位置し, 台地縁辺の斜面部に立地している。

壘坑 主室南壁のやや西側に位置し, 上面は長軸1.70m, 短軸1.42mほどの隅丸長方形である。壁高は0.38mで外傾して立ち上がっている。底面は緩やかに傾斜して主室に至っている。

主室 長軸3.1m, 短軸1.6mの長方形で, 主軸方向はN-3°-Eである。天井部は遺存していない。壁はほぼ直立し, 壁高は1.0mである。底面は平坦である。

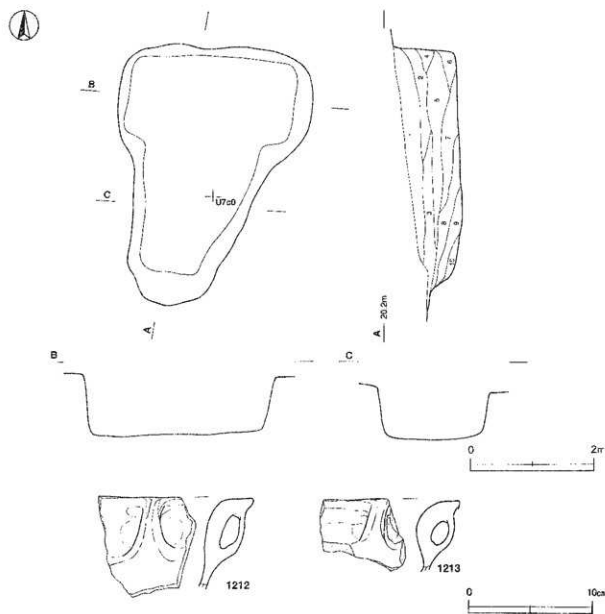
覆土 10層からなる。レンズ状に堆積した自然堆積である。第5・7層はローム土を多く含む褐色土であることから、天井部の崩落土と考えらえる。

土層解説

- |       |                        |        |                    |
|-------|------------------------|--------|--------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒少量   | 7 暗褐色  | ロームブロック中量、焼土ブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量                | 8 暗褐色  | ロームブロック少量          |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量         | 9 暗褐色  | ロームブロック微量          |
| 4 褐色  | ロームブロック多量              | 10 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒少量    |
| 5 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土ブロック微量       |        |                    |
| 6 褐色  | ロームブロック多量、炭化物・焼土ブロック微量 |        |                    |

遺物出土状況 土師器片243点、須恵器片12点、土師質上器片14点が出土しているが、ほとんどが混入したものと考えられる。1212・1213は覆土上層から出土している。

所見 北側に位置する第91号堀跡と同時間と考えられる遺物が出土していることから、時期は15世紀後半頃と考えられる。



第401図 第28号地下式塙・出土遺物実測図

第28号地下式横物観察表 (第401図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1212	土師黄土器	内耳罎	-	(8.1)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	内部内・外面ナデ	覆土上層	外面保付着
1213	土師黄土器	内耳罎	-	(5.7)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	内部内・外面ナデ	覆土上層	外面保付着

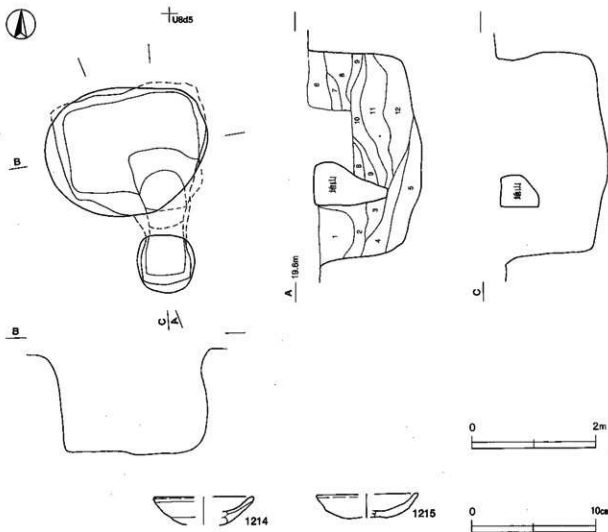
第29号地下式横 (SK-1562) (第402図)

位置 調査区南部のU8d4区に位置し、台地縁辺の斜面部に立地している。

竪坑 主室南壁の東側に位置し、上面は一辺が0.9mほどの方形である。壁高は1.3mでほぼ直立している。底面は緩やかに傾斜して主室に至っている。

主室 長軸2.6m、短軸1.9mの長方形で、主軸方向はN-11°-Wである。天井部は遺存していない。壁はほぼ直立し、壁高は1.6mである。底面は平坦である。

覆土 12層からなる。第10~12層はロームブロックを含まない第9層の下位にあり、ローム土を多く含む褐色土であることから、天井部の崩落土と考えられる。また、天井部が崩落した後に第9層が自然堆積し、その後、ロームブロックを多量に含んだ第1~8層が人為堆積したと考えられる。



第402図 第29号地下式横・出土遺物実測図

## 土層解説

1	暗褐色	ローム中ブロック多量	7	褐色	ローム大ブロック少量
2	黒褐色	ローム小ブロック多量	8	褐色	ローム粒子多量
3	暗褐色	ローム小ブロック多量	9	暗褐色	ローム粒子微量
4	暗褐色	ローム小ブロック多量	10	褐色	ローム大ブロック多量
5	暗褐色	ローム中ブロック多量	11	褐色	ローム中ブロック多量
6	暗褐色	ローム小ブロック微量	12	褐色	ローム大ブロック多量

遺物出土状況 土師器片70点, 須恵器片21点, 土師質土器片7点が出土しているが, ほとんどが混入したものと考えられる。1214・1215は覆土中から出土している。また, 覆土中から骨粉が検出されている。

所見 時期は, 第27・28号地下式墳に隣接していることや出土土器から15世紀後半頃と考えられる。

第29号地下式墳遺物観察表 (第402図)

番号	種類	器種	口径	器底	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1214	土師質土器	小皿	[ 80 ]	( 22 )	-	黄母・赤色粒子	橙	普通	内・外面ナデ, 輪挽み痕	覆土中	35%
1215	土師質土器	小皿	[ 40 ]	( 19 )	-	黄母・赤色粒子	橙	普通	内・外面ナデ	覆土中	30%

表11 地下式墳一覽表

番号	位置	方向	規模 (m)						覆土	底面	出土遺物	備考
			壙			室						
			長軸×短軸	深さ	平面形	長軸×短軸	深さ	平面形				
27	T 719	N-3°-W	2.0×1.7	1.2	隅丸長方形	3.3×2.4	2.4	長方形	自然	平坦	瓦輪器片(須恵器), 土師質土器(小皿)	
28	U 7 b0	N-3°-E	1.4×1.7	0.38	隅丸長方形	3.1×1.6	1.0	長方形	自然	平坦	土師質土器(内耳環)	
29	U 8 d4	N-11°-W	0.9	1.3	方形	2.6×1.9	1.6	長方形	人為	平坦	土師質土器(小皿)	

## (5) 井戸跡

今回の調査で, 井戸跡 2基を確認した。奈良・平安時代の住居跡を掘り込んでいることから, 中世以降と考えられる。以下, その概要について記述する。

## 第36号井戸跡 (SK-1472) (第403図)

位置 調査区中央部の R 7 g0区に位置し, 平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1569号住居跡と第138号担立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径2.2m, 短径1.8mほどの楕円形で, 長径方向はN-57°-Eである。深さは2.2m以上あり, 円筒状にローム層を掘り抜き, 粘土層まで掘り込んでいることが確認された。

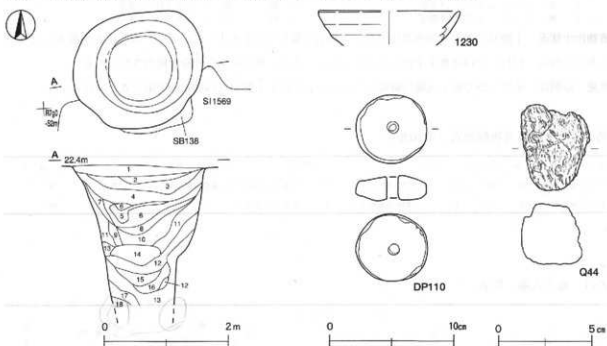
覆土 18層からなる。ロームブロック・粘土ブロックを多く含む層があることから, 人為地積である。

## 土層解説

1	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子微量	10	暗褐色	ロームブロック中量, 粘土ブロック少量
2	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	11	暗褐色	ローム粒子少量, 粘土ブロック微量
3	褐色	ロームブロック中量, 粘土ブロック微量	12	褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子少量
4	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子微量	13	褐色	ロームブロック少量
5	褐色	ロームブロック中量	14	にぶい黄褐色	粘土粒子多量
6	黒褐色	ローム粒子微量	15	暗褐色	ロームブロック中量, 焼土粒子微量
7	黒褐色	粘土ブロック少量	16	暗褐色	ロームブロック中量, 焼土粒子微量
8	黒褐色	ローム粒子中量, 粘土ブロック微量	17	暗褐色	ロームブロック少量, 粘土粒子微量
9	にぶい黄褐色	粘土ブロック中量	18	暗褐色	ロームブロック多量, 粘土粒子微量

遺物出土状況 土師器片65点, 須恵器片26点, 陶器片1点(常滑), 鉄滓2点, 土師質土器片1点, 土製紡錘車1点, 浮子カ1点が出土している。DP110は下層部の覆土中から出土している。

所見 時期は, 形状と土師質土器(小皿)が出土していることから中世と考えられる。



第403図 第36号井戸跡・出土遺物実測図

第36号井戸跡遺物観察表(第403図)

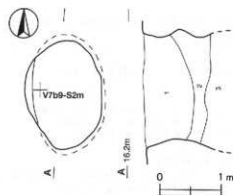
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1230	土師質土器	皿	[11.2]	(2.7)	-	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	内・外面ナデ	覆土中	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質・胎土	特徴	出土位置	備考
DP10	紡錘車	5.4	5.6	2.0	64.9	長石・石英・雲母	孔径0.9cm	覆土中	PL74
Q44	浮子カ	(4.5)	(3.6)	(0.34)	(9.70)	軽石	形状不明, 側面薄減	覆土中	

第37号井戸跡(SK-1557)(第404図)

位置 南部のV7b9区に位置し, 平坦な台地上に立地している。



第404図 第37号井戸跡実測図

重複関係 第1650号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.7m, 短径1.2mほどの楕円形で, 長径方向はN-0°である。深さは1.2m以上であり, 円筒状に掘り込まれている。

覆土 3層からなり, レンズ状に堆積した自然堆積である。第2・3層には水に含まれた鉄分が認められる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 灰褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 出土していない。

所見 周囲には、方形竪穴遺構や地下式竈が確認されており、本跡を含む墓域が形成されていたと想定される。時期は、同時期中世と考えられる。

表12 井戸跡一覧表

番 号	位 置	長 短 方 向	平 面 形	規 模		形 状	覆 土	出 土 遺 物	備 考
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(m)				
36	R 7 g0	N-57°-E	楕円形	2.2×1.8	2.2以上	円筒状	人馬	土師器片,須恵器片,常滑片,土師質土器片,土製陶埴片	
37	V 7 b0	N-0°	楕円形	1.7×1.2	1.2以上	円筒状	自然		

#### 4 その他の時代の遺構と遺物

##### (1) 道路跡

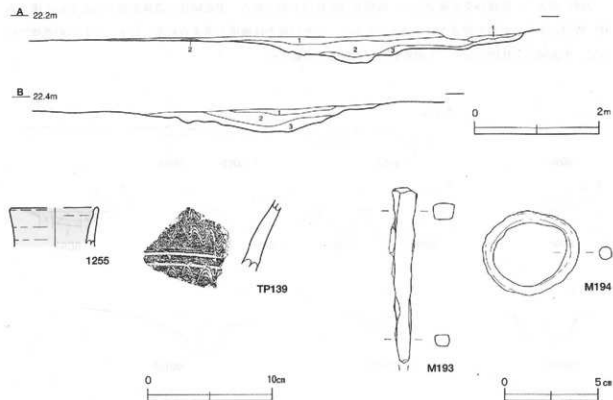
今回の調査で、道路跡1条を確認した。本跡の東に位置する神社に向かって延びており、数十年前まで使用されていたようである。以下、その概要について記述する。

##### 第11号道路跡 (第405図, 付図)

位置 調査区中央部のS 6 f4~S 6 g9区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 第1614号住居跡及び第96・98号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 東西方向(N-98°-E)に直線的に延びており、幅は5.0~1.6mで、長さ24mほどが確認されている。



第405図 第11号道路跡・出土遺物実測図



覆土 3層からなる。第2・3層はロームブロックを多く含む人為堆積で、第1層はロームブロックを含まないことから自然堆積である。硬化面は第1層下で確認されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、炭化物少量  
 2 黒褐色 ロームブロック多量、炭化物少量  
 3 黒褐色 ロームブロック多量

遺物出土状況 土師器片34点、須恵器片29点、灰釉陶器片1点、土師質土器片3点、瓦片8点、鉄製品2点(釘、不明)が出土している。1255・TP139は中央部の覆土中から、M193・M194は西部の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 土層断面から人為的に構築された様子がうかがえる。覆土中から遺物が出土しているが、古墳時代から現代までのものが出土しており、時期は不明である。

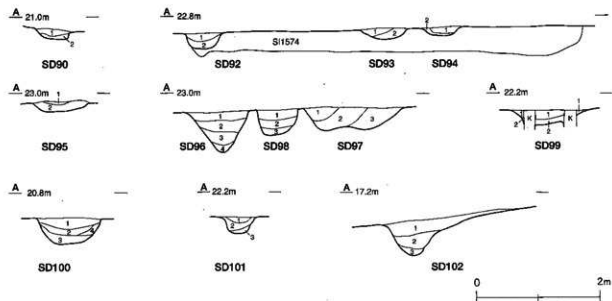
第11号道路跡出土遺物観察表(第405図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1255	須恵器	瓶	[6.9]	(3.2)	-	黒石・石灰・黒色粒子	灰	良好	口ロ鑿形	中央部覆土中	
TP139	須恵器	甕	-	-	-	長石・石英	黄灰	良好	各部外面沈澱2条、鑿掻き波状文2条	中央部覆土中	破断面率減

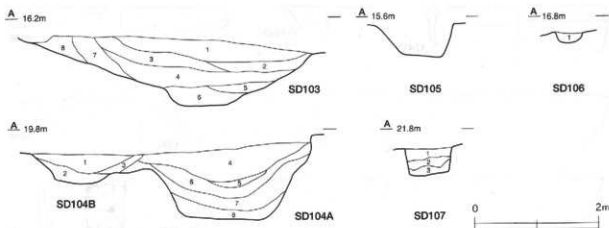
番号	器種	朝	口径	器高	底径	材質・胎土	特徴	出土位置	備考
M193	釘	(9.2)	1.4	1.0	(32.2)	鉄	断面長方形、先端部破損、頭部段行板	東部覆土中	PL81
M194	不明	3.2	4.5	0.7	17.9	鉄	断面円形、リング状	東部覆土中	PL83

(2) 溝跡(第406~409図, 付図)

今回の調査で、溝跡18条を確認した。時期及び性格は不明である。平安時代の遺構を掘り込んでいる溝もあり、周辺に中世の遺構が確認されていることから、中世以降の区画溝と考えられる。以下、これらの遺構について、平面図は全体図に示し、土層断面図と一覧表を掲載する。



第406図 第90・92~102号溝跡実測図



第407図 第103・104(A・B)・105~107号溝跡実測図

第90号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

第92号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量

第93号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量

第94号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

第95号溝跡土層解説

- 1 黒色 炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・炭化物微量

第96号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 褐色 ロームブロック中量

第97号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ロームブロック多量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量

第98号溝跡土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子少量
- 2 極暗褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子微量

第99号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

第100号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 極暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量

第101号溝跡土層解説

- 1 褐色 ロームブロック多量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量

第102号溝跡土層解説

- 1 極暗褐色 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量
- 2 極暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

第103号溝跡土層解説

- 1 黒色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 2 黒色 焼土ブロック・ローム粒子少量
- 3 黒色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量
- 4 極暗褐色 炭化物・焼土粒子微量
- 5 極暗褐色 粘土ブロック微量
- 6 極暗褐色 粘土ブロック中量
- 7 灰褐色 砂粒多量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 8 暗褐色 ロームブロック多量

第104A・B号溝跡土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 4 褐色 ロームブロック多量、焼土ブロック微量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 8 暗褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック少量

第106号溝跡土層解説

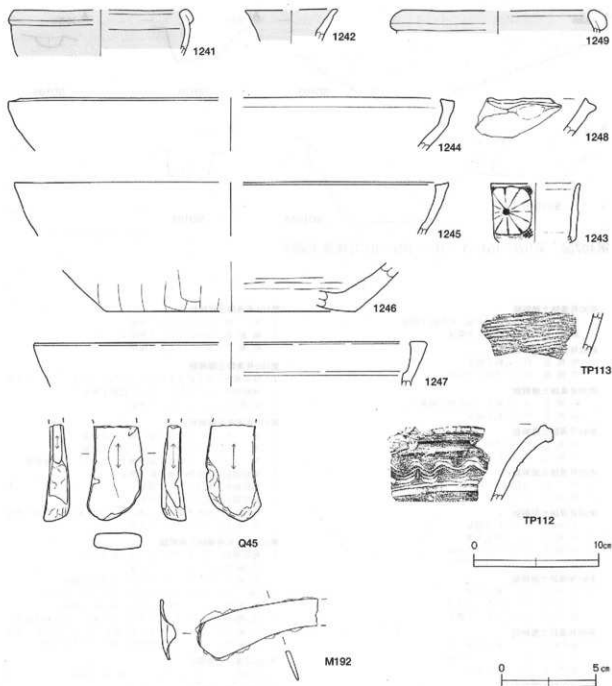
- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量

第107号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量



第408図 第90・92号溝跡出土遺物実測図



第409図 第92・93・96・97・101～104A号出土遺物実測図

第90号溝跡出土遺物観察表 (第408図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1231	陶器	丸碗	[5.6]	3.4	3.2	長石・石英	淡黄	良好	体部外面回転ヘラ削り、高台取り付付	覆土中	40%、磨く残跡
1232	磁器	箱形湯呑	[6.6]	5.0	3.2	緻密	灰白	良好	帯花繋ぎ	覆土中	15%、磨痕あり

第92号溝跡出土遺物観察表 (第408・409図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1239	須恵器	長頸瓶	-	(5.6)	-	長石・石英・黒色灰子	灰黄褐色	良好	体部内・外面ロクロナテ	覆土中	外面自然蝕

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
T240	灰意器	高盤	-	(3.6)	-	長石・石英	灰	普通	脚部貼付。3孔を有す。ロクロナデ	覆土中	
TF112	灰意器	壺	-	-	-	長石・雲母	灰黄褐色	普通	口縁部外面に2枚の沈凹。流紋文2条	覆土中	

第93号溝跡出土遺物観察表 (第409図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TF113	灰意器	壺	-	-	-	長石・石英	灰	普通	体部外面縦位の平行縞	覆土中	

第96号溝跡出土遺物観察表 (第409図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
T241	陶器	鉢	[13.8]	(3.7)	-	磁器	浅黄	良好	口縁端部折返し	覆土中	10%、瀬戸・美濃系

第97号溝跡出土遺物観察表 (第409図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
T242	灰胎陶器	瓶	[7.4]	(2.6)	-	長石・石英	灰	普通	ロクロナデ	覆土中	

第101号溝跡出土遺物観察表 (第409図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
T243	磁器	納形湯呑	[7.0]	(4.7)	-	磁器	灰白	良好	菊花繫ぎ	覆土中	30%、瀬戸・美濃系

第102号溝跡出土遺物観察表 (第409図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
T244	上野質土器	鍋	[33.6]	(4.2)	-	長石・石英・雲母	褐	普通	体部内・外面ナデ	覆土中	

第103号溝跡出土遺物観察表 (第409図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
T245	土野質土器	鍋	[26.6]	(4.2)	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	体部内・外面ナデ	覆土中	
T246	陶器	壺	-	(4.0)	[20.0]	長石・石英・小礫	灰黄褐色	普通	体部内・外面ヘラナデ	覆土中	常陸系

番号	器種	幅	高さ	口径	底径	材質	特徴		出土位置	備考
Q45	灰打	(7.7)	4.3	1.3	(77.6)	安山岩	断面長方形、縦断面4角		覆土中	PL77
M192	鉢	(6.4)	3.1	0.25	(14.9)	鉄	断面三角形、先端部欠損。左利き用		覆土中	PL81

第104A号溝跡出土遺物観察表 (第409図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
T247	上野質土器	鍋	[31.0]	(3.5)	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	体部内・外面ナデ	覆土中	
T248	陶器	片口鉢	-	(3.1)	-	長石・石英・小礫	褐	普通	体部内・外面ナデ	覆土中	常陸系
T249	陶器	鉢	[14.5]	(1.8)	-	磁器	灰白	良好	口縁端部折返し	覆土中	瀬戸・美濃系

表13 溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模 (m)				開口	断面	覆土	出土遺物	備考
				長さ	上幅	下幅	深さ(cm)					
90	R 8g6-S 8c9	N-10°-W	直線状	(27.0)	0.56-0.92	0.40-0.60	10-13	外傾	蓋状	自然	陶器片(瓦類), 須器片(蓋形陶片)	
92	S 6d9-S 7d9	N-89°-W	直線状	(43.5)	0.23-0.89	0.11-0.67	8-38	外傾	U字状	自然	須器器片(瓦類), 高段, 壺)	
93	S 7d3-S 7d8	N-85°-E	直線状	(18.4)	0.60-0.81	0.24-0.52	19	外傾	蓋状	自然	須器器片(壺)	
94	S 7d1-S 7d5	N-82°-E	直線状	(18.3)	0.52-1.36	0.30-0.80	14	外傾	蓋状	自然		
95	R 7i3-S 7c3	N-0°	直線状	16.8	0.61-0.78	0.28-0.44	15	外傾	蓋状	自然		
96	S 6b7-S 6b8	N-10°-W	直線状	(13.6)	0.58-0.84	0.18-0.58	68	外傾	V字状	自然	陶器片(鉢)	
97	S 6a8-S 6b8	N-10°-W	直線状	(18.4)	0.46-0.64	0.06-0.22	32-38	外傾	逆台形	自然	灰釉陶器片(壺)	
98	S 6b7-S 6b8	N-10°-W	直線状	(14.0)	0.73-1.48	0.28-0.84	42	外傾	U字状	自然		
99	T 6h8-T 6h9	N-78°-W	直線状	(5.5)	1.04-1.25	0.20-0.43	22	外傾	蓋状	自然		
100	T 8h6-T 8h8	-	蓋状	(8.8)	0.80-1.12	0.40-0.76	40	外傾	蓋状	自然		
101	T 6b3-T 6d6	F-3°-E, Y-Y°-Y°	L字状	(10.8, 6.3)	0.52-0.81	0.26-0.28	52-72	外傾	逆台形	自然	須器片(箱形湯炊)	
102	V 8a1-V 8c4	N-77°-W	直線状	(13.8)	2.40-4.00	0.22-0.40	56	外傾	U字状	自然	土師質土器片(壺)	
103	V 7b4-V 7d9	N-72°-W	直線状	(28.8, 4.0)	1.22-2.40	0.58-1.00	99	外傾	逆台形	自然	土師質土器片(壺), 陶器片(壺)	
104A	U 7h0-U 8c5	S-W, E, F-F°-F°	L字状	(18.6, 34.0)	4.20-2.40	1.28-1.20	96-116	外傾	逆台形	自然	土師質土器片, 陶器片(鉢)	
104B	U 8c2-U 8d5	N-83°-W	直線状	(13.0)	1.50-0.98	0.40-0.78	46	外傾	蓋状	自然		
105	V 7c4-V 7h1	N-71°-W	直線状	(44.2)	0.50-0.75	0.30-0.52	48	外傾	逆台形	-		
106	V 7a5-V 7a6	N-79°-W	直線状	(5.3)	0.44-0.50	0.12-0.15	15	外傾	蓋状	自然		
107	T 7h8-T 7h9	N-85°-W	直線状	(7.2)	0.60-0.78	0.45-0.63	44	外傾	逆台形	自然		

### (3) 土坑

今回の調査で、土坑146基が確認された。中には井戸や方形堅穴遺構、地下式塚と隣接する位置に、平面形を円形もしくは長・方形とする土坑が32基あり、骨粉・骨片が確認された。これまでの調査でも類似が報告されており、墓塚であると考えられる。これらは群をなしており、墓域が形成されていたと考えられる。時期判断は、出土遺物がなく不明である。今回の調査区域内では、北部で1か所、中央部で5か所、南部で1か所の計7か所で墓域が形成されていたものと想定される。以下、特徴的な土坑について記載する。

#### 第1597号土坑 (第410図)

位置 南部のV 7d0区に位置し、台地裾部の斜面部に立地している。

重複関係 第1664号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.4m, 短軸1.9mの長方形で、長軸方向はN-30°-Wである。湧水のため、完掘することができず、深さは不明である。

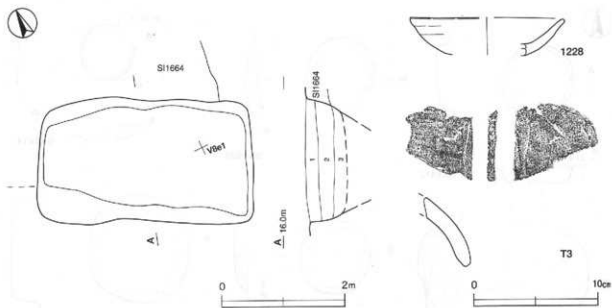
覆土 3層からなる。焼土・炭化粒子、粘土ブロックが含まれていることから人為堆積である。

##### 土層解説

- |       |               |       |                               |
|-------|---------------|-------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量       | 3 黒褐色 | 炭化粒子少量, 焼土ブロック・粘土ブロック・ローム粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子微量 |       |                               |

出土遺物 土師器片40点, 須器器片23点, 土師質土器1点(小皿), 瓦片1点が出土している。出土した土師器片と須器器片は混入したものである。1228とT 3は覆土中からの出土である。

所見 湧水のため完掘することができず全容は不明である。土師質土器が出土しており、第1664号住居跡を掘り込んでいることから中世ないしそれ以降と考えられ、規模から推測して地下式塚の可能性もある。



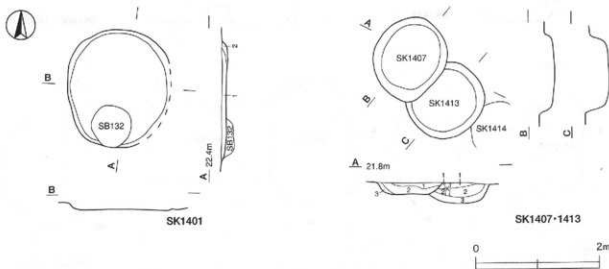
第410図 第1597号土坑・出土遺物実測図

第1597号土坑出土遺物観察表 (第410図)

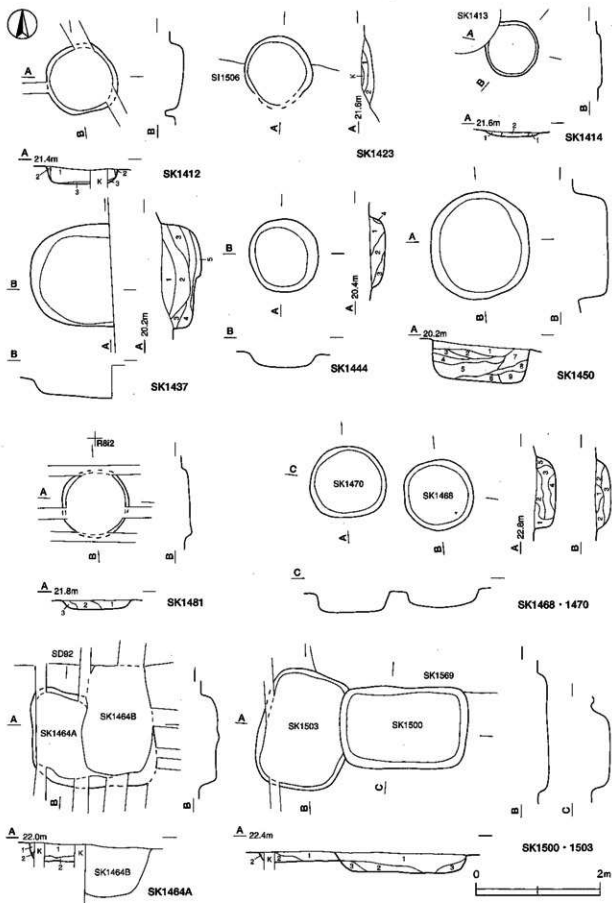
番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1228	土器質土器	小皿	12.2	3.0	-	長石・赤色砂子	黄褐色	普通	ナデ	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
T3	丸瓦	5.5	3.9	1.3	55.9	長石・石英・雲母	織やかに写曲する。凹・凸面ヘラナデ。扉部ヘラ倒り	覆土中	

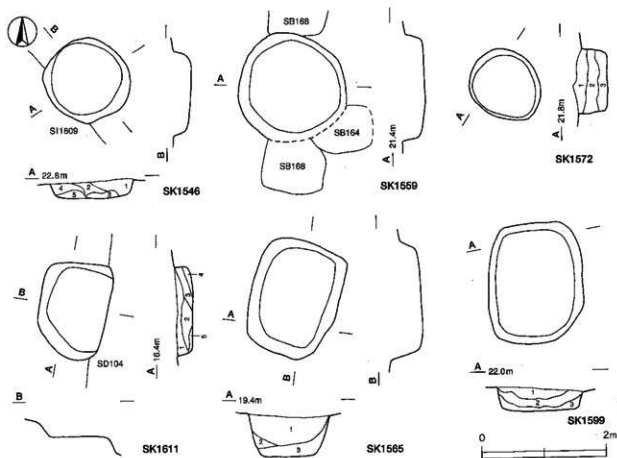
次に、墓塚と考えられる土坑について実測図と土層解説を掲載する。



第411図 第1401・1407・1413号土坑実測図



第412图 第1412·1414·1423·1437·1444·1450·1464A·1468·1470·1481·1500·1503号土坑实测图



第413図 第1546・1559・1565・1572・1599・1611号土坑実測図

第1401号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化物微量
- 2 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量

第1407号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック微量

第1412号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

第1413号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

第1414号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 極暗褐色 ロームブロック中量、炭化物少量

第1423号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・砂粒微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・砂粒微量

第1437号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック微量
- 5 暗褐色 ローム粒子微量

第1444号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック微量

第1450号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化物少量
- 2 極暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化物微量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化物微量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量、炭化物微量
- 5 黒褐色 ロームブロック多量、焼土ブロック微量
- 6 黒褐色 焼土ブロック・炭化物少量
- 7 黒褐色 ロームブロック多量、炭化物少量
- 8 黒褐色 ロームブロック中量、炭化物少量
- 9 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

第1464号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

第1468号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 極暗褐色 ロームブロック中量
- 3 極暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

第1470号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 褐色 ロームブロック多量
- 5 極暗褐色 ロームブロック少量



第1481号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
- 3 暗褐色 ロームブロック多量

第1500号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック多量、焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック多量、炭化物微量

第1503号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック多量、炭化物微量

第1546号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック・炭化物少量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量
- 5 極暗褐色 ロームブロック・炭化物少量

第1565号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量、粘土ブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 極暗褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック少量

第1572号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子、炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ロームブロック多量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量

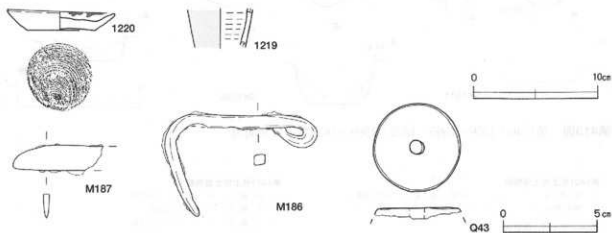
第1599号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック多量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック多量、焼土粒子微量

第1611号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック多量、焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・炭化物微量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

その他の土坑については遺物実測図と一覧表で記載し、平面図は全体図に示した。



第414図 第1513・1514・1524・1541・1552A号土坑出土遺物実測図

第1513号土坑出土遺物観察表 (第414図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1219	円縁陶器	長頸瓶	-	(3.2)	-	長石・石英	灰黄	良好	ロクロナデ	覆土中	装設産

第1514号土坑出土遺物観察表 (第414図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M186	金釦	8.3	5.4	0.6	21.2	鉄	形状はL字状、前面方形、端面扇状	覆土中	PL83

第1524号土坑出土遺物観察表 (第414図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1220	土師器土器	小皿	8.6	1.6	5.5	長石・石英・雲母	にがい赤褐色	普通	十字、底面回転糸切り	覆土中	98%焼成台器PL82

第1541号土坑出土遺物観察表 (第414図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M187	刀子	(4.8)	1.3	0.3	(6.40)	鉄	先端部、断面三角形	第七中	PL79

第1552A号土坑出土遺物観察表 (第414図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q43	紡錘車	4.6	4.6	(0.6)	(117)	粘板岩	円錐台形、孔径0.6cm	東麓部底面	PL76

表14 その他の時代の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形状	規模		壁面	底面	壁土	手法の特徴	備考
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
1400	P 8 j2	N-38°-W	[楕円形]	1.08×(0.58)	40	外傾	平坦	人為	土師器片、須恵器片	墓域
1401	P 7 i8	N-0°	[楕円形]	1.84×(1.62)	10	外傾	平坦	人為	土師器片、須恵器片	墓域
1402	Q 7 a3	N-1°-W	楕円形	0.44×0.38	20	外傾	平坦	人為	土師器片	
1403	P 7 i5	N-15°-E	楕円形	0.60×0.46	16	外傾	平坦	人為	土師器片	
1404	Q 7 b4	-	円形	0.58	30	外傾	平坦	人為	土師器片、須恵器片	
1405	Q 8 a2	-	円形	0.68	10	外傾	平坦	人為		墓域
1406	P 7 j7	-	円形	0.62	46	外傾	凹状	人為	土師器片、須恵器片	柱穴*
1407	P 8 j1	N-1°-E	楕円形	1.24×1.08	28	外傾	平坦	人為	土師器片、須恵器片	墓域
1408	Q 7 b0	-	円形	0.38	44	垂直	平坦	人為	土師器片	
1409	Q 7 b9	N-0°	楕円形	0.44×0.30	36	外傾	凸凹	人為	土師器片	
1410	Q 7 c9	-	円形	0.32	30	外傾	凹状	人為		
1411	Q 8 b3	N-7°-E	長方形	2.46×1.08	35	外傾	平坦	人為	土師器片、須恵器片	近畿以降
1412	Q 8 a2	-	円形	1.10	24	外傾	平坦	人為	土師器片	墓域
1413	P 8 j1	-	[円形]	1.22	42	外傾	平坦	人為		墓域
1414	P 8 j1	-	[円形]	0.90	6	外傾	平坦	人為	土師器片、須恵器片	墓域
1415	Q 7 a0	-	円形	0.36	64	垂直	平坦	人為		柱穴*
1416	Q 7 a0	-	[円形]	0.74	10	垂直	平坦	人為		柱穴*
1417	Q 8 a1	-	円形	0.46	30	外傾	凹状	人為		柱穴*
1418	Q 7 a0	-	円形	0.38	50	垂直	平坦	人為		柱穴*
1419	P 7 i7	-	[円形]	0.60×(0.42)	30	外傾	平坦	人為		柱穴*
1420	Q 7 a0	N-5°-E	楕円形	0.48×0.40	18	外傾	平坦	人為		柱穴*
1421	Q 8 a1	N-90°-E	楕円形	0.42×0.30	50	外傾	平坦	不明		柱穴*
1422	Q 7 a0	-	円形	0.34	74	垂直	平坦	不明		柱穴*
1423	Q 8 a1	-	円形	1.10	20	外傾	平坦	人為	土師器片、須恵器片	墓域
1424	Q 7 a0	-	円形	0.28	30	外傾	U字状	自然	土師器片	
1425	S 8 b7	N-1°-E	楕円形	0.48×0.40	10	外傾	平坦	人為	土師器片、須恵器片、瓦片	近畿*
1432	R 8 b9	N-15°-W	長方形	2.56×0.90	24	外傾	平坦	人為	土師器片、須恵器片	近畿以降
1433	R 8 b9	-	円形	0.30	28	外傾	平坦			
1434	R 8 g9	-	円形	0.38	32	外傾	凹状		土師器片	
1436	R 8 b7	N-90°-E	楕円形	0.96×0.62	24	外傾	平坦	人為	土師器片、須恵器片	柱穴*

番号	位置	長径方向	平面形状	泉 橋		噴 面	噴 面	噴 上	手法の特征	備考
				長径(軸)×短径(軸)(m)	高さ(cm)					
1437	S 8 g7	N-90°-E	[楕円形]	1.62×(1.24)	28	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	墓塚
1438	R 8 g7	N-4°-W	方形	0.84	40	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	柱穴*
1442	R 8 h7	N-70°-W	楕円形	1.26×1.04	36	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	墓塚
1443	S 8 g6	-	円形	0.64	16	外傾	直立	人為		
1444	S 8 g6	-	円形	1.18	22	外傾	平坦	人為	土師器片	墓塚
1445	R 8 g9	N-58°-E	楕円形	(0.64)×0.34	16	外傾	平坦	人為		
1446	R 8 g9	-	円形	0.26	46	外傾	平坦	人為		柱穴*
1447	R 8 h9	-	円形	3.30	17	外傾	直立	自然		柱穴*
1448	R 8 g7	-	円形	0.46	24	外傾	平坦	人為		柱穴*
1449	T 8 c4	-	不定形	0.94×0.56	44	外傾	U字状	人為	土師器片	
1450	S 8 h 6	-	円形	1.72	52	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片, 炭化材	墓塚
1457	R 8 h6	-	円形	0.62	18	外傾	直立	自然		
1458	R 8 h6	-	円形	0.32	18	外傾	直立	自然		
1459	R 8 h6	-	円形	0.40	14	外傾	直立	自然		
1460	R 8 h6	-	円形	0.54	14	外傾	平坦	自然	土師器片	
1461	S 7 e0	-	不定形	2.3×(1.60)	16	外傾	平坦	人為	土師器片, 陶器片, 不明鉄製品	墓塚
1464	S 7 e9	N-86°-E	長方形	1.92×1.68	27	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片, 陶器片	墓塚
1469	S 7 e9	N-1°-W	長方形	1.80×1.14	79	外傾	平坦	人為		
1465	S 7 c9	-	[円形]	0.90×(0.46)	14	外傾	平坦	人為	土師器片	
1468	R 7 b6	-	円形	1.10	26	外傾	直立	人為	土師器片, 須恵器片, 土師質土器片(小皿), 炭渣	墓塚
1469	S 7 d8	-	[円形]	1.90×(1.26)	24	外傾	平坦	人為	土師器片	墓塚
1470	R 7 b6	-	円形	1.14	32	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	墓塚
1471	R 7 h9	-	円形	1.14	24	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	柱穴*
1475	S 7 b7	N-5°-W	長方形	1.66×0.76	38	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	
1476	R 7 g8	-	円形	0.64	38	外傾	凸凹	人為	土師器片, 土師質土器片(小皿)	
1477	R 7 g8	-	円形	1.08	40	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	
1479	R 7 g9	N-75°-E	楕円形	0.66×0.46	40	外傾	平坦	不明	土師器片	
1480	S 7 d0	N-14°-W	長方形	(2.54)×1.22	102	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片, 陶器片	近世以降
1481	R 8 i2	-	円形	1.08	11	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	墓塚
1482	S 8 d1	N-13°-E	長方形	3.14×1.14	80	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片, 陶器片	近世以降
1483	R 7 g9	-	円形	1.06	18	外傾	平坦	人為	土師器片	柱穴*
1484	R 7 h8	N-9°-W	[方形]	[1.82]×1.38	25	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	墓塚
1485	R 7 g8	N-87°-W	[長方形]	1.42×(1.14)	18	外傾	凸凹	人為	土師器片, 須恵器片	
1486	R 7 g7	N-37°-W	不定形	1.76×1.38	48	外傾	平坦	人為	土師器片	
1489	R 7 b7	-	円形	0.74	12	外傾	平坦	人為		
1490	R 7 g8	-	円形	0.90	10	外傾	平坦	人為	土師器片	
1492	S 8 i1	-	円形	0.60	34	外傾	直立	人為	土師器片	柱穴*
1495	T 7 a9	-	[円形]	[2.1]	39	外傾	平坦	自然	土師器片, 須恵器片	
1496	R 7 h9	N-65°-W	[長方形]	(1.04)×0.82	10	外傾	平坦	人為	土師器片	墓塚
1500	R 7 h0	N-90°-E	長方形	2.00×1.30	28	外傾	平坦	不明	土師器片, 須恵器片	墓塚
1503	R 7 h0	N-10°-E	長方形	1.88×1.40	16	外傾	平坦	不明	土師器片, 須恵器片	墓塚

番 号	位 置	径方向	平 面 形	規 模		直 径 面	直 面	覆 土	工 法 の 特 徴	備 考
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
1503	S 7 b4	N-6°-W	長方形	1.13×0.64	42	垂直	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	
1506	R 7 i1	-	円形	0.56	33	垂直	U字状	人為	土師器片, 須恵器片	
1507	R 7 f4	-	[円形]	(2.76)	66	外傾	直状	人為		
1508	S 6 a8	N-84°-W	[長方形]	(3.88)×1.20	67	外傾	平坦	人為		近世以降
1509	S 6 b8	N-85°-W	[長方形]	(3.34)×1.04	65	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	近世以降
1510	S 6 b8	N-85°-E	長方形	2.64×1.00	65	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片, 瓦片	近世以降
1511	S 6 b8	N-96°-E	長方形	1.40×1.52	59	外傾	平坦	人為		近世以降
1512	S 6 c8	N-87°-E	長方形	2.32×1.22	91	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片, 灰釉陶器片, 瓦片, 陶器片, 漆片	近世以降
1513	R 6 f0	N-89°-W	長方形	4.40×1.10	75	外傾	平坦	人為	鉄製品(金釧?)	近世以降
1514	R 7 j9	N-2°-W	長方形	1.72×0.98	50	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	柱穴?
1515	R 7 i0	N-27°-E	長方形	1.80×1.10	31	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片, 陶器片	墓域
1516	S 7 j0	N-31°-W	楕円形	0.99×0.85	53	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	
1517	S 7 i0	N-0°	方形	1.02×0.94	37	外傾	直状	人為	土師器片, 須恵器片	
1518	S 7 i0	N-78°-W	楕円形	0.98×0.84	21	外傾	平坦	人為		
1519	S 7 i0	N-0°	長方形	0.75×0.52	20	外傾	平坦	人為		
1520	S 7 i0	N-3°-E	長方形	0.88×0.76	18	外傾	平坦	人為		
1521	R 7 j9	N-2°-W	方形	1.60×1.48	113	外傾	直状	人為	土師器片, 須恵器片	
1522	S 6 b6	N-63°-W	長方形	1.20×0.98	128	外傾	平坦	人為	土師器片	墓域
1523	R 6 b0	N-0°	長方形	1.30×0.70	40	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片, 土師質土師片	
1524	S 6 i3	N-75°-E	長方形	1.64×0.72	16	外傾	平坦	不明	土師器片	
1529	S 6 c0	N-43°-W	楕円形	0.79×0.62	44	外傾	直状	人為	土師器片, 須恵器片, 陶器片	
1530	S 8 i2	N-84°-E	円形	1.56×1.48	36	外傾	凸凹	人為	土師器片, 須恵器片	
1531	S 8 i2	-	円形	1.02	14	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	
1532	S 8 i2	N-90°-E	長方形	2.20×0.88	30	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片, 陶器片, 刀子	近世以降
1541	T 8 d1	N-84°-W	長方形	2.88×0.95	61	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片, 不明鉄製品	近世以降
1545	T 8 d1	N-84°-W	長方形	2.66×0.75	60	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	近世以降
1546	T 7 a4	N-40°-W	円形	1.37×1.29	28	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	墓域
1548	T 8 b3	-	円形	1.30	26	外傾	平坦	人為	須恵器片	
1551	T 9 a5	N-1°-W	[楕円形]	(1.37)×0.9	15	外傾	直状	人為	土師器片, 須恵器片, 陶器片, 石製的鍬水	
1554	T 8 e1	N-82°-W	長方形	2.77×0.94	34	垂直	平坦	人為		近世以降
1555	T 8 e1	N-82°-W	長方形	2.22(0.8)	20	垂直	平坦	人為	土師器片, 須恵器片, 土師質土師片(以東), 不明陶器片	近世以降
1553	T 8 b1	N-79°-W	長方形	2.16×0.86	40	垂直	平坦	人為		近世以降
1554	T 8 b1	N-85°-W	長方形	2.88×0.87	73	垂直	平坦	人為		近世以降
1556	T 8 a1	N-87°-W	長方形	2.86×1.06	55	垂直	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	近世以降
1558	T 7 i7	-	円形	0.90	24	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片, 陶器片	
1559	T 8 h1	-	円形	1.68	36	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	墓域
1561	V 8 d3	N-9°-E	長方形	1.17×0.94	11	外傾	平坦	人為	土師器片	墓域
1563	S 8 j1	N-86°-W	長方形	2.88×1.00	50	垂直	平坦	人為	土師器片, 須恵器片	近世以降
1564	T 7 g7	N-84°-W	長方形	1.94×1.30	23	外傾	平坦	人為		
1565	U 8 d1	N-20°-E	長方形	1.84×1.42	51	外傾	平坦	不明	土師器片	墓域
1567	T 8 e1	N-26°-W	[楕円形]	[1.0×0.7]	46	外傾	平坦	人為	土師器片	柱穴?

番号	位置	長径方向	平面形状	規模		壁面	断面	覆土	手法の特徴	備考
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(m)					
1568	T 8 e1	N-8°-W	長方形	0.90×0.80	23	外傾	平垣	人為		柱穴○
1569	T 8 d2	N-36°-W	長方形	1.33×1.12	39	外傾	平垣	人為	土師器片, 須恵器片	柱穴○
1571	T 8 d1	N-28°-W	方形	1.06	47	外傾	平垣	人為	土師器片, 須恵器片	柱穴○
1572	T 8 d2	N-45°-W	楕円形	1.20×1.06	50	外傾	平垣	人為		溝痕
1573	T 8 d2	N-82°-E	楕円形	0.83×0.78	49	外傾	平垣	人為	土師器片	柱穴○
1575	T 8 c2	N-90°	不定形	1.30×1.0	40	外傾	平垣	不明		
1576	T 8 c2	N-28°-W	方形	0.68×0.66	90	外傾	U字状	人為		柱穴○
1577	T 8 d3	N-0°	楕円形	0.94×0.84	60	外傾	U字状	人為	土師器片	
1578	T 8 d2	N-16°-W	長方形	0.96×0.62	31	外傾	竪状	人為	土師器片, 須恵器片	
1579	T 8 d2	N-60°-E	方形	0.9×0.86	6	外傾	平垣	人為	土師器片, 須恵器片, 鉄滓	
1580	T 8 d1	N-76°-W	楕円形	1.16×[1.02]	27	外傾	竪状	人為	土師器片	溝痕
1581	T 8 d1	N-61°-E	[長方形]	(0.50×0.30)	41	外傾	平垣	人為	土師器片	柱穴○
1582	T 8 d1	-	[円形]	0.78	31	外傾	平垣	人為	土師器片, 須恵器片, 土師支脚	柱穴○
1583	T 8 d1	N-25°-E	[方形]	1.10×(0.8)	54	外傾	平垣	人為		柱穴○
1584	T 7 e0	N-33°-E	円形	0.89×0.8	38	外傾	平垣	自然	土師器片	
1585	T 8 b1	N-70°-E	[楕円形]	1.23×[0.93]	40	外傾	平垣	人為	土師器片	
1586	T 8 b2	N-84°-E	[長方形]	0.96×0.29	27	外傾	平垣	人為		
1588	T 8 d2	N-28°-E	[長方形]	(1.0)	24	外傾	平垣	人為	土師器片	
1593	T 8 a2	N-16°-W	楕円形	1.06×0.89	31	外傾	平垣	人為	土師器片, 須恵器片	
1594	T 8 b2	N-89°-E	[楕円形]	0.78×[0.6]	18	外傾	竪状	人為	土師器片, 須恵器片, 不明鉄製品	
1595	T 8 e1	-	円形	0.91	32	外傾	平垣	人為	土師器片, 須恵器片	
1596	T 8 e1	N-18°-E	[楕円形]	[1.8]×0.92	40	外傾	平垣	人為	土師器片, 須恵器片, 土師貫土器片(小皿), 丸瓦片	
1597	V 7 d0	N-30°-W	長方形	3.4×1.9	(63)	外傾	平垣	人為	土師器片, 瓦片	地下式竪○
1599	T 7 e0	N-0°	長方形	1.98×1.50	35	外傾	平垣	人為		溝痕
1600	T 8 e1	N-76°-W	長方形	0.98×0.71	31	外傾	平垣	不明		
1601	T 8 e1	-	[円形]	0.77	18	外傾	平垣	不明		
1602	T 8 e1	-	[円形]	[1.2]	16	外傾	平垣	不明		
1603	T 8 d1	N-1°-E	楕円形	1.04×0.9	23	外傾	竪状	不明		
1604	T 8 d1	-	円形	0.62	20	外傾	U字状	不明		
1607	T 7 e0	N-12°-W	長方形	0.9×0.68	42	外傾	平垣	不明		
1608	T 7 e0	N-20°-E	方形	1.6×1.4	74	外傾	平垣	人為		
1609	T 7 e0	N-39°-E	[楕円形]	[0.94×0.8]	22	外傾	平垣	人為		
1611	V 6 a9	N-20°-E	[方形]	1.32×(1.1)	23	外傾	平垣	人為		溝痕
1613	T 6 d2	-	[円形]	0.64	4	外傾	竪状	不明		溝痕○

#### (4) ビット群 (付図)

第8号ビット群でビット75基, 第9号ビット群でビット32基が確認されている。形状は円筒形を主体としており, 柱穴と考えられる。掘立柱建物跡の可能性を想定して調査したが, 配列に規則性を見出すことができなかったため, ビット群として報告する。時期は, 形状と平安時代の住居跡を掘り込んでいるものが多いことから, 中世以降と考えられる。

### (5) 遺物包含層

調査区域南西部の台地端部から低地に下がる位置に、黒色土の堆積が認められ、トレンチ調査を行った結果、遺物包含層であることを確認した。以下、その概要について記述する。

#### 第1号遺物包含層 (第415・416・付図)

**位置** 調査区南部のT5b4～U5a6区で、南に傾斜する台地の南端部に位置している。

**規模** 調査区南部の南西に位置する黒色土の堆積区域に、南北軸20m、東西軸6.5m、厚さ50cmほどにわたって土器片の包含が見られる。

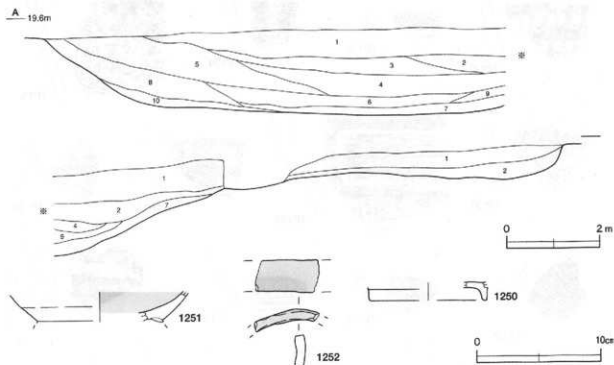
**覆土** 10層からなる。遺物は第1～5層に集中している。

土層解説

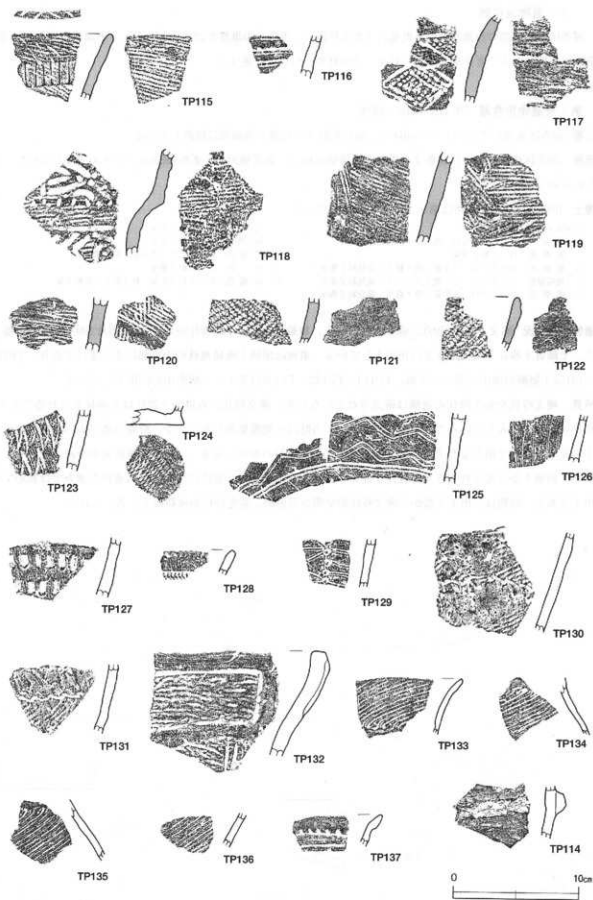
1 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	6 暗褐色	ローム粒子中量
2 暗褐色	ローム粒子多量	7 極暗褐色	ローム粒子少量
3 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	8 暗褐色	ロームブロック少量、砂粒微量
4 極暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	9 黒色	ローム粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	10 暗褐色	ローム粒子中量、粘土粒子・砂粒少量

**遺物出土状況** 縄文土器片219点、弥生土器片6点、埴輪片1点、土師器片987点、須恵器片239点、灰雑陶器3点、土師質土器片8点、鉄滓2点が出土している。遺物は黒色土堆積地域の中央部にまとまっており、TP115～131は土層断面図中の第4・5層、TP114・TP132～TP137は第1～3層を中心に出土している。

**所見** 縄文時代や弥生時代の遺構は確認されていないが、縄文時代の石鏃や土器片は表面採集されることや、後世の遺構に混入していることがあることから、当時は小規模集落があったか、狩猟の場であった可能性が考えられる。本跡で出土した土器片は、自然堆積した埋没谷の中央に集まっており、破断面が摩滅していることから、台地上から流されてきた可能性が高い。また、弥生時代の土器片については当遺跡の調査では初めての出土である。時期は、出土土器から縄文時代が早期から前期、弥生時代が後期後半と考えられる。



第415図 第1号遺物包含層・出土遺物実測図



第416图 第1号遺物包含層出土遺物実測図

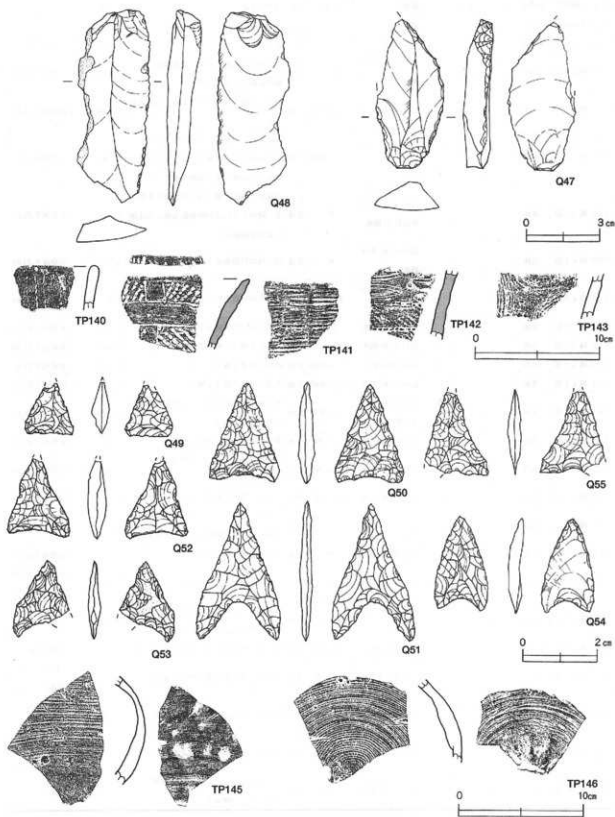
第1号遺物包含層出土遺物観察表(第415・416図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色澤	焼成	特徴	出土位置	備考
T250	灰輪陶器	輪	-	(15)	(9.2)	黄褐色	灰白	良好	口ロナデ、高台貼り付け	T 5 a5	
T251	灰輪陶器	短筒形	-	(2.4)	-	黄褐色	灰黄	良好	口ロナデ	V 7 a6	
T252	灰輪陶器	平板 <sup>a</sup>	-	-	-	黄褐色	灰白	良好	ナデ、把手部	V 7 a6	
TP14	磁輪	円筒形	-	-	-	灰石・石英・雲母	橙	普通	突帯貼り付け、ナデ	T 5 c5	古墳時代, PL84
TP15	縄文土器	深鉢	-	-	-	灰石・石英・雲母・ 繊維	橙	普通	内・外面に貝殻条文、頸部外縁に 微隆起線文による区画文	T 5 b4	早期後半, PL84
TP16	縄文土器	深鉢	-	-	-	灰石・石英・雲母	にぶい橙	普通	胴部に半農竹管状工具による平行沈線が 通る	T 5 b4	前期後半, PL84
TP17	縄文土器	深鉢	-	-	-	灰石・石英・雲母・ 繊維	にぶい黄橙	普通	沈線文により変形に区画され、交点に 半月形刺突文、区画内には半農竹管状 工具による押し文、頸部条文	T 5 b5	早期後半, PL84
TP18	縄文土器	深鉢	-	-	-	灰石・石英・雲母・ 赤色粒子・繊維	橙	普通	口縁部と胴部の間に段を持ち刻みを有す 。段の上下には貝殻条文地に太沈線 による文様抽出	T 5 b5	早期後半, PL84
TP19	縄文土器	深鉢	-	-	-	灰石・石英・雲母・ 繊維	橙	普通	内・外周貝殻条文、繊維彫刻有り	X 1	早期後半, PL84
TP20	縄文土器	深鉢	-	-	-	灰石・石英・雲母・ 繊維	明赤褐色	普通	内・外周貝殻条文、繊維彫刻有り	X 1	早期後半, PL84
TP21	縄文土器	深鉢	-	-	-	灰石・石英・繊維	にぶい橙	不良	早期LRの羽状線文を施文	T 5 e4	前期前半, PL84
TP22	縄文土器	深鉢	-	-	-	灰石・石英・繊維	暗灰	不良	早期LR施文、繊維彫刻有り	T 5 e5	前期前半, PL84
TP23	縄文土器	深鉢	-	-	-	灰石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	液状貝殻文を施文	T 5 b5	前期後半, PL84
TP24	縄文土器	深鉢	-	-	-	灰石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	胴部に液状貝殻文を施文	T 5 b5	前期後半, PL84
TP25	縄文土器	深鉢	-	-	-	灰石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい黄橙	普通	無文地に竹管状工具による平行沈線文と 山形文を数条施文	T 5 b4	前期後半, PL84
TP26	縄文土器	深鉢	-	-	-	灰石・石英・雲母	にぶい橙	普通	胴部に縦位の短い沈線文を施文	T 5 b5	前期後半, PL84
TP27	縄文土器	深鉢	-	-	-	灰石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部に棒状工具による刺突文状の 短沈線2列施文	T 5 b4	前期後半, PL84
TP28	縄文土器	深鉢	-	-	-	灰石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部に菱形彫文を施文	X 1	前期後半, PL84
TP29	縄文土器	深鉢	-	-	-	灰石・石英・雲母	黄	普通	竹管状工具による円形刺突文と半農竹 管状工具による胎文及び木葉文を施文	X 1	前期後半, PL84
TP30	縄文土器	深鉢	-	-	-	灰石・石英・雲母	黄	普通	Lの無筋縄文による横線文	T 5 b5	前期後半, PL84
TP31	縄文土器	深鉢	-	-	-	灰石・石英・雲母	橙	普通	Lの無筋縄文による横線文	T 5 e5	前期後半, TP130 と同一器種 <sup>a</sup> , PL84
TP32	縄文土器	深鉢	-	-	-	灰石・石英・雲母・ 赤色粒子	明赤褐色	普通	器底区画のL線部で、区内に無筋縄文、 胴部は基部縄文地に沈線が下垂	T 5 a4	中期, PL84
TP33	弥生土器	広口壺	-	-	-	灰石・赤色粒子	にぶい黄	普通	附加条一種附加2条の縄文を施文	T 5 b5	後期, PL84
TP34	弥生土器	広口壺	-	-	-	灰石・赤色粒子	にぶい黄	普通	附加条一種附加2条の縄文を施文	T 5 b5	後期, TP131同 一器種 <sup>a</sup> , PL84
TP35	弥生土器	広口壺	-	-	-	灰石・赤色粒子	にぶい黄	普通	附加条一種附加2条の縄文を施文	T 5 b5	後期期の庄原石9, PL84
TP36	弥生土器	広口壺	-	-	-	灰石・赤色粒子	橙	普通	附加条一種附加2条の縄文を施文	T 5 b5	後期, TP132同 一器種 <sup>a</sup> , PL84
TP37	弥生土器	広口壺	-	-	-	灰石・石英・雲母	橙	普通	L口部折り返し、下腹部に厚帯押圧、 胴部に縦位の横線文	T 5 e4	PL84

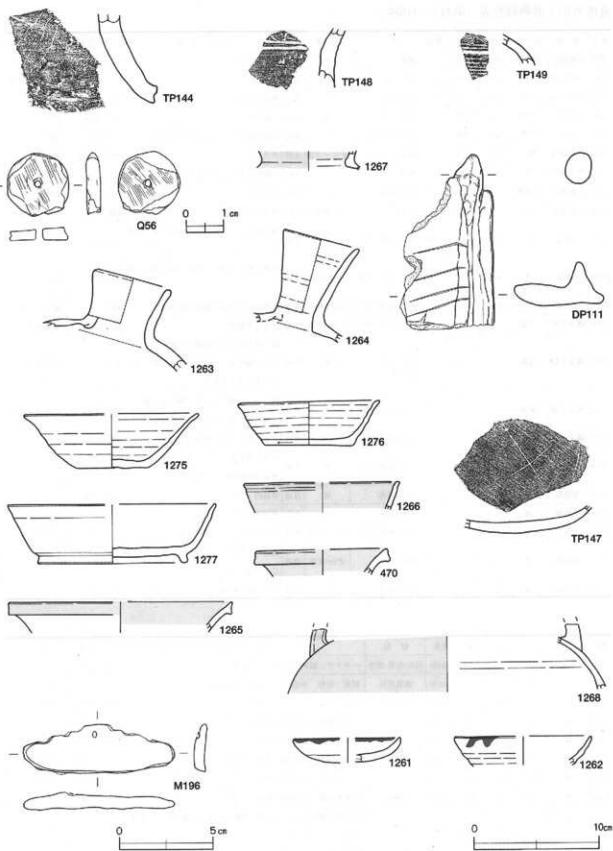


(6) 遺構外出土遺物 (第417・418図)

今回の調査で出土した遺構に伴わない主な遺物について、実測図及び遺物観察表に掲載する。



第417図 遺構外出土遺物実測図 (1)



第418図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表 (第417・418図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
470	灰釉陶器	長頸瓶	[10.4]	(2.0)	-	緻密	灰黄褐色	良好	ロクロナデ	SI-1585	製造産
1261	土加質土器	小皿	[8.4]	1.9	-	長石・石英	黄	普通	ナデ	V 6 J0	40%、修理付着
1262	土加質土器	小皿	[10.8]	(2.3)	-	長石・石英・雲母	黄	普通	外部外面棒状工具による沈降2条	SI-1665	油煙付着
1263	須恵器	平瓶	6.0	(8.3)	-	長石・石英	灰	良好	口縁部貼り付け、内部ヘラナデ	SK-1560	10%
1264	須恵器	平瓶	6.1	(8.9)	-	長石・黒色雲母	灰白	良好	口縁部外面ヘラナデ、内面ナデ、貼り付け	V 6 a0	10%
1265	灰釉陶器	瓶	[17.8]	(2.4)	-	緻密	オリーブ黄	良好	ロクロナデ	SD-187付着	製造産
1266	灰釉陶器	瓶	[12.4]	(2.4)	-	緻密	灰	良好	口縁部外面に1条の沈降	SI-1650	製造産
1267	灰釉陶器	長頸瓶	-	(1.5)	-	長石・石英	灰	良好	ロクロナデ	V 8 a1	焼痕付
1268	灰釉陶器	壺	-	(5.3)	-	緻密	灰黄褐色	良好	内部内・外面ナデ	SD-91	10%、製造産
1275	須恵器	杯	[14.0]	4.3	5.8	長石・石英・雲母	灰	普通	底部回転ヘラ切り、外部外面下端ヘラ削り	SI-1666	50%
1276	須恵器	杯	11.2	3.6	7.2	長石・石英・雲母	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り、外部外面下端ヘラ削り	SD-103	75%
1277	須恵器	高台付杯	[16.6]	4.7	11.3	長石・石英・雲母	に灰・黄褐色	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	表土	60%
TP10	縄文土器	網鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	に灰・黄褐色	普通	軸糸文を施文	SI-1574	早期前半
TP11	縄文土器	網鉢	-	-	-	長石・石英	黄	普通	縦と横方向の平行沈降で区画し、交点に円形の刺突文。区画内に平貝竹管による押し文。裏面条状文	表土	早期後半
TP12	縄文土器	網鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	に灰・黄褐色	不良	縄文地に平貝竹管による押し文2条、上部に円形刺突文と軸糸文を施文	SK-1556	前期後半
TP13	縄文土器	網鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	赤褐色	普通	6本の斜合沈降で曲線文を施文	SI-1638	中期
TP14	不明	-	-	-	-	長石・石英・雲母	黄	普通	下縁に輪帯貼り付け、底部工具による楕円目の粗線なヘラ巻き	SD-91	
TP15	須恵器	壺	-	-	-	長石・石英	灰	普通	内部・外面ヘラナデ	SK-1560	
TP16	須恵器	瓶	-	-	-	長石・石英	灰	良好	外部外面カキ目、内面ヘラナデ	SI-1622	
TP17	土加質土器	瓶	-	-	-	長石・石英・雲母	に灰・黄褐色	普通	外部外面ナデ、内面ヘラ巻き	SD-91	[X]状の破割
TP18	須恵器	壺	-	-	-	長石・石英	オリーブ黒	普通	頸部外面横方向の内面2条、棒状工具による痕状文	SI-1569	
TP19	須恵器	瓶	-	-	-	長石・石英	黄灰	普通	外部外面に棒状工具による痕状文	SI-1580	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP11	小刀	(14.0)	(7.5)	(3.4)	(239.0)	長石・石英・雲母	ヘラナデ、鋭利な工具による磨削	S D-103	
Q17	ナイフ	(5.95)	2.75	1.1	(15.9)	軟質頁岩	断面三角形、刃部欠損、片面に加撃痕	表土	PL84
Q48	削片	7.7	2.8	1.0	23.3	軟質頁岩	断面三角形	S D-103	PL84
Q49	鏃	(1.4)	1.3	0.4	(0.63)	チャート	平基無基鏃、表裏押圧剥離	S I-1520	
Q50	鏃	2.61	1.81	0.42	1.36	加礫石	凹基無基鏃、表裏押圧剥離	S I-1655	PL84
Q51	鏃	3.6	2.2	0.35	1.86	チャート	凸基無基鏃、表裏押圧剥離、長脚鏃	S I-1638	PL84
Q52	鏃	(2.10)	1.66	0.46	(1.20)	チャート	凹基無基鏃、表裏押圧剥離	S I-1638	PL84
Q53	鏃	2.0	(1.50)	0.30	(0.58)	加礫石	凹基無基鏃、表裏押圧剥離	S I-1388	
Q54	鏃	2.5	1.35	0.4	0.96	加礫石	凹基無基鏃、片面だけの押圧剥離、片面は剥離前をそのまま使用	S 6 09	PL84
Q35	鏃	( 2.2)	( 1.7)	0.35	(0.93)	加礫石	凸基無基鏃、表裏押圧剥離、やや長脚形	S K-1435	
Q56	有孔ノコ	(1.65)	( 1.6)	(0.2)	(1.72)	滑石	表裏一方の研磨	U 6 b1	PL84
M196	火打ち金	8.05	(2.65)	0.90	(3.20)	鉄	X線撮影により、孔確認	V 6 a0	PL84

## 第4節 まとめ

### 1 はじめに

調査12区はこれまでの調査区域のさらに南側に位置し、同じ台地上の最南端に立地している。第190集で「6世紀後半になると、台地上を覆い尽くすように集落が形成される」と指摘しているように、今回の調査を通して、台地の最南端部まで集落が展開されていたことが明らかになった。

鳥名熊の山遺跡の最大の特徴は、6世紀後半から11世紀に至るまで集落が途絶えることなく連続と続いたその継続性にある。しかし、個々の住居に目を向けると、土器の一形式ごとに頻繁に廃絶と住み替えが繰り返されている。一軒の住居の存続期間は一代程度の短期間のものであり、しかもそれぞれの住居はその選地に当たってかなり流動的である。にもかかわらず、これだけの長期間、集落が展開されたということは、この台地にそれだけの吸引力があったからに違いない。以下、鳥名熊の山遺跡が高名地区の中核的集落として存在し得た要素を念頭に置きつつ、集落の様相について概観していきたい。

### 2 集落の変遷

ここでは、土器型式に従って時期区分を行い、集落の変遷をたどっていききたい。時期区分に際しては、これまでに報告された調査区との整合性を保つために、第190集で示された土器型式に基づき、第3～5期を6世紀、第6～8期を7世紀、第9～11期を8世紀、第12～14期を9世紀、第15～18期を10～11世紀としておく。なお、当調査区において、第1～4期までの集落は確認されていない。

#### (1) 古墳時代

##### 第5期(第419団)

東谷田川沿いの台地縁辺部に点在していた小規模な集落域が、一挙に拡大する時期である。ほぼ時期を同じくして鳥名前野東遺跡や鳥名八幡前遺跡においても集落が展開され、鳥名熊の山遺跡を中心とする周辺一帯が大規模に開発された時期ともいえる。人口の自然増だけでこれだけ広範囲な集落の展開は考えにくく、他地域からの集団的な移住と定着という事態を念頭に置いておく必要がある。

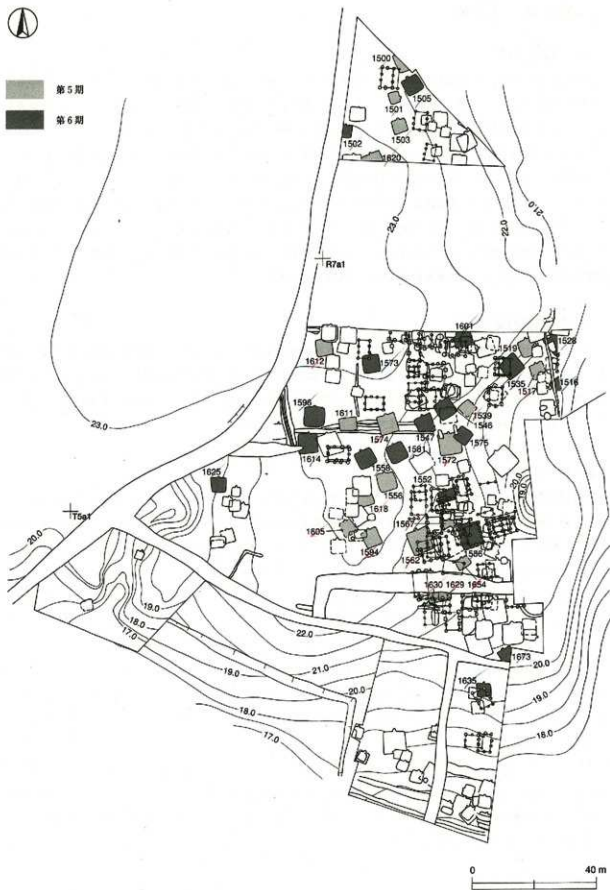
本期には、竪穴住居跡19軒が該当する。主な遺物として、耳環1点、刀子1点、鏃2点、不明鉄製品8点、鉄滓5点、砥石2点、白玉1点、土製品12点(鏃先形2、勾玉2、管玉1、上玉5、不明2)、手捏土器2点、須恵器片4点(甕3、瓶1)、炭化種子13点(桃)、炭化米などが出土している。

1辺が7mを超える大形住居は第1562・1630号住居だけであり、これまでの調査区で見られたような1辺が10mを超えるような極めて大形の住居は確認されていない。1辺が6mを超える住居も第1500・1572号住居の2軒だけであり、一方、1辺が4mに満たない小形の住居は第1501・1567号住居の2軒で、その他は1辺が4～6mの中規模の住居である。

これらの住居は2～3軒の単位群からなり、それらが集まって一つの大きな住居群を構成している。特に、第1501・1503号住居、第1539・1572号住居、第1574・1611号住居、第1562・1567号住居、第1630・1654号住居の各単位は、規模の比較的大きい住居と小さい住居の組み合わせからなっており、住居の構造や出土遺物から機能的な使い分けも想起されるものである。



- 第5期
- 第6期



第419図 鳥名熊の山遺跡集落変遷図(第5・6期)

## 第6期(第419図)

本期には住居跡19軒が該当する。主な出土遺物には、耳環1点、刀子1点、鎌1点、馬具1点(引手金具)、不明鉄製品7点、鉄滓3点、輪羽口1点、土製紡錘車1点、土製品48点(鋤先形7、土玉41)、手捏土器2点、須恵器片12点(坏蓋2、高坏1、瓶・甕2、甕・壺7)、浮子1点、炭化種子2点(桃)などがある。

2～3軒を基本とする単位集団が複数集まる集落形態は、当該期においても踏襲されている。1辺が7mを超える大形住居は第1586号住居の1軒で、1辺が6mを超える住居は第1581・1596・1614号住居の3軒を数え、その他は1辺が4～5mの中規模の住居である。1辺が4m未満の小形住居は姿を消し、第419図にみられるように、単位集団もほぼ等質な組み合わせになっている。

最大の規模を有する第1586号住居は、配置からみて第5期において最大の規模を有していた第1562号住居または第1630号住居のいずれから住み替えられたものと考えられる。また、北側には2本柱で横長の住居である第1552号住居が付属しており、これら2軒の住居の組み合わせで1世帯と考えられる。この単位集団は周囲が空白帯となっており、他の住居とはやや隔絶した印象を受けることから、住居の規模と相まって当集落の中心的な人物が居住していたとも推測される。

当該期には、主軸方向が真北を指す住居群が登場することも特徴の一つである。調査区の北西部に位置する第1596・1614・1625号住居がその一環であり、特に第1596号住居は卓越した出土遺物で注目される。馬具の一部である引手金具や不明鉄製品、須恵器片6点(坏蓋、甕、壺、平瓶、高坏、甕)の他に、鋤先形土製品7点と土玉41点が竈付近からまとまって出土している。鋤先形土製品の出土例は第510・1426・1620号住居跡でも報告されており、これらは例外なく竈付近からの出土である。この出土状況の一致は、当時の使用状況を復元する上で興味深い。

## 第7期(第420図)

本期には、竈穴住居跡15軒と独立柱建物跡1棟が該当する。主な出土遺物には、刀子1点、鎌1点、鎌1点、不明鉄製品2点、鉄滓3点、砥石2点、須恵器片15点(坏身1、坏蓋4、瓶5、甕2、甕2、提カ1)、手捏土器2点、土玉3点、炭化種子1点(桃)がある。

1辺が7mを超える住居は第1590・1610号住居の2軒、6mを超えるのは第1645号住居の1軒、1辺が3m以下の小形の住居は第1669号住居の1軒で、その他の11軒は1辺4～6mの中形の住居である。

住居の主軸方向をみると、第6期と同じように、北西方向を主軸とする住居群と真北を主軸とする住居群が認められる。北西方向を主軸とする住居群は、互いに10～20mの距離を置いて単独で存在しており、住居の規模や構造、出土遺物に差が認められないことから、各住居が最小単位となって集落を構成していたと考えられる。一方、真北を主軸方向とする住居群は、第6期同様、調査区の北西部に位置する一群であり、さらに調査区の最南端である台地から低地へ下りる斜面部に位置する一群もこれに加わる。いずれも2軒で1単位の構成をとっており、この単位を1世帯とみなすことができる。

個々の住居に目を向けると、1辺が8m弱の最大規模を有する第1590号住居が集落の中心住居と考えられ、配置からみて、第6期の第1586号住居から住み替えられたものと推測される。また、最南端の斜面部に位置する第1645号住居は1辺が7m弱の大形住居で、刀子1点、鉄鎌1点、砥石1点、須恵器片5点(坏蓋、壺カ、フラスコ形瓶、甕、甕)が出土し、付属する1辺が2.5mほどの小形の住居である第1669号住居跡からは鎌が出土している。このように、当該期には、住居の軒数に減少傾向こそ見られるが、居住域は台地から低地へ下りる斜面部にまで広がりを見せるようになる。



## 第8期(第420図)

本期には、竪穴住居跡9軒と掘立柱建物跡3棟が該当する。主な出土遺物には、刀子3点、鐵9点、手鎌2点、釘3点、不明鉄製品4点、鉄滓14点、砥石2点、石製紡錘車1点、管状土鎌2点、輪羽口3点、ミニチュア土器1点、須恵器17片(坏2、蓋6、高坏1、壺2、瓶3、甕2、甕1)などがある。

1辺が7mを超える住居は第1525号住居1軒、6mを超えるのは第1520・1650号住居の2軒、1辺が4m未満の小形住居は第1577・1667号住居の2軒で、その他は1辺が4～6mの中形の住居である。

当該期の中心となる住居は規模の卓越した第1525号住居であり、配置からみて第7期における第1590号住居から住み替えたものと推測される。出土遺物の面でも他の住居を優越しており、須恵器片3点のほか、刀子1点、鐵6点、釘1点、不明鉄製品1点など多くの鉄製品が出土している。特に注目したいのは、住居がそれまでの居住域から北東へ20m以上移動し、その跡地に掘立柱建物3棟が建てられたことである。これらの建物は規模と構造から倉庫として使用されたものと推測され、この周辺は当該期以降10世紀になるまで竪穴住居は構築されずに、掘立柱建物のみが建てられていくことになる。当時の社会状況と照らし合わせて考えるならば、律令体制が整う前夜の様相を示しているともいえる。

一方、調査区の北西部にみられた、主軸方向を真北にする住居群は調査区域内から姿を消し、住居跡地は無遺構地帯となる。また、南斜面部に位置していた一群は、第1645号住居から第1650号住居へ、小形の第1669号住居は第1667号住居へと建て替えられており、大形住居と小形住居の組み合わせからなる居住形態が維持されている。さらに、この第1650号住居跡及び隣接する第13号不明遺構からは、畿内産とみられる土師器坏片が出土している。これまでの調査で確認されていない稀少なものであり、都との交流を知る資料の一つとして注目される。

## (2) 奈良時代

### 第9期(第421図)

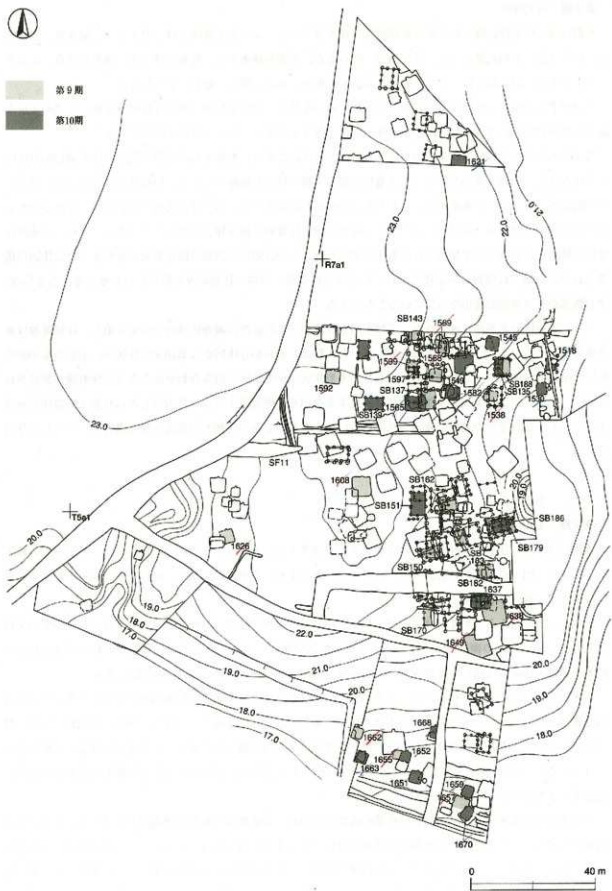
本期には、竪穴住居跡11軒と掘立柱建物跡9棟が該当する。主な出土遺物には、鉄釘1点、刀子7点、鐵1点、鎌3点、門1点、不明鉄製品8点、鉄滓1点、銅滓1点、石製紡錘車3点、砥石2点、手捏土器1点、炭化種子2点(桃)などがある。

1辺が6mを超える大形住居は第1608・1638・1649号住居の3軒で、そのうち第1649号住居は6か所の主柱穴を有し、60㎡ほどの面積を有する極めて大形の住居である。一方、1辺が4m未満の小形住居は第1538・1599・1655・1662号住居の4軒が該当し、その他の4軒は1辺が4～6mの中形の住居である。

第8期における中心的な住居であった第1525号住居は、第1649号住居ないし第1638号住居へと建て替えたものと推測される。この2軒の住居はいずれも極めて大形で、互いに近接していることから、短期間での建て替えが行われたものと推測される。さらに、掘立柱建物6棟が第8期に引き続き、大形住居に付随する形で建てられている。第179号掘立柱建物跡の柱穴からは門が出土しており、これらの建物が倉庫的な機能を有していたことが示唆される。

これまでの調査例から、当該期には集落の再編が行われ、各遺構は真北を主軸方向とするようになることが指摘されているが、上述の住居と掘立柱建物群はいずれも主軸方向が北西に振れており、他の集団との違いが明白である。このことは、古墳時代から居住域を変えずに集落の中心としてこの地にあった地縁・血縁的に連なる伝統集団が、新しい時代に移ってもなおその伝統を維持していたことによるものと考えたい。言い換えれば、律令体制の進展は伝統的な在地支配体制を取り込みつつ図られたものとも考えられる。





第421図 烏名熊の山遺跡集落変遷図(第9・10期)

また、調査区の北側にも獨立柱建物3棟が建てられている。桁行方向はいずれも真北を指しており、この周辺も当該期から継続して獨立柱建物が増えていくことになる。

出土遺物の面では、前述の大形住居3軒からの出土が顕著である。第1608号住居跡からは鉄釘1点、石製紡錘車1点、手捏土器1点、第1638号住居跡からは刀子3点、鎌1点、不明鉄製品2点、石製紡錘車1点、砥石1点、炭化種子1点(桃)、第1649号住居跡からは刀子3点、鎌2点、鏃1点、不明鉄製品4点、鉄滓1点、炭化種子1点(桃)が出土しており、これら3軒の大形住居だけで当該期に出土した土器以外の出土遺物のほとんどを占めている。鎌や石製紡錘車が集中して出土している事実から、これらの大形住居によって鉄器や紡錘車が保有され、その管理には大形住居の居住者たる家父長層が当たったと想定することもできる。

ところで、大きく南部と北部に二分される集団としてのまとまりは、当該期に限らず、最終段階である第18期まで続いている。この北部と南部の集団の間には明白に無遺構地帯が存在し、いわゆる空白帯によってそれぞれの集団に分断されていることが分かる。しかも、後述する第15期となって集落構造に変化が見られてもなお空白帯が存在していることから、この部分には住居が作られない大きな理由が存在していたと考えられる。その理由として考えられるのが、道路の存在である。この部分には近世の道路跡が存在しているが、遺構の配置を見る限り、古代にまでさかのぼって考えることも可能である。この想定に従うならば、当該期以降、当該調査区の集団は中央部を東西に走る道路によって二分され、この道路を境として別個のまとまりを作っていたと考えられる。

#### 第10期(第421図)

本期には、竪穴住居跡15軒、獨立柱建物跡5棟が該当する。当該期から、ほぼすべての住居が真北を指すようになり、居住に当たって集落内に強い規程が働いていたものと推測される。主な出土遺物には、刀子4点、鏃8点、鎌1点、手鎌1点、釘1点、鏃カ1点、火打金1点、楔カ1点、不明鉄製品6点、銅製丸鞘1点、円面硯2点、転用硯6点、油煙付着土器1点、土製紡錘車1点、石製紡錘車1点、土玉1点、鉄滓3点、銅滓1点などがある。

1辺が6mを超える大形の住居は第1549・1637号住居の2軒で、それぞれ北側と南側に展開する獨立柱建物群と併存している。第1549号住居跡からは円面硯、丸鞘、鉄釘、土玉、鉄滓各1点、さらに、周辺に位置する第1518号住居から土製と石製の紡錘車、第1530号住居から転用硯、第1582号住居から円面硯、第1565号住居から転用硯、鏃、刀子各1点ずつが出土しており、獨立柱建物を中心としてその近辺から硯や鉄製品などの出土が見られる。

また、第1637号住居は第9期の第1649号住居ないし第1638号住居からの住み替えが想定される住居で、鏃3点、不明鉄製品2点の他に、転用硯3点が出土している。

#### 第11期(第422図)

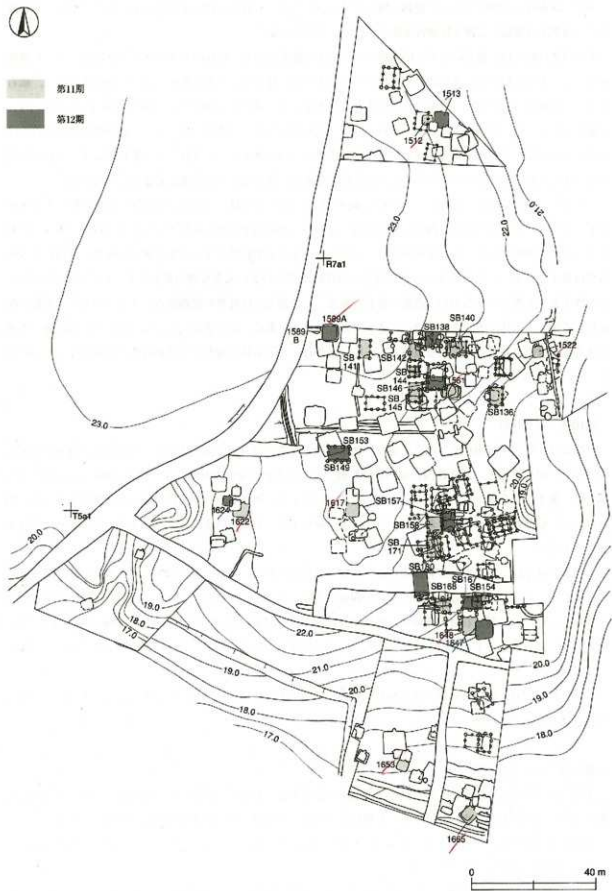
本期には、竪穴住居跡8軒と獨立柱建物跡11棟が該当する。主な出土遺物には、刀子2点、鎌1点、釘2点、鏃カ1点、不明鉄製品3点、鉄滓7点、石製紡錘車1点、転用硯3点、油煙付着土器1点などがある。

大形住居は姿を消し、1辺が4m未満の小形住居は第1522・1653号住居の2軒で、その他の7軒は1辺が4～5mの中形の住居である。

北部の獨立柱建物群は6棟からなり、柱筋が南北や東西に揃う整然とした配置が見られる。周辺に位置する第1522号住居跡からは朱墨痕のついた転用硯、第1561号住居跡からは転用硯2点が出土している。



第11期  
第12期



第422図 島名熊の山遺跡集落変遷図(第11・12期)

南部の独立柱建物群は4棟からなり、その南側には第1648号住居が位置している。第1648号住居は当該期においては最大の規模を有しており、第10期の第1637号住居から住み替えたものと推測される。当該期における唯一の鎌は、この第1648号住居から出土したものである。

### (3) 平安時代

#### 第12期 (第422図)

本期には、竪穴住居跡5軒と独立柱建物跡5棟が該当する。主な出土遺物には、刀子2点、鎌2点、釘1点、不明鉄製品1点、砥石2点、円面硯1点、転用硯5点、漆附着土器2点、油煙付着土器1点、灰釉陶器3点などがある。これらの遺物のほとんどが、第1589A・1647号住居跡からの出土である。

南部に位置する第1647号住居は第11期の第1648号住居からの建て替え、北西部に位置する第1589A号住居は第11期の第1589B号住居からの建て替えと推測される。注目されるのは、いずれの住居跡からも転用硯や漆附着土器、刀子などが出土していることであり、こうした出土遺物の様相や独立柱建物群が併存していることから、これら2軒が集落内において優位な立場にあった住居と考えられる。

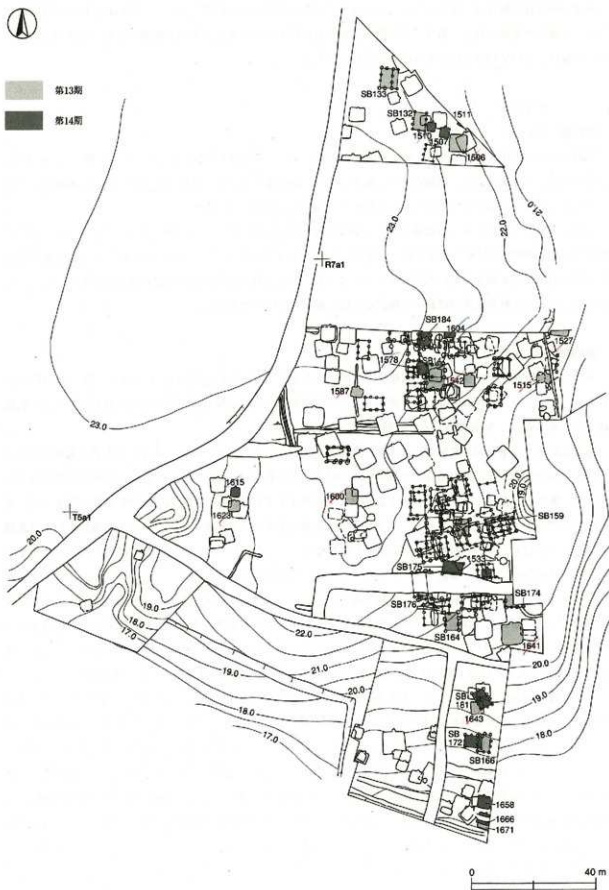
#### 第13期 (第423図)

本期には、竪穴住居跡9軒と独立柱建物跡8棟が該当する。主な出土遺物には、刀子4点、鎌3点、鎌2点、釘2点、鑿カ3点、不明鉄製品6点、砥石3点、石製紡錘車1点、油煙付着土器5点、漆附着土器1点、転用硯3点(朱墨痕2)、灰釉陶器10点、緑釉陶器1点などがある。

南部に位置する第1641号住居は、この地に継続して居住してきた地縁・血縁に連なる有力者の末裔とでも言うべき住居であり、第12期の第1647号住居からの住み替えが推測される。この住居跡からは灰釉陶器2点と刀子3点、鎌2点、鑿カ1点、油煙付着土器1点などが出土しており、礎柱穴を有する住居形態と相まって、集落内における優位性が際立っている。出土した灰釉陶器は朱墨痕のある皿と小瓶で、この小瓶については北側に位置する第174号独立柱建物跡から鉄鉢形土器も出土していることから、仏具として使用された可能性がある。独立柱建物跡は4棟が確認されているが、整然とした配置はみられない。

調査区北部における独立柱建物跡は1棟が確認され、その周囲に主柱穴を持たない小形の住居2軒が位置する構成となる。第1542号住居跡からは石製紡錘車1点、鑿カ2点、油煙付着土器1点、第1587号住居跡からは灰釉陶器2点、転用硯2点(朱墨痕1)、漆附着土器1点、砥石1点のほかに「大土」と墨書された土器が出土している。「大土」は島名照の山遺跡の標識文字の一つであり、集落の様相を探る上で興味深い。

また、同じ調査区でありながら、未調査区が存在するために分断されてしまった北側の調査区からも、当該期に比定される独立柱建物跡2棟と竪穴住居跡1軒が確認されている。第133号独立柱建物は東庇を有する建物である。第1506号住居跡からは、鎌1点、砥石1点、釘1点、不明鉄製品3点、砥石1点、火打石1点の他に、灰釉陶器2点、猿投産須恵器1点、油煙付着土器3点、畿内産土師器、「丕」と墨書された須恵器などが確認されている。灰釉陶器は長頸瓶の破片で、井ヶ谷78号窯式期と考えられる。猿投産須恵器は碗の破片で、鳴海32号窯式期と考えられるものである。混入したと考えられる畿内産土師器も含めて、他地域との交流に關与する有力者層の存在がうかがわれる。また、「丕」は当遺跡の標識文字の一つで、これまでも「城内丕」と墨書された土器が出土している。



第423図 鳥名熊の山遺跡集落変遷図 (第13・14期)

#### 第14期（第423図）

本期には竪穴住居跡8軒、掘立柱建物跡4棟が該当する。主な出土遺物には、刀子2点、鏃1点、釘1点、鍔金具1点、砥石3点、灰釉陶器2点、転用硯（朱墨痕有り）1点などがある。

これまで南部に存在した大形住居は、見られなくなる。また、北部の集団では第184号掘立柱建物跡と第1578・1604号住居跡が確認されただけであるが、遺構の配置からみて中心部分は北側の調査区域外に延びていた可能性がある。第1604号住居跡からは朱墨痕のある転用硯が、第1578号住居跡からは鏃1点のほかに「子淡口」「宅」「区」と墨書や窠書が施された土器が出土している。「宅」は有力者層の経営拠点を示唆するものとして興味深い。「区」は島名八幡前遺跡の第86号住居跡から出土したものと筆跡が酷似しており、同一人物によって書かれたものと推測されるものである。このように、第13・14期では、過去に調査された島名熊の山遺跡の中心部分や島名八幡前遺跡との関わりが、文字資料の面から推測されるのである。

#### 第15期（第424図）

本期は、竪穴住居跡7軒と粘土採掘坑1か所、焼成遺構2基が該当する。主な出土遺物は、刀子1点、鏃1点、不明鉄製品1点、灰釉陶器2点、平瓦2点などである。

第5期以来、継続して南部に居住してきた集団は、当該期には見られなくなる。掘立柱建物跡も確認されなくなり、各住居の規模も縮小傾向が見られる。また、東甕の住居が増加することも含めて、こうした変化が漸移的でなく唐突な観があることから、一般に言われるように大きな社会変革があったと考えざるを得ない。また、南に隣接する島名八幡前遺跡は当該期には消滅し、島名地区一帯に展開していた集落は島名熊の山遺跡に集約されることになる。

#### 第16期（第424図）

本期には、竪穴住居跡8軒と焼成遺構1基が該当する。主な出土遺物には、釘3点、不明鉄製品1点、鉄滓2点、砥石2点などがある。集落は北部に3軒、南部に5軒の住居群に分かれており、各住居はいずれも1辺が4m未満の小形のものである。

南部の集団に属する第1536号住居は、竈と炉をもつ住居である。このような形態は当調査区では5軒認められ、いずれも主柱穴を持たず、住居のほぼ中央に地床炉を有し、東壁に竈を有する住居形態である点で共通している。このような住居形態の使用状況を積極的に示す資料は確認されなかったが、武蔵国府内の工房群から同様の住居形態をもつ住居跡が多数確認されている<sup>1)</sup>ことから見て、何らかの生産に携わった職住一体型の工房跡と考えられる。

#### 第17期（第425図）

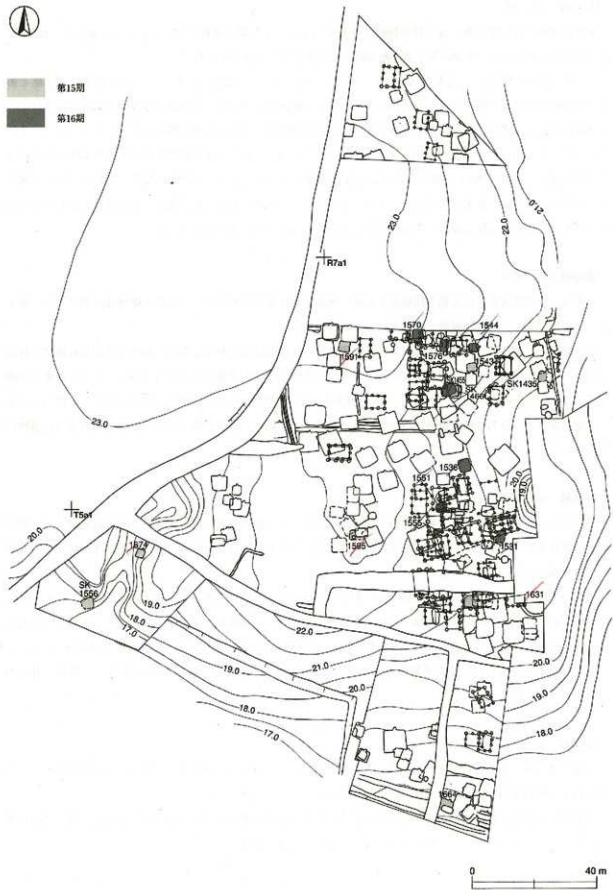
本期には、竪穴住居跡9軒が該当する。主な出土遺物には、鏃1点、鏃1点、釘2点、不明鉄製品3点、鉄滓2点、不明銅製品1点、転用紡錘車1点などがある。

集落は第16期と同様に南部と北部に分かれ、それぞれ5軒と2軒のまとまりからなっている。特に南部の集団は互いの住居間隔がおおむね10m程度を保っており、寒村的な様相を呈している。



■ 第15期

■ 第16期

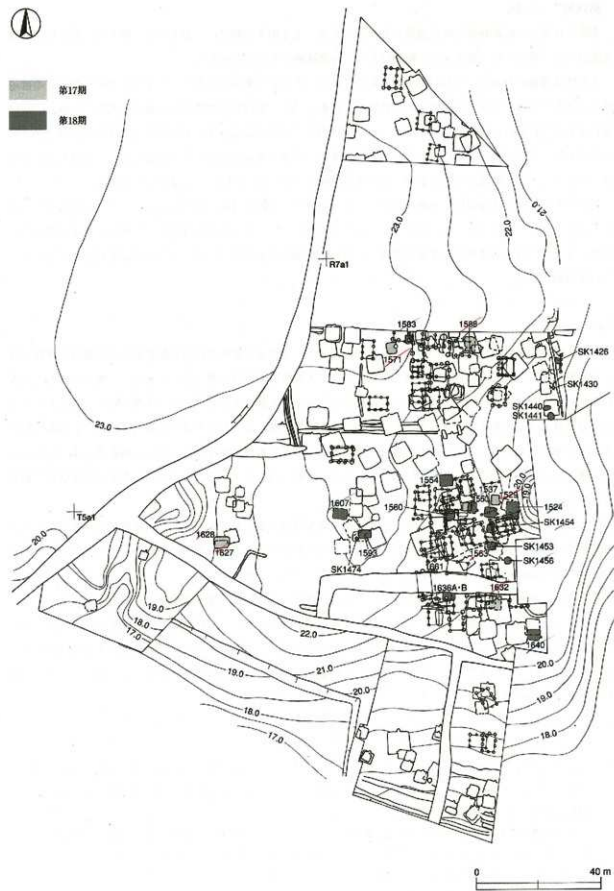


第424図 島名熊の山遺跡集落変遷図 (第15・16期)



■ 第17期

■ 第18期



第425図 鳥名熊の山遺跡集落変遷図（第17・18期）



#### 第18期（第425図）

本期には竪穴住居跡16軒と焼成遺構8基が該当する。主な出土遺物には、刀子3点、鎌2点、釘1点、不明鉄製品3点、砥石1点、鉄滓1点、輪羽口1点、石製紡錘車1点などがある。

土器焼成遺構の分布は、第1474号土坑を除いて大きく北東部と東部に分かれ、いずれも平坦な台地上の縁辺部に立地している。平面形は隅丸方形や楕円形、円形を呈し、焚口部と燃焼部の区別が不明瞭な形態で、特に東日本を中心に同様の確認例が顕著である<sup>3)</sup>。本格的な窯の体裁はなはず、上屋構造等を持たずに野焼きに近い状態や覆い焼きで焼成されたものと思われる。また、台地の東端に位置していることから、意図したか否かはともかくとして、低地から吹き上がる自然風が焼成に役を買っていたことは明らかである。

焼成された器種は土師器坏と小皿が主体で、ヘラ磨きやヘラ削りは施されていない。ロクロが使用され、簡素な技法で大量に生産することを目的としていたと推測される。竪穴住居の分布からたどれる集落変遷の最終段階、すなわち竪穴式建物から平地式建物への移行が推測される時期に、このような土器が焼成されていたことは象徴的といえる。

#### (4) 小括

以上、第5期から第18期にいたる変遷を概観してきた。4世紀に開始される初期の集落の基盤は生産性の低い台地裾部の谷水田に求められ、集落の規模からみて大規模な灌漑は必要とされず、従って強大な権力も発生しなかったと考えられる。ところが、6世紀後半に台地上を占拠した高名熊の山の集落が成立したことによって、景観は大きく変化することになった。集落の変遷で見たように、集団をまとめる力をもった有力者の存在を示す大形住居が出現し、その後も居住域を変えることなく、地縁・血縁的につながる後継者によって集落は受け継がれていったと考えられるのである。しかも、今回の調査で、こうした力を持った集団が集落内に複数存在することが明らかになった。

さらに、律令国家が在地の勢力を取り込みながら支配体制を強化していく中で、居住域を排除する形で獨立柱建物群が形成されるようになり、視覚的にも大きな変化がもたらされたと考えられる。この変化は、国郡里(郷)制という地方制度の確立が具体化されたものの一つとして評価できる。

ところが、10世紀に入ると、集落の中心となるべき住居の不明瞭化と獨立柱建物の消滅という現象が顕著になる。また、当遺跡と密接な関係にあった島名八幡前遺跡は集落としての終焉を迎え、高名地区の集落は高名熊の山遺跡に集約されることになった。このような状況の中で、土師器小皿と坏が焼かれた土器焼成遺構が確認されたことは一つの成果として挙げられる。古代集落における中世の萌芽は、こうした「集村」<sup>2)</sup>化と土器様式の変化の中に認められるのである。

#### 註

- 1) 深澤靖幸氏は、手工業生産として「熱処理技術に伴う冷間鍛造技術（いわゆる鍛金）や、銅の採取、漆の精製、金属製品への漆の塗着など」を想定している。（深澤靖幸 「武蔵国府における手工業生産」『府中市郷土の森博物館紀要』第16号 府中市教育委員会 2003年3月）
- 2) 集村化に伴う現象として土地利用の集約化、郷の縮小、荘園の一門化などをあげ、集村化と領域型荘園の管理システム・灌漑システムの進展とがかわるであろうと提言されている。（宇野隆夫 「荘園の考古学」青木書店 2001年6月）
- 3) 南跡研究会 「古代の土師器生産と焼成遺構」真福社 1997年5月

### 3 遺構について

#### (1) 集落構造

「2 集落の変遷」で見たように、第5期の集落は単位集団を把握する上で、良好な資料を提供してくれている。規模の比較的大きな住居が互いに適度な距離を置いて位置し、小形の住居がそれぞれに付随した構造である。出土遺物の面でも大形住居と小形住居には違いが認められ、機能的な違いも推察されるが、確認されたすべての住居に竈が伴っていることからみて、小形の住居においても自立した消費生活が行われていたと推測される。

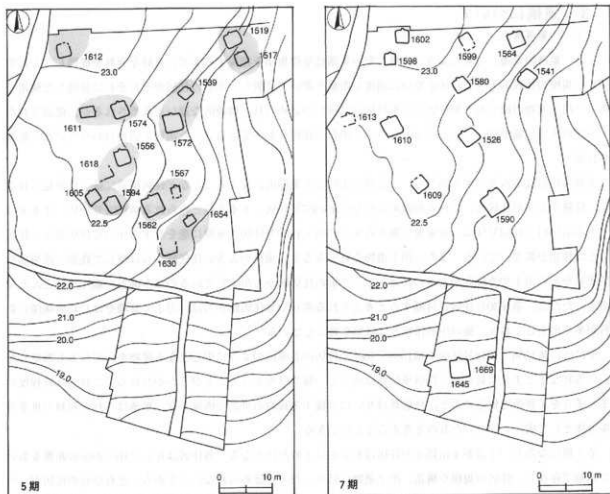
大形の住居は北西を主軸方向とし、4か所の主柱穴を規則的に配することなど住居構造に統一性が見られるが、付随する小形住居は、主柱穴の認められない第1567号住居、1本主柱とみられる第1501号住居、2本主柱である第1611・1654号住居、北東壁に竈を有する1501・1539号住居、東壁に竈を有する1611号住居など、住居ごとに様相が異なっている。また、出土遺物を見てみると、規模の大きい住居跡からは概して鉄器・鉄製品や祭祀具などの出土する傾向があるのに対して、小形の住居跡から出土しているのは土師器の細片がほとんどである。ただし、第1630号住居に付随すると考えられる第1654号住居跡からは、刀子や耳環をはじめ興味深い資料が多く出土しており、他の小形住居とは様相を異にしている。

中には、第1556・1618号住居や第1594・1605号住居の各单位のように中心となる建物をいずれとも断定しがたい等質なまとまりも見られ、住居単位群は決して一様ではなかったことがうかがわれる。これら2軒程度のまとまりを1世帯と仮定すると、住居群は互いに近接する複数の世帯で構成され、集落はこれら複数の世帯の集合体として成り立っていたものと考えられることができる。

第7期になると、1辺が4m以下の住居はわずかに1軒だけとなる。各住居は互いに10~20mの距離を置いて単独で存在し、住居の規模や構造、出土遺物に目立った差が認められないことから、それぞれの住居が一つの世帯として集落の最小単位を構成していたことがわかる。このことは、消費生活における自立化がより進んだことの一つの表れとみることもできる。

表15 調査12区の第5期における単位住居群一覧

住居番号	規模	主軸方向	主柱穴	主な出土遺物
1503	4.4 × 4.3	N-16° - W	4	手押土器、土製勾玉
1501	3.6 × 3.5	N-44° - E	1	
1519	[6.0] × 5.3	N-23° - W	4	不明鉄製品、炭化種子(横)、鉄滓
1517	[4.6] × 4.5	N-23° - W	4	土製勾玉
1562	7.5 × 7.4	N-22° - W	4	須恵器片(フラスコ形破)、鉄器*
1567	3.6 × (2.9)	N-21° - W	0	須恵器片(甕)、礫石*
1572	6.9 × 6.9	N-12° - W	4	刀子
1539	4.5 × [4.0]	N-47° - E	4	
1574	5.9 × 5.4	N-16° - W	4	刀子、礫石*
1611	5.6 × 3.9	N-82° - E	2	
1594	5.4 × 5.3	N-24° - W	4	
1605	[4.7] × [4.7]	N-28° - W	4	
1618	(3.8) × (3.0)	N-16° - W	4	手押土器2、土製2、白玉、礫石、炭化種子(横)12
1556	5.6 × 5.4	N-17° - W	4	土玉
1630	[7.0] × [2.6]	N-7° - W	[4]	
1654	4.6 × 3.6	N-31° - W	2	須恵器片(甕)、土製管瓦、不明土製品、耳環、刀子、不明鉄製品3



第426図 第5・7期遺構配置図

## (2) 竪穴住居跡

今回の調査で確認された竪穴住居跡数は、古墳時代63軒、奈良・平安時代111軒に及んでいる。これらの住居の規模について集計したところ、表16のような結果になった。なお、住居が調査区域外に延びているものや他遺構によって掘り込まれているために全容が不明なものについては除外しており、総数は調査軒数と一致しない。また、面積については、長軸と短軸の積を用いた。

面積が50㎡を超える大形住居は、第5期から第9期にかけて1軒ないし2軒ずつ見られる。第6期にも大形住居は存在しているが、北側部分を中世の大溝に掘り込まれているために、この数には含まれていない。一方、30㎡以下の住居は各期に見られる。

「2 集落の変遷」で見たように、第5期は大形の住居と小形の住居で構成される単位集団が認められるため、同じ古墳時代である第6～8期に比べて20㎡以下の住居の割合が多くなっている。一方、第6～8期は等質な集落構成が見られるため、分布は20～40㎡に集中している。

奈良・平安時代になると、20㎡以下の住居が圧倒的多数を占めるようになり、このことは1辺が4m程度の等質化した住居が大半を占めることの数値的な現れといえる。一方、50㎡を超えるような大形の住居は第9期を最後に認められなくなる。第9期の大形住居は主軸方向が北西に振れるもので、古墳時代からの伝統を受け継ぐ有力者の住居と想定されているものである。第10期以降では、配置や出土遺物から集団の中心と考えられ

る住居はいずれも30～50㎡の範疇に収まり、古墳時代に比べて明らかに小さい。すなわち、この時代の住居の規模における優位性は、他の小形住居との相対的な比較によるものといえる。50～100㎡の建物は郷段階の在地有力者層の屋敷に多い<sup>1)</sup>とも言われる中で、当調査区の中心的な住居は規模の上では貧弱であり、わずかに第13期に比定される第164号住居跡の46.9㎡がこれに近い数字を示すだけである。

しかし、以下に示すように、古墳時代には見られなかった掘立柱建物がこれらの住居に付随していることを考慮すると、占地面积については同等ないしそれ以上と判断することもできる。収納空間の住居からの分離こそこの時代の特徴といえ、出挙等による集落経営の一端を垣間見ることができる。

表16 調査12区の時期別住居跡規模一覧

	第5期	第6期	第7期	第8期	第9期	第10期	第11期	第12期	第13期	第14期	第15期	第16期	第17期	第18期	計
60～70㎡	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
50～59㎡	1	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
40～49㎡	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	5
30～39㎡	3	8	4	0	1	1	0	1	1	0	0	0	0	0	18
20～29㎡	3	3	5	3	1	1	5	2	0	0	0	0	0	0	24
10～19㎡	5	2	2	2	6	9	2	1	6	4	3	2	4	11	42
0～9㎡	0	0	1	1	1	1	1	1	0	3	2	4	4	4	23
計	14	12	15	7	11	12	8	5	8	7	5	6	8	15	133

### (3) 掘立柱建物跡

今回の集成では、過去の調査報告も含め、127棟を対象とした。時期や規模が不明なものは除外しており、実際の調査棟数とは一致していない。

古墳時代にはわずかに9棟しか見られなかった掘立柱建物は、律令体制の進展とともに急激にその数を増やしている。グラフ1から明らかなように、第11期を頂点として左右対称に近い山形を呈した棟数の推移が見られる。第10～11期にかけては柱筋の通った整然とした配置が見られる時期で、五十戸制以来の「郷」段階では、生産物の取収や貢進のために必要な物品の集荷・保管の施設として、まず倉庫の造営が必要であり、その計画的な配備が建物群の規則性につながったものと考えられる。このことは、烏名熊の山の集落が律令体制に組み込まれていく一端を示すものと考えられる。ところが、第12期以降になると、建物数の減少とともに、建物群としての規格性が弱まる傾向が見られる。集落の変遷で示したように、掘立柱建物は建て替えとそれに伴う小移動を随時繰り返しており、第10・11期に見られた規則性は維持されていないことが明らかである。

これらの建物群は、そのほとんどが3×2間の側柱式建物で占められており、総柱式建物は少ない。確認された総柱式建物は27棟で、総確認数に占める割合はわずかに19.7%である。最も多く確認された第11期でも6棟を数えるだけであり、該期の総建物数に占める割合はほぼ同数の19.4%となっている。しかも、6棟中5棟が2×2間の小形のものであることから壮大な倉院ではなく、3×2間の側柱式建物が林立する中に少数の総柱式建物が存在するという景観を想定することができる。また、側柱式建物は構造上の理由から、備蓄よりも運用を目的として建てられていたと考えられ、私出挙経営との関わりから、富の取巻の象徴と見ることもできる。

加えて、古墳時代の第5期にみられる掘立柱建物がすべて2×2間の小形の総柱式建物であることは、「剰生産物の貯蔵施設」<sup>2)</sup>と見なすことも可能で、言い換えれば、そのような備蓄を目的とした施設の有り様は

時代が変わっても大きく変化することがなかったともいえる。

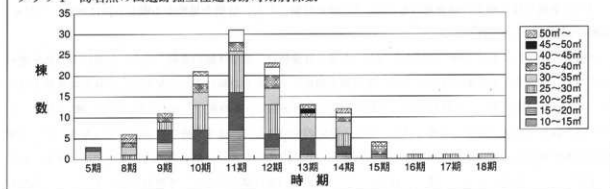
註

- 1) 宇野隆夫 『荘園の考古学』 青木書店 2001年6月
- 2) 近藤義郎 『前方後円墳の時代』 岩波書店 1983年4月

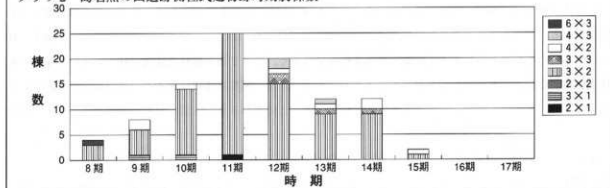
表17 高名熊の山遺跡掘立柱建物跡規模一覧

	10~15㎡	15~20㎡	20~25㎡	25~30㎡	30~35㎡	35~40㎡	40~45㎡	45~50㎡	50㎡~	合計
5期		2	1							3
8期				1	2	1			2	6
9期	1	3	3	2		1			1	11
10期			7	6	3	2	2		1	21
11期	1	6	9	9	1	2	3			31
12期	1	2	3	7	4	3	2		1	23
13期		1	4		5	1		1	1	13
14期		1	2	3	3	1	1		1	12
15期		1				2			1	4
16期				1						1
17期				1						1
18期					1					1
計	3	16	29	30	19	13	8	1	8	127

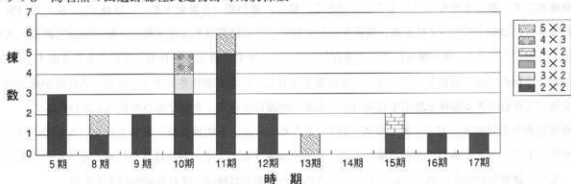
グラフ1 高名熊の山遺跡掘立柱建物跡時期別棟数



グラフ2 高名熊の山遺跡側柱式建物跡時期別棟数



グラフ3 鳥名熊の山遺跡総柱式建物跡時期別棟数



#### 4 遺物について

##### (1) 鉄器・鉄製品

今回の調査では、188点の鉄器・鉄製品と7点の銅製品（耳環2、丸駒1、不明4）が出土した。そのうちの169点が竪穴住居跡内からの出土である。過去の調査結果も含めると約760点という膨大な数になり、そのうちの569点が竪穴住居内から出土している<sup>1)</sup>。鉄器・鉄製品を扱う場合には、鉄器の遺存の偶然性や鉄器の帰属遺構についての問題が取り沙汰されるが、住居跡から出土した570点ほどの鉄器・鉄製品すべてについて集成を行うならば、おおよその傾向はつかめるものと考えている。以下、松村恵司氏が提示された出土鉄器構成表<sup>2)</sup>に準拠して、若干の分析を行いたい。

表18 鳥名熊の山遺跡住居跡出土鉄器集計一覧

		3期	4期	5期	6期	7期	8期	9期	10期	11期	12期	13期	14期	15期	16期	17期	18期	総数	器種別割合(%)
農具	鋤先			2						1								4	0.7
	鎌			3	9	8	2	7	8	9	5	11	7	0	2	2	1	74	13
	刀子	1	4	4	11	13	16	18	12	17	26	32	4	3	9	11		181	31.7
工具	斧・鋤頭							1	1		1	2		3				8	1.4
	鎌・鋤								1	2	1	5						9	1.6
	金釧												1					1	0.2
	火打金								1			2				1		4	0.7
武器	鎌		1	5		3	10	9	14	3	3	13	7	5	6	15	6	100	17.5
	小刀									1								1	0.2
馬具	馬具					1			1	1					1	4		10	1.8
	鞍轡車											1	3	2	1	3	4	14	2.5
釘・鋸・衝	釘・鋸・衝				1	1	3	8	8	3	10	5	6	3	3	5	1	57	10
	窓・門								2	2	1	2	4					11	1.9
	不明			13	12	3	4	13	11	5	2	9	5	2	3	9	5	96	16.8
	出土総数		2	27	27	26	32	34	66	40	40	78	66	18	22	49	24	570	
時期別割合(%)		0.35	4.7	4.7	4.4	5.8	9.3	11.4	6.8	7.2	13.7	11.6	3.2	3.9	8.8	4.4			
出土住居軒数		2	23	33	23	9	33	34	27	19	38	41	14	14	36	18	364		
調査住居軒数		2	31	125	137	64	42	96	101	78	64	78	91	64	95	103	58	1229	
調査内土住居率(%)		0	16.5	18.4	24.1	35.9	21.4	34.4	33.7	34.6	29.7	48.7	45.1	21.9	14.7	35	31	29.6	
磁石		1	10	10	10	10	6	8	6	3	14	15	9	11	5	2	111		

時期別に見ると、6世紀(第3～5期)には20%に満たなかった鉄器出土住居率は、7世紀(第6～8期)以降確実にその割合を増やしていることが分かる。特に、第13期(9世紀中葉)には48.7%、続く第14期(9世紀後葉)には45.1%といずれも高い数値を示しており、この時期はおよそ2軒に1軒の割合で鉄器・鉄製品が出土したことになる。鉄が酸化によって遺存しにくいことや打ち直して再利用できることを考慮するならば、この割合は極めて高い数値といえ、各住居が鉄器を保有していた可能性さえ考えられる。各住居が経済的な格差を超えて保有できる器種を想定するならば、万能の利器に近い刀子を挙げるのが妥当と思われる。

器種別割合を見ると、刀子と鏃で全体の49.2%を占めている。不明鉄製品と報告されているものほとんどが棒状であり、刀子や鏃の一部の可能性が高いことを加味すると、この割合はさらに高くなるものと考えられる。また、鏃類が13%を占めていることも注目され、その他の器種はいずれも10%以下である。

鏃については、承平・天慶の乱に代表される東国の動乱と結びつける考え方もあるが、集成の結果、10世紀代だけがとりわけ高い出土状況を示しているわけではないことが明らかになった。複数本まとまって出土している例も少なく、「武器、狩猟具としての鏃は単独での所有は意味をなさない」ともいえることから、松村恵司氏のいうように建築儀礼に伴う可能性<sup>3)</sup>を想定しておく必要があろう。

また、かつて鬼頭清明氏が示したように、8・9世紀(第9～14期)には鉄製農具類が普及する<sup>4)</sup>という現象は、古墳時代から奈良・平安時代にかけてほぼ同様の出土が確認されている状況からみて認められない。従って、鉄製品の出土量の増加による労働の効率化<sup>5)</sup>も、実体として認めることはできない。むしろ、第9期以降は、釘・鏝などの消耗品類の充実、紡錘具の鉄器化、斧・鑿・金鉗・火打金などの工具類や鎌・門などの施設具の使用という現象が顕著である。特に、釘や門類が多く出土した時期は、集落内に掘立柱建物が増盛んに建てられる時期とほぼ一致しており、そうした遺構との関わりで論じるのが妥当と思われる。

鏃先は今回の調査では出土しなかったが、後述する鏃先形土製品との関わりから、簡単に触れておきたい。これまでにも、鏃先と鏃の保有形態については盛んに議論が交わされ、様々な見解が出されている。その一つとして、鏃先の稀少性は大規模灌漑による開墾がなされていないためであり、当時の需要の低さによるものであるとする説<sup>6)</sup>に対しては、では何故当遺跡から鉄製鏃先の出土数を超える鏃先形土製品が出土したのかという疑問が生じる。また、鏃先を有力家父長層による集中的な所有とする説や製鉄の経営主体である富豪層の集中的な所有とする説<sup>7)</sup>も提案されているが、いずれにしても総数760点中わずかに5点しか確認されていないという事実からは、特定の人物である在地有力者によって所有されていたことが推測されるだけである。

また、鏃については、出土率が全体の13%を占めていることや時期別に見た場合に目立った偏りがなく、出土数がおおむね安定していることから、鏃先と比べて集落内にかなり普及していた様子うかがえる。しかし、各住居が保有していたとするには出土率が低く、大形住居や特定集団への偏在傾向も見られないことから、高橋一夫氏のいうように「家父長制の世帯共同体単位によって所有され」<sup>8)</sup>ていたものと推測され、その管理には家父長層が当たったとみるのが妥当と思われる。

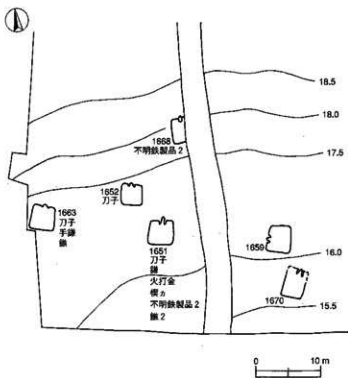
次に、所有形態を探るために、当調査区において鉄器が3点以上出土した住居を表19に示してみる。

「3 遺構について」で確認したように、第10期以降の中心住居に50mを超えるものがないことを踏まえると、確認された13軒のうち8軒は、当集落にあっては比較的大規模の大きい住居であることが分かる。このように中心的な住居に偏在する出土状況は、優先的に金属器を所有できた有力者の存在をうかがわせるものともいえる。

表19 調査12区の鉄器3点以上出土の住居跡集成一覧

番号	長軸(m)	短軸(m)	鉄器・鉄製品	その他の主な出土遺物	時期
SI-1054	4.60	3.60	刀子1, 不明3	須恵器甕, 管工, 耳環, 不明土製品	5期
SI-1514	5.00	4.70	刀子1, 手鎌2, 釘 $\phi$ 2, 不明2	須恵器甕, 漆, 兵頭釧, 石製紡錘車, 管状土器	8期
SI-1025	7.50	7.30	刀子1, 鎌6, 釘1, 不明1	須恵器杯, 蓋, ミニチュア土器, 陶製口, 磁石, 鉄滓	8期
SI-1638	7.70	7.10	刀子3, 鎌1, 不明2	磁石, 石製紡錘車, 炭化種子(横)	9期
SI-1649	8.65	7.15	刀子3, 鎌2, 鎌1, 不明4	石製紡錘車, 鉄滓, 炭化種子(横)	9期
SI-1637	[6.55]	(4.40)	鎌3, 不明2	転用鏡, 鉄滓	10期
SI-1651	3.80	3.60	刀子1, 鎌1, 鎌2, 火打金1, 楔 $\phi$ 1, 不明2		10期
SI-1663	3.55	3.50	刀子1, 手鎌1, 鎌1		10期
SI-1089A	4.95	4.90	刀子 $\phi$ 1, 鎌2	磁石, 転用鏡, 白面鏡, 漆付着土器	12期
SI-1647	5.85	5.35	刀子1, 釘1, 不明1(鉄地金銅板)	転用鏡, 漆付着土器, 灰輪陶器	12期
SI-1506	5.75	5.60	鎌1, 鎌1, 釘1, 不明3	灰輪陶器, 漆付着土器, 畿内産土器器	13期
SI-1615	3.05	3.00	刀子1, 鍔金具1, 釘1	磁石	14期
SI-1641	7.00	6.70	刀子3, 鎌2, 楔 $\phi$ 1	灰輪陶器, 漆付着土器	15期

以上の知見に基づいて、第10期の集落を具体的な事例として取り上げてみたい。該期には、調査区最南端の斜面部から住居跡6軒が互いに近接して確認されており、これらの住居群は一つの単位集団を構成していたと考えられる。いずれも1辺が4m未満の小形の住居で、第1651号住居跡からは鎌2点、鎌1点、刀子1点、火打金1点、楔 $\phi$ 1点、不明鉄製品2点、第1652号住居跡からは刀子1点、1663号住居跡から刀子1点、手鎌1点、鎌1点、第1668号住居跡からは不明鉄製品2点が出土している。6軒中4軒から鉄器の出土が見られ、当時の鉄器の保有形態を示すものとして興味深い。すなわち、鉄の遺存率が低い点や不明鉄製品が鎌か刀子の一部である可能性が高い点などを考慮すると、住居ごとに刀子や鎌を保有していた可能性が高い。一方、鎌や手鎌、火打金は各1点の出土であるから、この集団で保有または管理されていたものと思われる。従って、この集団を農業生産を行う際の一つの単位集団と判断することもできる。

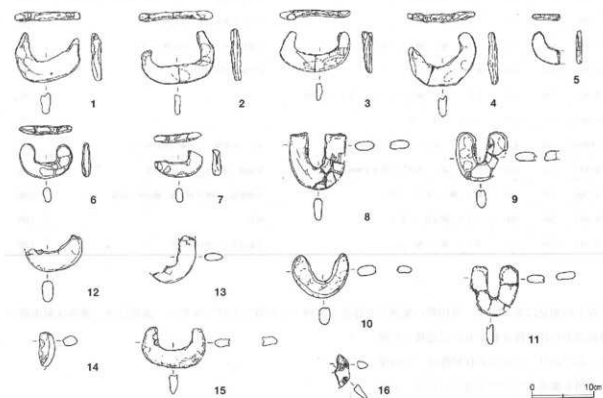


第427図 第10期の集落における鉄器の出土状況図



## (2) 土製品

—当調査区からは、鐏先形土製品が9点出土している。過去の調査結果を合わせると16点になり、管見の限りでは最も多く出土した遺跡といえる。いずれもU字型鐏先を模倣したものと考えられ、木柄との接合部の溝も表現されているが、指頭痕が明瞭に確認されるなど、作りは概して粗雑である。



第428図 烏名熊の山遺跡鐏先形土製品集成図

表20 烏名熊の山遺跡出土鐏先形土製品集成一覽

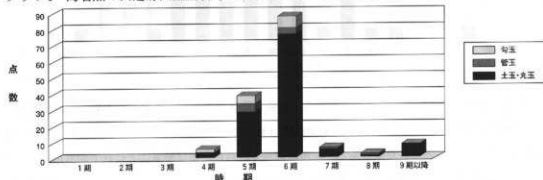
番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特徴	出土遺構	出土位置	時期	備考
1	7.8	10.5	1.6	84	完形,U字状	SI-510	北西壁部上層	7世紀前半	DP2011
2	8.1	11.9	1.8	84	完形,U字状	SI-510	窟内	7世紀前半	DP2012
3	6.5	11.2	1.6	49	完形,U字状	SI-510	窟西側中層	7世紀前半	DP2013
4	8.4	10.9	1.5	66	完形,U字状	SI-510	窟西側中層	7世紀前半	DP2014
5	5.3	(4.5)	1.0	(18)	U字状	8区遺構外	表面採集	-	DP2035
6	5.5	8.5	1.3	43.3	完形,U字状	SI-1426	竈手前床下	7世紀後半	DP8421
7	(4.2)	7.6	1.5	(31.4)	一部欠損,U字状	SI-1426	竈手前床下	7世紀後半	DP8422
8	9.0	9.2	1.5	91.9	完形,U字状	SI-1596	竈東側下層	7世紀前半	DP120069
9	7.9	8.3	1.6	(76.3)	一部欠損,U字状	SI-1596	竈西側下層	7世紀前半	DP120070
10	6.9	9.0	1.9	(73.3)	一部欠損,U字状	SI-1596	竈東側下層	7世紀前半	DP120071
11	8.2	7.7	1.4	(58.8)	一部欠損,U字状	SI-1596	竈西側下層	7世紀前半	DP120072
12	(5.8)	(9.0)	1.8	(70.9)	一部欠損,U字状	SI-1396	竈東側下層	7世紀前半	DP120073
13	(7.6)	(6.9)	1.3	(34.2)	一部欠損,U字状	SI-1596	竈東側下層	7世紀前半	DP120074
14	(4.5)	(2.5)	1.5	(18.8)	一部欠損,U字状	SI-1596	竈東側下層	7世紀前半	DP120075
15	6.3	10.3	1.5	66.1	完形,U字状	SI-1620	竈西側下層	6世紀後半	DP120080
16	(5.3)	(2.5)	1.1	(10.7)	一部欠損,U字状	SI-1620	竈壁上中	6世紀後半	DP120081

これらの土製品は、遺構外から出土したものを除いて、すべて竈周辺ないし北西壁際から出土している。古墳時代は主軸方向が北西に振れるものが主体であることから、北西壁際とはすなわち竈の構築された壁際のことである。しかも、この興味深い出土状況の一致は、当遺跡に限ったことではない。千葉県我孫子市に所在する日秀西遺跡<sup>9)</sup>の第041B号住居跡から出土した8点は、すべて竈両側の覆土中層からまとまって出土しており、当遺跡の第1596号住居跡の出土状況と酷似している。また、栃木県野木町に所在する清六Ⅲ遺跡<sup>10)</sup>の第282号住居跡出土の鋤先形土製品も、竈の上部から琥珀製や碧玉製の管玉とともに出土している。このように、出土した土製品の大半が竈付近の覆土中から出土したという状況は単なる偶然とは考えにくく、使用状況を復元する上での重要な手がかりとなるものである。しかも、竈の火床面や床面直上からの出土がないことを併せ見ると、これらの土製品が棚などの施設に置かれていたか、廃絶に際して竈付近に意図して廃棄されたかのいずれかを想定することができる。一方、第1426号住居跡の場合は竈手前の床下からの出土であり、「竈構築の際の鎮めもの」<sup>11)</sup>と考えられなくもない。いずれにしても祭祀的な意味合いが強く示唆され、五穀豊穡<sup>12)</sup>や財貨に関わって神に捧げられたもの<sup>13)</sup>と推測される。

模倣対象である鉄製鋤先は、先に検討したとおり、古墳時代には2点が出土しただけであり、日秀西遺跡や清六Ⅲ遺跡においても2点ずつしか確認されていない稀少性の高いものである。こうした稀少性に加え、土浦市尻替遺跡<sup>14)</sup>の第1号火葬墓では鉄製鋤先が副葬されていることや当時の貴族への祿として鋤先が支給されていること<sup>15)</sup>、鋤先形土製品が模倣対象としているのは金属部だけであることなどから、鉄製鋤先は有力者だけが保持できたもの<sup>16)</sup>であり、鋤先形土製品もまた有力者の立場を象徴するものと考えられる。

先に紹介した第1596号住居跡は、鋤先形土製品とともに土玉41点が出土していることでも注目される。出土位置は、鋤先形土製品と同様、竈周辺の覆土中～下層であることから、土鏝ではなく祭祀具として鋤先形土製品と共に使用された可能性が高い。このような土玉類は、グラフィのように手握土器・ミニチュア土器の消長とはほぼ同じ推移をたどっている。さらに付け加えると、こうした消長は高坏や石製模造品の消滅<sup>17)</sup>や前方後円墳の築造停止なども重なり、時代の大きな変換点の中に位置づけられるものである。このような状況の中、家父長層が掌握していた祭祀権は律令体制への転換とともに不明瞭になるが、「春時祭田」や「郷飲酒礼」の例を見るまでもなく、在地に君臨する有力者として共同体の族長的側面をもっている以上、祭祀や宗教なしに集落経営が行われたとは考えられない。8世紀後半以降、島名地区への仏教の浸透は明らかであり<sup>18)</sup>、神仏習合という形をとりながら、新たな祭祀行為が営まれていったものと考えられる。俗的支配と宗教的支配は車の両輪であり、今後、特に追究されるべき課題といえよう。

グラフ4 島名熊の山遺跡出土土製勾玉・土玉・管玉類集成一覧



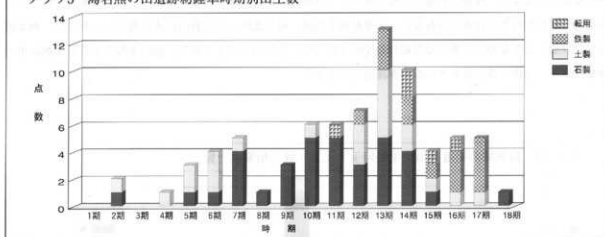
### (3) 紡錘車

これまでの調査で、堅穴住居内から76点の紡錘車が出土している。表21を見ると、古墳時代には石製と土製が使用され、第12期以降、すなわち9世紀以降、鉄製と土器を転用したものが出現していることが分かる。また、出土住居率を見ると、9世紀代にピークがあることは、他の報告例<sup>19)</sup>と同様の傾向を示している。

表21 鳥名熊の山遺跡出土紡錘車集成一覧

	石製	土製	鉄製	転用	計	出土住居率(%)
1期					0	0
2期	1	1			2	20
3期					0	0
4期		1			1	6.5
5期	1	2			3	2.4
6期	1	3			4	3
7期	4	1			5	7.9
8期	1				1	2.4
9期	3				3	3.1
10期	5	1			6	6.1
11期	5			1	6	7.8
12期	3	3	1		7	11.1
13期	5	5	3		13	17.1
14期	4	2	2	2	10	10.8
15期	1	1	1	1	4	6.3
16期		1	3	1	5	5.3
17期		1	4		5	4.9
18期	1				1	1.8
計	35	22	14	5	76	

グラフ5 鳥名熊の山遺跡紡錘車時期別出土数



「(1) 鉄器・鉄製品について」で確認したように、鉄製紡錘車の出現は鉄製品の多様化と時期を同じくしており、この時代の特徴の一つといえる。鉄製紡錘車は形状や重量に高い画一性が認められ、転用紡錘車が様々な形状を示していることと好対照である。転用紡錘車で撚られた糸は製品ごとに仕上がりの違いが予想され、この転用紡錘車の出現と調布絹・布の粗悪化が問題視される時期<sup>20)</sup>が重なってくることは興味深い。こ

の2つの事例を直接関連づけることは早計であるが、少なくとも製品の均一化を図る上で鉄製紡錘車を導入することは、極めて有効な手段といえよう。

第190集では鉄製紡錘車と絹製品の関わりを指摘したが、栃木県岩舟町に所在する古橋Ⅰ遺跡の第15号住居跡から出土した鉄製紡錘車には植物繊維を撚った糸が巻き取られていたことが報告されている<sup>21)</sup>。また、古庄浩明氏は糸の付着した出土例4点について、それらが麻などの植物繊維であることから、鉄製紡錘車と絹織物生産を結び付けることには懐疑的な立場を示している<sup>22)</sup>。養蚕個別経営を里長層によるものとする論説があるように<sup>23)</sup>、当遺跡内において絹織物生産が行われていた可能性は高いが、絹製品が出土しない限り、現状では鉄製紡錘車と絹織物を結び付けて考えることはできない。むしろ、堀田孝博氏が指摘するように<sup>24)</sup>、官衙関連遺跡からの出土が多い点を考慮すると、鉄製紡錘車を導入するに当たって指導的な人物が存在していたことが推測され、その背景には9世紀代の鉄製品の普及があったことが強く示唆されるのである。

#### (4) 灰釉陶器・緑釉陶器

今回の調査区からは、52点の灰釉陶器・緑釉陶器が出土している。住居の廃絶時に遺棄されたと判断できるものは、第1587号住居跡出土の灰釉陶器碗と第1641号住居跡出土の灰釉陶器皿の2点程度で、その他はほとんどが細片であり、帰属遺構の不明なものが多い。従って、出土数や器種別分類等から若干の考察を行いたい。なお、表の作成に当たっては、川井正一氏の示した表<sup>25)</sup>に従った。

表22 調査12区出土の施釉陶器の器種別・部位別数一覧

器種	口縁部	頸部	体部	口-底部	体-底部	底部	把手	計	器種別割合
碗	5			2	2	1		10	19.2
皿				1				1	1.9
長頸瓶	11	11	2			1		25	48.1
短頸瓶			4			2		6	11.5
壺・瓶類	2		3					5	9.6
小瓶			1					1	1.9
平瓶							2	2	3.8
不明	1		1					2	3.8
計	19	11	11	3	2	4	2	52	100

表から分かるように、碗と長頸瓶で全体の67.3%を占めていることが分かる。しかも、狭口窯座と考えられるものが86.5%と主流を占めており、県内の施釉陶器の在り方<sup>26)</sup>と同じ傾向がうかがえる。窯式については、細片のために形状把握の困難なものが多いため、省略する。

稀少な例としては、第1506号住居跡から井ヶ谷78号窯式期の長頸瓶と共に出土した、鳴海32号窯式期と考えられる碗<sup>27)</sup>がある。当遺跡の北側に隣接する島名関の台南B遺跡からは、奈良三彩片が2個体分出土しており、8世紀代に生産されたと考えられるこれらの貴重品が島名地区にも搬入されていたことは注目すべきことである。また、緑釉陶器の出土は3点だけであり、過去の調査例を含めてもわずかに6点しか確認されていない。施釉陶器に占める緑釉陶器の割合はわずかに4.5%であり、同じような大規模集落である東四中原遺跡<sup>28)</sup>や辰海道遺跡<sup>29)</sup>と比べると際だって少ないものである。一方、灰釉陶器は過去の調査結果を含めると130点を超える量が確認されており、多くの灰釉陶器が当集落に搬入されていることが分かる。また、島名八幡前遺跡<sup>30)</sup>からも20点の出土例が報告されており、数量の違いこそあれ、嗜好品として様々な集落に行き渡っていた状況

が明らかになりつつある。それに対して、緑釉陶器は極めて稀少なものであり、その保有には格別の意義があったものと推測される。その入手に当たっては、集落内の限られた有力者による「個人的なネットワーク」<sup>31)</sup>が介在していたものと想定しておきたい。

#### (5) 文字資料

今回の調査で確認された文字資料は14点である。そのうち「丕」「大士」は過去の調査でも確認された文字であり、標識文字の一つとして興味深い資料である。特に、「丕」は「城内丕」「城内」との関わりから、第190集で呼称した掘立柱建物B群との関連が示唆され、また「大士」は掘立柱建物C群との関連が示唆される文字である。さらに、「區」は谷津をはさんで南に隣接する鳥名八幡前遺跡の第86号住居跡から出土したものと筆跡が酷似しており、同一人物によって書かれたと推測されるものである。このように、鳥名熊の山遺跡の中心部分と鳥名八幡前遺跡の中間部分に位置する当調査区は、両遺跡との関わりをもった文字資料が確認されている。

表23 調査12区出土の文字資料一覧

番号	種別	跡像	釈文	部位	方向	遺構	遺構の時期	備考
118	須恵器	坏	丕	体部内面	正位	SI-1506	9世紀中葉	
367	須恵器	高台付坏	□	底部外面		SI-1555	8世紀中葉	
434	十脚器	坏	宅	底部外面		SI-1578	9世紀後葉	
434	*	*	子換□	体部内面	右横位	*	*	434と同一個体
435	須恵器	坏	區	体部外面	右横位*	*	*	
436	須恵器	坏	區	体部外面	右横位*	*	*	
486	土師器	皿	大士	底部外面		SI-1587	9世紀後葉	
579	須恵器	坏	宅*	底部外面		SI-1600	9世紀中葉	
589	土師器	皿	□	体部外面		SI-1604	9世紀後葉	
602	須恵器	坏	區	底部外面		*	*	
644	須恵器	坏	ヤ	体部外面	正位	SI-1617	9世紀前葉	
645	須恵器	坏	子	底部外面		*	*	
1067	須恵器	坏	□□	底部外面		SB-167	9世紀後葉	
1068	須恵器	坏	□	体部外面		*	*	

ところで、第1578号住居跡からは、底部に「宅」と宛書きされた土師器坏が出土している。焼成前の所作であることから、土師の納品先として「宅」なる発注者名が記されたものと推測される。「宅」の確認例は2例目で、過去には第1316号住居跡から「宅」と底部に墨書された須恵器坏が出土している。出土遺構の時期は、前者が9世紀後葉、後者が8世紀後葉に比定され、両者の間にはおよそ1世紀の開きがある。従って、8世紀後葉には「宅」と呼称する施設が登場したか、あるいは既存の施設を「宅」と呼称するようになり、9世紀後葉まではそのような施設が存在していたことになる。しかも、拡大解釈するならば、生産時に「宅」と刻み込むには、そのように称して差し支えないだけの既成の事実があり、言い換えれば、周囲からもそのように認められた施設なり人物なりの存在が想定できる。もちろん、こうした「宅」が同一箇所に継続して存在した場合と、集落内に複数存在した場合が考えられるが、いずれかを判断するような資料の蓄積はない。

「宅」の実体については復元が困難なため、東日本における「宅」墨書の出土例を概観しながら類推することにしたい。

表24 主な「宅」出土遺跡一覧

番号	遺跡名	県名	市町村名	「宅」墓嚢と数	主な遺物（墓嚢等）	出典名
1	家老内遺跡	宮城県	白石市	「宅」×2、「新宅」×2、「新」×1	初期瓦葺*	家老内遺跡（1981）
2	山平遺跡	宮城県	多賀城市	「宅」	田子の鏡	山平遺跡Ⅱ 多賀前地区遺物編（1996）
3	市川橋遺跡	宮城県	多賀城市	「宅」×3	「壺」「山川遺」「大伴」「大伴御前」「文部」「文部真文」「厨」「家」「倉」、人頭墨書、横笛、帯巾、船尾、人形、漆紙文書	市川橋遺跡（2003）
4	上高田遺跡	山形県	遊佐町	「宅」×27、「電宅」×7、「真宅」、 「真宅」	「述」「田」「部」「ノ」刺流、人頭墨書	上高田遺跡 第2・3次発掘調査報告書Ⅰ（1998）、上高田遺跡 本戸下遺跡 発掘調査報告書（1998）
5	正産C遺跡	福島県	郡山市	「宅」	富象塚の居宅、自然埋土型	正産C遺跡（1995）
6	芳賀東部団地遺跡	群馬県	前橋市	「宅」	勢多郡芳賀町岡田、「門」	芳賀団地遺跡群第2巻 芳賀東部団地遺跡Ⅱ 占増一平安時代編 その2（1988）
7	野台遺跡	茨城県	鹿嶋市	「中御宅」	「鹿嶋神社」、鹿島神社に刷印「申田宅印」	鹿嶋神社宮北北部聖域文化財調査報告書Ⅱ（1990）
8	六峰D遺跡	茨城県	友部町	「宅」	六峰A遺跡から「墓嚢家」	北関東自動車建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ（1990）
9	茨城鹿守寺	茨城県	石岡市	「宅才」	茨城鹿守寺	石岡市史編さん資料12（1990）
10	辰海遺跡	茨城県	岩槻町	「西宅」	初期瓦葺*、「庄」「庄奥」「新家」「八万家」	辰海遺跡1（2004）
11	藤部寺南遺跡	栃木県	南河内町	「宅」	下野堂南寺に隣接	考古学7（1987）
12	砂部遺跡	栃木県	高根町	「宅」×9	地方豪族の居宅、漆紙付着土器	砂部遺跡（1990）
13	常光院東遺跡	埼玉県	熊谷市	「宅」	拠点集落である北谷遺跡に隣接	中倉遺跡群Ⅱ 榎岡山古墳・常光院東遺跡（1982）
14	今宿遺跡	埼玉県	秩山市	「三宅」	「高」の他印、高麗郡陶器、「大」「土」「神」「主」	今宿遺跡（1987）
15	戸張遺跡	埼玉県	秩山市	「宅」	今宿遺跡の対岸、遺跡集集地	戸張ノ中原（1999）
16	作畑遺跡	千葉県	東金市	「宅」×成	山邊郡山口町岡田、「大門」「門田」	作畑遺跡（1986）
17	立木南遺跡	千葉県	千葉市	「宅」	「仁」	立木南遺跡（1983）
18	四之宮高林寺遺跡	神奈川県	平塚市	「宅」□	「大住」大住郡岡田	四之宮高林寺Ⅱ（1986）
19	真田・北金目遺跡群	神奈川県	平塚市	「宅」×5	「高大長」「殿」「門」「田」「方岡」、 図形ないし片岡標岡遺	真田・北金目遺跡群発掘調査報告書（1999）
20	長後上ノ原遺跡	神奈川県	藤沢市	「宅」	藤岡岡田遺跡、「宮」	藤沢市長後上ノ原（No. 372）遺跡調査報告書（1996）
21	宮ノ前遺跡	山梨県	塩崎市	「宅」×24	豪族別宅ないし別家別遺、「家」「寺」「介」「丈」「主」、人頭土器、素奉	宮ノ前遺跡（1992）
22	上荒屋遺跡	石川県	金沢市	「宅」×13、「三宅」	初期瓦葺、「門」「庄」「田中」「人上」「厨上」「部」	上荒屋遺跡（Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ）（1995、1998、2000）
23	横江庄遺跡	石川県	松任市	「三宅」	初期瓦葺、「門」「庄」「田中」「大上」	真大寺横江庄遺跡（1983、1990）

石川県金沢市に所在する上荒屋遺跡や松任市に所在する横江庄遺跡は、初期荘園として名高い遺跡である。宮城県白石市の家老内遺跡もまた、平安時代に集落が拡大する初期荘園関連遺跡と考えられている。さらに、宮城県多賀城市山王遺跡の多賀前地区は国司の館として、福島県郡山市の正直C遺跡や栃木県高根沢町の砂部遺跡は郷に関わる富豪層の居宅として知られる遺跡である。共存する文字資料からは、山形県遊佐町の「上高田遺跡」から「宅」37点の他に「連」「弓削連」「臣」「郡」が、山梨県韮崎市の宮ノ前遺跡から「宅」24点の他に「家」が、群馬県前橋市の芳賀東部団地遺跡から「門カ」が、神奈川県平塚市の真田・北金日遺跡群から「宅」5点の他に「殿」「門」「田」などが出土している。また、表には掲載していないが、「宅」が出土した山梨県一宮町の西田遺跡は甲斐国分寺や国分尼寺に隣接し、「宅主」が出土した静岡県袋井市の坂尻遺跡は郡衙ないし駅家関連の遺跡と考えられている<sup>32)</sup>。

これらの遺跡の様相について詳しく考察する余裕はないが、概して大形住居と多数の掘立柱建物で構成され、豊富な施釉陶器や鉄器類を保有していることなど、いわゆる一般集落を優越している点で共通している。当遺跡からも、130点を超える施釉陶器や760点の鉄製品、180棟を超える掘立柱建物、「大殿墨硯」「子鼻門」「門太」「田前」などの文字資料が確認されており、いくつかの共通点を見出すことができる。仲山英樹氏は「門」「家」「殿」「宅」の相互の関連から興味深い分析を行い、「宅（ヤケ）は屋や倉を含む一区画の施設として、出挙などに関わる農業経営の拠点であろう<sup>33)</sup>と論じている。一般に、出挙や開発を通じて勢力を拡大してきた富豪層が、田地や自宅を中央貴族に寄進ないし売却し、貴族の田地や「宅」「荘」だと称して租税を拒否しながら、さらに私腹を肥やしていく様子はよく知られているところである。この「宅」と出土資料である「宅」が同義とすれば、鳥名地区における公地公民制を突き崩し、新たな村落を形成する主体となったのは、一般に言われる浮浪・逃亡農民ではなく、正にこうした富豪層ということができる。

#### (6) 食性

集落の復元に当たって、食料の調達手段を探ることは重要な課題である。第1号包含層から出土した弥生土器片にイネ痕が確認されたことは、鳥名地区における稲作の起源を探る上で貴重な資料といえる。

集成した炭化種子はいずれも可食植物であり、食用とする部位が見られることから、当時の食料の一部として利用されていたものと考えられる。モモ、イネ、ムギ、アワ・ヒエ、マメ類はいずれも栽培植物であり、当時、栽培・利用されていた可能性が高い。また、カシ類は取量が多く、保存も利くことから、周辺の山野で採集されたものと考えられる。「球根」は種類の特定が困難であるが、分析によればユリ科もしくはヒガンバナ科の可能性が高いもので、「水さらし」等で「あくぬき」を行った後に、デンプンを採取したものと推測される。これまでの出土例は多くないが、当時利用されていた食材の一つである可能性が高い。

モモは主に古墳時代の住居跡から出土する食物で、奈良・平安時代、特に第10期以降になるとほとんど出土しない点は興味深い。このことを食習慣や環境の変化と結び付けるには資料に乏しく、むしろ手捏土器など祭祀具との共存事例が多いことから、祭祀に関わる可能性を指摘しておきたい。

貝片や骨片はいずれも熱を受けた痕跡が認められることや竈内からの出土が多いことなどから、調理された残渣と考えられる。また、ハマグリやアカシ、カキなど海生の貝類は他の場所で採取されたものが持ち運ばれてきたもので、他地域との交流を知る上で興味深い資料といえる。鳥名ツバタ遺跡<sup>34)</sup>で出土した初期須恵器をはじめとして、鳥名地区には古墳時代から東海産と考えられる須恵器や灰釉陶器が定量搬入されていることも含めて考えると、東・西谷田川を媒介とした流通網が存在していたことは、ほぼ間違いないものと思われる。

表25 高名熊の山遺跡出土炭化種子集成一覧

番号	遺構名	イネ	モモ	アワビエ	ムギ類	マメ類	アカガシ	コナラ	球	不	出土位置	時期	備考
1	SI-19		1								中央部床面	8世紀前半	
2	SI-86		1								覆土中	6世紀後半	
3	SI-535	1									北東部床面	6世紀後半	
4	SI-540	1	1								竈火床部	11世紀前半	分析済
5	SI-557	3		多							炭化物層中	9世紀前半	分析済, 6・7
6	SI-592	1									竈火床部	9世紀前半	
7	SI-605	1									竈火床部	10世紀前半	
8	SI-635	1									竈火床部灰層	9世紀中葉	
9	SI-639		1								中央部下層	8世紀前半	分析済
10	SI-640						2	20			壁土中	9世紀後半	分析済, 2・3
11	SI-655								3		竈内	10世紀後半	分析済, 4
12	SI-680	1									土師器室内	9世紀後半	
13	SI-758		2								覆土中	8世紀前半	分析済
14	SI-803		1								覆土中	10世紀後半	分析済, 1
15	SI-973		1								覆土中	7世紀中葉	
16	SI-1045		2								覆土中	7世紀前半	
17	SI-1056	1	1								土師器室内	7世紀中葉	
18	SI-1079		1								中央部中層	7世紀後半	
19	SI-1110	1									土師器室内	7世紀前半	
20	SI-1324		2								南壁寄り床面	9世紀後半	
21	SI-1369		1								竈火床部	10世紀前半	
22	SI-1429	1									土師器室内	6世紀後半	
23	SI-1441		1								北西部下層	7世紀中葉	
24	SI-1505	1									竈内	6世紀後半	
25	SI-1519		1								南西部床面	6世紀後半	
26	SI-1580		1								北東部床面	7世紀前半	
27	SI-1586		1								北西部床面	8世紀前半	
28	SI-1614		1								南東部下層	7世紀前半	
29	SI-1618		12								覆土中	6世紀後半	
30	SI-1638		1								覆土中	8世紀前半	
31	SI-1649		1								覆土中	8世紀前半	
32	SE-11				8	1				21	覆土中	13~14世紀	分析済, 5・8・9
合計		13	34		8	1	2	20	3	21			

表26 動物骨片集成一覧

番号	遺構名	動物遺体名	出土位置	時期	備考
1	SI-198	ヤマトシジミ, ハマダリ, カキ, コイあるいはフナ, キジ	竈内灰層	7世紀後半	分析済
2	SI-308	シカ	竈内灰層	8世紀前半	分析済
3	SI-538A	鹿骨片	竈火床部	6世紀中葉	
4	SI-623	鹿骨片	竈火床部	7世紀後半	
5	SI-634	フナ, コイ, ナマズ, スズメ	竈火床部	7世紀前半	
6	SI-658	鹿骨片	竈火床部	7世紀中葉	
7	SI-618	鹿骨片	竈火床部	11世紀前半	
8	SI-707	シカ, イノシシ	竈火床部	9世紀後半	
9	SI-1674	アカニシ	中央部下層	10世紀前半	
10	SK-1426	鹿骨片	覆土下層	11世紀	分析済, 10, 11
11	SK-1435	シカ	覆土下層	10世紀前半	
12	SK-1440	鹿骨片	覆土下層	11世紀	
13	SK-1441	鹿骨片	覆土下層	11世紀	
14	SK-1453	鹿骨片	覆土下層	11世紀	
15	SK-1455	鹿骨片	覆土下層	11世紀	
16	SK-1466	シカ	覆土下層	10世紀前半	分析済, 12





1. モモ

2. アカガシ亜属

3. コナラ属

4. 球根

5. マメ類



6. イネ



7. アワーヒエ



8. ムギ類



9. ムギ類

(バリノ・サーヴェイ社撮影)



10. シカの中節骨片



11. シカの左下顎骨片



12. シカの角幹片

第429図 島名熊の山遺跡出土炭化種子、動物骨片

註

- 1) 鉄器・鉄製品の集成に当たっては、藤田哲也氏の協力をいただいた。記して、感謝申し上げたい。
- 2) 松村憲司 「古代集落と鉄器所有」『日本村落史講座』第4巻 政治Ⅰ 雄山閣 1992年5月
- 3) 松村憲司 「鉄器と建築儀礼」『山梨県考古学協会誌』第7号 山梨県考古学協会 1995年5月
- 4) 鬼頭清明 「律令国家と農民」塙書房 1979年10月
- 5) 古庄浩明 「古代における鉄製農具の所有形態 - 6世紀から10世紀の南関東を中心として -」『考古学雑誌』第79巻第3号 日本考古学会 1994年2月
- 6) 岩崎卓也 「古墳時代史論」雄山閣 2000年7月
- 7) 高橋一夫 「古代東国の考古学的研究」六一書房 2003年9月
- 8) 註7)と同じ
- 9) 清原一順、上野純司 「千葉県 我孫子市日秀西遺跡発掘調査報告書」千葉県教育委員会・(財)千葉県文化財センター 1980年2月
- 10) 上原康子、篠原祐一 「清六三遺跡Ⅱ」『栃木県埋蔵文化財調査報告』第218集 栃木県教育委員会 (財)栃木県文化振興事業団 1998年3月
- 11) 篠原祐一 「白玉研究私論」『研究紀要』第3号 栃木県文化財振興事業団埋蔵文化財センター 1996年3月
- 12) 人見晚晴 「一般県道新川・江戸橋線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 尾島貝塚 宮の脇遺跡 後九郎兵衛遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第46集 (財)茨城県教育財団 1988年3月
- 13) 金子裕之 「武器・武具・農具」『古墳時代の研究 3生活と祭祀』雄山閣 1991年3月
- 14) 黒澤春彦 「田村・神宿遺跡群」『茨城県資料 考古資料編 奈良・平安時代』茨城県史編纂会 1995年3月
- 15) 註13)と同じ
- 16) U字形鋤先は、「専ら古墳や横穴墓等の非日常的な土木作業(造墓作業等)に使用された」とする説がある。(野口達 「古代鉄製U字形鋤・鋤先をめぐって」『古代集落の諸問題』 玉口時雄先生古希記念事業会 1988年11月)
- 17) 高橋一夫氏は、「石製模造品の消滅は、村社の成立と剣・玉・鏡の祭祀権を天皇に集中するという両者の動向の中ではじめて理解することができる」と述べている。(高橋一夫 「古代東国の考古学的研究」六一書房 2003年9月)
- 18) 当遺跡の南東に位置する鳥名前野東遺跡からは「寺」と墨書された須恵器环、北側に隣接する鳥名間の台南B遺跡からは仏具と考えられる奈良三彩や鉄鉢形土器が出土している。
- 19) 堀田孝博 「古代における鉄製紡錘車普及の意義について - 神奈川県下出土資料を中心として -」『神奈川考古』第35号 神奈川考古同人会 1999年5月
- 20) 註19)と同じ
- 21) 田代己佳 「古橋Ⅰ・Ⅱ遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告』第247集 栃木県教育委員会 (財)とちぎ生涯学習文化財団 2001年3月
- 22) 古庄浩明 「鉄製紡錘車の研究」『國學院大學考古学資料館紀要』第8号 國學院大學考古学資料館 1992年3月
- 23) 関 和彦 「物部郷長の世界」『矢田遺跡Ⅲ (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告』第131集 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査 1992年3月
- 24) 註19)と同じ
- 25) 川井正一 「国分遺跡出土土師陶器の検討」『国分遺跡 - 確認調査報告書 -』石岡市教育委員会 2002年3月
- 26) 奈良・平安時代研究班 「茨城県域における施釉陶器の検討(1)~(5)」『研究ノート』4~8号 (財)茨城県教育財団 1995~1999年6月
- 27) 豊橋市埋蔵文化財収蔵庫事務職員 賢 元洋氏にご教示いただいた。

- 28) 東國中京道跡からは、灰輪陶器442点、緑輪陶器98点、初期貿易陶磁17点が出土している。(高野勉夫、白田正子、仲村浩一郎、島田和宏「中根・金田台特定土地地区西整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 中原道跡3」『茨城県教育財団文化財調査報告』第170集 (財)茨城県教育財団 2001年3月)
- 29) 辰海道遺跡からは灰輪陶器139点、緑輪陶器42点が出土しており、緑輪陶器の出土率は中原道跡を凌いでいる。(仲村浩一郎、後藤一成、嶋志田祐一、芳賀友博、富田和男「辰海道遺跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第222集 (財)茨城県教育財団 2004年3月)
- 30) 青木仁昌「鳥名八幡宮遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第201集 (財)茨城県教育財団 2003年3月
- 31) 田中広明「緑輪陶器の流通と武蔵国北部の古代社会」『埼玉考古』第35号 埼玉考古学会 2000年3月
- 32) 明治大学教授 吉村武彦氏にご教示いただいた。
- 33) 仲山英樹「出土文字資料にみる「門」と「家」」『研究紀要』第5号 (財)栃木県文化振興事業団 埋蔵文化財センター 1997年3月
- 34) 菅川修「鳥名ツバタ遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第203集 (財)茨城県教育財団 2003年3月

## 5 おわりに

遺跡の性格については今回の考察では特に触れなかったが、第190集で示した評価を大きく逸脱するものではない。そこで、今回は、鳥名熊の山遺跡が地域の中心集落となり得た背景や、安定した集落経営を長期間継続できた要因を念頭において考察を進めてきた。以下、その概要を振り返りながら、まとめたい。

「2 集落の変遷」では、集落をまとめる中心住居の抽出に努めた。こうした住居は各期に認められ、しかも居住域がほとんど変わっていないことから、地縁・血縁に連なる後継者によって住み替えが行われたものと判断し、「長期継続型集落」に見られる伝統性を見出すことに努めた。

「3 遺構について」では、単位集団の抽出に努め、各世帯が徐々に自立していく様子を確認した。また、住居規模の縮小と掘立柱建物の増加を同じ社会現象の中に位置づけ、両者を通して集落構造の変容を把握することに努めるとともに、出挙経営との関わりを推測した。

「4 遺物について」では、鉄器や土製品、紡錘車といった生活の基礎となる遺物について数量の推移を時期別にとらえ、鉄器を保有することの意義や有力者の保持していた祭祀権の部分的剥奪、及び鉄製紡錘車の導入の意義などを見出すことに努めた。また、施輪陶器や文字資料では、他の遺跡の例を援用しつつ、緑輪陶器の稀少性や「宅」のもつ意味から、当遺跡に居住する有力者層の存在を炙り出そうと試みた。

以上の作業で得られた知見はわずかであるが、伝統的な支配や習慣、生産を基盤としつつも、徐々に社会の変化に対応していく様子を垣間見ることができたように思われる。そうした在地色を色濃く残している点が、鳥名熊の山の集落を長期にわたって地域の中心集落にならしめた要因の一つであると考えられる。端的に言えば、律令体制における鳥名熊の山遺跡は古墳時代から築き上げた長い営みの一つの到達点であり、と同時に、そこには次の時代を生み出す力が内包されていたともいえる。自立した集落である鳥名熊の山遺跡が社会変化に対応していく中で、そうした変容がどのような形態をもって現れてくるのかをより具体的にすることが、今後の課題といえよう。

末筆になるが、発掘及び整理作業において御協力をいただいた関係諸機関や関係者、補助員の皆様、御指導・御助言をいただいた多くの方々に、紙面を借りて感謝申し上げます。

# 写真図版



調査12区全景



調査区北部完掘状況



調査区中央部完掘状況



調査区南部完掘状況



第1503号住居跡完掘状況



第1503号住居跡  
遺物出土状況



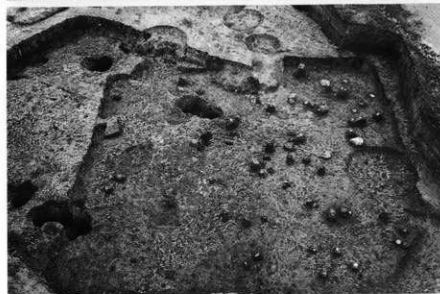
第1503号住居跡  
遺物出土状況



第1505号住居跡完掘状況



第1509号住居跡, 第1412号  
土坑完掘状況



第1509号住居跡, 第1412号  
土坑遺物出土状況



第1525号住居跡完掘状況



第1525号住居跡  
遺物出土状況



第1525号住居跡  
遺物出土状況





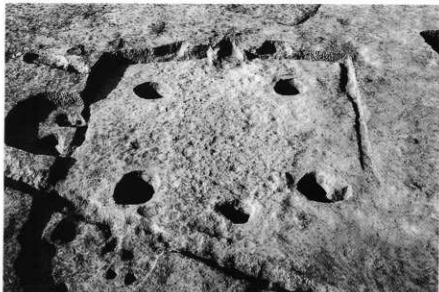
第1546号住居跡完掘状況



第1546号住居跡  
遺物出土状況



第1546号住居跡竈完掘状況



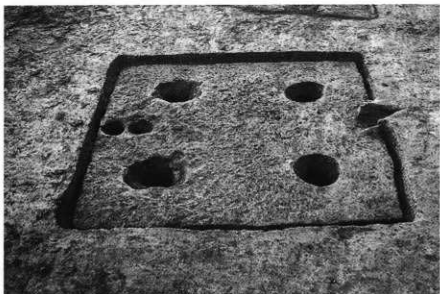
第1547号住居跡完掘状況



第1547号住居跡  
遺物出土状況



第1547号住居跡竈  
遺物出土状況



第1556号住居跡完掘状況



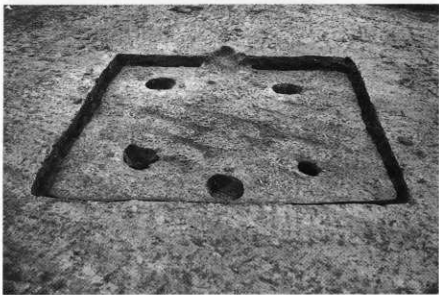
第1556号住居跡  
遺物出土状況



第1556号住居跡  
遺物出土状況



第1556号住居跡P4  
遺物出土状況



第1558号住居跡完掘状況



第1558号住居跡  
遺物出土状況



第1562号住居跡発掘状況



第1562号住居跡  
遺物出土状況



第1562号住居跡  
遺物出土状況



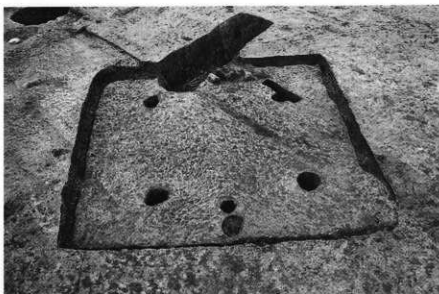
第1573号住居跡完掘状況



第1573号住居跡竈  
完掘状況



第1580号住居跡竈袖部  
断ち割り状況



第1575号住居跡完掘状況



第1575号住居跡  
遺物出土状況



第1594号住居跡完掘状況



第1574号住居跡完掘状況



第1574号住居跡  
遺物出土状況



第1574号住居跡  
遺物出土状況





第1596号住居跡完掘状況



第1596号住居跡  
遺物出土状況



第1596号住居跡  
遺物出土状況



第1581号住居跡完掘状況

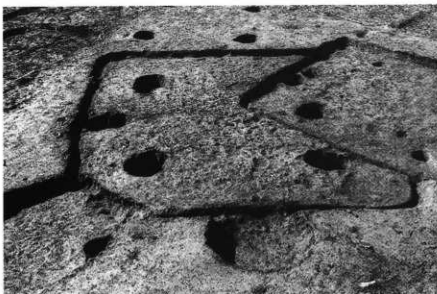


第1598号住居跡完掘状況



第1598号住居跡竈土層断面

第1609号住居跡，第1546号  
土坑完掘状況



第1609号住居跡  
遺物出土状況



第1614号住居跡電完掘状況





第1618号住居跡完掘状況



第1618号住居跡  
遺物出土状況



第1618号住居跡  
遺物出土状況



第1611号住居跡完掘状況



第1635号住居跡完掘状況



第1635号住居跡竈完掘状況



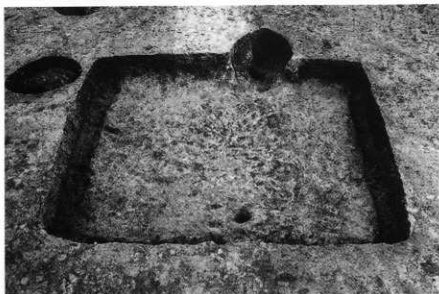
第1669号住居跡完掘状況



第165号掘立柱建物跡  
完掘状況



第163・169号掘立柱建物跡  
完掘状況



第1510号住居跡完掘状況



第1510号住居跡  
遺物出土状況



第1510号住居跡  
遺物出土状況



第1542号住居跡完掘状況



第1542号住居跡電  
遺物出土状況



第1587号住居跡完掘状況



第1587号住居跡  
遺物出土状況



第1589号住居跡完掘状況

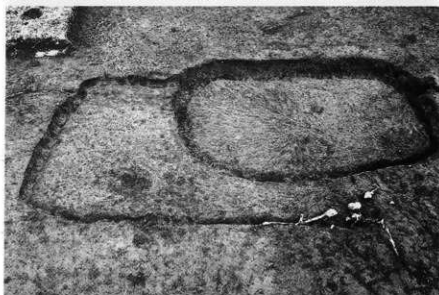


第1589号住居跡  
遺物出土状況





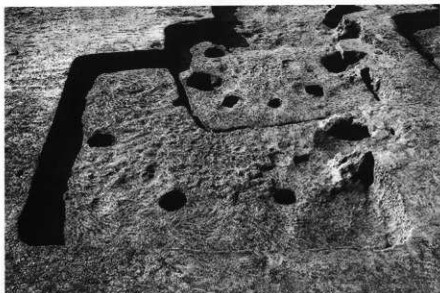
第1592号住居跡完掘状況



第1593・1595号住居跡  
完掘状況



第1608号住居跡完掘状況



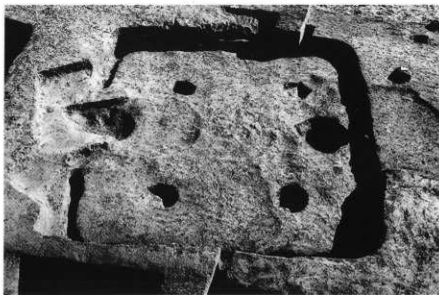
第1622号住居跡発掘状況



第1622号住居跡  
遺物出土状況



第1622号住居跡  
遺物出土状況



第1623号住居跡完掘状況



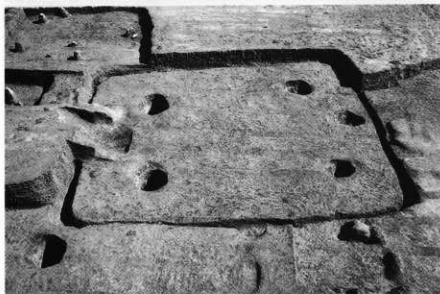
第1623号住居跡  
遺物出土状況



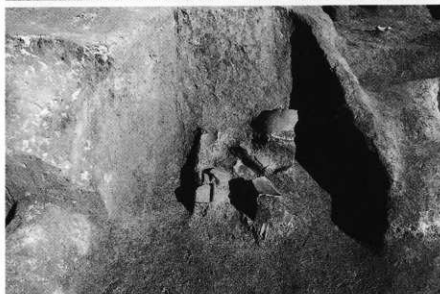
第1623号住居跡  
遺物出土状況



第1638号住居跡完掘状況



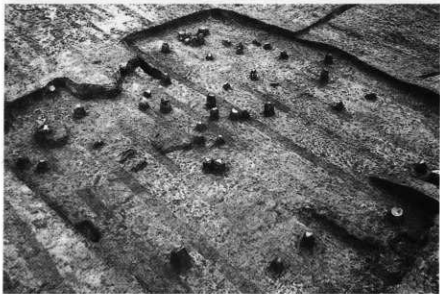
第1647号住居跡完掘状況



第1647号住居跡遺物出土状況



第1641号住居跡完掘状況



第1641号住居跡  
遺物出土状況



第1649号住居跡完掘状況

第1651号住居跡発掘状況



第1651号住居跡  
遺物出土状況



第1651号住居跡  
遺物出土状況

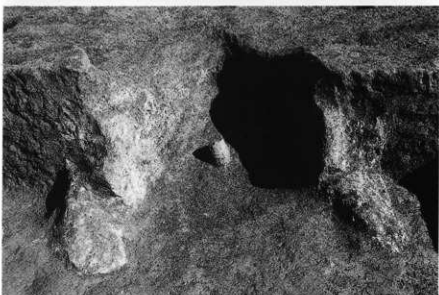




第1653号住居跡完掘状況



第1653号住居跡  
遺物出土状況



第1653号住居跡完掘状況